

平安時代終末頃、北川辺町を含む埼玉県北東部は太田氏により太田荘が開発されていた。

中世は、その末期、飯積遺跡において区画溝や井戸跡が残された時代である。北川辺町内では、古くは貞永2（1233）年銘から、1360年代を分布の頂点とし、15世紀前半までの板碑が確認されている。

局部遺跡では、合の川を挟んだ板倉町で、文和4（1355）年の紀年銘のある板碑を出土した宇奈根中世墓（42）や14～15世紀の大久保中世墓（43）、船山古墳の中世墓などが確認されている。このほか、宝福寺坊内の塚（＝宝福寺遺跡（51））からは、14世紀中頃の古瀬戸蔵骨器や多数の経石が出土した。同寺では、13～15世紀の板碑2枚出土の記録が残っており、蔵骨器の年代と合致している。

また、猿島台地や藤岡台地側では、野木Ⅲ遺跡や清六Ⅲ遺跡、藤岡神社遺跡などで中世の掘立柱建物跡や塼跡、溝跡、土坑、井戸跡、地下式坑などが発掘調査によって検出されている。

近世は、飯積遺跡において、飯積鷲神社が勧進された時代である。鷲神社は、太田荘の総鎮守である鷲宮神社を祀ったもので、その創建は万治年中（1658～1661）を伝えるものが多い。鷲神社は町内の至るところに分布しており、この点からも北川辺町が太田荘域であったことが裏付けられる。

該町の局部遺跡としては、飯積遺跡の西側に隣接し、合の川川流路に位置する島悪途遺跡（41）で、17～18世紀の高が検出された。合の川縮め切り後の土地利用を考える上で重要である。

#### 近代以降の北川辺

最後に、近代以降の北川辺町を概観して、歴史的環境を綴ることしよう。

明治期以前の北川辺町域は、古河藩に属していた。明治初年の廃藩置県で、古河藩は古河県となり、明治4（1872）年には、本町域は埼玉県に属することとなった。明治22（1890）年、町村制施行で川辺村（柏戸、向古河、駒場、本郷、栄、小野袋の一

部）、麦倉村（麦倉、飯積、柳生、小野袋の一部）の二村が成立する。また、昭和5（1930）年には、渡良瀬川の河川改修により伊賀袋が編入となった。現在の町域が確定したのはこのときである。

このほか、北川辺町の歴史的環境を語る上で、足尾銅山鉱毒事件は避けて通れない。明治23（1890）年頃より、渡良瀬川上流の足尾銅山から廃棄される鉱毒が渡良瀬川を汚染し、洪水のたびに田畑の作物が枯死する被害をもたらした。被災者たちは、大挙上京して農商務省に銅山の操業停止を陳情し、国会でも、田中正造により鉱毒問題は議論されることとなった。明治31（1898）年には洪水が再び起こり、翌32年、被災者たちの第3回目の上京の際には、警官隊と衝突し、上州川俣事件を引き起こした。

そして明治39（1905）年、ついに渡良瀬・利根川の水量を調節する目的で、遊水池建設計画が立てられることとなった。大正2（1913）年、3,500haの渡良瀬遊水池は、14ヵ年の継続事業で誕生した。

以上、県境に位置し他県と接する北川辺町飯積遺跡の地理的、歴史的環境について概説してみた。

すでに繰り返して述べてきたが、北川辺町を含む加須・中川低地は考古学的データが乏しい地域である。この理由としては、加須低地に特有の関東造益地運動の結果、遺跡が地中に埋没し、確認しづらいたまがまず指摘される。また一方では、この認識が過度に繰り返され再生産された結果、新資料発見の機会を直接的、間接的に減らし、見かけ上の「空白」を作り出してきたのかもしれない。しかしながら、沖積地の発掘調査例は全国的に増加し成果を挙げている。加須低地や中川低地もこの例外ではないだろう。飯積遺跡は、こうした加須・中川低地の遺跡イメージの転換を図る多大な成果をもたらした。考古学的なデータの乏しい当地域の、基準資料となっていくことだろう。

（本書では紙数の関係で、参考文献を割愛し、第334集飯積遺跡Ⅱにまとめて記載した。）

### III 遺跡の概要

#### 1. 調査の方法

飯粒遺跡の発掘調査は、第2次調査が平成15年9月22日から平成16年3月24日まで、第3次調査は平成16年4月8日から平成17年3月31日まで、第4次調査は平成17年4月8日から平成17年10月14日まで実施した。

第2次調査は、表土掘削後、遺構確認を行おうとしたが、遺構確認面からの湧水が激しく、確認作業に移れる状態ではなかった。そこで、調査区外周に排水用の溝を掘削したが湧水は収まらなかった。次に、グリッド杭に沿って水抜き用の溝を掘削して遺構確認面の排水を行い、遺構確認作業に入ることが可能となった。遺構確認作業を行った結果、プランを明確に掘むことができた住居跡は少なく、その存在はわかっていても、その範囲を明確に捕らえることができた住居跡は数軒であった。特に、調査区南東部

は全体が黒く、その中から土器が出土する状態であった。そこで、この地域は10mグリッドを5×5mに分割して掘り下げ、土層断面から遺構の確認を行った。他の地域は、水抜き用の溝の断面等を利用し、遺構確認を繰り返し行い、平面形の確認に努めた。

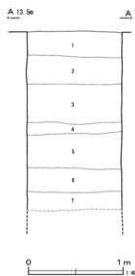
第3・4次調査は、第2次調査地点に比べ、周囲の地形が高くなるために調査区周囲にシートバイルを設置し、安全の確保を図った。また、シートバイルの倒壊を避けるために、遺構の掘り下げは一定の深さまでに限られた。特に、河川跡は河床の検出はできなかった。第3・4次調査も湧水が激しく、遺構確認後に遺構を壊す形態で十字の溝を掘削し、排水をしながら精査を行った。住居跡は実測・写真撮影後、貼り床を剥がし、ビットや下階遺構の確認に努めた。

#### 2. 基本層序

飯粒遺跡の基本層序は、第2次調査区内のL-6グリッド調査区壁際で観察した。

なお、第3・4次調査区では前述のとおり、周囲にシートバイルを設置したため基本土層の観察は不可能であった。

- 1 褐灰色土 酸化鉄を線状 炭化粒子・白色粒子少
- 2 褐色土 暗褐色粒子多 灰色粘土粒子 炭化粒子微
- 3 明黄褐色土 砂粒主体 下層に灰色粘土粒子 青灰色土を線状(水の滲みだした跡)
- 4 暗オリーブ色土 炭化粒子微 砂粒
- 5 オリーブ灰色土 粘土主体 炭化粒子 暗オリーブ色粘土少
- 6 暗オリーブ灰色土 粘土主体 炭化粒子 酸化鉄を線状
- 7 灰オリーブ色土 粘土主体 湧水



第6図 基本土層図

### 3. 遺跡の概要

#### (1) 周辺地形と遺跡の範囲

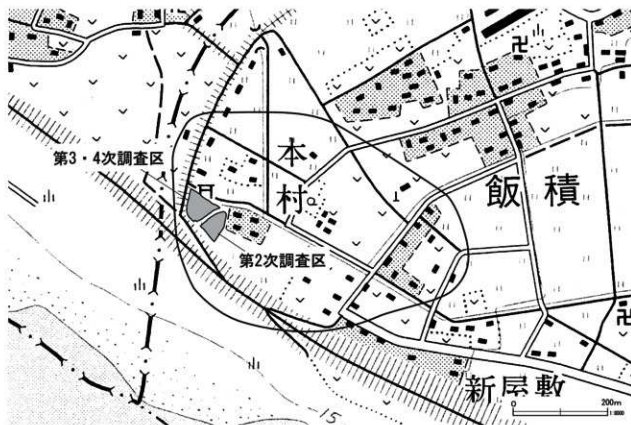
飯積遺跡は、埼玉県の北東端に位置する北川辺町に所在する。北川辺町は、南側を除く三方を他県と接しており、県境や町境は、河川によって区切られている。町の北側は、谷田川を境として栃木県下都賀郡藤岡町、東は渡良瀬川を境に茨城県古河市、西は合の川（利根川支流）跡を境に群馬県邑楽郡板倉町と接している。また、南西に位置する加須市と北埼玉郡大利根町とは、利根川を隔てて接している。

飯積遺跡は、北川辺町でも南西端に位置しており、利根川と合の川の分岐点である標高13.5mの自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は、西側は群馬県との県境まで、南側は利根川堤外まで伸びた東西約600m、南北約450m、面積にして約270,000㎡である（第7図）。今回報告するのは、飯積遺跡の第2～4次調査で、遺跡範囲の最西端に位置している。

発掘調査区は、町道1229号線を境にこれより東側を「第2次調査区」、西側を「第3・4次調査区」と呼称した。調査面積は、第2次調査区が3,000㎡、第3・4次調査区は4,900㎡である。

調査前の第2次調査区は、水田が一面に広がっており、第3・4次調査区は、水田の中に飯積神社がたたずむ景観であった。両調査区に広がる水田面の標高は15.0mほどで、飯積社境内はこれより高い標高15.8mの丘状となっていた。

第3・4次調査区の北側には町道1235号線が東西に走行し、合の川の堤防に向かって上り坂となっている。堤防頂部の標高は18.2mほどで、水田面との標高差は3.0mほどである。また南面する利根川堤防の頂部は標高27.8mであり、水田面との標高差は13mほどである。



第7図 遺跡の範囲

## (2) これまでの調査

飯積遺跡跡地は、古くから土器が採集される場所として知られていた。第2次調査区と第3・4次調査区の間、町道1229号線が利根川堤防とぶつかる地点に、飯積樋管が存在した。昭和34（1959）年、これより下流400mにあった樋管を移設する際に、土器が多数出土した。これが飯積の地に遺跡の存在が認識された初めての年である。

飯積遺跡の第1次調査は、昭和54（1979）年に、飯積農業研修センター建設に伴い、北川町教育委員会により実施されている。第1次調査区は、第3・4次調査区の中央付近に位置し、L字型のトレンチを掘削している（第8図）。調査面積は約5㎡

と狭いが、標高12.6mまで掘り下げており、第197号住居跡の床面を掘り扱いた形となる。

このときは調査面積が狭く、住居跡の存在を確定するには至っていないが、古浄土時代後期から奈良・平安時代の土師器、須恵器が完形品で多数出土し、土層断面には炭化層が確認された。

第2～4次調査は、大高島地区河川防災ステーション整備事業に伴い、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が実施された。調査期間は平成15年10月から平成17年9月までの2年間である。その内訳は、第2次調査が平成15年10月～平成16年3月、第3次調査は平成16年4月～平成17年3月、第4次調査は平成17年4～9月となる。



第8図 調査区全体図



第2次調査区と第3・4次調査区は、同じ自然堤防上に形成された同一の集落である。しかしながら、報告では便宜的に両調査区を分け、第2次調査区の成果を第333集『飯梳遺跡Ⅰ』に、また、第3・4次調査区の成果を第334集『飯梳遺跡Ⅱ』に収めた。

### (3) 第2次調査区

第2次調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡92軒、土坑14基、井戸跡23基、溝跡7条である。遺構全体としてみると重複状況が著しいが、調査区南東部には分布の空白を生んでいる。

竪穴住居跡は92軒検出されている。もっとも古いものは5世紀第Ⅳ四半期で、第54・55・78号住居跡がこれに該当する。一方、もっとも新しい住居跡は第25号住居跡で10世紀前半に位置付けられる。

第3・4次調査区では、5世紀第Ⅲ四半期(第201号住居跡)から10世紀前半(第163号住居跡)までの竪穴住居跡が確認されていることから、遺跡総体としては、5世紀第Ⅲ四半期から10世紀前半までの集落と捉えられる。

竪穴住居跡の分布や重複状況、平面形や規模、主軸方向などを概観すると、古墳時代後期(5世紀後半から7世紀前半)と奈良時代(8世紀初頭)以降とで方向が異なる。同時期の傾向を抽出すると、古墳時代後期は分布密度が高く、同時期での重複状況が著しい。一方、奈良時代以降は分布密度が低く、同時期での重複をほとんど見せなくなる。

また、古墳時代までの竪穴住居跡の分布は、調査区の南西部から北東部へ延び、集落東側の限界がうかがえるのに対し、奈良時代以降は、第27・28号住居跡などに見られるように、東側へ集落域を拡大している。また、平面形や規模は、古墳時代後期が大型・方形であるのに対し、奈良時代以降は小型・長方形となり、真北だった主軸方向も、西にやや振れるようになる。

本遺跡のカマドの特徴を示すと、北壁に設けられたものが圧倒的に多いこと、煙道部の長大なカマドが見られること、また煙道部や煙出しが未崩落のもの

のが認められることなどが指摘できる。煙道部の長い住居跡には、第30・33・36・37・54・56・59号住居跡などが見られ、時期は5世紀第Ⅳ四半期～6世紀第Ⅰ四半期に特に集中する。

またこのほかの特徴として、土器をカマド構築材や支脚に用いた例が見られた。土器による袖部の補強は、第4・53・60・64・87・91号住居跡で見られた。構築材には、いずれも土師器甕を倒立させて用い、①芯材として袖内部に埋め込むもの、②袖先端に据えるもの、の二態が確認されている。

また、第77号住居跡ではカマド掘り方が確認された。第3・4次調査区では比較的多出しているカマド掘り方は、本調査区では唯一の事例である。

また、第79号住居跡では、住居跡に多数の土器が残されていた。床面に残っていた土器は、土師器環・高環・壺・甕・甕など実測個体だけでも34個体出土している。中には大型の土師器高環2個体を含んでおり注目される。

また、このほか、第51号住居跡の床面では、土玉8点が、白玉、紡錘車を伴って出土している。

土坑は14基確認されており、分布に偏りは見られない。古墳時代後期の土器が出土した第7号土坑や、竪穴住居跡の床面や覆土形成過程に掘り込まれた第10・11号土坑や第12号土坑などのほか、井戸跡や溝跡と同じ覆土をもつ土坑など、時期は古墳時代後期から中・近世までのものが見られる。第12号土坑ではその周辺から白色粘土が検出されていることから、粘土を採掘した穴と推測される。

井戸跡は分布に偏りが見られた。第14・15号井戸跡を除く21基の井戸跡は、第1号溝跡を区画溝と捉えたときの区画内側に濃密に分布する。いずれの井戸跡も覆土は、灰色粘質土を基調としており、第1号溝跡の覆土とよく似ることから、両者の構築時期は、大きな隔たりはないものと考えられる。第2号井戸跡の覆土上層からは、かわらけ11点が一括廃棄の状態で出土している。

溝跡は7条確認されている。第1号溝跡は区画溝

と思われる。調査区南側で確認された第2・3号溝跡は、第1号溝跡からほぼ直角に派生しており、両者の関係がうかがえる。第1号溝跡の覆土からは、16世紀のかわらけや15世紀後半から16世紀頃の播鉢や埴鉢、焙烙や陶磁器、砥石などが出土した。

第2次調査区の出土遺物は、土師器がその大半を占め、これに須恵器が少量加わる。器種としては、土師器環・壺・盤・高坏・壺・甕・甔、須恵器坏身・坏蓋・高坏・甕・甔・提瓶などが見られる。土師器は、北武蔵地域のものに混じり、比企地域、栃木県南部、茨城県西部、下総地域の土器が含まれており、出土土器からも県境に位置する北庄辺りという地域的辨性がうかがえる。

また、須恵器は、南北比企産、木野産、太田産、秋間窯、藤岡産、新治産などが見られ、僅かながら灰釉陶器が出土した。

このほか、播鉢・埴鉢・かわらけなどの土器、青磁、天目茶碗などの中世陶磁器や土錘・土玉・支脚・土製甲板などの土製品、紡錘車・砥石などの石製品、勾玉・管玉・白玉などの玉類、耳環・刀子・鉄鎌などの金属製品が出土した。

#### (4) 第3・4次調査区

第3・4次調査区では、竪穴住居跡152軒、土坑28基、井戸跡8基、溝跡10条、ピット37基などのほか、鷲神社境内と一致する方形須区画（盛土造成部と区画溝）や、古浄土代後期の流路跡を確認した。また調査区に残っていた、鷲神社本殿基壇部の調査も併せて行った。

遺構は全体として見ると、南側に分布密度が高く、北側ほど密度が低い。この分布の偏りを形成した要因は、古浄土代の流路跡が存在したためである。

流路跡は調査区北側で確認された。これを埋めた主な土は、「第一次堆積層」としたしまりの強い黄褐色粘質土の一群と、「第二次堆積層」としたしまりの弱い褐色粗粒砂に大別される。前者は、5世紀第Ⅲ四半期から6世紀第Ⅱ四半期までの土器やチャート転石を含んでおり、後者は榛名起源の角閃石安

山岩を含んでいる。

流路跡は、土層の堆積状況から、初め穏やかな堆積環境にあり、その後6世紀後半頃の河川の氾濫で埋まったと判断された。土層に含まれた礫は、6世紀後半頃に渡良瀬水系から利根川水系への変化が起こったことを示している。また、第一次堆積層では立ち上がりからやや離れた斜面地に、5世紀第Ⅲ四半期から6世紀第Ⅱ四半期頃の土師器が、東西方向に広がって大量に出土した。

このほかの出土遺物として、須恵器や土玉、支脚などの土製品、白玉、勾玉、有孔甲板、砥石などの石製品、鉄製品などが見られるが、出土比率は全体の1%程度である。これらの遺物は、その出土状況から、生活什器の日常的な廃棄行為と儀礼を含む廃棄行為との複合した姿と判断した。

一方、第二次堆積層では、地滑りや噴砂といった地震の痕跡を確認した。地滑りは調査区の東西にわたって広範囲に検出された。第135号住居跡では、地滑りとこれに並行する噴砂を確認している。地震の時期を特定することはできないが、遺構との重複関係から、7世紀第Ⅲ四半期以降、近世初頭までの間と判断される。

竪穴住居跡や土坑の分布は、この流路跡の埋没と密接に関連している。5世紀第Ⅲ四半期に始まった集落は、流路跡の埋まりきる6世紀後半までは、調査区南側の自然堤防上を居住域とし、流路跡が埋まると7世紀頃から居住域を拡大していった。

北側の第二次堆積層に掘り込まれた住居跡には、カマド掘り方を設けたものが多数見られた。掘り方は、カマド構築部分にあらかじめ土坑を掘削し、しまりの強い土を詰め込み、こへ煙道および煙出しを設けている。しまりの強い砂層に煙道や煙出しを掘り込むための工夫であろう。

このような工夫に加え、地山であるしまりの強い砂層が竪穴住居跡を比較的に短期間で埋めたこともあり、煙道や煙出しの残存状況は非常に良く、天井部が未崩落の住居跡も数多く見られた。第111・

115・135・141・150・153号住居跡は、いずれもカマド掘り方を設けた住居跡である。第111号住居跡や第141号住居跡では崩落が見られず、煙道と煙出しの様子が登場のまま現われた。

また、本調査区においてもカマド袖部に構築材として土器を用いたものが多数見られた。袖部の先端に逆立て据えられた例が多い中で、袖部の芯材として、左右の袖に土師器甕や甗を3個体ずつ用いた第115号住居跡は特異である。

以上のように、カマド掘り方の敷設、カマド袖の補強をした住居跡は、調査区内の全域に見られるが、脆弱な基盤をもつ流路跡堆積層中に掘り込まれた住居跡で特にその出現率が高い。ここに低地に集落を営むための工夫を見出せるだろう。

このほか、支脚として土師器高環や土師器甕が転用されている例が見られた。甕は完形品をそのまま使う例と、胴部下半のみが使われる例の二者が見られた。

土坑は28基確認され、分布は調査区北側に集中す

る。第二次堆積層では、覆土に炭化物や焼土ブロックを多量に含み、掘り込み縁辺が被熱亦変している土坑を8基確認した。第16・17・18・29・31・36・39・40号土坑がこれに該当する。形状は様々であるが、長円形や隅丸長方形など、一方に長軸をもつ形状に特徴がある。出土遺物に乏しく、焼成の対象は特定できないが、第18号土坑は珪口や銚津が見られた。

井戸跡は8基検出されている。時期は中世末から近世と思われる、分布に偏りは見られない。第36・37号井戸跡ではシガラミが検出されており注目される。

溝跡は10条検出されている。第9号溝跡で出土した16世紀末頃のかむらけ以外の遺物は見られない。第13・15号溝跡を除けば、溝跡の覆土は、第9号溝跡と同質であることから、溝跡の大半は中世末から近世のものと思われる。

第8号溝跡と第9号溝跡は、総体として捉えたとき、鷲神社の境内範囲と一致し、区画溝の可能性がある。ピットは37基検出されている。

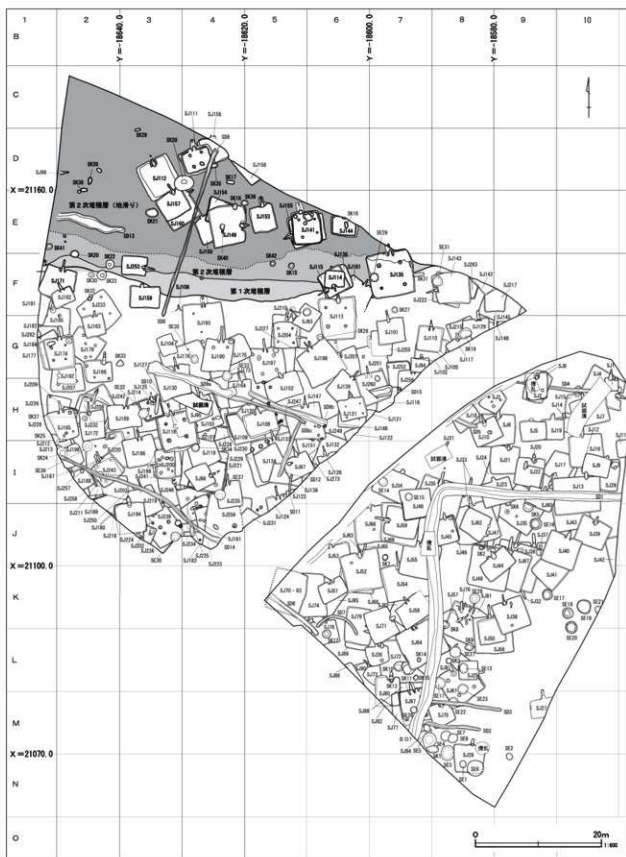
分布に偏りはなく、遺物は出土していないため時期を特定できないものが多い。第二次堆積層形成過程に掘り込まれたピットもあり、洪水直後の河川際に生活の痕跡を残している。

第3・4次調査区出土遺物の内容は、第2次調査区とほぼ同じである。本調査区では銚津が多く出土したのが特徴的である。

勾玉は2点、遺構外から出土した。また、耳環は第9号住居跡の覆土中から出土している。



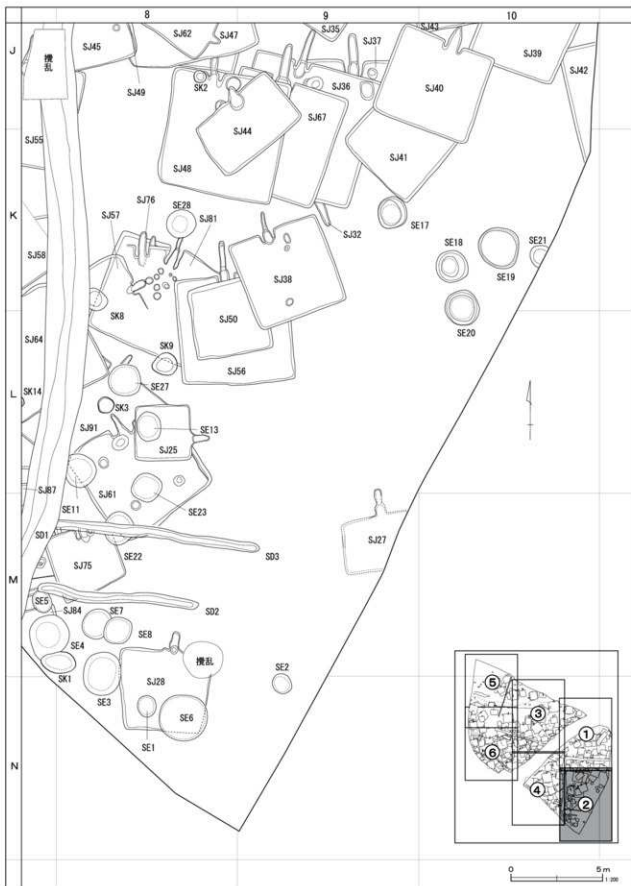
第9図 調査区と鷲神社



第10図 グリッド配置図



第11图 全体图①

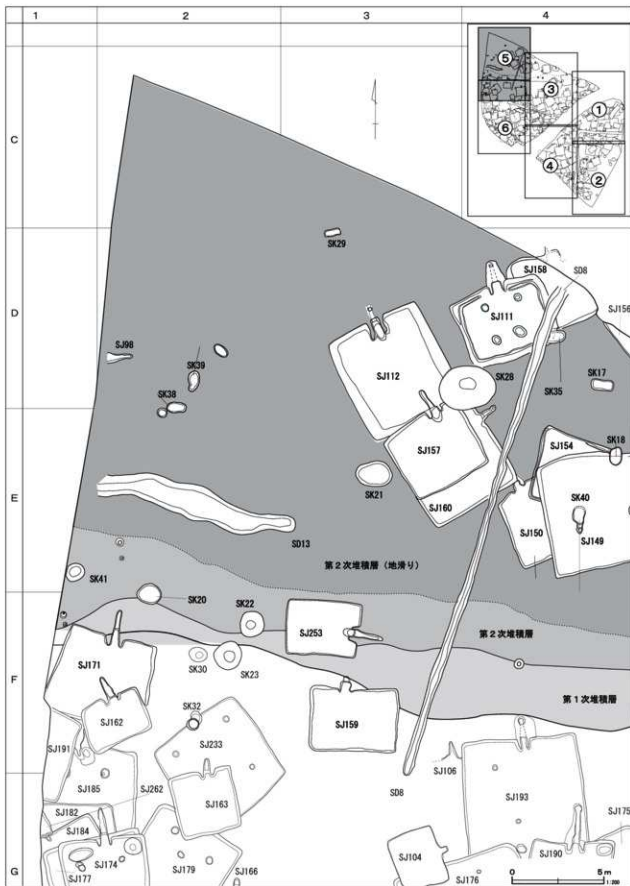


第12図 全体図②



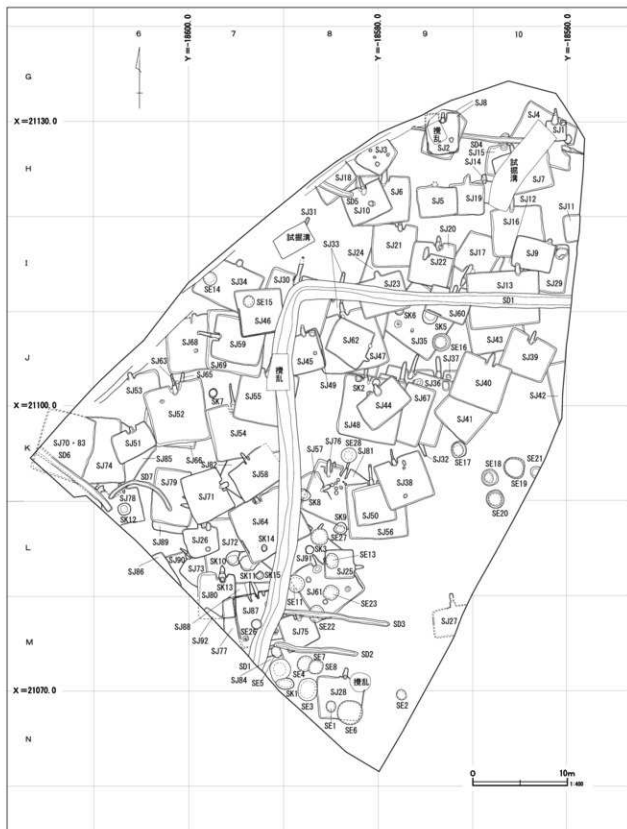






第15图 全体图⑤

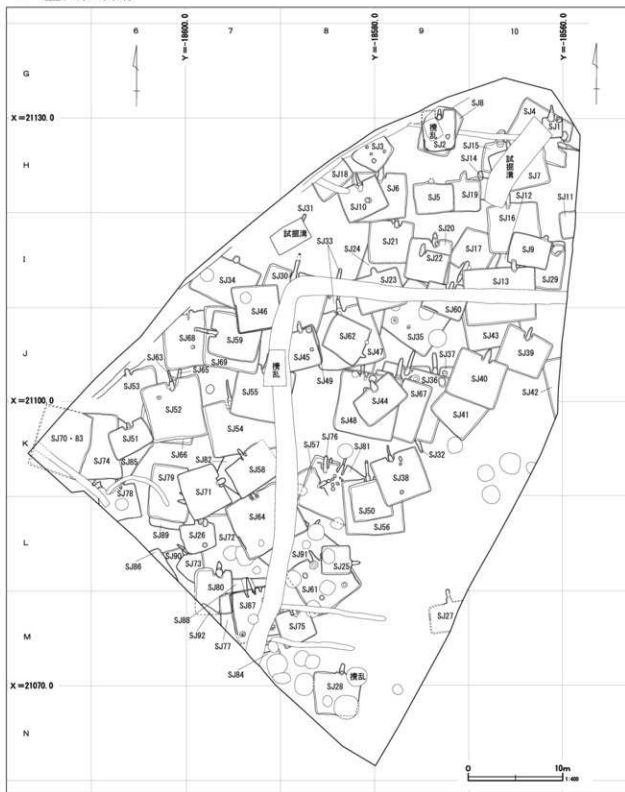




第17図 調査区全体図

## IV 検出された遺構と遺物

### 1. 竪穴住居跡



第18図 住居跡全体図

### 第1号住居跡 (第19・20図)

調査区北側、G・H-10グリッドに位置する。第4号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方が新しい。住居跡南西部は試掘溝によって壊されている。

平面形は方形で、規模は東西2.22m、南北2.16m、確認面からの深さは0.35mである。主軸方位はN-0°である。床面はカマド前面から中央部にかけて埋蔵に貼り床が残っていた。

カマドは北壁の中央に設けられ、カマド方位はN-0°である。袖部は右袖のみ検出され、北壁からの残存規模は45cmである。燃烧部は北壁を大きく切り込んでおり、床面より10cmほど掘り込まれる。煙道部へは20cmほどの埋蔵な段差を持って移行する。燃烧部の壁はよく焼けていた。燃烧部の規模は長さ140cm、幅57cm、煙道部の規模は、長さ40cm、幅25cm、確認面からの深さは8cmである。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴が北東コーナーで確認されている。カマドの右袖、東壁に接する位置にあり、平面形は楕円形である。規模は60×38cm、床面からの深さは17cmである。

遺物は、灰桶陶器、須恵器環、土師器甕等が認められた。第21図1は南北企産の須恵器環で、東壁際で出土した。自然軸が見られる。

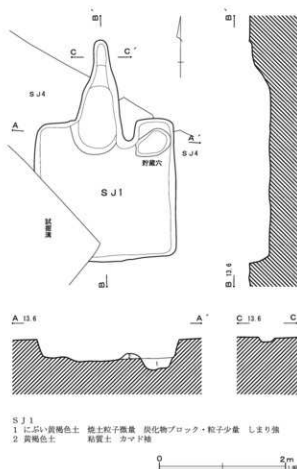
時期は9世紀第Ⅱ四半期である。

### 第2号住居跡 (第22・23図)

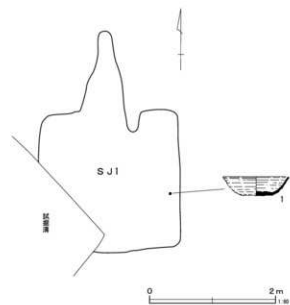
調査区北側、G・H-9グリッドに位置する。第8号住居跡、第4号溝跡と重複関係にあり、新旧関係は第4号溝跡より古く、第8号住居跡よりも新しい。住居跡中央部の床面が攪乱によって壊されるほか、第4号溝跡が横走り、遺構上部を削平する。また、住居跡北西コーナーは調査区域外におよぶ。

平面形は、北西コーナーが未検出であるが、南北に長い長方形である。規模は残存する箇所では南北4.4m、東西3.55mで、確認面からの深さは0.24mである。主軸方位はN-1°-Wである。

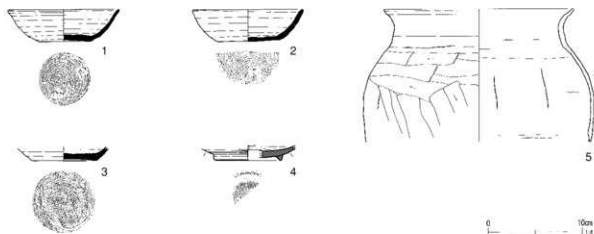
床面は全体的によく踏み固められているが、カマ



第19図 第1号住居跡



第20図 第1号住居跡遺物出土状況



第21図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	須恵器	坏	11.7	3.4	5.6	118.4	95	南比金	針	良好	灰白	No.2 自然輪	57-1
2	須恵器	坏	11.6	3.3	6.6	65.3	40	南比金	針	良好	灰黄	カマド	57-2
3	須恵器	坏	—	(1.5)	6.9	62.1	20	南比金	角、針	普通	灰黄	■	
4	須恵器	坏	—	(1.6)	(7.6)	10.8	5	猿投	角	普通	灰白	ハケヌリ	
5	土師器	甕	(20.0)	(14.1)	—	171.7	20	埴北	角	普通	にぶい橙	貯穴床直	

ド前面と左側で硬化が顕著である。カマド前面から住居跡中央部にかけての床面直上には炭化物や焼土ブロックが薄く堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-5°-Wである。煙道部先端、左袖は調査区域外におよんでいる。袖部は両側で確認できたが、左袖部の大半は調査区域外にあり、先端部のみ確認した。右袖の壁からの残存規模は100cmである。構築土にはしまりの強い黄褐色粘土が用いられ、内側が非常によく焼けている。燃焼部は床面より10cmほど掘り窪められ浅いピット状になる。煙道部とは段差をもって接続する。燃焼部の規模は長さ65cm、幅36cm、床面からの深さは10cmである。

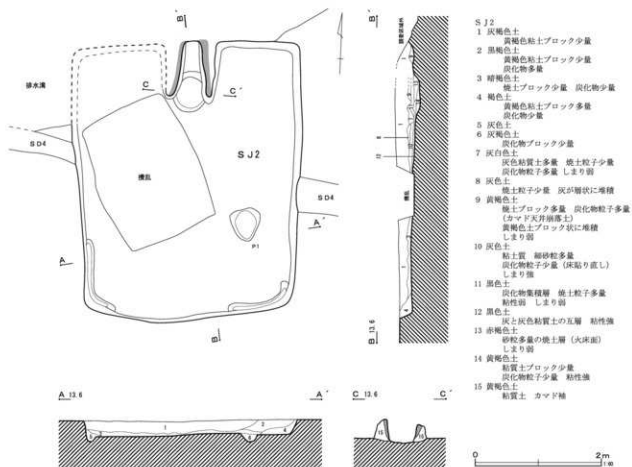
カマド以外の施設としては、住居跡西壁及び南壁の一部で壁溝が確認されている。床面からの深さは

12cmである。また、住居跡東側でピットが1基確認されている。平面形は逆三角形で、規模は50×48cm、床面からの深さは12cmである。

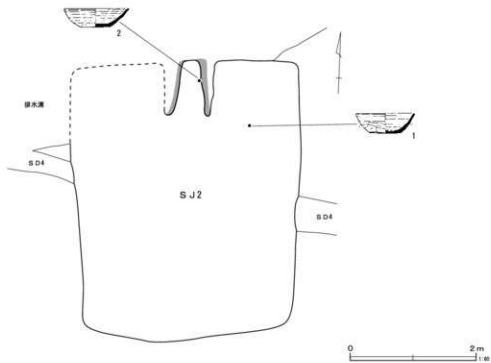
出土遺物は灰釉陶器、須恵器環が見られ、混入したと考えられる土器も認められた。第24図1の須恵器環はカマド右側から、2はカマド内から出土した。4の土師器環は黒色処理がされていた。鉄製鎌1点、角閃石安山岩製の有溝砥石1点、貝塚穴底泥岩2点が出土した。

覆土中より鉄滓が1点出土した。直径6.5cm、重さ213.8g、製鉄滓の可能性が高い。全体に重く、扉刃には鉄錆が付着している。本住居跡には伴わないと考えられる。

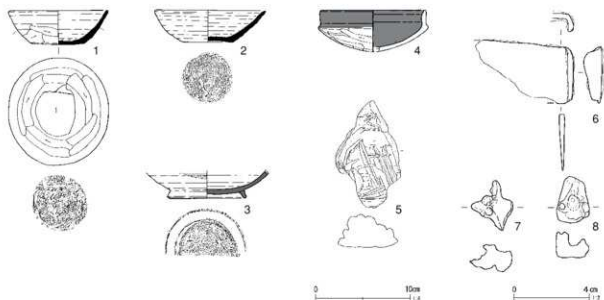
時期は9世紀第Ⅲ四半期である。



第22図 第2号住居跡



第23図 第2住居跡遺物出土状況



第24図 第2号住居跡出土遺物

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	10.4	3.6	5.7	110.4	100	三和	角	良好	灰白	No2	57-3
2	須恵器	環	11.5	3.4	5.6	125.3	80	下総	雲	不良	浅黄	Ⅱ, No1	57-4
3	須恵器	環	—	3.0	8.4	59.0	10	狼投	—	良好	灰白	床直	—
4	土師器	環	(11.0)	(4.4)	—	62.9	30	茨西	角	良好	にぶい黒	■ 角四石安山岩	—
5	石製品	有溝砥石	長さ11.3幅6.7厚さ3.5重さ61.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6	鉄製品	鎌	長さ(5.3)幅2.9背幅0.3	—	—	—	25	—	—	—	—	—	98-10
7	貝類(須恵器)	貝殻	長さ2.3幅2.2厚さ1.3重さ1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	貝類(須恵器)	貝殻	長さ2.5幅1.7厚さ1.3重さ2.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

### 第3号住居跡 (第25・26図)

調査区北側、H-8・9グリッドに位置する。住居跡北西部は調査区域外のため未検出であるが、西側コーナー部は確認できた。

平面形は北西壁が長い台形と思われる。規模は北西-南東3.22m、北東-南西3.83mを測り、確認面からの深さは0.4mである。主軸方位はN-55°-Wである。

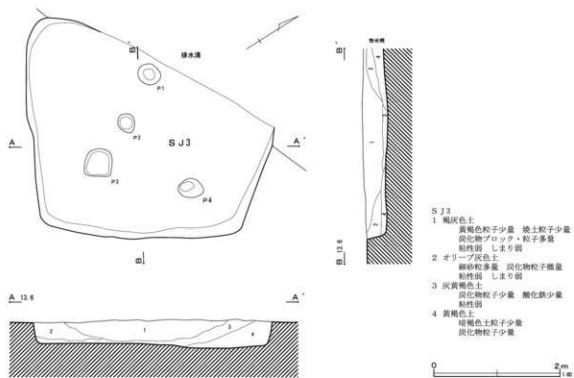
カマドは調査区域外にあたる北西壁に設けられていたものと思われる。

カマド以外の施設としてはピットが4基検出されている。P1は円形で35×31cm、床面からの深さ11cm、P2は円形で33×27cm、床面からの深さ23cm、P3は方形で44×43cm、床面からの深さ21cm、P4は楕円形で38×30cm、床面からの深さ24cmを測る。

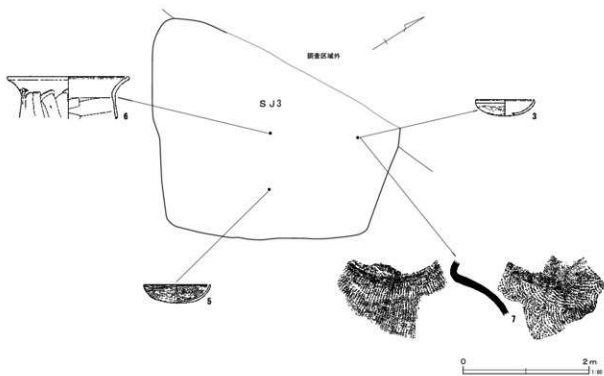
遺物は土師器環・甕、須恵器甕が認められた。第27図の1・2の土師器環は内外面黒色処理がされていた。土玉が1点覆土中より出土した。

時期は7世紀末から8世紀第Ⅰ四半期である。

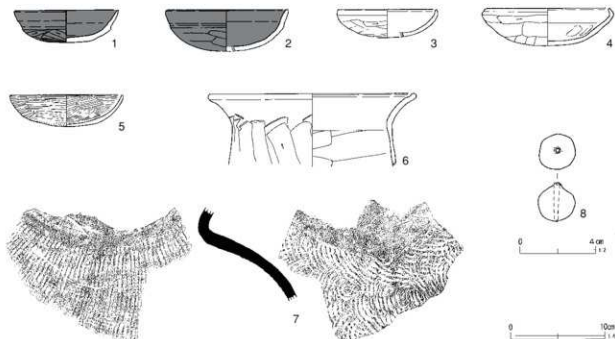




第25図 第3号住居跡



第26図 第3号住居跡遺物出土状況



第27図 第3号住居跡出土遺物

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.4	—	70.5	50	群馬	雲、軽	普通	橙	Ⅱ	
2	土師器	坏	(12.8)	4.4	—	44.8	20	佐野	雲、角	普通	にふい橙	Ⅱ	
3	土師器	坏	(10.4)	(2.9)	—	32.9	30	埴北	角	普通	にふい橙	No.1	
4	土師器	坏	(13.1)	4.0	—	78.8	50	佐野	角	普通	にふい橙	指頭痕	
5	土師器	坏	11.9	3.3	—	99.1	95	佐野	角	普通	にふい橙	No.2、Ⅱ	57-5
6	土師器	甕	(21.5)	(7.8)	—	78.9	5	埴北	雲、角	良好	にふい橙	No.3	
7	須恵器	甕	—	—	—	372.1	5	菅ノ沢	雲	良好	灰	No.1	
8	土製品	土玉	径2.0孔径0.3厚さ2.0重さ6.4	—	—	—	100	—	角	良好	灰黄	Ⅲ	98-34

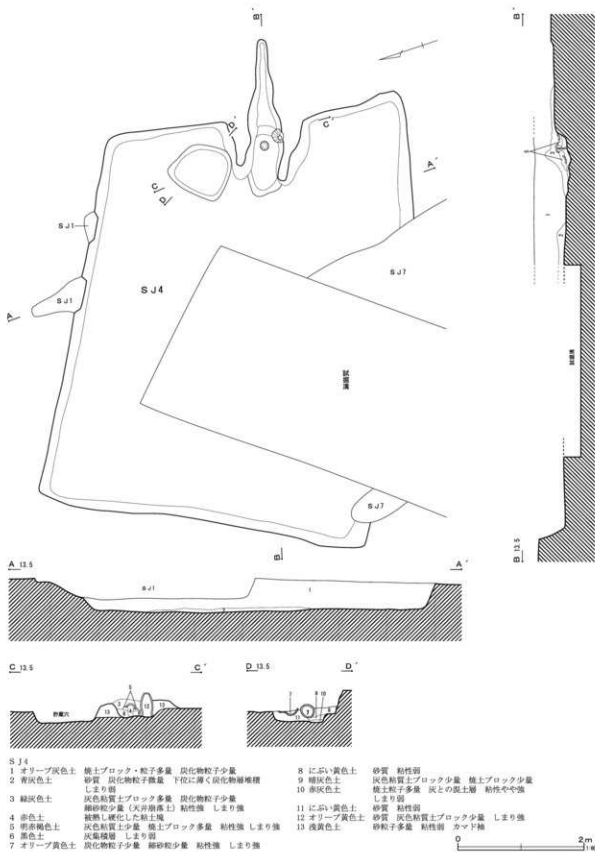
#### 第4号住居跡 (第28~30図)

調査区北側、G・H-10・11グリッドに位置する。第1・7・15号住居跡、第4号溝跡と重複しており、新旧関係は、第1・7号住居跡、第4号溝跡よりも古く、第15号住居跡よりも新しい。試掘溝および第7号住居跡により住居跡中央部から南側の床面を壊されているほか、第1号住居跡により、住居跡北西の遺構上部の削平を受ける。

平面形は東西に長い台形で、規模は、東西方向は住居跡北側で5.85m、南側で7.25m、南北5.25mである。確認面からの深さは0.5mである。主軸方位はS-60°-Eである。

カマドは東壁ほぼ中央に設けられ、カマド方位は

S-70°-Eである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖が90cm、右袖が105cmである。構築土には浅黄色土が用いられ、右袖には土師器甕1点が倒立した状態で、半分ほど埋め込まれていた。燃焼部側の器面には集積した灰が付着していたことから、カマド使用時には燃焼部側の半分は土器が露出していたものと推測される。燃焼部は壁内に取まり、床面よりやや低く掘り窪められる。火床面は凹凸しており、明顯な段差をもって煙道部へと移行する。煙道部はほぼ水平に壁外へ延びる。燃焼部の規模は長さ110cm、幅40cm、床面からの深さは10cmである。煙道部の規模は幅33cm、確認面からの深さは8cmである。カマド燃焼部では土師器坏が2点出土



第28図 第4号住居跡

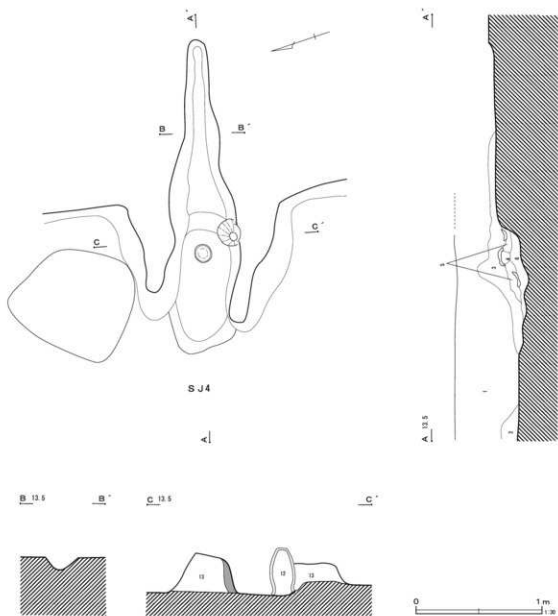
した。このうち倒位の坏は燃烧部のほぼ中央で出土しており、支脚と思われる被熱し赤変した土柱状の粘土塊の上に被せられていた。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴がカマド左袖際で確認されている。平面形は方形で、規模は96×83cm、床面からの深さは22cmである。

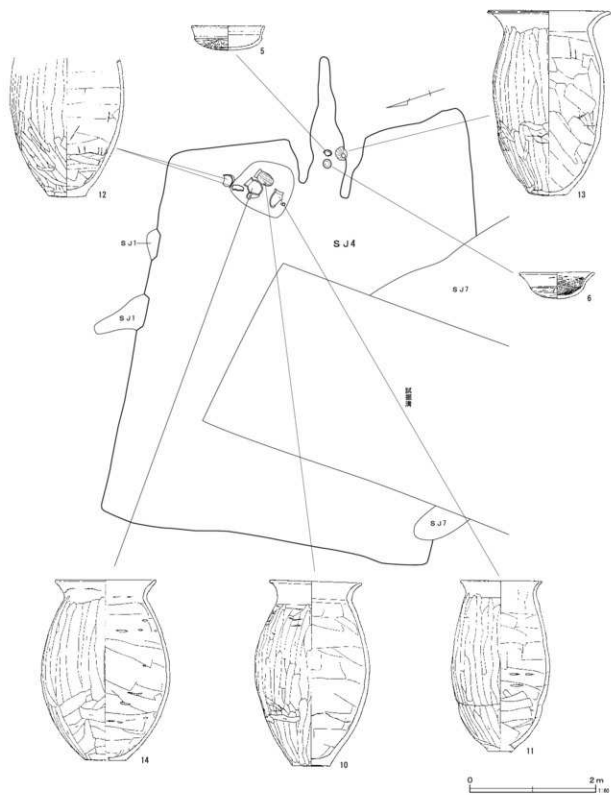
遺物は土師器坏・甕、須恵器坏が認められ、混入

と思われるものも見られた。カマド燃烧部で倒位で出土した土師器坏（第31图6）は内面に細かいミガキが見られ、赤彩されていた。5の坏も内外面に赤彩されていた。このほか、貯蔵穴から土師器甕が4点まとめて出土している。

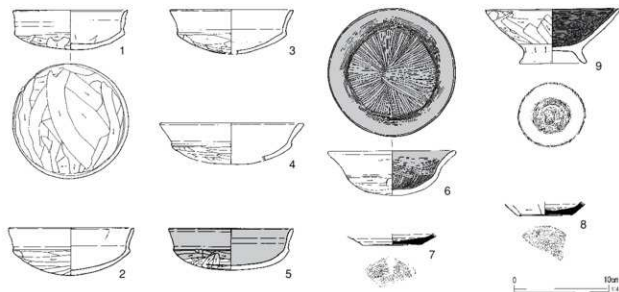
時期は6世紀第I四半期である。



第29图 第4号住居跡カマド



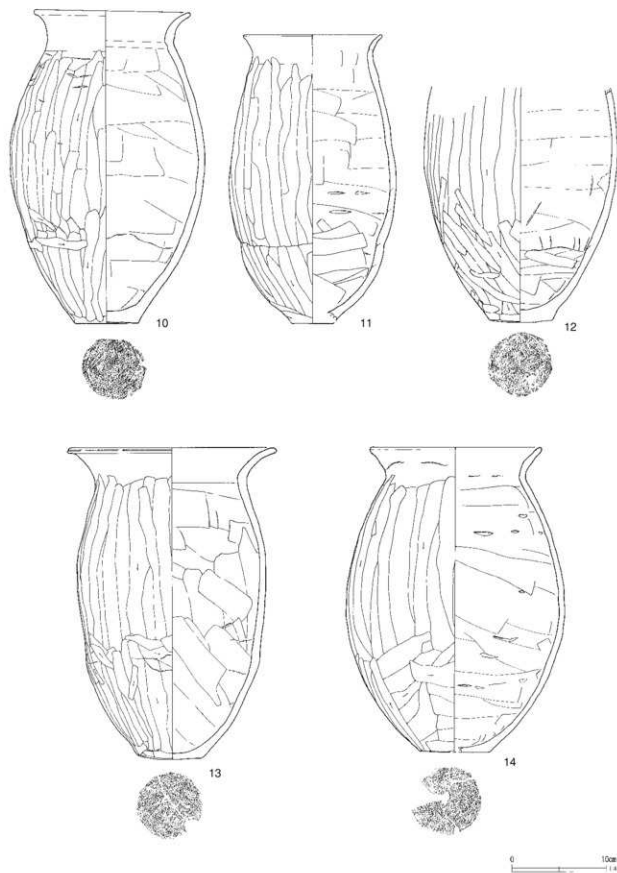
第30图 第4号住居跡遺物出土状況



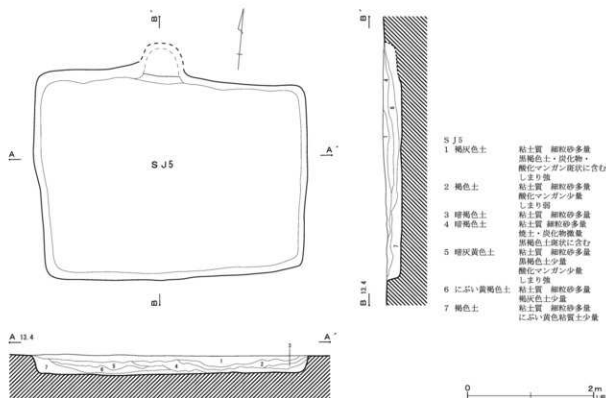
第31図 第4号住居跡出土遺物(1)

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表(第31・32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.2	4.2	—	156.3	95	群東	角	普通	橙	カマド	57-6
2	土師器	坏	13.0	5.0	—	51.0	25	埵北	雲	普通	橙		
3	土師器	坏	(12.9)	(4.7)	—	56.7	30	埵北	角	普通	橙		
4	土師器	坏	(15.2)	(4.0)	—	49.7	25	埵北	雲、角	普通	にぶい橙	■ 小針系	
5	土師器	坏	13.6	4.4	—	114.2	70	埵南	雲	良好	にぶい橙	No2 比企型坏	57-7
6	土師器	坏	13.2	4.7	—	182.4	100	下総	角	普通	橙	No1	57-8
7	須恵器	坏	—	(1.2)	(6.4)	18.3	10	未野	雲	普通	灰白	II	
8	須恵器	坏	—	(1.4)	(5.7)	15.6	10	三和		良好	灰黄	II	
9	内壇土器	高台付甕	(14.2)	5.8	6.8	115.5	50	下総	雲、角	普通	にぶい黄橙		
10	土師器	甕	16.3	33.3	6.8	2502.7	95	群東-臣野	雲、片、角	良好	にぶい黄橙	野穴No1	83-1
11	土師器	甕	(14.4)	30.3	—	846.7	40	群東-臣野	角、軽	普通	にぶい黄	野穴No3	
12	土師器	甕	—	(24.9)	6.6	1037.7	50	群東-臣野	雲、角	普通	にぶい黄	野穴、野穴No5・6、カマド、I	
13	土師器	甕	21.4	33.0	6.9	2484.3	100	茨西	角	良好	にぶい黄	No4	83-2
14	土師器	甕	(18.0)	32.3	7.5	1453.0	50	茨西	雲、軽	普通	にぶい黄橙	野穴No2、I	83-3



第32图 第4号住居跡出土遺物(2)



第33図 第5号住居跡

### 第5号住居跡 (第33・34図)

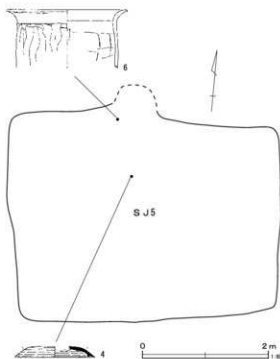
調査区北側、H・I-9グリッドに位置する。第19号住居跡と重複し、同住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西4.36m、南北3.3m、確認面からの深さは0.29mである。主軸方位はN-5°-Wである。

カマドは調査段階で遺構として明瞭に捉えられず、灰や焼土ブロックの集積をもってその位置とした。推測されたカマドは、北壁やや西寄りに位置する。袖部は検出されず、燃烧部、煙道部の範囲は明確ではない。灰・焼土ブロックの分布範囲は壁外におよぶ。

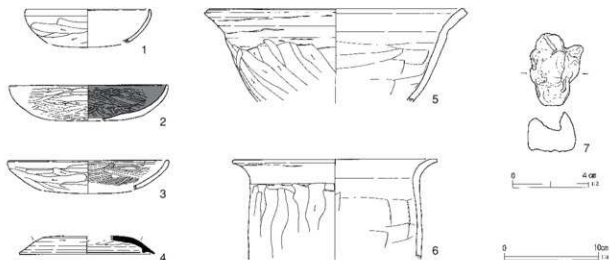
遺物は土師器・鉢・甕、須恵器蓋等が認められた。須恵器蓋は住居跡中央付近から、土師器甕はカマド前から出土した。第33図2の土師器は内面が黒色処理されていた。貝塚(珉泥岩)が1点出土した。

時期は7世紀末から8世紀第I四半期である。



第34図 第5号住居跡遺物出土状況





第35図 第5号住居跡出土遺物

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.4)	(3.6)	—	46.7	30	群東	角	良好	橙	Ⅲ	
2	土師器	坏	(16.7)	3.8	—	54.1	20	佐野	角	良好	にぶい橙	Ⅲ	
3	土師器	坏	(17.0)	(3.1)	—	30.7	10	佐野	角	良好	橙	Ⅲ	
4	須恵器	蓋	(14.3)	(2.0)	—	25.2	5	金山	角	良好	灰	No.1	
5	土師器	鉢	(27.3)	(9.9)	—	409.4	20	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙	Ⅲ	
6	土師器	甕	(21.4)	(10.6)	—	135.4	5	埴北	雲、角	良好	浅黄	No.6、Ⅱ	
7		瓦重穴瓦器片	長さ3.8幅2.6厚さ2.1重さ2.8				—						

### 第6号住居跡 (第36・37図)

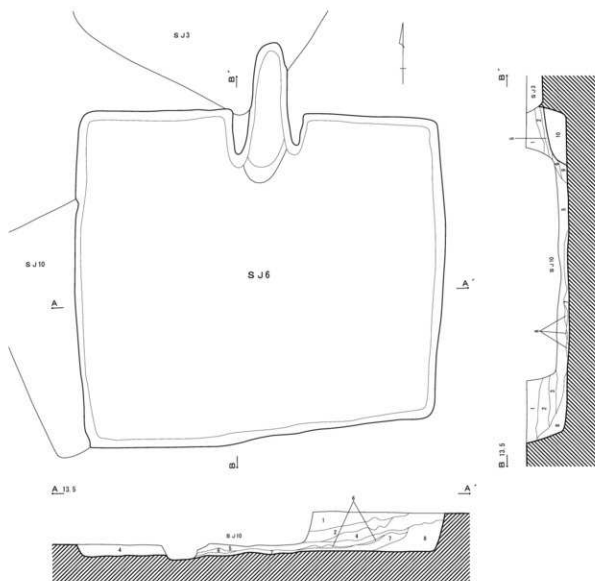
調査区北側、H・I-8・9グリッドに位置する。第3・10・21号住居跡と重複し、新旧関係は、第3・10号住居跡よりも古く、第21号住居跡より新しい。第3号住居跡にカマド煙道の遺構上部を削平されているほか、第10号住居跡に住居跡西側を壊されているが、床面は全面が残っていた。住居跡北側には貼り床が明瞭に残されていた。

平面形は方形で、規模は東西5.90m、南北5.25m、確認面からの深さは0.6mを測る。主軸方位はN-1°-Eである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-0°である。袖部は両側が確認された。構築土には黄褐色の粘土ブロックが用いられ、壁からの規模は左袖92cm、右袖65cmを測る。燃焼部は床面より僅かに低く、煙道部へは明瞭な段差を持たずに移行する。

遺物は土師器の小片が少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、第10号住居跡と第21号住居跡との関係から6世紀第Ⅱから第Ⅲ四半期と考えられる。



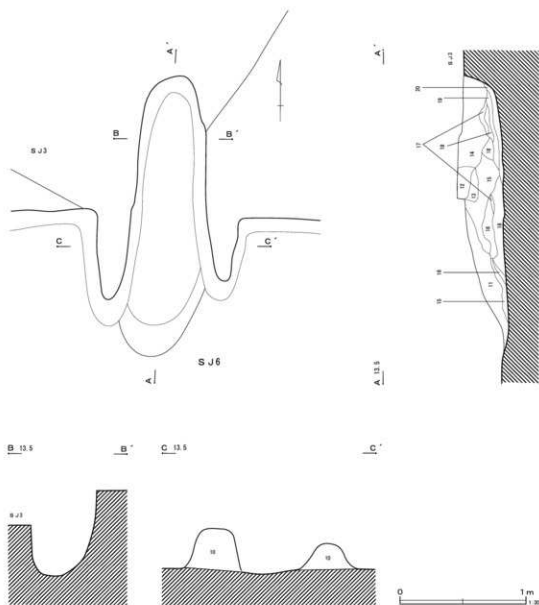
S J 6

- 1 緑褐色土 シルト質、粗砂粒多量、下位に薄く黒色土堆積  
しまりや中強
- 2 緑褐色土 灰色土ブロックやや多量、粗砂粒やや多量
- 3 緑褐色土 灰色土ブロックやや多量、焼土、炭化物微量
- 4 緑褐色土 粗砂粒少量、粘性強、しまりや中強
- 5 黒色土 増粘色土ブロック少量、粗砂粒少量、焼土微量  
炭化物多量、しまり弱
- 6 緑褐色土 黒褐色土・黄褐色土ブロックやや多量  
焼土微量、炭化物少量
- 7 黒色土 炭化物集積層、しまり強
- 8 緑灰色土 灰土層、粗砂粒、灰少量、しまり弱
- 9 灰褐色土 増粘色土ブロック少量
- 10 灰褐色土 焼土ブロック少量、炭化物粒子少量
- 11 黄褐色土 粘質土ブロック層、カマド跡

- 11 にぶい黄褐色土 シルト質、粗砂粒多量、焼土、炭化物微量  
しまりや中強
- 12 灰褐色土 砂質（築山遺構土）
- 13 赤色土 天井跡層土
- 14 褐色土 青灰色砂粒まじり土ブロック少量、粗砂粒少量  
酸化マンガン少量
- 15 緑灰色土 青灰色砂粒まじり土ブロック少量、粗砂粒少量  
焼土微量、炭化物少量、粘性や中強、しまり弱
- 16 褐色土 シルト質、粘質土粒少量（天井跡層土）、  
粘性強、しまりや中強
- 17 赤色土 障子跡層土、粘性や中強、しまりや中強
- 18 黒色土 炭化物集積層、しまり強く弱
- 19 赤色土 天井跡層土、障子跡、粘性や中強、しまりや中強
- 20 黒色土 炭化物集積層

0 2m

第36図 第6号住居跡



第37図 第6号住居跡カマド

### 第7号住居跡 (第38図)

調査区北側、H-10グリッドに位置する。第4・15号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。住居跡中央部が試掘溝に壊されているほか、住居跡北西部を第15号住居跡によって削平され、検出はカマドと住居跡南東部のみにとどまった。

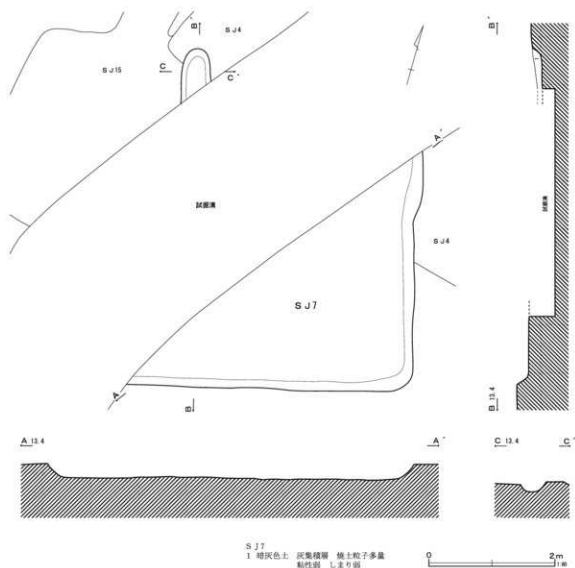
平面形は不明である。検出された規模は東西4.40 m、南北3.80 mである。東壁を基準とした方位は

N-14° -Wである。

カマドは北壁に設けられ、煙道部の一部のみ検出された。カマド方位はN-15° -Wである。袖部は試掘溝に壊されており確認できなかった。

遺物は土師器環・甕、須恵器蓋・環等が認められた。土師器環のうち比較的多くが黒色処理されていた。

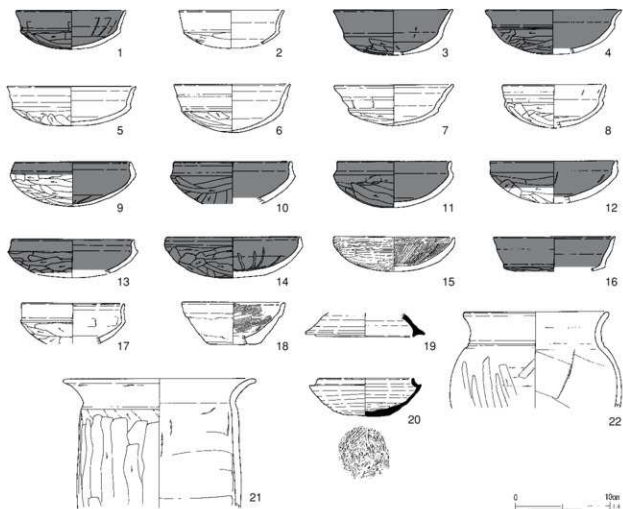
時期は7世紀第Ⅲ四半期である。



第38図 第7号住居跡

第7表 第7号住居跡出土遺物観察表(1) (第39図)

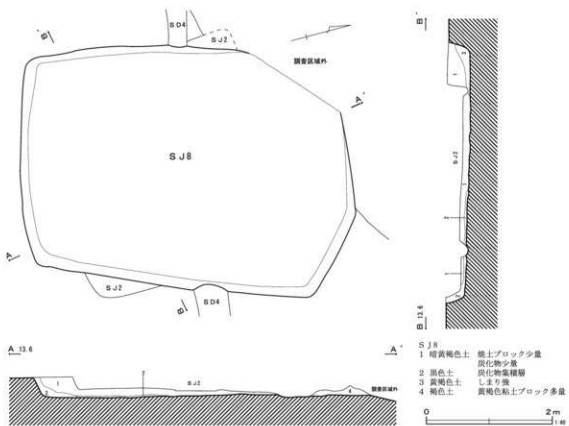
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.5	4.1	—	90.2	60	埴北	雲	普通	にぶい椀	Ⅳ	57-9
2	土師器	坏	11.0	(3.6)	—	41.8	40	埴北	雲	普通	椀	Ⅳ	
3	土師器	坏	(12.4)	(4.8)	—	80.4	30	埴南	雲、片、針	普通	にぶい椀	Ⅳ	57-10
4	土師器	坏	(14.3)	(4.6)	—	38.7	20	佐野	角	普通	にぶい椀	床直	
5	土師器	坏	13.4	4.2	—	138.7	80	埴北	角、軽	良好	にぶい椀	I	57-10
6	土師器	坏	(12.2)	5.1	—	45.9	25	埴北	角	良好	椀		
7	土師器	坏	(12.5)	4.3	—	72.0	40	埴北	角	普通	陶灰		58-1
8	土師器	坏	(10.9)	(4.6)	—	47.1	30	埴北	角	普通	灰濁		
9	土師器	坏	12.2	4.7	—	123.1	70	埴南	角	普通	にぶい椀	Ⅳ	58-1
10	土師器	坏	(12.4)	(4.5)	—	88.8	30	群東	角、軽	普通	にぶい椀		



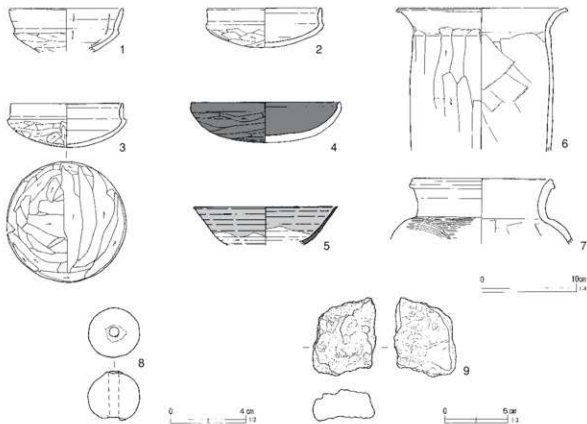
第39図 第7号住居跡出土遺物

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表(2)(第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
11	土師器	坏	11.9	4.9	—	214.0	80	茨西角	普通	普通	にぶい・橙	IV 指頭取	
12	土師器	坏	(13.3)	(4.4)	—	69.6	25	幡南角	普通	普通	にぶい・橙		
13	土師器	坏	(12.9)	(3.5)	—	42.3	25	幡南角	普通	普通	灰黄褐	IV	
14	土師器	坏	(14.2)	4.4	—	143.2	50	茨西角	普通	普通	灰黄褐	IV	
15	土師器	坏	(12.7)	3.6	—	79.9	25	幡南雲、角	普通	普通	にぶい・黄橙	I	
16	土師器	坏	(12.9)	(3.6)	—	49.0	30	群東雲、角	普通	普通	にぶい・橙	IV	
17	土師器	坏	(10.9)	(4.3)	—	42.5	25	埜北雲、角	良好	普通	にぶい・橙	IV	
18	土師器	鉢	(10.4)	4.5	(6.0)	71.8	40	茨西角	普通	普通	にぶい・黄橙	床直	
19	須恵器	坏蓋	(10.4)	(2.5)	—	19.9	10	太田雲	普通	普通	灰白	IV	
20	須恵器	坏身	10.1	4.0	—	143.4	90	秋間	普通	普通	灰		58-2
21	土師器	甕	(20.0)	(13.7)	—	226.6	5	埜北雲、角	普通	普通	にぶい・黄橙	IV	
22	土師器	甕	(15.1)	(10.2)	—	78.9	5	佐野雲	普通	普通	にぶい・橙	床直、IV	



第40図 第8号住居跡



第41図 第8号住居跡出土遺物

### 第8号住居跡 (第40図)

調査区北側、G・H-9グリッドに位置する。第2号住居跡、第4号溝跡と重複しており、新旧関係は両遺構よりも古い。遺構上部は削平を受けるが、床面はほぼ全面が残っている。北西コーナーは調査区域外のため未検出である。

平面形は南北に長い長方形で、規模は南北5.24m、

東西3.85m、確認面からの深さは0.35mである。主軸方位はN-75°-Wである。

カマドやその他の施設は確認されなかった。

遺物は土師器環・甕が認められた。第41図4の土師器環は黒色処理されていた。土玉1点、鉄滓1点、混入と思われる灰種陶器が1点出土した。

時期は7世紀第Ⅱ四半期である。

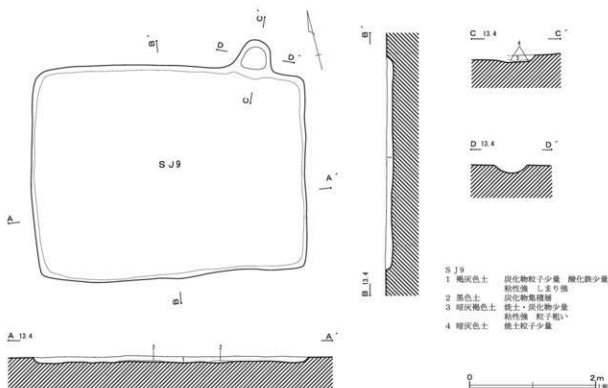
第9表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(11.9)	(4.6)	—	55.2	25	群東	雲	良好	にぶい橙		58-3
2	土師器	環	(12.0)	4.1	—	70.0	30	群東	角	普通	浅黄橙	IV	
3	土師器	環	11.7	4.7	—	123.4	80	幡南	雲、角	普通	灰白	II	
4	土師器	環	(15.6)	4.3	—	105.0	30	幡南	角	良好	浅黄橙	IV	I ツケガケ
5	灰種陶器	甕	(15.2)	(4.1)	—	20.3	5	猿投	角	良好	灰白	I	
6	土師器	甕	(17.7)	(15.3)	—	159.7	5	鳩北	雲、角	普通	淡黄	PI床直	IV 須恵器模倣
7	土師器	甕	(14.6)	(7.0)	—	98.8	5	群東	角	良好	にぶい橙	IV	
8	土製品	土玉	径2.2孔径0.5厚さ2.6重さ15.8				100						93-4
9	が	炭	長さ7.1幅5.2厚さ2.3重さ81.8				—					II	

### 第9号住居跡 (第42図)

調査区北側、I-10グリッドに位置する。第13・

16・29号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも新しい。



第42図 第9号住居跡

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西4.36m、南北3.45m、確認面からの深さは0.08mを測る。主軸方位はN-13° Eである。

カマドは北壁の東寄りに設けられ、カマド方位はN-30° Eである。袖部は検出されていない。燃焼部は壁外に張り出し、床面よりもやや低く掘り窪められる。

出土遺物は少量で、須恵器環2点が図示できたの

みである。

時期は8世紀第Ⅲ四半期である。



第43図 第9号住居跡出土遺物

第10表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

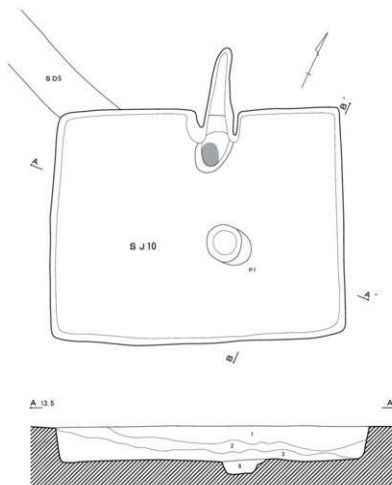
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	環	(12.0)	3.6	(6.5)	45.0	40	南比企	針	良好	灰	58-4
2	須恵器	環	(15.6)	(3.9)	—	32.7	10	未野	片	普通	にぶい・黄緑	

#### 第10号住居跡 (第44~46図)

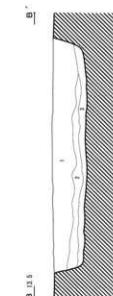
調査区北側、H-8・9、I-8グリッドに位置する。第6号住居跡、第5号溝跡と重複し、新住居

跡は、第5号溝跡よりも古く、第6号住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西4.65m、



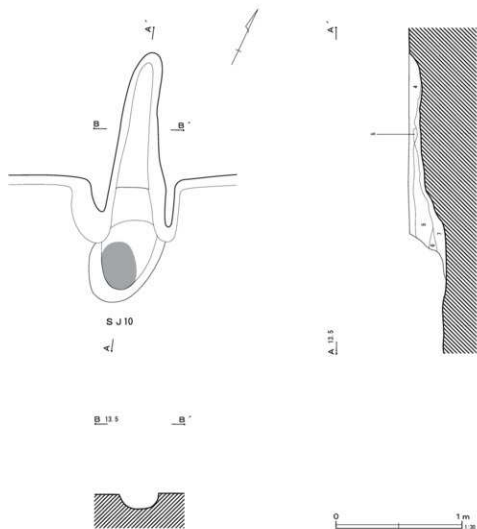
第44図 第10号住居跡



- S J 10
- 1 暗褐色土 シルト質、粗砂粒多量  
下位に薄く炭化物塊層 しまりやや強
  - 2 暗褐色土 灰色土ブロックや中多量 粗砂粒や中多量
  - 3 暗褐色土 灰色土ブロックや中多量 焼土・炭化物塊層  
粗砂粒少量 粘性強 しまりやや強
  - 4 暗褐色土 灰色土や中多量 粗砂粒や中多量
  - 5 暗褐色土 粗砂粒少量 焼土・炭化物塊層
  - 6 赤色土 焼土塊層 (天井崩落土) しまり強
  - 7 黒色土 炭化物塊層 しまり弱
  - 8 暗褐色土 炭化物や中多量

0 2m 1m





第45図 第10号住居跡カマド

南北3.65m、確認面からの深さは0.55mである。主軸方位はN-25°-Wである。

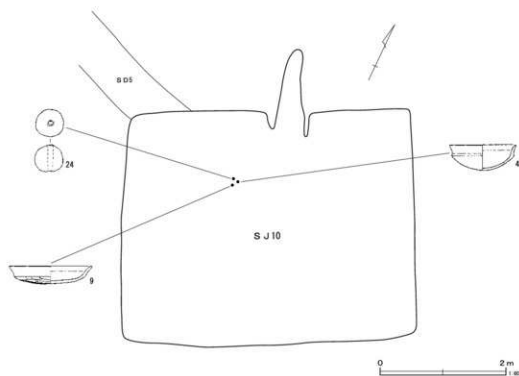
カマドは北壁のやや東寄りに設けられており、カマド方位はN-19°-Wである。袖部は両側が確認され、左右袖ともに壁から50cm残っていた。燃烧部は壁内に取まり、燃烧部は床面よりやや低く掘り窪められる。煙道部へは15cmほどの高低差のある傾斜をもって移行し、煙道部は長く伸びる。

カマド以外の施設では、中央部にピットが1基確

認されている。P1は楕円形で、規模は75×48cm、床面からの深さ20cmを測る。

遺物は土師器環・甕・壺・甕、須恵器環が認められた。土師器環には黒色処理されたものが比較的多く見られ、第47区16の土師器環は外面・縁端と内面が赤彩されていた。4の環は住居跡中央付近で出土し、内外面に煤が付着していた。土玉1点、貝塚穴痕泥岩1点が出土した。

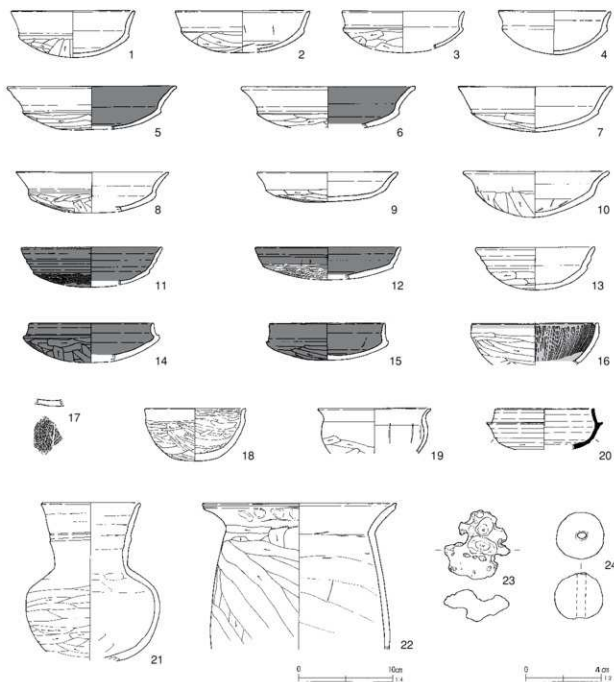
時期は6世紀第Ⅲ四半期である。



第46図 第10号住居跡遺物出土状況

第11表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	使成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.0	5.0	—	164.0	80	埴北	雲	普通	橙		58-5
2	土師器	坏	(14.2)	(4.5)	—	53.2	60	埴北	雲	普通	にぶい橙	■	
3	土師器	坏	(12.8)	(4.0)	—	29.7	20	埴北	雲	普通	にぶい黄橙	2号カマド	
4	土師器	坏	(12.4)	4.6	—	103.8	60	埴北	雲、角	普通	橙	No.3 内外面に煤付着	58-6
5	土師器	坏	(17.8)	4.6	—	50.4	20	埴北	角	良好	灰黄橙	■ 小針系	
6	土師器	坏	(18.2)	(4.4)	—	67.6	20	埴北	雲	良好	にぶい黄橙	■ 小針系	
7	土師器	坏	(16.4)	4.8	—	103.8	40	埴北	雲、角	普通	にぶい黄橙	■ 貼床下、小針系	
8	土師器	坏	(15.8)	(4.2)	—	62.5	25	埴北	雲	普通	橙	■ 貼床下、■、■ 貼床下	
9	土師器	坏	15.0	3.1	—	133.1	80	埴北	角	普通	にぶい橙	No.5	58-7
10	土師器	坏	(15.0)	4.9	—	182.2	60	埴北	雲、角	普通	灰褐		58-8
11	土師器	坏	(14.9)	4.0	—	38.1	30	埴北	雲	良好	橙	■	
12	土師器	坏	15.0	(3.4)	—	105.5	50	埴北	角	普通	橙	I	
13	土師器	坏	12.4	4.5	—	169.0	100	埴北	角	良好	灰白	IV	58-9
14	土師器	坏	(13.1)	(4.1)	—	60.2	25	群東	角	普通	にぶい黄橙	■	
15	土師器	坏	(12.2)	3.9	—	45.5	25	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙	■、IV	
16	土師器	坏	(13.3)	(4.4)	—	38.5	20	栲野	角	普通	にぶい橙	I、■	
17	土師器	坏	—	—	—	9.3	5	佐野	角	普通	にぶい橙	I 木炭痕	
18	土師器	甕	(10.6)	(5.5)	—	84.8	30	栲野	角	良好	にぶい黄橙	I 貼床下、2号カマド 黒煤	
19	土師器	鉢	(12.0)	(4.8)	—	80.9	40	埴北	雲	普通	にぶい橙	■	
20	須恵器	坏身	(10.6)	(4.4)	—	16.3	10	金山	角	良好	黄灰	I、貼床下	
21	土師器	壺	10.3	16.7	—	385.2	60	群東-埴北	角	普通	にぶい赤橙	I、I 貼床下、■、2号カマド	83-4
22	土師器	甕	20.6	(15.5)	—	701.9	20	栲野	角	普通	にぶい黄橙	I 貼床下、I 貼床下、2号カマド、■、■	73-1
23		貝類(加瀬産)	長さ3.6幅3.4厚さ1.5重さ6.9				—				■		
24	土製品	土玉	径2.5孔径0.5厚さ2.4重さ14.4				100			普通	にぶい黄橙	No.4	98-26



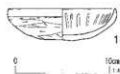
第47図 第10号住居跡出土遺物

第11号住居跡 (第48図)

調査区北東側、H・I-10・11グリッドに位置する。他遺構との重複は見られない。

平面形は東側の大部分が調査区域外に及んでいるため不明である。検出された規模は南北2.90m、東西1.80m、確認面からの深さは0.3mである。主軸方位はN-7°-Wである。

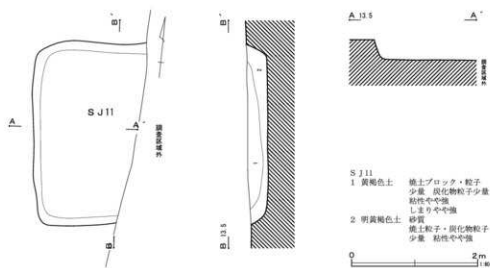
遺物は小片が少量で、土師器環1点が図示できたのみである。内面の放射状指文は、風化が激しく見



第48図 第11号住居跡出土遺物

えにくくなっている。

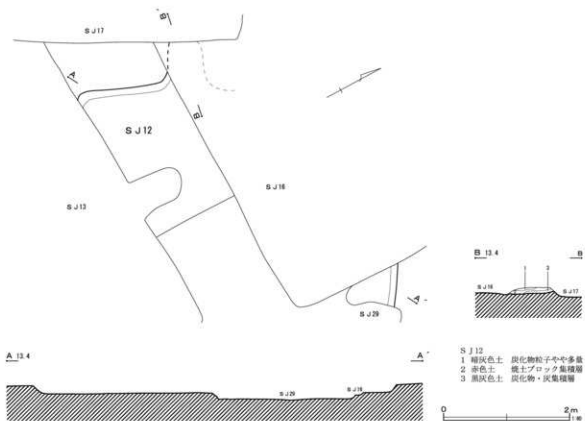
時期は8世紀前半である。



第49図 第11号住居跡

第12表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	坏	11.2	3.4	—	102.3	75	佐野	角	良好	橙		58-10



第50図 第12号住居跡

### 第12号住居跡 (第50図)

調査区北東、1-10グリッドに位置する。第9・13・16・17・29号住居跡と重複し、新旧関係はすべての住居跡よりも古い。第16号住居跡の下層からカマド燃焼部と思われる炭化物・灰・焼土ブロックの集積が確認されたほか、西壁と北壁の一部が検出された。床面は他遺構との重複により、住居跡南西と北東の一部が残るのみである。

平面形は不明であるが、確認された西側コーナーと北壁から推測すると、東西5.2m前後となる。西壁を基準とした方位はN-60°-Wである。

カマドは炭化物・灰・焼土ブロックの集積として西壁で確認された。集積層は床面よりわずかに低い位置に堆積しており、この位置が燃焼部と思われる。袖部、煙道部などは不明である。

出土遺物は土師器の小片が少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、他の住居跡の重複関係から、6世紀第1四半期以前と考えられる。

### 第13号住居跡 (第51図)

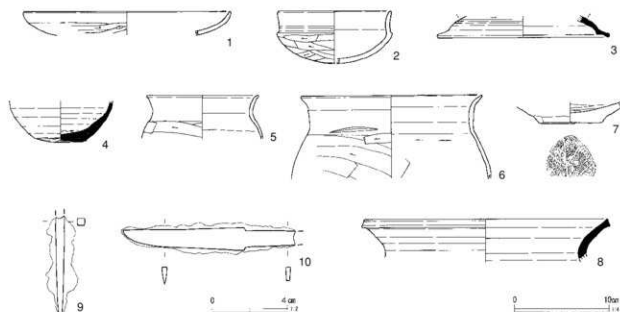
調査区北東側、I・J-9・10グリッドに位置する。第9・12・17・29・43・60号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は、第9・60号住居跡、第1号溝跡よりも古く、第12・17・29・43号住居跡よりも新しい。住居跡中央部は第1号溝跡が横走り、床面を大きく掘りぬく。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西7.73m、南北6.02m、確認面からの深さは0.26mである。主軸方位はN-4°-Wである。

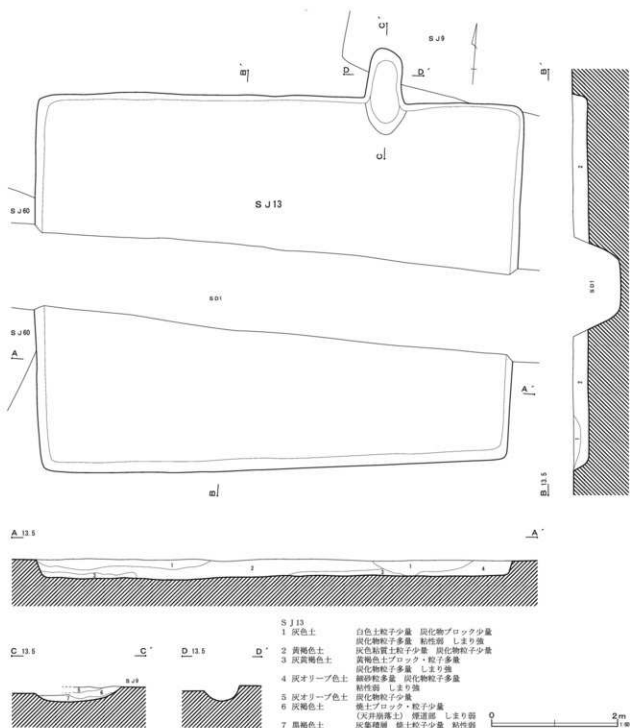
カマドは北壁の東寄りに設けられ、カマド方位はN-2°-Wである。燃焼部は壁を切り込み、床面より15cmほど掘り窪められる。煙道部は確認できなかった。

遺物は土師器皿・甕、須恵器蓋・壺・甕等が認められた。第51図8の須恵器甕の口縁には、自然釉が見られた。土師器坏には混入と思われるものも見られた。釘、刀子の鉄製品が出土した。

時期は8世紀前半である。



第51図 第13号住居跡出土遺物



第52図 第13号住居跡

第13表 第13号住居跡出土遺物観察表(1)(第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(21.6)	(2.5)	—	23.7	5	佐野	内・軽	普通	灰黄褐	I	
2	土師器	坏	(11.8)	5.6	—	46.3	20	群東	雲	普通	にぶい、粗		
3	須恵器	蓋	(18.2)	(2.3)	—	9.5	5	新治	雲	普通	灰白	IV	
4	須恵器	壺	—	(4.4)	4.6	62.6	20	湖西		良好	灰	I	指頭痕

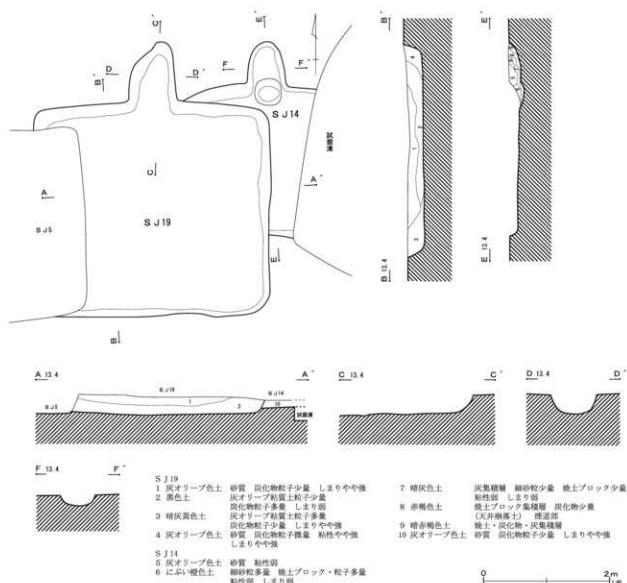
第14表 第13号住居跡出土遺物観察表 (2) (第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
5	土師器	小型甕	(11.8)	(4.6)	—	40.9	10	埼北	角	良好	にぶい橙	Ⅲ		
6	土師器	甕	(19.0)	(8.9)	—	83.7	5	埼北	雲、角	普通	にぶい橙	カマド		
7	土師器	甕	—	(2.8)	(6.4)	60.9	5	群東	角	普通	灰褐色	本堂庭		
8	須恵器	甕	(25.7)	(4.6)	—	32.2	5	東海		良好	灰	Ⅳ 自然軸		
9	鉄製品	棒状品	長さ(5.6)	幅0.4			—					Ⅳ		98-11
10	鉄製品	刀子	長さ(9.1)	刃長6.4	刃幅1.2	背幅(0.3)	90					Ⅳ		98-5

第14号住居跡 (第53図)

調査区北側、H-9・10グリッドに位置する。第19号住居跡と重複関係にあり、新旧関係は本住居跡の方が古い。

住居跡東側は試掘溝に、西側は第19号住居跡に埋されており、平面形は不明である。検出された規模は南北2.05m、東西2.10m、確認面からの深さは0.2mである。主軸方位はN-0°である。



第53図 第14・19号住居跡

カマドは北壁に造られ、カマド方位は $N-5^{\circ}-W$ である。燃焼部は床面よりやや低く、浅いピット状となる。煙道部は住居跡床面とほぼ同じ高さで、スロープ状に立ち上がる。

出土遺物は土師器の小片が極少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、第19号住居跡との関係から、7世紀末以前と考えられる。

#### 第15号住居跡 (第54図)

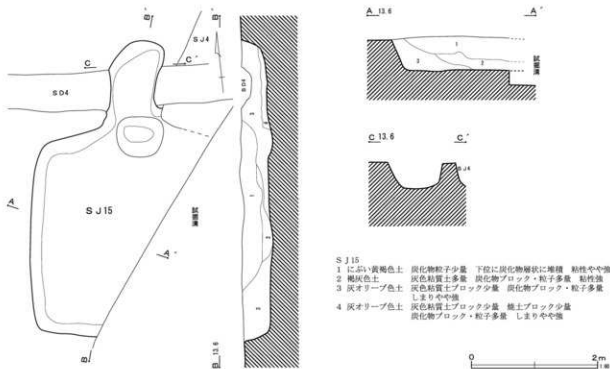
調査区北側、H-10グリッドに位置する。第4・7号住居跡、第4号溝跡と重複しており、新旧関係は、第4号住居跡、第4号溝跡よりも古く、第7号住居跡よりも新しい。住居跡東側を試掘溝、第4号住居跡に壊されているほか、第4号溝跡がカマド部分を東西に走り、上部を削平する。

平面形は不明で、検出された規模は南北3.20m、東西2.65m、確認面からの深さは0.45mである。主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ である。

カマドは北壁に設けられ、カマド方位は $N-8^{\circ}-E$ である。袖は両側ともに確認できなかったが、床面より10cm程度掘り窪められた燃焼部が確認できた。煙道部は壁外に延び、燃焼部とはゆるやかな段差を持って移行する。煙道部は僅かな凹凸を繰り返しながら外側に向かって緩やかに傾斜し、僅かに開きながら立ち上がる。煙道部の規模は、長さ120cm、幅75cm、確認面からの深さ37cmである。

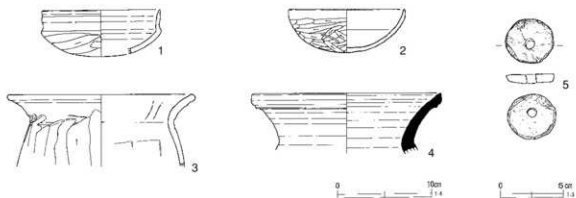
出土遺物は少量で、土師器環・埴、須恵器残片等が認められた。第55図4の須恵器甕の口縁部には自然釉が見られた。扁平な石製紡錘車が1点出土した。

時期は6世紀第I四半期である。



第54図 第15号住居跡





第55図 第15号住居跡出土遺物

第15表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.4)	(4.7)	—	35.0	20	埼玉	角	普通	浅黄		59-1
2	土師器	環	12.1	4.6	—	99.3	70	埼玉	雲、角	良好	にぶい橙		
3	土師器	甕	19.4	(7.7)	—	364.4	5	埼玉	角	普通	浅黄粒		
4	須恵器	甕	(19.8)	(6.4)	—	96.6	5	陶色		良好	褐灰		
5	石製品	紡錘車	径3.8孔径0.7厚さ0.7重さ14.3				100						

### 第16号住居跡 (第57図)

調査区北側、H・I-10グリッドに位置する。第9・12・17・29号住居跡と重複し、新旧関係は、第9号住居跡よりも古く、第12・17・29号住居跡よりも新しい。カマドの一部が鼠掘溝によって壊されているほか、第9号住居跡により遺構上部の削平を受ける。

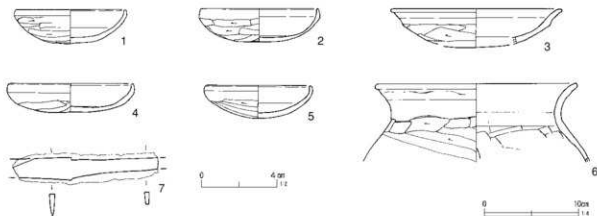
平面形はやや歪んだ方形で、規模は東西5.67m、

南北5.56m、確認面からの深さは0.3mである。主軸方位はN-1°-Wである。

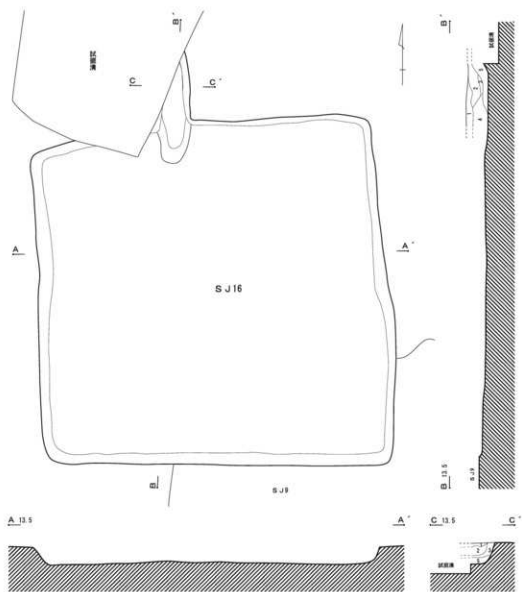
カマドは北壁のやや西寄りに設けられ、カマド方位はN-0°である。燃焼部は床面よりやや低く掘り窪められ、煙道部と区別は不明瞭である。

遺物は土師器環、甕が認められた。刀子が1点出土した。

時期は8世紀前半である。



第57図 第16号住居跡出土遺物



- S J 16
- |           |                               |           |                |
|-----------|-------------------------------|-----------|----------------|
| 1 オリーブ灰色土 | 砂質 粘性弱                        | 4 オリーブ灰色土 | 細砂粒多量 粘性弱 しまり弱 |
| 2 明赤褐色土   | 焼土ブロック・粒子多量 細砂粒多量             | 5 黒褐色土    | 炭化物粒子多量        |
| 3 にぶい赤褐色土 | 焼土粒子多量 下部に炭化物層状に堆積 粘性やや強 しまり弱 |           |                |

第57図 第16号住居跡

第16表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	坏	(11.6)	3.6	—	58.2	40	群東	雲、角	普通	にぶい椀		
2	土師器	坏	(12.1)	3.5	—	64.4	40	群東	雲、角	良好	にぶい椀	■ 指頭痕	
3	土師器	坏	(17.6)	(3.7)	—	71.9	20	茨西	雲、角	良好	にぶい椀		
4	土師器	坏	(12.9)	3.0	—	75.4	30	茨西	角	普通	にぶい椀		
5	土師器	坏	10.4	3.5	—	70.3	60	佐野	角	普通	にぶい椀	■	59-2
6	土師器	甕	(21.0)	(8.4)	—	282.4	5	埴北	雲、角	普通	にぶい椀	■、■	
7	鉄製品	刀子	長さ(27)	刃長(31)	刃幅(9-12)	幅(3)	50					■	38-2-6

### 第17号住居跡（第58図）

調査区北側、1-9・10グリッドに位置する。第13・16・20号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも古く、他遺構に各所の上面を壊されている。

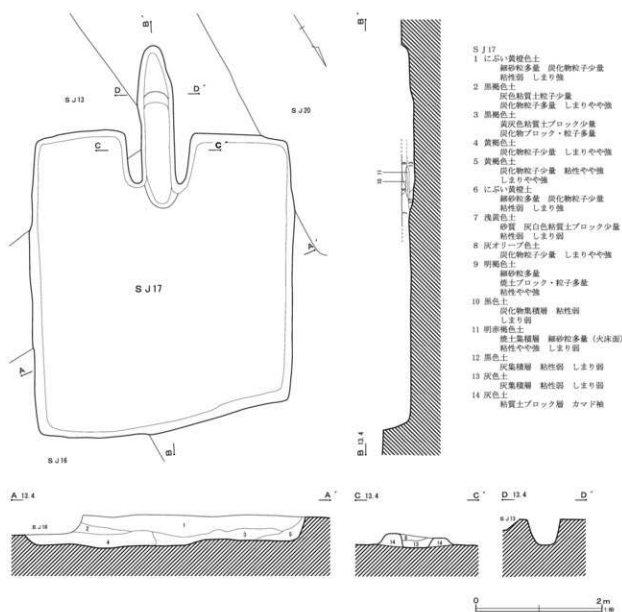
平面形は南北に長い長方形で、南北4.83m、東西4.20m、確認面からの深さは0.43mである。主軸方位はS-30° -Wである。

カマドは南壁中央に設けられており、カマド方位

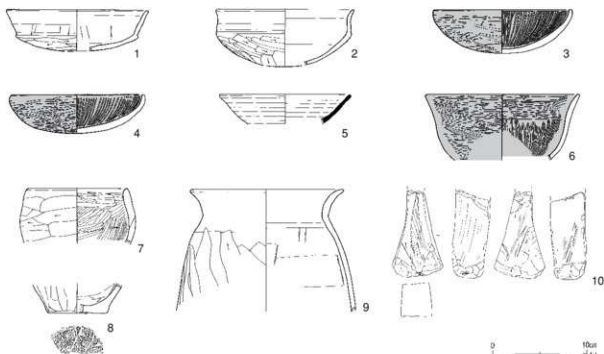
はS-30° -Wである。袖壁は両側で確認され、左袖は88cm、右袖は96cmである。燃焼部は壁を45cmほど切り込み、床面より5-10cmほど掘り窪められ、煙道部へは低い平差をもって移行する。

遺物は土師器環・鉢・甕等が認められた。第59図3・4の土師器環、6の鉢は赤彩されていた。凝灰岩製の砥石が1点出土した。また、混入と思われる須恵器環が見られた。

時期は6世紀第1四半期である。



第58図 第17号住居跡



第59図 第17号住居跡出土遺物

第17表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	杯	(14.8)	(4.3)	—	86.5	40	群東	角	普通	橙		
2	土師器	杯	14.4	(5.9)	—	111.5	50	群東	角	普通	橙	Ⅳ	59-3
3	土師器	杯	14.5	4.6	—	241.4	80	群南	角	普通	浅黄橙	Ⅲ	59-4
4	土師器	杯	13.9	4.1	—	186.2	75	群南	針	普通	橙	Ⅲ	59-5
5	須恵器	杯	(13.7)	(3.1)	—	18.4	10	南比企	角	普通	灰白	Ⅱ	
6	土師器	鉢	(16.0)	(7.0)	—	46.5	10	茨西-玉雲	雲、角	普通	にぶい橙	Ⅱ	
7	土師器	鉢	(10.4)	(5.9)	—	97.7	25	茨西	角	良好	にぶい橙		
8	土師器	甕	—	(3.2)	(6.0)	62.0	5	新治	雲、角	普通	にぶい橙	木葉斑	
9	土師器	甕	16.0	(13.0)	—	392.0	20	群東	角	良好	橙		
10	石製品	砥石	長さ9.3幅5.4厚さ3.6重さ199.1				80					Ⅰ 凝灰岩	96-13

#### 第18号住居跡 (第60図)

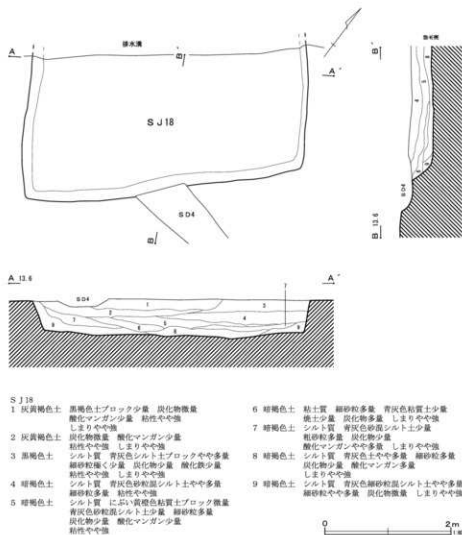
調査区北側、H-8グリッドに位置する。住居跡北側半分が調査区域外に及ぶほか、第5号溝跡と重複している。新旧関係は第5号溝跡よりも古い。

平面形は不明で、検出された規模は北東-南西4.46m、北西-南東2.20m、確認面からの深さは

0.55mである。主軸方位はN-36°-Wである。

遺物は土師器環・甕・壺・鉢等が認められた。第61図2・3・4の土師器環には黒色処理がされていた。14は欠けているものの凝灰岩製の砥石と考えられるが、極めて薄い。土玉1点が出土した。

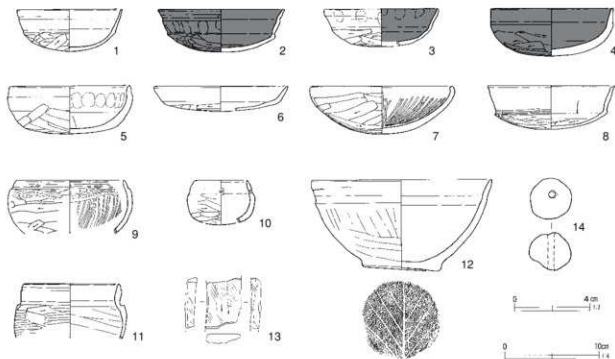
時期は7世紀第Ⅳ下半期である。



第60図 第18号住居跡

第18表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版		
1	土師器	坏	(11.0)	(4.4)	—	56.2	50	埜北	角	良好	橙	IV	59-6		
2	土師器	坏	13.2	4.5	—	104.5	60	埜北	角	良好	灰黄褐	IV		指頭痕	
3	土師器	坏	(11.8)	(3.9)	—	54.2	40	埜南	角	良好	にぶい黄橙	指頭痕			
4	土師器	坏	(12.8)	5.0	—	124.2	40	茨西	角	普通	にぶい橙	IV	59-7		
5	土師器	坏	(12.5)	5.1	—	101.3	30	埜南	角	普通	にぶい橙	指頭痕 煤付着			
6	土師器	皿	(14.1)	(2.1)	—	31.4	25	埜北	雲、角	普通	橙	I			
7	土師器	坏	(14.4)	(5.0)	—	130.3	30	佐野	角、軽	普通	橙	IV、SJ6-III	59-7		
8	土師器	坏	13.2	4.6	—	159.0	75	群東	角	普通	にぶい橙	SJ10-II			
9	土師器	甕	(11.4)	(5.7)	—	28.3	10	佐野	雲	良好	橙	I			
10	土師器	無頭壺	(5.5)	(4.5)	—	10.3	10	角	角	普通	黄灰	IV	穿孔	73-2	
11	土師器	小型甕	10.0	5.8	—	147.2	50	埜南	角	普通	にぶい橙	I、III、IV、SJ18-IV			
12	土師器	鉢	(19.0)	9.7	8.4	420.2	75	茨西	雲、角	普通	にぶい橙	I、III、IV	煤付着 木葉痕		
13	石製品	砥石	長さ4.9幅3.7厚さ1.0重さ29.3				50						IV	凝灰岩	96-1-9
14	土製品	土玉	径2.2孔径0.4厚さ2.0重さ8.0				100						IV		90-2-2



第61図 第18号住居跡出土遺物

#### 第19号住居跡 (第53区)

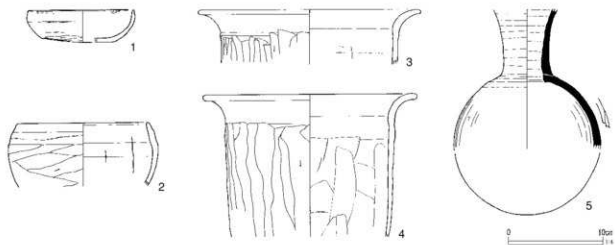
調査区北側、H-9・10グリッドに位置する。第5・14号住居跡と重複し、新旧関係は、第5号住居跡より古く、第14号住居跡よりも新しい。床面は、西側を第7号住居跡によって壊されている。

平面形は方形で、規模は東西3.75m、南北3.40m、確認面からの深さは0.28mである。主軸方位はN-0°である。

カマドは北壁中央に設けられており、カマド方位はN-7°-Eである。燃焼部は床面とほぼ同じ高さであり、煙道部との区別が不明瞭である。

遺物は土師器環・鉢・甕、須恵器長頸瓶が認められる。第62図5の須恵器長頸瓶には自然釉が見られた。

時期は7世紀末から8世紀第1四半期である。



第62図 第19号住居跡出土遺物

第19表 第19号住居跡出土物観察表 (第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.1	3.4	—	70.3	50	茨西	角	良好	にぶい橙	平底 油煙付着	59-8
2	土師器	鉢	(13.6)	(6.7)	—	74.8	10	茨西	雲、角	良好	橙		
3	土師器	甕	(23.0)	(5.8)	—	183.0	10	埼玉	角	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	甕	(22.4)	(15.1)	—	182.5	5	群東	雲、角	普通	にぶい橙		
5	須恵器	長頸壺	—	(15.0)	—	245.2	20	湖西		良好	灰白	フラスコ形 自然輪	

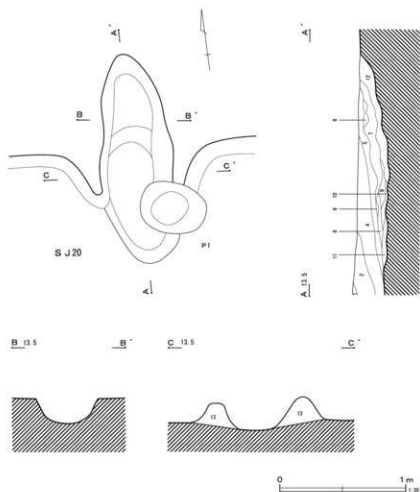
第20号住居跡 (第63・64図)

調査区北側、I-9グリッドに位置する。第17・21・22・24・35・60号住居跡と重複し、新旧関係は、第60号住居跡より古く、その他の住居跡よりも新しい。

平面形は方形で、規模は南北4.80m、東西4.70m、確認面からの深さ0.25mである。主軸方位はN-

8°-Eである。

カマドは北壁のやや東寄りに設けられ、カマド方位はN-3°-Eである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は、左袖46cm、右袖30cmである。右袖はP1によって先端部が壊されている。構築土には灰色粘質土が用いられていた。燃焼部は壁内に収まり、床面よりやや低く掘り窪められる。煙道部



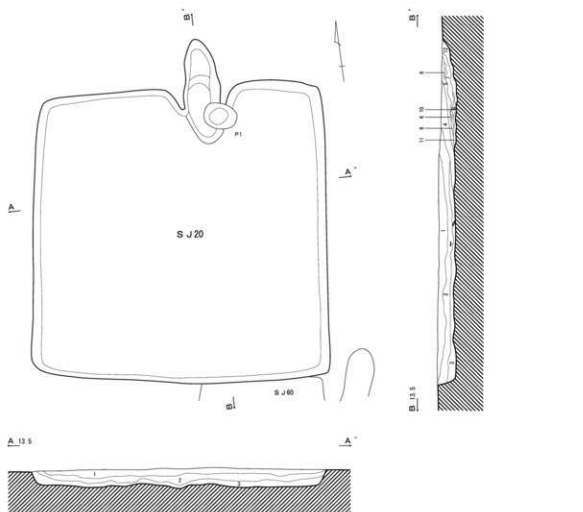
第63図 第20号住居跡カマド

へは低い段差をもって移行し、煙道部は外側へ向かって70cm延び、緩やかに傾斜して立ち上がる。

カマド以外の施設では、カマド右側にピットが1基確認されている。P1は楕円形で、規模は53×40cm、床面からの深さ9cmを測る。

遺物は土師器環・皿・皿・盤・甕、須恵器蓋・坏等が認められた。土師器環・皿・盤には内外面にミガキを施すものが多く見られた。第65図3の土師器環の外周底部には木炭痕が見られる。

時期は8世紀前半である。

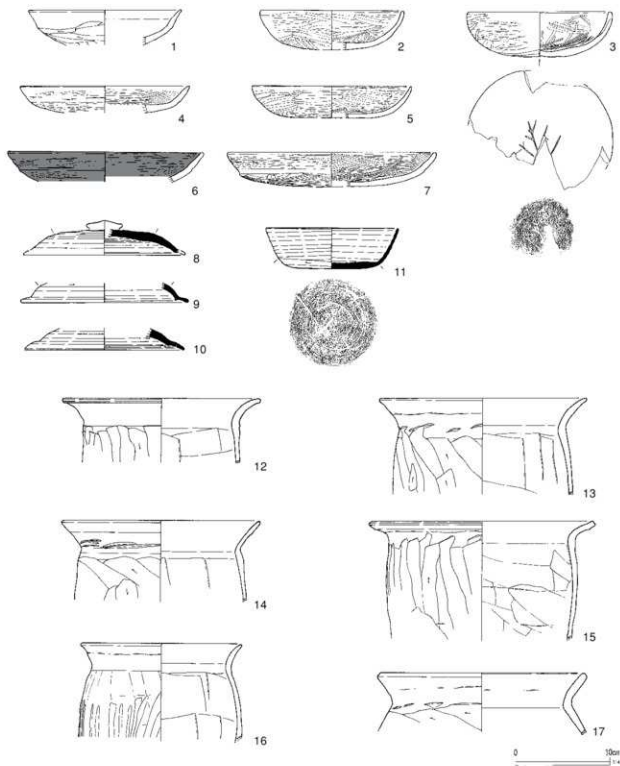


S J 20

- |        |                               |         |                                |
|--------|-------------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 埴埴色土 | シルト質 褐色色シルト土少量 粗砂粒少量 炭化物微量    | 10 黒色土  | 炭化物微量層 埴埴色土少量 しまり強             |
| 2 埴埴色土 | 褐色マンガンやや多量、粘性やや強 しまり強         | 11 褐色土  | シルト質 粗砂粒少量 (大床面) しまり強          |
| 3 赤褐色土 | シルト質 褐色色シルト土少量 粗砂粒少量 炭化物少量    | 12 赤褐色土 | シルト質 褐色色粘り土少量 粗砂粒少量 炭化物少量 しまり弱 |
| 4 埴埴色土 | シルト質 褐色色土層状にやや多量 粗砂粒少量 炭化物微量  | 13 黄灰色土 | 粘質土ブロック層 カマド跡                  |
| 5 埴埴色土 | 褐色マンガン少量 粘性やや強 しまりやや強         |         |                                |
| 6 赤色土  | シルト質 褐色色粘質土層状にやや多量 粗砂粒微量      |         |                                |
| 7 赤色土  | 粘土凝縮層 (大床面層) 煙道部 しまり極く強       |         |                                |
| 8 褐色土  | 炭土凝縮層 粗砂粒微量 粘土・灰・炭化物少量 しまり弱   |         |                                |
| 9 埴埴色土 | シルト質 粗砂粒やや多量 (大床面) 粘性やや強 しまり強 |         |                                |
|        |                               |         |                                |

第64図 第20号住居跡





第65图 第20号住居跡出土遺物

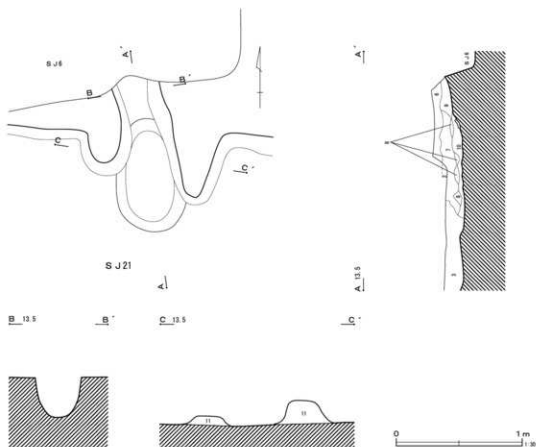
第20表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(16.1)	(3.7)	—	45.4	20	埴南	角	普通	橙	IV	59-9
2	土師器	坏	(15.0)	4.2	—	73.9	25	佐野	角	良好	褐灰	IV	
3	土師器	坏	(15.0)	4.7	—	187.4	50	佐野	角	普通	にぶい・褐	Ⅲ 本葉痕	
4	土師器	皿	(18.1)	(2.8)	—	71.8	20	佐野	角	普通	橙	I	
5	土師器	皿	(16.9)	3.4	—	142.7	50	佐野	角	普通	橙	I	
6	土師器	皿	(20.4)	(3.2)	—	46.6	10	佐野	雲、角	普通	にぶい・橙	I・Ⅲ	
7	土師器	盤	21.9	3.6	—	386.9	75	佐野	雲、角	普通	橙	I	
8	須恵器	蓋	—	(2.4)	—	132.7	50	埴田	片	普通	黄灰	I	
9	須恵器	蓋	(17.6)	(2.1)	—	9.1	5	新治	雲	良好	黄灰	IV, SJ24	
10	須恵器	蓋	(16.9)	(2.3)	—	18.9	5	埴田	雲	良好	黄灰	SJ20-I, SJ21-II	
11	須恵器	坏	(14.0)	4.3	8.3	170.9	80	新治	雲	良好	黄灰	IV, SJ24	59-10
12	土師器	甕	(20.7)	(6.8)	—	150.3	5	埴北	角	普通	にぶい・橙	Ⅱ	
13	土師器	甕	21.8	(10.2)	—	258.0	15	埴北	角	普通	にぶい・橙	Ⅳ	
14	土師器	甕	(20.8)	(8.6)	—	180.7	5	埴南	角	普通	橙	I, IV	
15	土師器	甕	(23.4)	(12.6)	—	328.1	10	埴南	雲、角	普通	にぶい・黄橙	Ⅳ 外面に煤付着	
16	土師器	甕	(16.7)	(10.4)	—	285.2	5	新治	雲	良好	にぶい・橙	I	
17	土師器	甕	21.6	(6.3)	—	305.6	10	群東	雲、角	良好	にぶい・橙	Ⅳ	

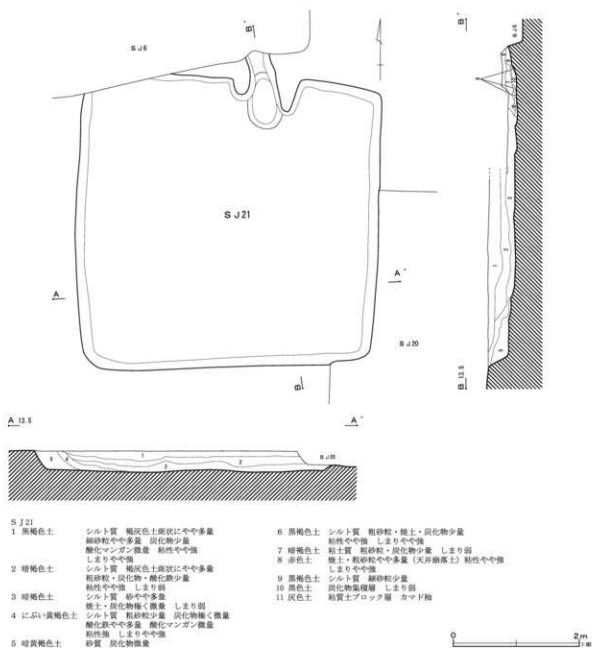
第21号住居跡 (第66・67図)

調査区北側、I-8・9グリッドに位置する。第6・20・22・24号住居跡と重複し、新田関係は、第

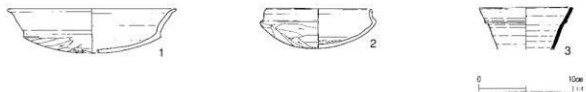
6・20号住居跡よりも古く、第22・24号住居跡よりも新しい。第6号住居跡にカマド煙道部および北西コーナーを壊され、第20号住居跡に北東部上面を切



第66図 第21号住居跡カマド



第67図 第21号住居跡



第68図 第21号住居跡出土遺物

られるが、床面は全体的に残存していた。床面は凹凸が著しい。

平面形は方形で、規模は東西4.82m、南北4.62m、確認面からの深さは0.33mである。主軸方位はN-1°-Wである。

カマドは北壁のやや東寄りに造られ、カマド方位はN-8°-Wである。煙道部先端は第6号住居跡に壊されている。袖部は両側が残存しており、壁か

らの残存規模は左袖が35cm、右袖が58cmである。燃焼部は床面より10cmほど掘り窪められ、煙道部とは段差をもって接続する。

出土遺物は少量で、土師器環2点と、須恵器甕が図示できたのみである。須恵器甕には自然釉が見られた。

時期は6世紀第Ⅱ四半期である。

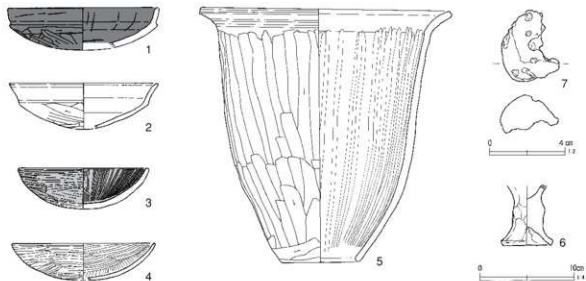
第21表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(17.5)	4.7	—	57.2	20	埴北	角、軽	良好	にぶい黄緑	小針系	60-1
2	土師器	環	11.1	4.3	—	96.8	75	埴南	雲、角	良好	淡黄	Ⅱ	
3	須恵器	甕	(10.0)	(4.6)	—	11.7	5	猿投	良好	陶灰	自然釉		

### 第22号住居跡 (第70図)

調査区北側、I-9グリッドに位置する。第20・24・60号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は何れの遺構よりも古い。第1号溝跡に住居跡南側を、

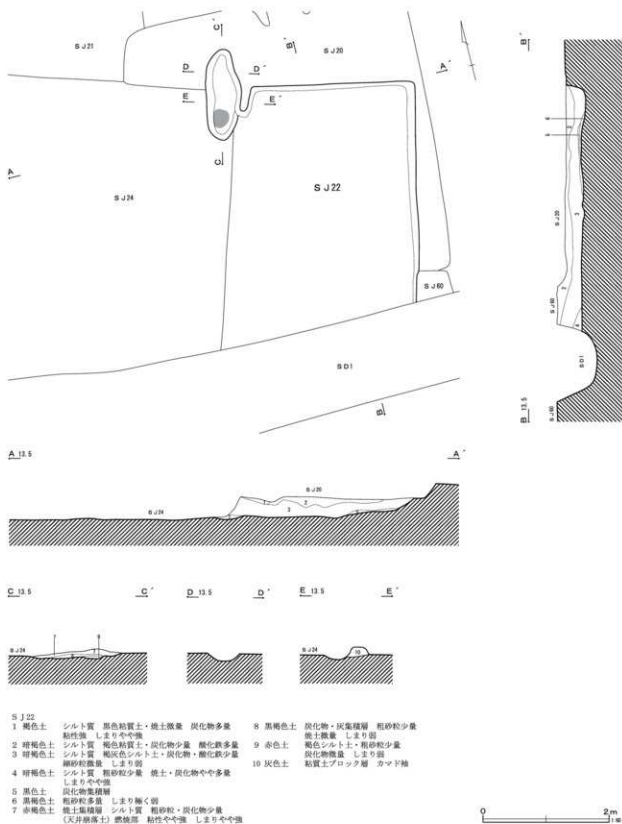
第24号住居跡に住居跡西半分を壊されているため平面形は不明である。第24号住居跡の構築時、左袖が削平を受けるが、床面よりやや深く掘り込まれたカマドの燃焼部は残っていた。



第69図 第22号住居跡出土遺物

第22表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(15.8)	(4.3)	—	57.7	20	群東	角	普通	にぶい黄緑	I	60-2 84-1 73-3
2	土師器	環	(15.7)	(4.8)	—	64.3	40	群東	角	良好	橙		
3	土師器	環	(13.7)	4.3	—	146.8	60	茨西	角	普通	浅黄緑	I、SJ20-I	
4	土師器	環	(15.1)	3.9	—	101.2	50	埴南	角	普通	橙	Ⅱ	
5	土師器	甕	26.2	27.1	8.0	1936.8	80	埴北	角、軽	良好	にぶい褐	SJ24-1	
6	土師器	製塩土器	—	(6.3)	(5.2)	61.4	10	下総	雲、角	普通	明褐色		
		貝黒穴状泥	長さ3.7幅2.9厚さ1.8重さ9.3								—		



第70図 第22号住居跡

検出された規模は、東西3.00m、南北4.10mである。遺構上面は、各所で他遺構の削平を受けるが、もっとも残りのよい場所での確認面からの深さは0.28mである。主軸方位はN-14°-Eである。

カマドは北壁に設けられており、カマド方位はN-0°である。袖部は右袖のみ検出されている。左袖は第24号住居跡により壊されており検出には至らなかった。右袖の壁からの残存規模は48cmである。燃焼部は床面より5cmほど低く掘り窪められ、被熱部が明瞭に確認された。

遺物は土師器環・甕が認められた。第69図1の土師器環は内外面に黒色処理が、3は赤彩されていた。6は製塩土器の一部と考えられる。貝殻穴底泥岩が1点出土した。

時期は6世紀第Ⅱ四半期である。

#### 第23号住居跡 (第71・72図)

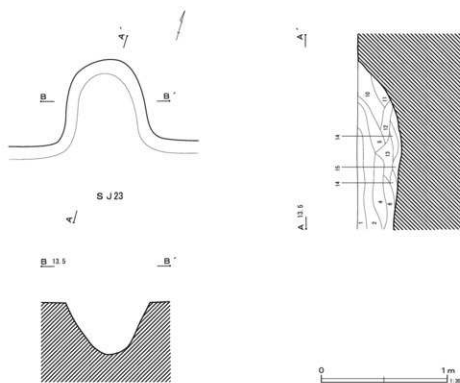
調査区北側、I・J-8・9グリッドに位置する。第24・33・35・47号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は、第1号溝跡よりも古く、重複するその他の住居跡よりも新しい。住居跡中央部は第1号溝跡が東西に走り、床面を大きく掘り抜いている。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西5.10m、南北4.12m、確認面からの深さは0.3mである。主軸方位はN-16°-Wである。

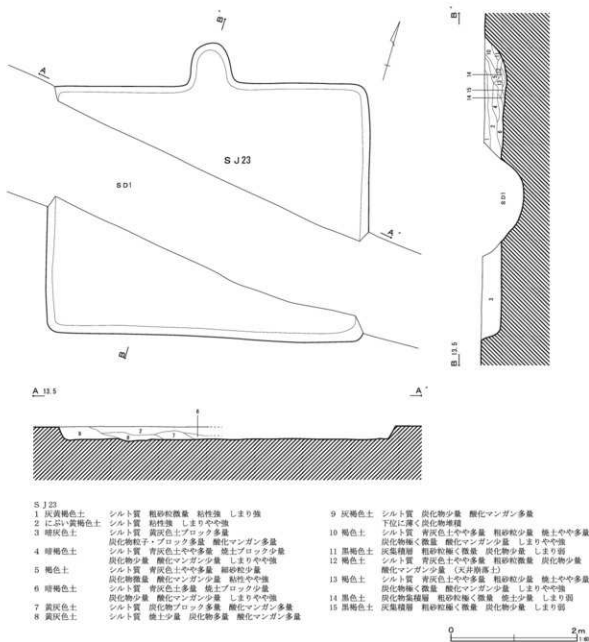
カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-15°-Wである。袖部は確認されなかった。燃焼部は壁を切り込み、床面よりやや低く掘り窪められる。煙道部との区別は判然としなない。

遺物は土師器環・甕、須恵器短頸壺が認められた。第73図1・3の土師器環は黒色処理されていた。

時期は6世紀第Ⅳ四半期である。



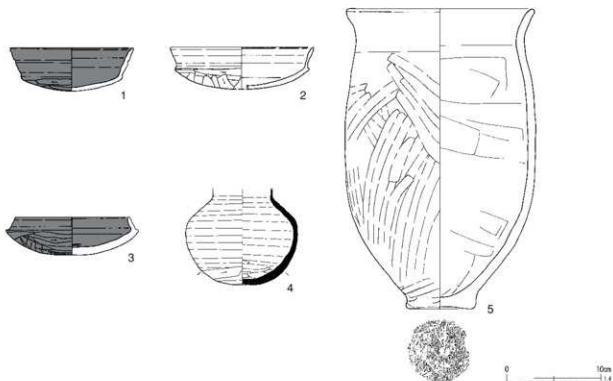
第71図 第23号住居跡カマド



第72図 第23号住居跡

第23表 第23号住居跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	4.6	—	82.0	50	埴北	角	良好	にぶい粒	II	73-4
2	土師器	坏	(15.0)	4.4	—	44.4	20	佐野	雲	良好	粒		
3	土師器	坏	(12.0)	4.0	—	109.3	40	佐野	角	普通	にぶい黄粒		
4	須恵器	短頸壺	—	(10.2)	—	299.2	75	湖西	角	良好	灰	I, SJ22	73-4
5	土師器	甕	(19.3)	36.1	6.8	2086.9	60	灰西	角、軽	普通	灰黄褐	SJ21—IV 木葉痕	



第73図 第23号住居跡出土遺物

#### 第24号住居跡 (第75図)

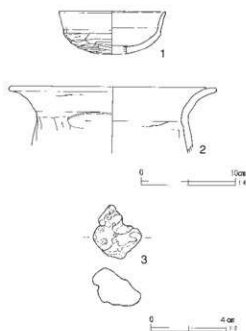
調査区北側、1-8・9グリッドに位置する。第20・21・22・23号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は、第20・21・23号住居跡、第1号溝跡よりも古く、第22号住居跡よりも新しい。住居跡南側は第1号溝跡によって壊されており、平面形は不明である。

検出された規模は東西5.90m、南北5.40m、確認面からの深さは0.55mである。主軸方位はN-20°-Eである。

カマドおよびその他の施設は確認できなかった。

出土遺物は少量で、土師器環と甕が図示できたのみである。貝塚穴礫泥岩が1点出土した。

時期は6世紀第I四半期である。

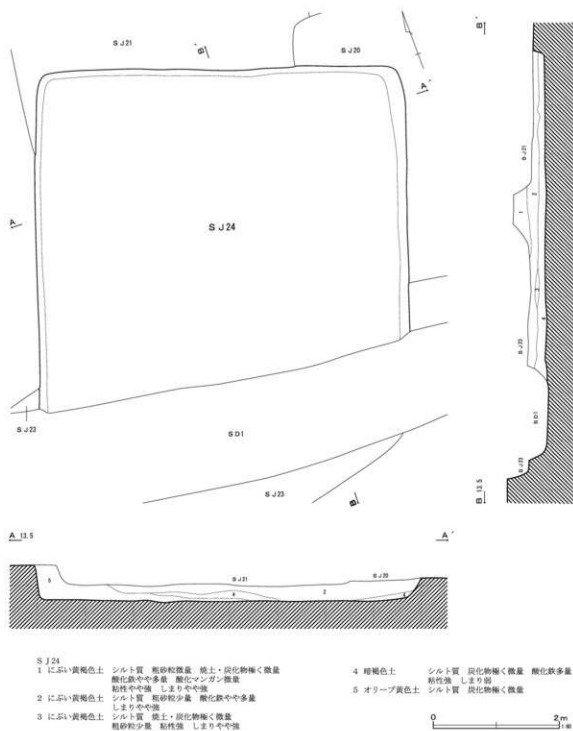


第74図 第24号住居跡出土遺物

第24表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(11.2)	4.5	—	38.6	25	佐野	角	普通	橙	I 外面黒斑	
2	土師器	甕	(21.6)	(7.1)	—	94.7	5	埜北	角	普通	濃い黄緑	II	
3		貝塚穴礫泥岩	長さ2.7幅2.5厚さ1.8重さ6.0				—					I	





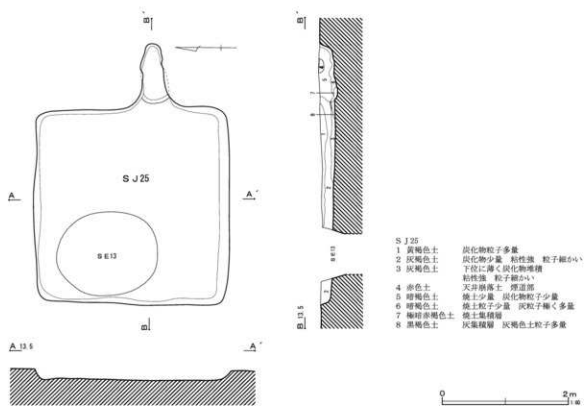
第75図 第24号住居跡

第25号住居跡 (第76・77図)

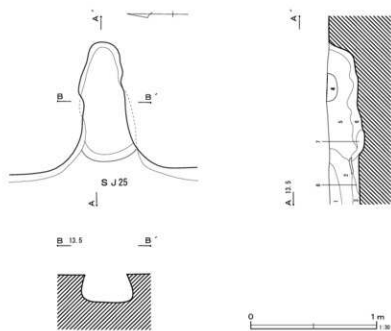
調査区南側、L-8グリッドに位置する。第61・91号住居跡、第13号井戸跡と重複し、新旧関係は、第13号井戸跡よりも古く、第61・91号住居跡よりも

新しい。

平面形は方形で、規模は東西、南北ともに3.10m、確認面からの深さ0.24mである。主軸方位はN-90°-Eである。



第76図 第25号住居跡



第77図 第25号住居跡カマド



位はN-4°-Wである。

カマドは北壁に2基確認された。西側がカマド1、東側がカマド2である。カマド1の方位はN-2°-Wである。燃焼部の掘り込みがほとんどなく、火床面が床面とほぼ同じ高さにある。カマド2の方位はN-8°-Wである。燃焼部が床面より10cmほど掘り窪められる。新旧関係は土層観察により、カマド1が新しく、カマド2が古いと判断した。何れも煙道の短い構造で、袖部は確認されなかった。

カマド以外の施設としては、住居跡南側でピットが1基確認されている。規模は54×52cmの円形で、床面からの深さは22cmである。

遺物は土師器の小片が少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、第72号住居

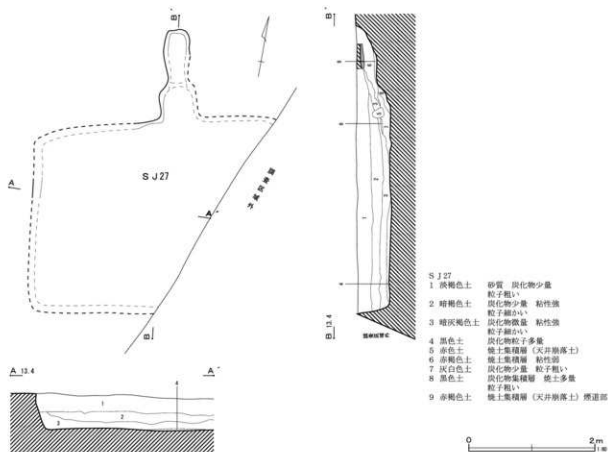
跡との重複関係から、7世紀の第Ⅲ四半期以降と考えられる。

#### 第27号住居跡 (第80・81図)

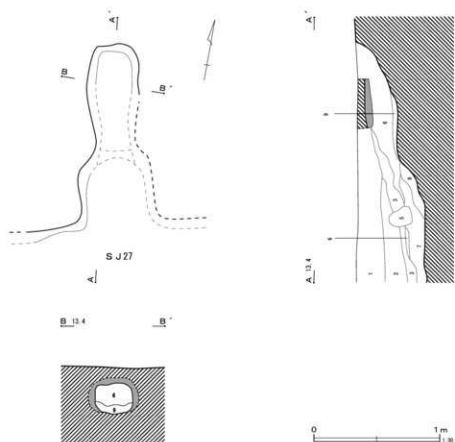
調査区南東、L・M-9グリッドに位置する。住居跡東側は調査区域外におよぶ。他遺構との重複はなかった。

土層断面で確認されたのみで、平面形は断面から長方形と推定した。検出された規模は南北3.04m、東西3.90m、確認面からの深さは0.53mである。主軸方位はN-12°-Wである。

カマドは北壁に設けられており、カマド方位はN-10°-Wである。袖部は両側とも確認できなかった。床面より5cmほど掘り窪められた燃焼部は、壁を50cmほど切り込み、20cmほどの明瞭な段差をも



第80図 第27号住居跡

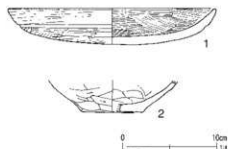


第81図 第27号住居跡カマド

って煙道部へ接続する。煙道部天井はその一部が崩落せず残存していた。煙道部の規模は、長さ80cm、幅26cm、確認面からの深さ25cmである。

遺物は少量で、土師器盤・甕が図示できたのみである。

時期は8世紀前半である。



第82図 第27号住居跡出土遺物

第26表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	盤	21.7	3.8	—	265.0	70	佐野	雲、角	良好	にひい黄緑		60-3
2	土師器	甕	—	(3.4)	(6.4)	62.4	5	茨西	角	良好	灰黄褐	貯穴	

### 第28号住居跡 (第83図)

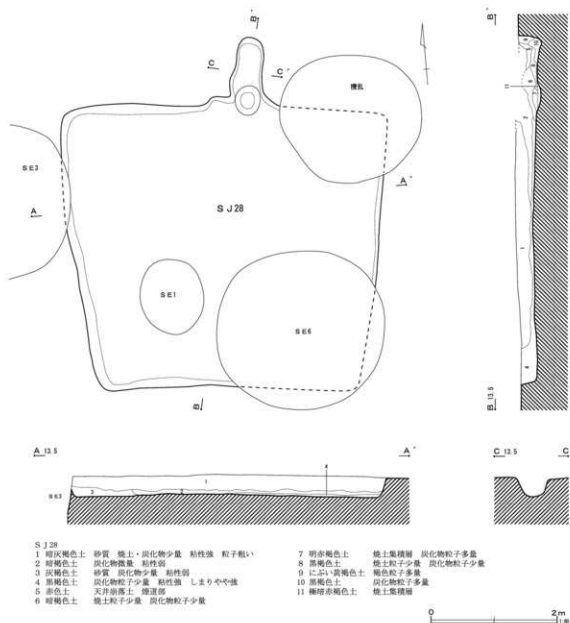
調査区南際、M・N-8グリッドに位置する。住居跡北東コーナーが焼乱によって壊されているほか、第1・3・6号井戸跡と重複している。新旧関係は、何れの井戸跡よりも古い。

平面形はいびつな方形で、規模は東西4.96m、南北4.56m、確認面からの深さは0.3mである。主軸方位はN-6°-Eである。

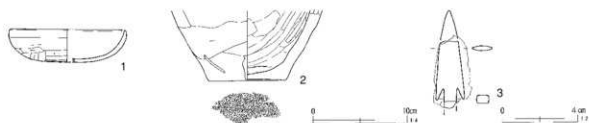
カマドは北壁のやや東寄りに設けられ、カマド方位はN-11°-Eである。袖部は両側とも確認されなかった。燃焼部は床面より10cm程度掘り窪められ、浅いピット状になる。

遺物は少量で、土師器片・甕が図示できたのみである。上下端を欠損した長三角形の鉄鏝が1点出土した。

時期は8世紀前半である。



第83図 第28号住居跡



第84図 第28号住居跡出土遺物

第27表 第28号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.2)	3.5	—	41.5	25	佐野	角	普通	にぶい・橙		
2	土師器	甕	—	(7.4)	(8.0)	289.8	5	新治	雲、角	普通	灰黄褐	外面に煤付着 砂底	
3	鉄製品	鉄鎌	長さ (3.1)	幅1.5厚さ0.3			30					長三角形鎌	98-22

### 第29号住居跡 (第85・86図)

調査区北東、I-10・11グリッドに位置する。第9・13・16号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも古い。他遺構により上面は各所で削平を受けるが、床面は全体が残っていた。

平面形は方形で、規模は南北5.20m、東西4.90m、確認面からの深さ0.35mである。主軸方位はN-0°である。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-25°Eである。袖部は両側で確認されており、壁からの残存規模は、左袖60cm、右袖75cmである。燃焼部は床面より5cmほど掘り窪められ、火床面は凹凸が著しい。

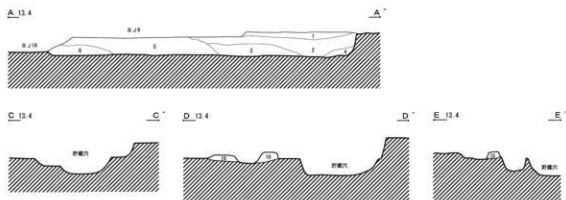
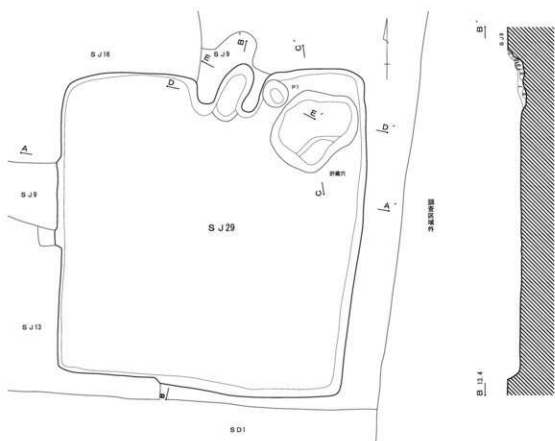
カマド以外の施設としては、貯蔵穴、ピットが確認された。貯蔵穴はカマド右側の北東コーナーで検出された。径130cmの不整形円形で、両側にはテラス状の高まりがある。このほかに右袖際にピットが1基確認されている。径42cmの円形で、床からの深さは7cmである。

遺物は土師器環・鉢・甕等が認められた。第87図5・6の土師器環は赤彩が、15の土師器甕には黒色処理がされていた。また、下半が欠けているが玉髓(メノウ)製の勾玉が1点、貝殻穴産泥岩が4点出土した。

時期は6世紀第I四半期である。

第28表 第29号住居跡出土遺物観察表 (1) (第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.8)	(4.8)	—	125.3	50	群東	雲、角	普通	にぶい・橙	II	
2	土師器	環	12.2	4.5	—	128.5	75	群東	雲	普通	にぶい・黄橙		60-4
3	土師器	環	(14.8)	4.9	—	50.3	20	群東	雲、角	普通	にぶい・橙	I	
4	土師器	環	12.4	4.9	—	131.7	75	埜北	角	良好	橙	貯穴 貯穴No.1	60-5
5	土師器	環	(13.7)	(3.7)	—	32.8	20	茨西	角	良好	にぶい・橙	I	
6	土師器	環	14.0	5.3	—	193.0	75	幡南	角	普通	にぶい・黄橙	II	60-6
7	土師器	鉢	(17.2)	(13.4)	—	231.8	10	茨西	雲	普通	灰黄褐	IV	
8	土師器	甕	18.2	14.8	3.0	844.9	95	群東	雲、角	普通	にぶい・橙	II 黒斑	73-5
9	土師器	甕	18.6	15.7	(5.1)	669.9	90	埜北	角	良好	にぶい・橙	II	84-3
10	土師器	甕	16.8	(29.5)	—	1429.8	40	茨西	雲、角	普通	にぶい・橙	IV	84-4



SJ29

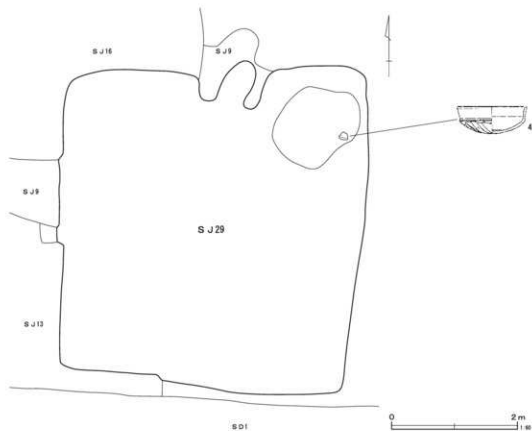
- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量 粘土ブロック微量
- 2 暗褐色土 炭化物粒子少量 しまりやや強
- 3 褐色土 黄褐色土ブロック、炭化物粒子多量、粘性やや強
- 4 浅黄褐色土 粗砂質ブロック、粘土粒子少量、炭化物粒子多量
- 5 オリーブ黄褐色土 砂質 灰白色粘質土ブロック少量 粘性弱 しまり弱
- 6 オリーブ黄褐色土 砂質 暗褐色土ブロック、炭化物粒子少量 粘性弱 しまり強

- 7 灰白色土 粘土粒子・ブロック少量 粘性強
- 8 暗灰色土 粘土粒子少量 粘性弱 しまり弱
- 9 濃い黄褐色土 砂質 粘性弱 しまり弱
- 10 灰白色土 粘質土ブロック層 カマド跡

0 2m

第85図 第29号住居跡

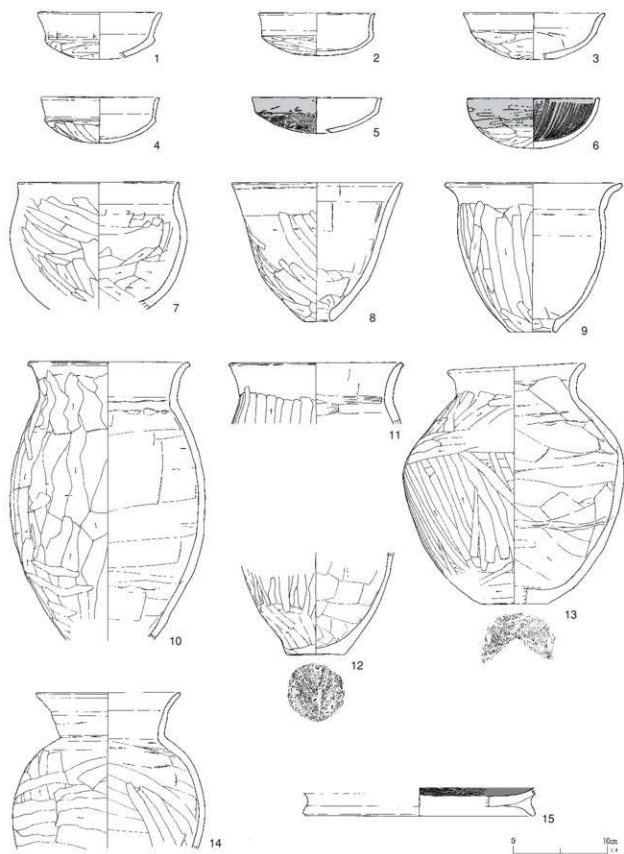




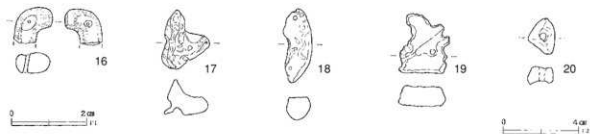
第86図 第29号住居跡遺物出土状況

第29表 第29号住居跡出土遺物観察表 (2) (第87・88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
11	土師器	甕	(18.0)	(6.6)	—	241.1	5	茨西	雲	普通	淡黄	Ⅱ	
12	土師器	甕	—	(10.8)	6.2	395.7	20	茨西	角	良好	にぶい黄橙	Ⅱ	木葉痕
13	土師器	甕	14.3	25.1	(7.0)	2021.9	80	茨西	雲、角	普通	橙	Ⅱ	
14	土師器	甕	15.1	(16.6)	—	638.5	20	埼玉	雲、角	普通	橙	Ⅱ	
15	土師器	盤	—	(3.0)	(24.2)	96.7	5	栃木	角	良好	にぶい黄橙	Ⅱ	
16	石製品	勾玉	長さ1.9幅1.2厚さ1.1	重さ5.0	—	50						Ⅱ	玉髄
17		貝塚穴頭泥岩	長さ3.1幅2.3厚さ1.6	重さ5.5	—							Ⅳ	
18		貝塚穴頭泥岩	長さ3.9幅1.3厚さ1.2	重さ3.8	—							Ⅱ	
19		貝塚穴頭泥岩	長さ3.1幅2.5厚さ1.0	重さ5.4	—							Ⅱ	
20		貝塚穴頭泥岩	長さ1.9幅1.4厚さ0.8	重さ1.2	—							Ⅱ	



第87图 第29号住居跡出土遺物 (1)



第88図 第29号住居跡出土遺物(2)

### 第30号住居跡 (第89・91図)

調査区中央やや西寄り、I・J-7・8グリッドに位置する。第33・45・46・47・49号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は第33号住居跡を除く何れの遺構よりも古い。遺構上部は他遺構との重複で削平を受けるが、床面は全面が残存していた。

平面形状は方形で、規模は東西7.16m、南北6.95m、確認面からの深さは0.42mである。主軸方位はN-16°-Eである。床面はカマド前面を中心に、住居跡北側において明瞭に貼り床が残っていた。

カマドは北壁に設けられており、カマド方位はN-15°-Eである。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は左袖が87cm、右袖が82cmである。燃

焼部は壁内に収まり、床面より10cmほど低く掘り窪められている。煙道部天井は、手前側は崩落していたが、奥側は残存しており、確認面では被熱した煙出し穴が確認できた。煙道部底面は燃焼部よりやや低く、僅かな凹凸をもちながらほぼ水平に、壁外へ185cm延びる。

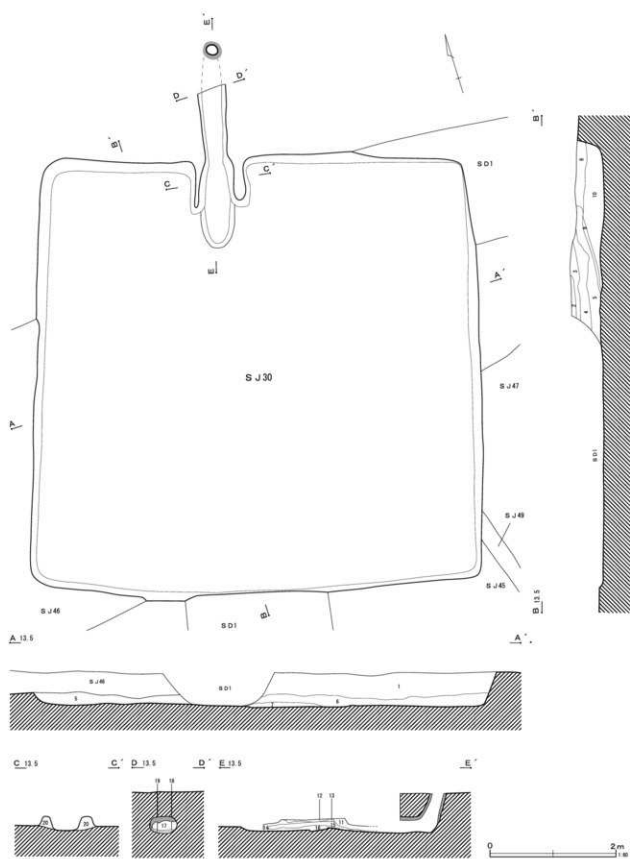
遺物は土師器環・甕、須恵器環が認められた。第90図4の土師器環には黒色処理が、6～8の環には赤彩がされていた。大型の支脚の上半部と角閃石安山岩製の有溝砥石がそれぞれ1点出土した。また、混入と思われる8世紀代の土器も出土した。

時期は6世紀第1四半期である。

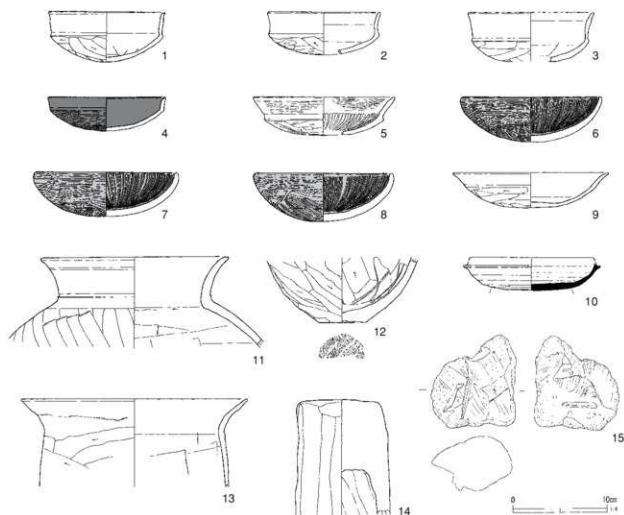
S J30

- 1 暗灰色土 シルト質、黄灰色シルト土ブロック少量、焼土少量  
炭化物少量
- 2 暗灰色土 シルト質 炭化物多量
- 3 灰色土 シルト質 褐色砂質土ブロック多量
- 4 暗灰色土 シルト質 焼土・炭化物多量
- 5 褐色土 砂質 炭化物粒子少量
- 6 黒色土 炭化物集積層 黄灰色シルト土・暗灰色シルト土やや多量  
焼土ブロックやや多量
- 7 黄褐色土 シルト質
- 8 明褐色土 砂質 焼土粒子少量 炭化物少量
- 9 黒色土 炭化物集積層
- 10 褐色土 シルト質 焼土少量 炭化物やや多量

- 11 赤い黄褐色土 シルト質 炭砂粒細く微量 焼土・炭化物微量(崩落土)  
粘性やや強 しまりやや強
- 12 暗褐色土 シルト質 炭化物少量 粘性やや強
- 13 褐色土 粘土質 細砂粒細く微量 粘性強 しまりやや強
- 14 赤褐色土 粘土集積層 炭化物少量 灰少量(カマド崩落土) 天井部  
しまりやや強 粘性強
- 15 黒灰色土 炭化物集積層 灰少量 粘性弱 しまり弱
- 16 暗褐色土 シルト質 焼土ブロック少量
- 17 赤色土 焼土集積層 下段に薄く炭化物集積(カマド崩落土) 煙道部
- 18 黒色土 炭化物集積層
- 19 黄褐色土 炭化物少量
- 20 灰白色土 粘質土ブロック層 カマド跡



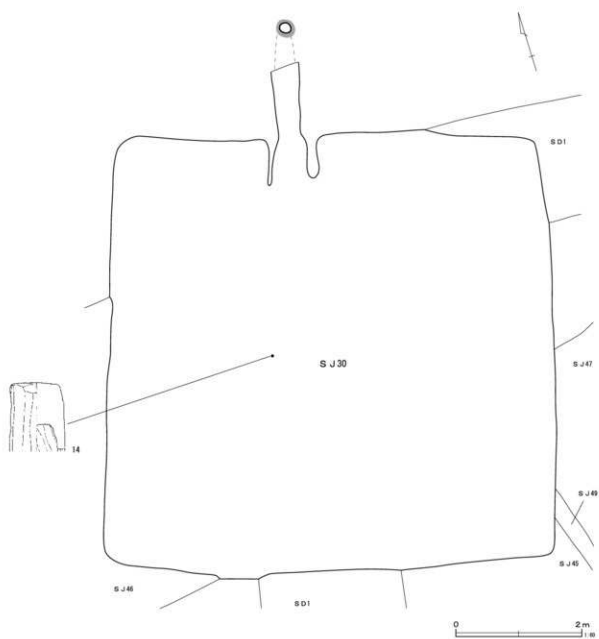
第80图 第30号住居跡



第90図 第30号住居跡出土遺物

第30表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	坏	(12.3)	5.3	—	99.8	50	群東	雲	普通	橙			
2	土師器	坏	(11.8)	(4.4)	—	44.5	25	群東	雲、角、軽	普通	にぶい橙			
3	土師器	坏	13.3	(5.2)	—	75.6	25	埜北	角	良好	にぶい橙			
4	土師器	坏	(12.5)	3.6	—	57.2	30	茨西	角	良好	にぶい橙			
5	土師器	坏	(14.9)	(4.0)	—	41.0	20	茨西	角	普通	橙	外面黒斑		
6	土師器	坏	14.8	4.8	—	288.3	95	幡南	雲、角	良好	浅黄橙	外面黒斑	60-7	
7	土師器	坏	15.0	4.7	—	289.5	90	幡南	雲	良好	浅黄橙	外面黒斑	60-8	
8	土師器	坏	14.4	5.1	—	313.5	100	幡南	雲、角	良好	にぶい橙		60-9	
9	土師器	坏	(16.8)	3.7	—	71.6	25	埜北	角	普通	橙			
10	須恵器	坏	—	(3.0)	—	60.6	20	金山		良好	灰	自然釉		
11	土師器	甕	(19.6)	(9.7)	—	413.1	5	幡南	角	普通	にぶい橙			
12	土師器	甕	—	(6.9)	(5.0)	210.3	5	新治	雲、角	良好	にぶい橙	木炭痕		
13	土師器	甕	(23.7)	(9.3)	—	78.7	5	埜北	角	普通	にぶい橙			
14	土製品	支脚	径9.0長さ12.2重さ754.8			—	50	在地			不良	橙	No 1	
15	石製品	有溝底石	長さ9.9幅8.9厚さ5.8重さ136.5			—	—						角閃石安山岩	



第91図 第30号住居跡遺物出土状況

**第31号住居跡 (第92図)**

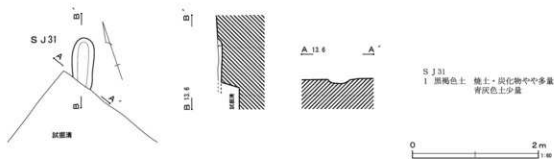
調査区北西、I-8グリッドに位置する。住居跡  
本体は削平を受け、形状・規模は不明である。

やや低く掘り籠められたカマドの燃焼部のみが確

認された。カマド方位はN-22°-Eである。

遺物は出土しなかった。

時期は遺物による決め手がなく、他の遺構との重  
複関係もないため不明とせざるを得ない。



第92図 第31号住居跡

### 第32号住居跡 (第93・94図)

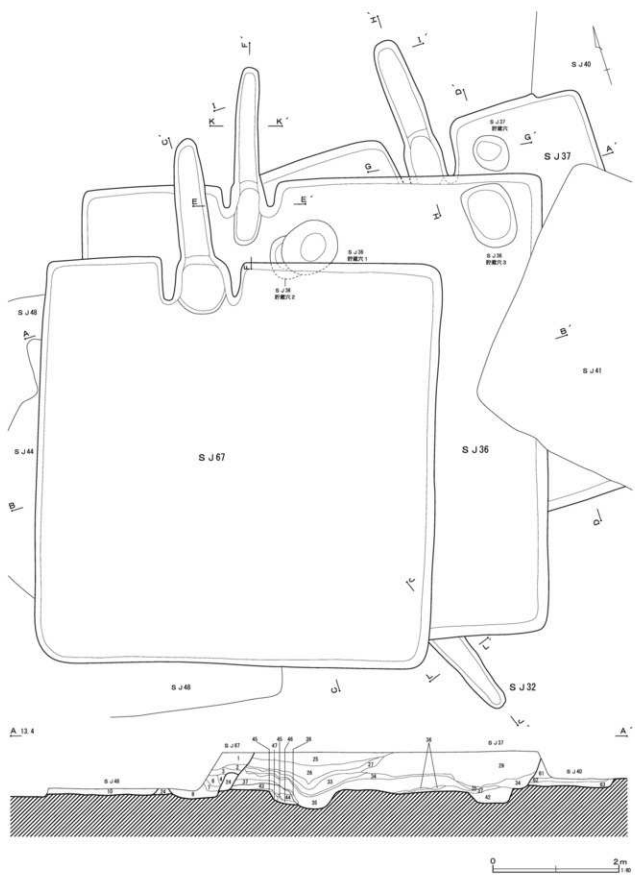
調査区中央東寄り、K-9グリッドに位置する。第36・67号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも古い。住居跡本体は両住居跡に壊されており、煙道部のみ検出した。重複する住居跡下層からも本住居跡の跡跡は見られなかったことから、床面はこれらの住居跡よりも高かったものと思われる。

カマド方位はS-20° Eである。煙道部は若干の凹凸をもちながら、外側に向かって緩やかに立ち上がる。検出された規模は長さ143cm、幅0.45cmである。

遺物は出土しなかった。

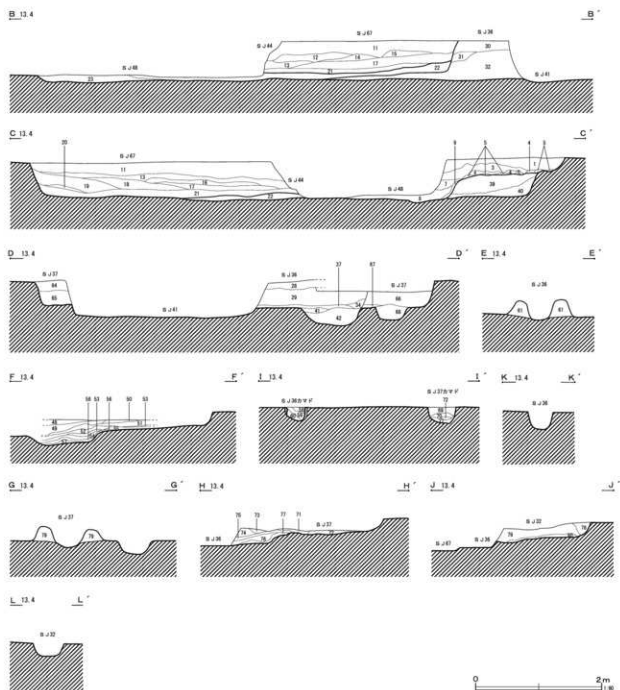
時期は他の住居跡との重複関係から、6世紀第I四半期以前と考えられる。

5 J 67	黄褐色砂質土ブロック多量	31 黒色土	炭化物集積層 粘性強 粒子粗い	58 黄褐色土	砂質
2 緑灰色土	炭化物やや多量	32 黒色土	炭化物集積層 粘性強 粒子粗い	59 褐色土	砂質 炭化物・灰少量
3 暗褐色土	砂質 黄褐色砂質土ブロック少量	33 灰白色土	粘土質 炭化物ブロック少量	60 暗褐色土	砂質 焼土ブロック少量
4 赤色土	炭化物集積層 (天井崩落土) 鉄屑部	34 赤色土	砂質 炭化物集積層	61 褐色土	砂質 炭化物・灰少量
5 暗褐色土	炭化物・炭集積層	35 炭褐色土	砂質 焼色砂質土多量	S J 37	
6 暗褐色土	砂質 焼土ブロック少量	36 赤色土	砂質 炭化物集積層	61 灰白色土	砂質 炭化物ブロック少量
7 褐色土	炭化物ブロック多量	37 黄褐色土	粘土質 (灰り床)	62 褐色土	砂質 黄褐色砂質土ブロック多量
8 暗褐色土	砂質 炭化物ブロック少量	38 青灰色土	砂質 黄褐色土ブロックやや多量	63 明灰色土	砂質 炭化物ブロック少量
9 暗赤色土	砂質 黄褐色砂質土ブロック少量	39 暗褐色土	炭化物集積層	64 黄褐色土	炭化物ブロック少量
10 暗灰色土	砂質 焼土・炭化物の混層	40 黒色土	炭化物集積層	65 黄褐色土	粘土質
11 暗褐色土	炭化物土ブロック少量	41 炭褐色土	砂質	66 暗褐色土	粘土質 炭化物集積層
12 黄褐色土	炭化物粒子少量 粒子粗い	42 褐色土	砂質 焼灰色砂質土ブロック多量	67 黄褐色土	灰り床
13 暗褐色土	焼土・炭化物少量 粘性強 粒子細かい	43 赤色土	黄褐色砂質土ブロック少量	68 灰褐色土	炭化物集積層
14 黒色土	炭化物集積層 やや暗褐色を帯びる	44 赤褐色土	粘土質 褐色土ブロック多量	69 黄褐色土	粘土質 炭化物集積層
15 暗褐色土	焼土・炭化物少量 粒子粗い	45 赤色土	砂質 炭化物集積層	70 褐色土	砂質 焼土ブロック少量
16 暗褐色土	炭化物土少量 粒子粗い	46 赤色土	粘土質 焼土ブロック集積層	71 暗褐色土	粘土質 粗砂粒多量 (天井崩落土) 煙道部 粘性やや強 しまりやや強
17 黄褐色土	焼土・炭化物粒子少量 粒子粗い	47 黄褐色土	砂質		
18 黄褐色土	粘土質 粒子粗い	48 黄褐色土	粘土質 粗砂粒少量	72 赤色土	天井崩落土 煙道部
19 黄褐色土	砂質 黄褐色土ブロック少量	49 赤褐色土	粘土質 粗砂粒少量 焼土やや多量	73 赤褐色土	焼土集積層 炭化物少量 灰少量 粘性やや強 しまり強
20 黄褐色土	粘性強 粒子粗い	50 暗褐色土	(天井崩落土(灰)) 煙道部	74 赤褐色土	粘土質 粗砂粒少量 しまり強
21 黄褐色土	粘性強 粒子粗い (灰り床)	51 暗赤褐色土	粘土質 炭化物少量 (天井崩落土(灰))	75 暗褐色土	粗砂粒やや多量 炭化物少量 灰少量 粘性やや強 しまりやや強
22 黄褐色土	炭化物土少量 粒子粗い				
23 暗褐色土	炭化物土少量 粒子粗い	52 暗褐色土	粘土質 粗砂粒少量 (天井崩落土)	76 赤色土	焼土集積層 粗砂粒少量
24 暗褐色土	砂質 カマド跡	53 暗灰色土	炭化物集積層 焼土少量 炭化物少量	77 灰白色土	炭化物・炭集積層
25 褐色土	砂質 黄褐色砂質土ブロック多量	54 暗赤褐色土	しまり床	78 灰白色土	炭化物集積層 焼土粒子少量 しまり弱
26 黒色土	炭化物土ブロック少量	55 赤色土	焼土集積層 (天井崩落土) 煙道部	79 明赤褐色土	焼土集積層 細砂粒多量 粘性弱 しまり弱
27 暗赤色土	黄褐色砂質土ブロック少量	56 黒色土	粘土集積層 (天井崩落土) 煙道部	80 灰白色土	炭化物集積層
28 黄灰色土	砂質 黄褐色砂質土ブロック少量				
29 黄灰色土	粘土質				
30 褐色土	砂質 黄褐色砂質土ブロック多量				
31 暗褐色土	焼土・炭化物少量 粒子粗い	57 暗赤褐色土	粘性強 しまり弱		



第93图 第32·36·37·67号住居跡 (1)





第94図 第32・36・37・67号住居跡(2)

### 第33号住居跡 (第95・96・98図)

調査区中央北寄り、I・J-8・9グリッドに位置する。第30・45・47・49・62号住居跡、第1号溝跡と重複しており、新旧関係は、何れの遺構よりも古い。第62号住居跡に住居跡中央床面を壊されている

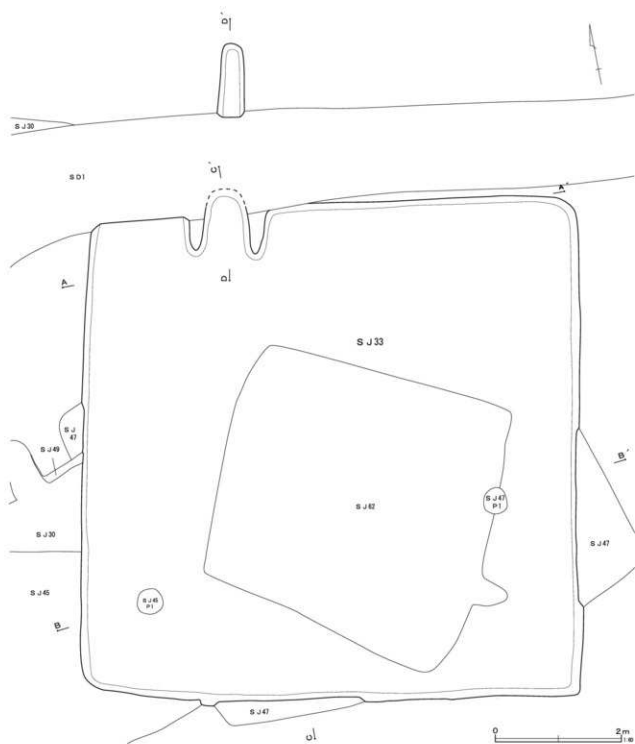
るほか、カマド煙道および両袖の一部を第1号溝跡に壊されている。

平面形は方形で、規模は東西7.98m、南北7.92m、確認面からの深さ0.4mである。主軸方位はN-11°-Eである。床面は、カマドのある住居跡北側

に貼り床を確認した。

カマドは北壁の西寄りに設けられ、カマド方位はN-15°-Eである。袖部は両側で確認されたが、壁際が第1号溝跡等に壊されている。構築土には黄

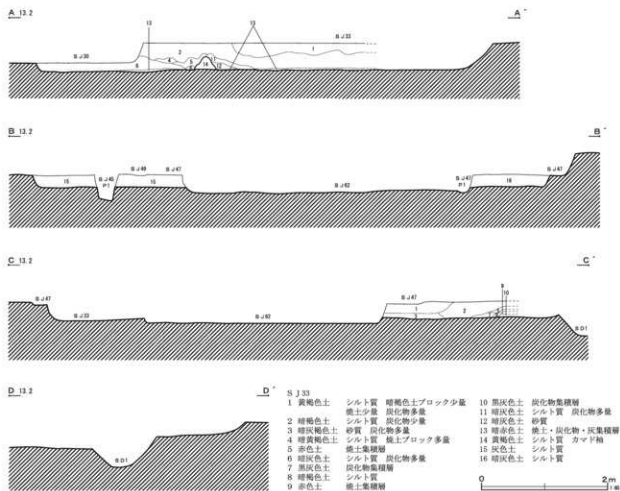
褐色粘質土が用いられ、内側は被熱し赤変していた。燃焼部は僅かに壁外へおよび、火床面は床面と同じかやや低い位置にある。燃焼部と煙道部二段のつく構造で、煙道部の長さは230cm程度と推測される。



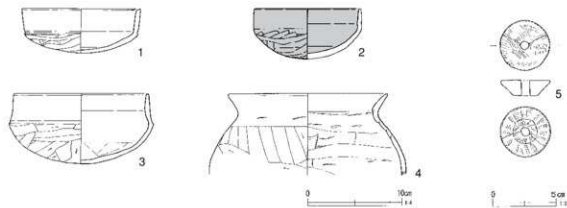
第95図 第33号住居跡 (1)

遺物は土師器・甕が認められる。第97図2の土師器は内外面に赤彩されていた。蛇紋岩製の石製

紡錘車が北西コーナー近くで1点出土した。時期は5世紀第IV四半期である。



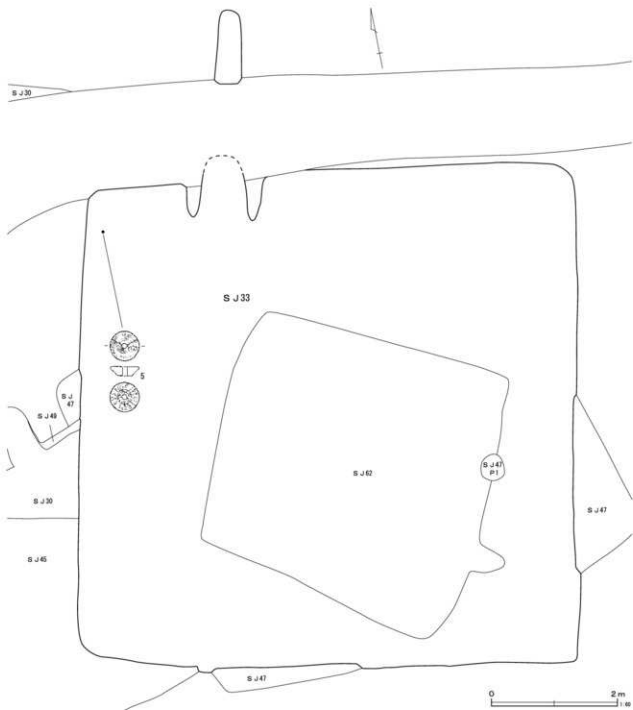
第96図 第33号住居跡 (2)



第97図 第33号住居跡出土遺物

第31表 第33号住居跡出土遺物観察表 (第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.5)	4.8	—	106.0	50	群東	角	普通	橙	外面黒斑	00-10
2	土師器	坏	(11.2)	5.4	—	124.5	50	埜南	角	良好	浅黄橙		
3	土師器	甗	(14.1)	7.4	—	137.8	50	埜北	雲	普通	にぶい橙		
4	土師器	甗	(16.7)	(8.7)	—	191.6	5	群東	雲、角	良好	にぶい橙		
5	石製品	紡錘車	径3.9孔径0.6厚さ1.3重さ24.8				100					No.1 蛇紋岩	95-3



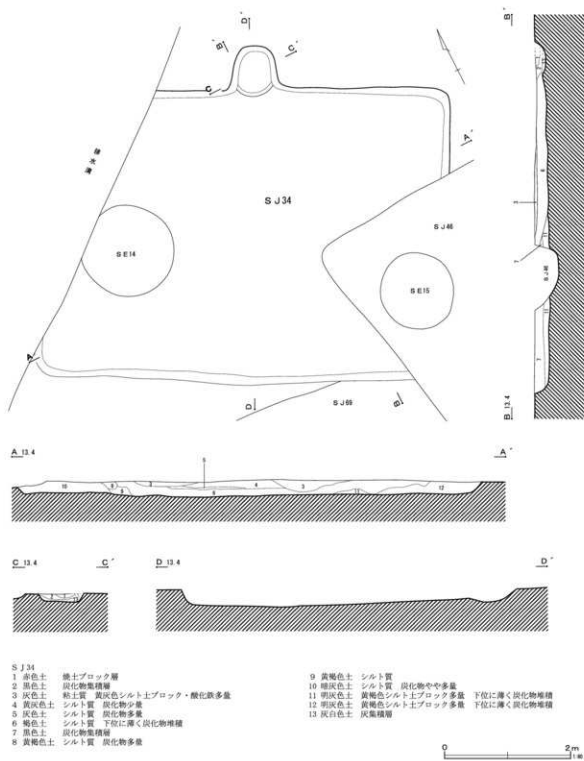
第98図 第33号住居跡遺物出土状況

### 第34号住居跡 (第99図)

調査区中央西寄り、I・J-7グリッドに位置する。第46・69号住居跡、第14・15号井戸跡と重複し、新旧関係は何れの遺構よりも古い。住居跡西側が調査

区域外におよぶほか、住居跡南東部は第46号住居跡に壊される。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西6.57m、南北4.70m、確認面からの深さ0.22mである。主軸



第99図 第34号住居跡

方位はN-26° Eである。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられており、カマド方位はN-27° Eである。袖部は確認できなかった。燃焼部は長さ85cm、幅52cm、床面からの深さは5cmを測る。

出土遺物は土師器の小片が少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、他の住居跡との重複関係から、6世紀第I四半期以前と考えられる。

### 第35号住居跡 (第96図)

調査区中央北寄り、I・J-9グリッドに位置する。第20・22・23・24・60号住居跡、第5号土坑、第16号井戸跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は何れの遺構よりも古い。第16号井戸跡と第1号溝跡に

は床面を壊されている。

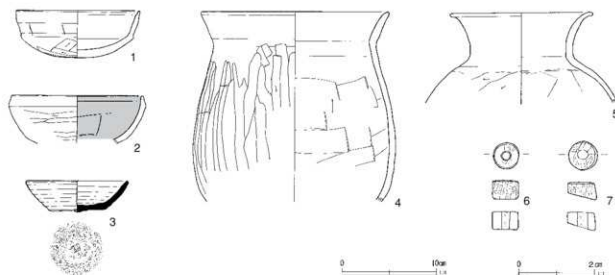
平面形は方形で、規模は北東-南西6.42m、北西-南東6.36m、確認面からの深さ0.4mである。主軸方位はN-36° Eである。

カマドは確認されなかったが、第1号溝跡に壊された北壁中央付近に設けられた可能性がある。

カマド以外の施設としては、住居跡西側でピットが2基確認されており、何れも掘り込みが深い。P1は円形で規模は80×75cm、床面からの深さ50cm、P2は楕円形で規模は43×30cm、床面からの深さ85cmを測る。

遺物は土師器環・壺・甕が認められ、混入と思われる須恵器環が見られた。第100図2の土師器壺は内面が赤彩されていた。滑石製の白玉2点が出土した。

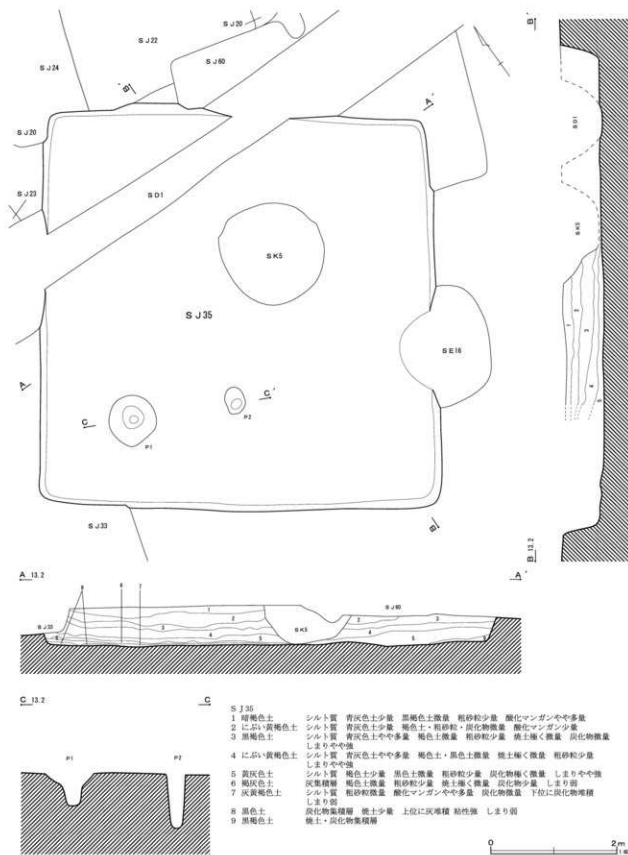
時期は6世紀第I四半期である。



第100図 第35号住居跡出土遺物

第32表 第35号住居跡出土遺物観察表 (第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	環	(13.0)	4.9	—	96.1	25	群東	角	普通	橙		
2	土師器	壺	(13.8)	(5.1)	—	45.6	20	埴南	角、針	良好	浅黄		
3	須恵器	環	10.7	3.3	6.0	112.5	100	下総	角	普通	浅黄	底部外面に黒色付着物	61-1
4	土師器	甕	(19.8)	(20.1)	—	507.0	20	佐野	雲、角	普通	にぶい・橙	外面黒斑	
5	土師器	壺	(14.9)	(9.7)	—	327.0	5	茨西	角	普通	にぶい・黄橙		
6	石製品	白玉	径0.68孔径0.21厚さ0.43			重さ0.37	100					滑石	95-11
7	石製品	白玉	径0.71孔径0.24厚さ0.40			重さ0.32	100					滑石	95-12

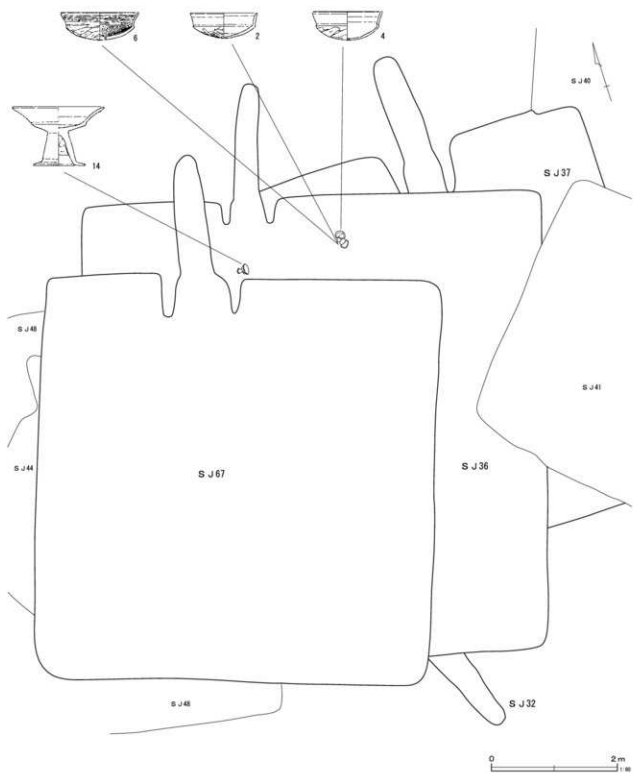


第101図 第35号住居跡

第36号住居跡 (第93・94・102図)

調査区中央やや東寄り、J・K-8・9グリッドに位置する。第32・37・41・44・48・67号住居跡と

重複し、新旧関係は第41・44・48・67号住居跡よりも古く、第32・37号住居跡よりも新しい。住居跡中央部から西側は第67号住居跡により大きく壊されて



第102図 第36号住居跡遺物出土状況

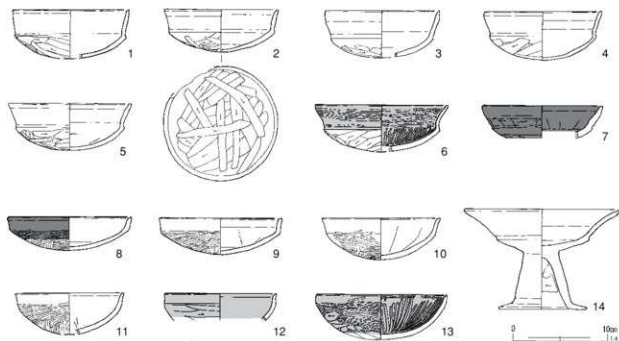


いる。また住居跡東壁の一部を第41号住居跡により壊されている。

残存部分から推定される平面形は方形で、規模は

東西、南北ともに7.30m、確認面からの深さは0.6mである。主軸方位はN-16°-Eである。

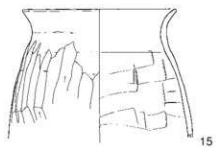
カマドは北壁のやや西寄りに造られ、カマド方位



第103図 第36号住居跡出土遺物(1)

第33表 第36号住居跡出土遺物観察表 (第103・104図)

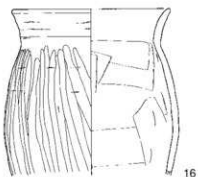
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	環	12.3	(5.2)	—	137.5	75	群東角	普通	橙			61-2	
2	土師器	環	12.0	36.0	—	158.3	95	群東角	普通	橙	No.1		61-3	
3	土師器	環 (12.0)	(4.9)	—	69.1	40	群東角	良好	にぶい橙					
4	土師器	環	12.2	5.6	—	143.8	80	埜北	雲	良好	橙	No.2	61-4	
5	土師器	環 (13.0)	4.9	—	53.2	25	埜北	雲、角	普通	橙				
6	土師器	環	14.0	(4.9)	—	154.3	80	茨西角	良好	灰黄褐	No.1		61-5	
7	土師器	環 (12.7)	(3.5)	—	49.0	25	橋南角	良好	にぶい橙					
8	土師器	環 (12.9)	3.5	—	52.9	25	茨西雲	良好	橙					
9	土師器	環 (13.0)	3.8	—	56.4	25	茨西雲	良好	橙					
10	土師器	環 (12.4)	4.4	—	41.7	20	茨西雲	良好	明赤褐					
11	土師器	環 (14.4)	(4.4)	—	57.7	30	茨西雲	良好	橙					
12	土師器	環 (11.8)	(2.9)	—	13.2	10	埜南	軽	良好	にぶい橙	比金型環			
13	土師器	環	13.8	4.8	—	154.1	70	橋南角	普通	にぶい橙			61-6	
14	土師器	高環	16.9	10.6	9.9	366.0	90	埜北	雲	普通	橙	No.4	74-2	
15	土師器	甕	16.2	(14.1)	—	579.5	20	埜南角	普通	にぶい黄橙			74-3	
16	土師器	甕 (16.5)	(17.6)	—	671.3	10	埜南	雲、角	普通	にぶい橙				
17	土師器	甕 (18.9)	(8.5)	—	239.5	5	茨西角	普通	にぶい橙			指頭痕		
18	土師器	甕 (17.1)	(18.3)	—	499.1	10	佐野	雲	普通	にぶい橙	SJ39			
19	土師器	甕	17.5	(26.0)	—	1391.5	50	茨西雲、角	普通	橙	被熱		85-2	
20	土師器	甕 (21.0)	(21.1)	—	819.0	30	茨西雲	普通	にぶい黄橙		常総甕			
21	土師器	甕 (20.7)	(14.1)	—	367.6	10	茨西角	良好	にぶい橙					
22	土製品	ミニチュア	—	(1.2)	—	5.1	50	角	普通	褐灰				
23		貝塚穴痕泥管	長さ3.2幅2.1厚さ1.9重さ5.9				—	—	—	—	—	—	—	—
24		貝塚穴痕泥管	長さ3.1幅2.4厚さ1.9重さ8.3				—	—	—	—	—	—	—	—



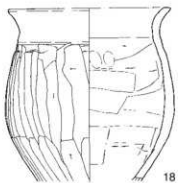
15



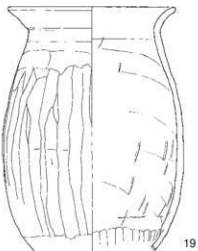
17



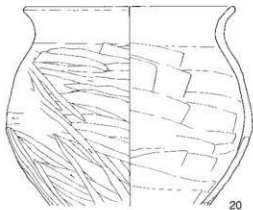
16



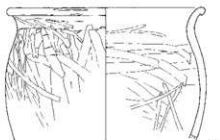
18



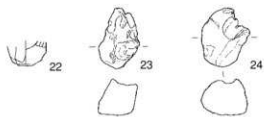
19



20



21



22

23

24

0 4cm 1/2

0 10cm 1/2

第104图 第36号住居跡出土遺物(2)

はN-20°-Eである。袖部は両側が残存しており、壁からの残存規模は左袖52cm、右袖58cmである。燃焼部は壁内に収まり、床面より15~20cmほど掘り窪められている。煙道部は燃焼部と明顯な段差を持ち、外側へ傾斜しながら壁外へ184cm延びる。

燃焼部の土層断面には、57層と56層、54層と53層のように、下位から焼土層と炭化物・灰集積層の互層が確認された。54層は天井崩落土であり、直上層に灰・炭化物を堆積させることから、新たな火床面となったものと推測される。50・51層は造り直したカマドの天井崩落土であろう。

カマド以外の施設としては、カマド東側、北東コーナーで貯蔵穴を3基確認している。貯蔵穴1と2は重複関係にある。覆土の観察から、貯蔵穴1が最も新しく、住居が廃棄された直前まで機能していたものと推測される。一方、貯蔵穴2と貯蔵穴3は同時時点で埋没が完了しており、貯蔵穴1よりは古く機能していたと判断される。平面形および規模は、貯蔵穴1は楕円形で90×78cm、床面からの深さ30cm、貯蔵穴2は残存部で80×20cm、床面からの深さ20cm、

貯蔵穴3は楕円形で103×73cm、床面からの深さ15cmである。

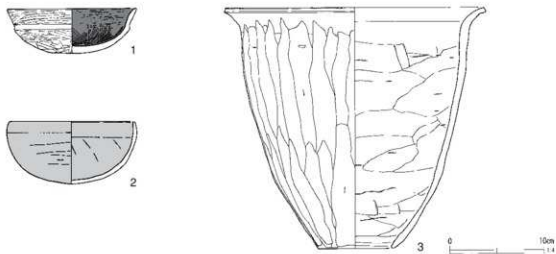
遺物は、燃焼部前面では高環が、貯蔵穴1周辺では、土師器環2点が出土している。土師器環・高環・甕が認められた。第103図6・12・13の土師器環には赤彩が、7・8には黒色処理がされていた。ミニチュア土器が1点、貝塚穴底泥岩が2点出土した。時期は6世紀第1四半期である。

### 第37号住居跡 (第93・94図)

調査区中央東寄り、J・K-9グリッドに位置する。第36・40・41・67号住居跡と重複し、新旧関係はすべての住居跡よりも古い。第40号住居跡には遺構上面を、第36・41号住居跡には床面を壊されており、遺存状態は極めて悪い。

平面形は不明瞭だが、南北に長い長方形と考えられる。検出された規模は南北6.40m、東西5.25mで、確認面からの深さは0.55mである。主軸方位はN-1°-Eである。

カマドは北壁に設けられており、カマド方位は



第105図 第37号住居跡出土遺物

第34表 第37号住居跡出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(13.6)	4.7	—	84.1	40	茨西角	普通	淡黄			
2	土師器	甕	(13.3)	6.6	—	149.4	70	埴南	普通	橙		SJ40	61-7
3	土師器	甕	27.5	20.5	8.0	2172.3	95	群東	雲、角	良好	に黄、黒	外面黒斑	85-3

N-5°-1Wである。袖部は、先端が第36号住居跡に壊されているが、両側が確認された。壁からの残存規模は左袖70cm、右袖87cmである。燃焼部も同様に、手前側を第36号住居跡に壊されている。壁内に取まる構造で、床面より10~15cm掘り窪められる。煙道部は燃焼部と20cmほどの厚い段差をもち、凹凸を繰り返しながら壁外に155cm延びる。

カマド以外の施設としては、カマド右脇で貯蔵穴が確認されている。平面形は円形で、規模は56×53cm、床面からの深さは20cmである。

遺物は土師器杯・壺・甕が認められた。第105図1の杯は内面に黒色処理が、2の壺は内外面に赤彩がされていた。

時期は6世紀第IV四半期である。

#### 第38号住居跡 (第106図)

調査区中央やや南東より、K-8・9、L-9グリッドに位置する。第50・56号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも新しい。

平面形は方形で、規模は東西、南北ともに5.15m、確認面からの深さは0.36mである。主軸方位はN-19°-1Wである。

カマドは北壁のやや西寄りに設けられ、カマド方位はN-10°-1Wである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は両袖とも58cmである。袖室内側は被熱し赤変している。燃焼部は壁内に収まり、床面よりやや浅く掘り窪められ、10cmほどの段をもって煙道部へ接続する。煙道部は外側へ緩やかに傾斜しながら壁外へ110cm延びる。

カマド以外の施設としてはビットが3基検出され

ている。平面形および規模は、P1は楕円形で58×32cm、床面からの深さ15cm、P2は円形で34×30cm、床面からの深さ20cm、P3は円形で42×40cm、床面からの深さ14cmである。

遺物は土師器の小片が極少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、他の住居跡との重複関係から、7世紀第IV四半期以降と考えられる。

#### 第39号住居跡 (第107・108図)

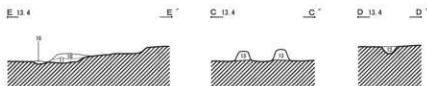
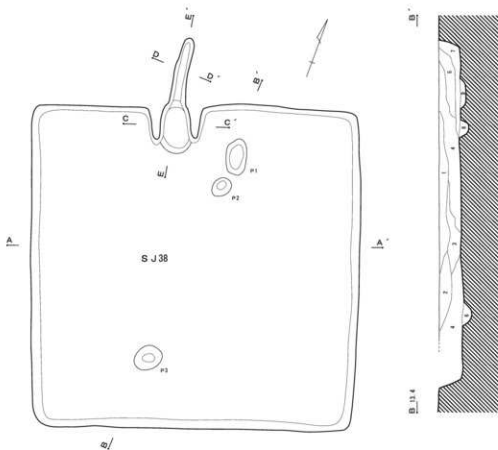
調査区東側、J-10グリッドに位置する。第40・42・43号住居跡と重複し、新旧関係は、第40号住居跡よりも古く、第42・43号住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西5.25m、南北4.57m、確認面からの深さは0.55mである。主軸方位はN-22°-1Eである。床面はカマド前面において貼り床が顕著に認められた。

カマドは北壁のやや西寄りに設けられ、カマド方位はN-20°-1Eである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖70cm、右袖64cmである。構築土にはオリーブ灰色砂質土が用いられていた。燃焼部は床面より5cmほど掘り窪められ、煙道部へは厚い段差を持たず緩やかに移行する。燃焼部から煙道部までの規模は、長さ110cm、幅35cmである。

遺物は土師器杯・鉢・甕が認められた。第109図3の甕は多孔で底部のみの残存であった。角閃石安山岩製の有溝砥石が1点出土した。

時期は6世紀第IV四半期である。

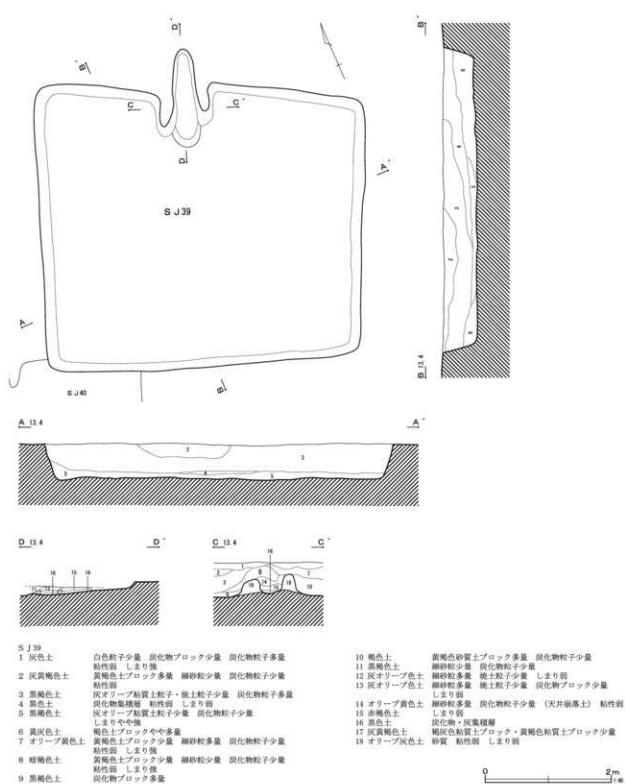


S J 38

- |        |                       |         |                    |
|--------|-----------------------|---------|--------------------|
| 1 灰色土  | シルト質 黄褐色シルト土ブロック少量    | 8 暗灰色土  | シルト質 黄褐色シルト土ブロック多量 |
| 2 黄褐色土 | シルト質                  | 9 暗灰色土  | シルト質 黄褐色シルト土ブロック多量 |
| 3 黄灰色土 | 炭化物炭層層 黄褐色ブロック散在 粘土少量 | 10 暗褐色土 | 粘土粒子少量 炭化物粒子少量     |
| 4 暗灰色土 | シルト質 炭化物多量            | 11 灰色土  | 灰主体 機土ブロック・粘土少量    |
| 5 黄灰色土 | 炭化物炭層層 黄褐色ブロックやや多量    | 12 暗灰色土 | 粘性弱 しまり弱           |
| 6 黄灰色土 | シルト質 暗灰色シルト土多量 炭化物多量  | 13 暗灰色土 | シルト質 下部に多く粘土・炭層層   |
| 7 暗灰色土 | シルト質 炭化物少量            |         | 粘質土ブロック層 カマド跡      |

0 2m

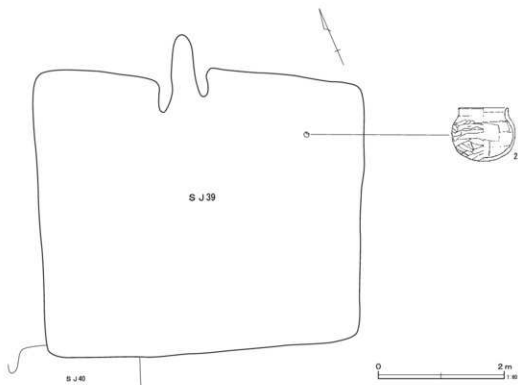
第106号 第38号住居跡



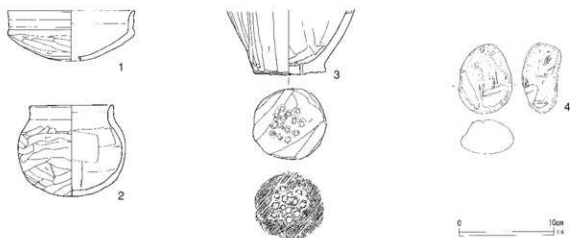
第107図 第39号住居跡

第35表 第39号住居跡出土遺物観察表 (第109図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.4	(5.3)	—	96.4	30	群東	角	普通	にぶい橙	No.1 角閃石安山岩	74-4
2	土師器	鉢	(8.6)	9.6	—	176.1	50	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	瓶	—	(6.9)	7.5	340.8	20	吾西・船	雲	普通	にぶい橙		
4	石製品	有溝砥石	長さ7.3幅5.6厚さ3.6重さ58.2		—	—	—	—	—	—	—		



第108図 第39号住居跡遺物出土状況



第109図 第39号住居跡出土遺物

**第40号住居跡 (第111図)**

調査区東側、J・K-9・10グリッドに位置する。第36・37・39・41・43号住居跡と重複し、新旧関係は、何れの住居跡よりも新しい。

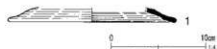
平面形は方形で、規模は東西5.58m、南北5.22m、確認面からの深さは0.47mである。主軸方位はN-

22° - Eである。

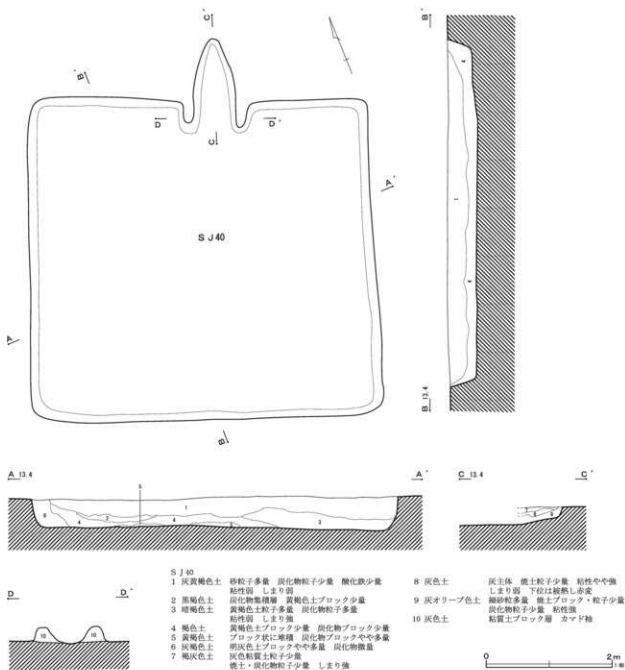
カマドは北壁のやや東寄りに設けられており、カマド方位はN-20° - Eである。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は左袖48cm、右袖48cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さであり、煙道部とは段差を持たずに移行する。

出土遺物は小片が少量で、図示できたのは須恵器  
蓋1点のみである。

時期は8世紀前半である。



第110図 第40号住居跡出土遺物



第111図 第40号住居跡

第36表 第40号住居跡出土遺物観察表 (第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋	(17.7)	(1.5)	—	22.6	10	新治	雲	普通	黄灰		

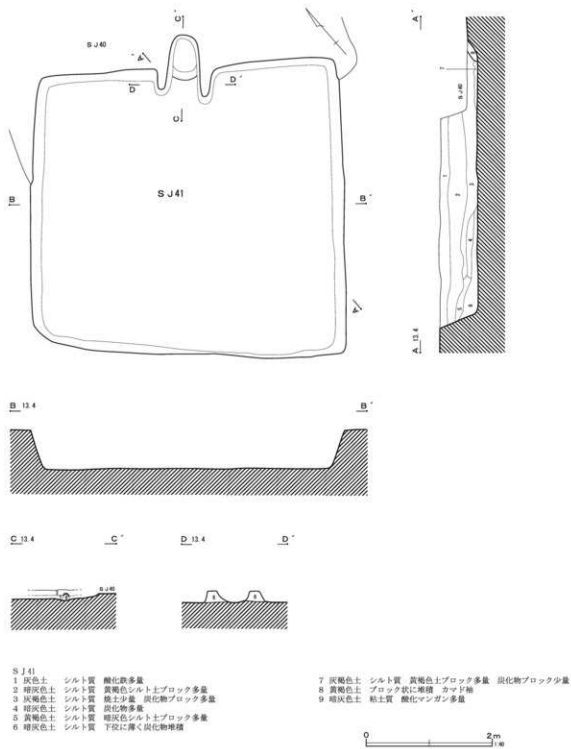


第41号住居跡 (第112図)

調査区中央東寄り、J・K-9・10グリッドに位置する。第36・37・40号住居跡と重複し、新旧関係は第40号住居跡よりも古く、第36・37号住居跡より

も新しい。

平面形はややいびつな方形で、規模は北東-南西4.73m、北西-南東5.00m、確認面からの深さ0.48mである。主軸方位はN-41° -Eである。



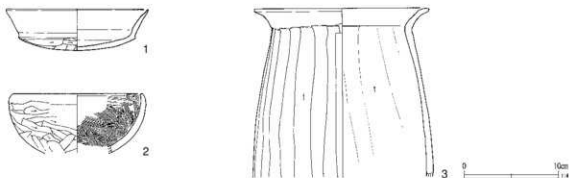
第112図 第41号住居跡

カマドは北東壁中央に設けられており、カマド方位はN-44° -Eである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖43cm、右袖60cmである。燃焼部は球面より5cm程度掘り窪めてあり、そのも

っとも手前側に支脚が置かれていた。

出土遺物は少量で、土師器環・壺・甕の3点が図示できたのみである。

時期は6世紀第Ⅳ四半期である。



第113図 第41号住居跡出土遺物

第37表 第41号住居跡出土遺物観察表 (第113図)

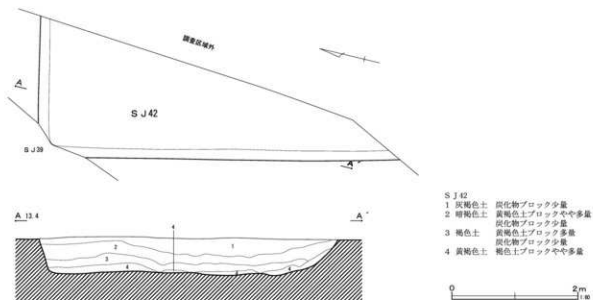
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(15.2)	4.3	—	143.3	50	埴北	雲	普通	浅黄橙		61-8
2	土師器	壺	(13.8)	(6.3)	—	61.8	20	茨西	角	普通	にぶい橙	外面黒斑	
3	土師器	甕	18.2	(17.9)	—	441.1	10	佐野	角	普通	にぶい黄橙		

#### 第42号住居跡 (第114図)

調査区東側、J・K-10グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区域外におよんでいる。第39号住

居跡とわずかに重複し、新旧関係は本住居跡が古い。

平面形は不明で、検出された規模は東西5.75m、南北2.30m、確認面からの深さは0.55mである。西



第114図 第42号住居跡

壁を基準とした方位はN-13° -Wである。

出土遺物は土師器の小片が極少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、第39号住居跡との重複関係から、6世紀第IV四半期以前と考えられる。

#### 第43号住居跡 (第116図)

調査区東側、I・J-9・10グリッドに位置する。第13・39・40・60号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係はすべての遺構よりも古く、住居跡の各所で他遺構の削平を受ける。第13号住居跡によって遺構上面を壊されるほか、第39・40号住居跡、第1号溝跡に床面を壊されている。第1号溝跡には北壁を壊されているが、北西コーナーは検出できた。床面は、壁際を除くほぼ全面において貼り床が確認された。

平面形は方形と推定される、規模は東西5.95m、南北5.83m、確認面からの深さは0.56mである。主軸方位はN-12° -Wである。

カマドは確認できなかったが、第1号溝跡に壊された北壁に設けられていたものと推測される。

カマド以外の施設としては、住居跡北側に2基、中央部に1基ピットを確認した。P2は柱穴と考えられる。P1は円形で、規模は40×38cm、床面からの深さ32cm、P2は円形で、規模は38×32cm、床面からの深さ45cm、P3は楕円形で、規模は77×62cm、

床面からの深さ40cmである。覆土には焼土ブロックを多く含んでいた。

遺物は覆土及び床面直上から出土している。また床面からやや浮いた位置に炭化材やまとまった焼土ブロックが検出されている。

出土遺物は少量で、土師器環・甕、須恵器甕が認められた。

時期は6世紀第I四半期である。

#### 第44号住居跡 (第117・118図)

調査区中央やや東寄り、J・K-8・9グリッドに位置する。第36・48・67号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西5.45m、南北3.40m、確認面からの深さは0.25mである。主軸方位はN-39° -Wである。貼り床や硬化面は見られなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-22° -Wである。袖設は両側とも検出できなかった。燃焼部は5~10cmほど浅く掘り窪められる。燃焼部の規模は、長さ137cm、幅66cmである。

遺物は少量で、内外面黒色処理された土師器環が認められた。滑石製白玉2点、滑石製石製模造品1点が平野近くから出土した。貝塚穴泥岩1点が出土した。

時期は7世紀第IV四半期である。



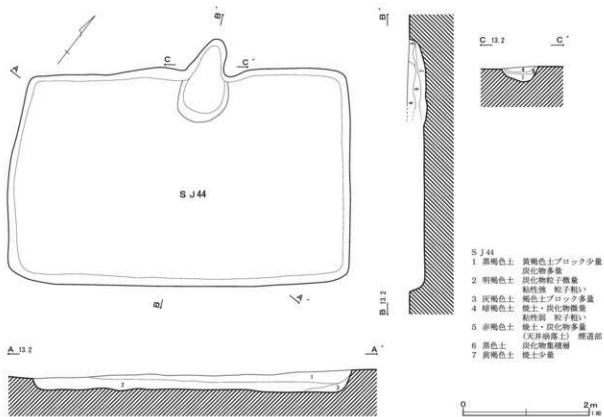
第115図 第43号住居跡出土遺物

第38表 第43号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

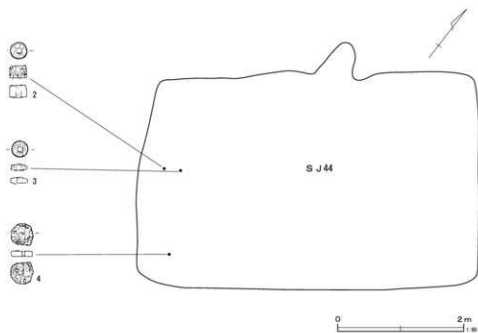
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	15.7	6.3	—	256.8	80	群東角	普通	にぶい橙			61-9
2	土師器	甕	(22.8)	(10.4)	—	186.8	5	埜北	普通	橙			
3	須恵器	甕	—	—	—	42.4	5	金山	良好	灰			



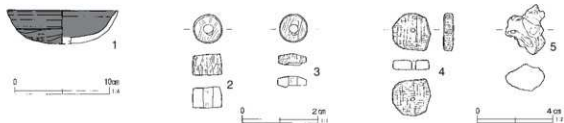
第116図 第43号住居跡



第117図 第44号住居跡



第118図 第44号住居跡遺物出土状況



第119図 第44号住居跡出土遺物

第39表 第44号住居跡出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.7)	3.5	—	36.7	25	群東	角	普通	橙	指押痕	
2	石製品	白玉	径0.76孔径0.24厚さ0.51			重さ0.48	100					No.3 滑石	95-14
3	石製品	白玉	径0.75孔径0.22厚さ0.30			重さ0.22	100					No.2 滑石	95-13
4	石製品	有孔円板	長さ1.9幅2.0厚さ0.5			重さ4.1	100					No.1 滑石	94-25
5		貝殻内面泥片	長さ2.6幅2.0厚さ1.4			重さ3.4	—						

#### 第45号住居跡 (第120・121図)

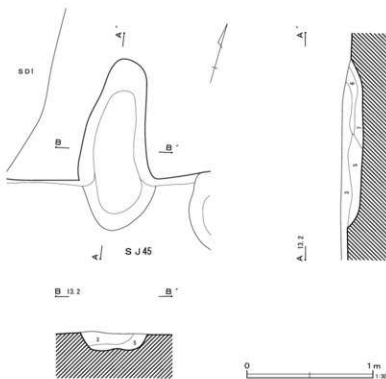
調査区中央部北西寄り、J-8グリッドに位置する。第47・49号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は第1号溝跡よりも古く、第47・49号住居跡よりも新しい。第1号溝跡には住居跡西側を壊されている。

第49号住居跡とはカマドを共有しており、同居居

跡を若干造り変えたと考えられる。

平面形は不明である。検出された規模は南北4.28m、東西4.00m、確認面からの深さは0.2mである。主軸方位はN-17°-Wである。床面は中央部に貼り床が顕著に認められた。

カマドは北壁の東寄りに設けられ、カマド方位はN-9°-Wである。袖部は確認されなかった。燃



第120図 第45号住居跡カマド

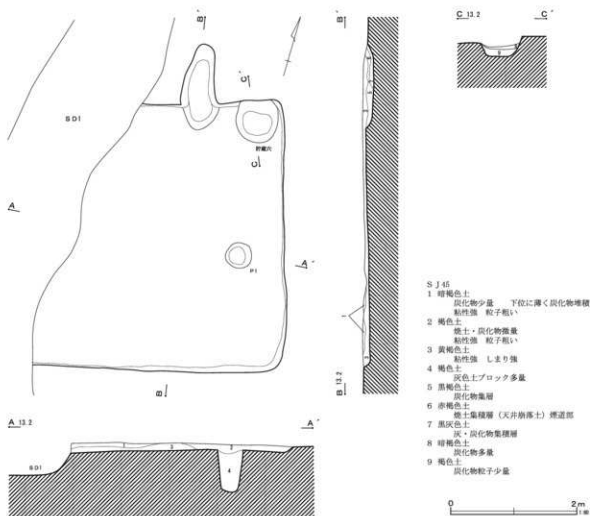
焼部と煙道部は段差を持たずに移行する。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴と柱穴が確認されている。貯蔵穴は北東コーナーで確認されており、平面形は円形で、規模は直径8cm、床面からの深さは22cmである。P1は住居跡東側で検出され、平

面形は円形で、規模は径40cm、床面からの深さは45cmである。

出土遺物は少量で、土師器環・甕と貝塚の底泥岩が各1点図示できたのみである。

時期は7世紀末から8世紀第I四半期である。



第121図 第45号住居跡



第122図 第45号住居跡出土遺物

第40表 第45号住居跡出土遺物観察表 (第122図)

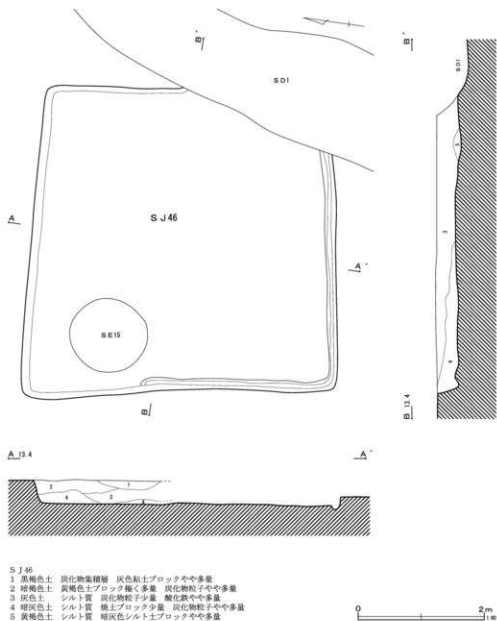
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	坏	(14.3)	(3.6)	—	18.5	10	佐野	角、英	良好	にぶい黄橙	
2	土師器	甕	(21.0)	(14.3)	—	189.5	5	埴南	雲	普通	にぶい橙	
3		目取穴開削	長さ3.2幅2.4厚さ1.9重さ7.0									

第46号住居跡 (第123・124図)

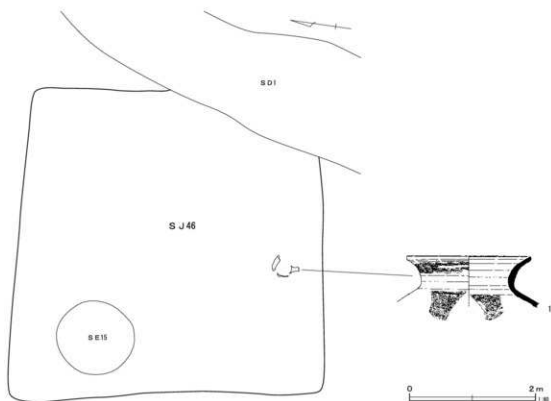
調査区中央西寄り、I-7、J-7・8グリッドに位置する。第30・34・39・69号住居跡、第1号溝跡、第15号井戸跡と重複し、新田関係は、第1号溝

跡、第15号井戸跡よりも古く、重複するすべての住居跡よりも新しい。カマドおよび住居跡南東部は第1号溝跡に壊されている。

平面形は方形で、規模は東西4.95m、南北5.05m、







第124図 第46号住居跡遺物出土状況

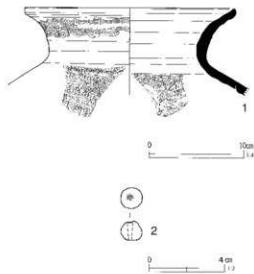
確認面からの深さは0.38mである。主軸方位はN-83°-Eである。

カマドは確認できなかったが、第1号溝跡に壊された東壁中央で焼土ブロックの集積を確認したことから、カマドはこの位置に設けられたものと推測される。

カマド以外の施設としては、住居跡南壁から西壁中央にかけて壁溝が巡っている。床面からの深さは10cmほどである。

出土遺物は少量で、須恵器甕1点と土玉1点が図示できたのみである。

時期は6世紀第IV四半期である。



第125図 第46号住居跡出土遺物

第41表 第46号住居跡出土遺物観察表 (第125図)

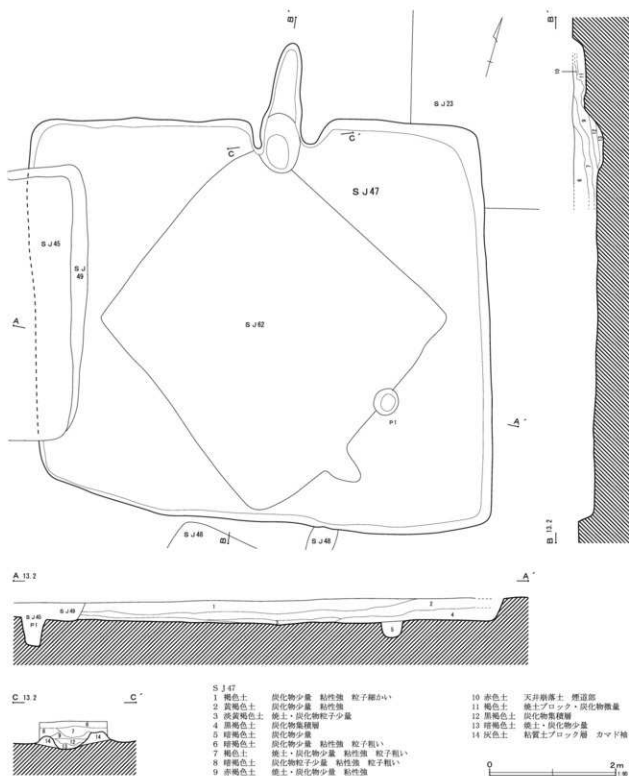
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	呉存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	甕	22.1	(9.2)	—	654.8	10	南比金	針	良好	灰	Nu1	61-10
2	土製品	土玉	径1.1孔径0.3厚さ1.1				100		軽	良好	褐灰		95-22

第47号住居跡 (第126・127回)

調査区中央、I-8、J-8・9グリッドに位置する。第23・33・45・48・49・62号住居跡と重複し、

新旧関係は第23・45・48・49・62号住居跡よりも古く、第33号住居跡よりも新しい。

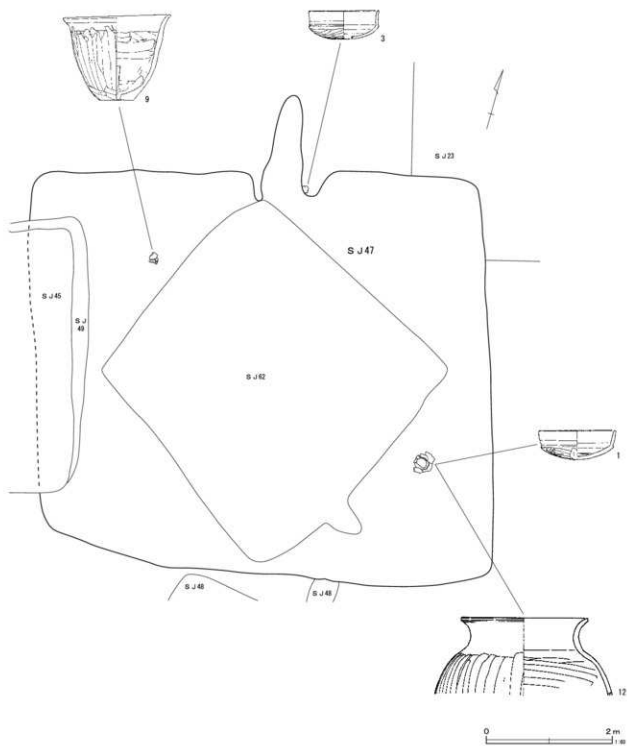
平面形は東西にやや長い長方形で、規模は東西



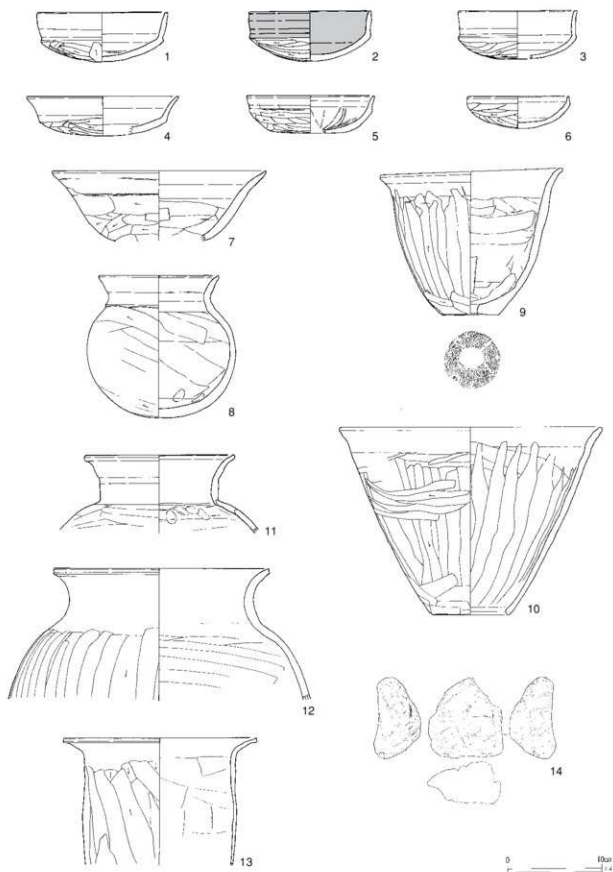
第126回 第47号住居跡

7.16m、南北6.55m、確認面からの深さは0.38mである。主軸方位はN-14°-Wである。床面は住居跡南側の一部で貼り床を確認した。

カマドは北壁のやや東寄りに設けられており、カマド方位はN-7°-Wである。袖部は両側で確認でき、壁からの残存規模は、左袖55cm、右袖45cm



第127図 第47号住居跡遺物出土状況



第128图 第47号住居跡出土遺物 (1)

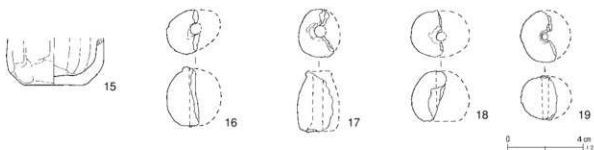
である。燃焼部は壁内に取まり、床面より15cmほど低く掘り窪められ明瞭なピット状になる。煙道部とは急傾斜をもって接続し、煙道部は緩やかに傾斜して壁外に75cm伸びる。

カマド以外の施設では、ピットが1基確認されている。P1は円形で42×38cm、床面からの深さ25cm

を測る。

遺物は土師器環・鉢・甗・小型甗・甗が認められた。第128図2の土師器環には内外面に赤彩がされていた。ミニチュア土器1点、土玉4点、角閃石安山岩製有溝砥石1点が出土した。

時期は6世紀第1四半期である。



第129図 第47号住居跡出土遺物(2)

第42表 第47号住居跡出土遺物観察表 (第128・129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	環	13.6	5.3	—	289.9	90	群東	雲、角	普通	橙	No1	62-1	
2	土師器	環	(12.8)	5.8	—	82.9	25	埼南	角、軽	良好	にぶい・橙	貼床 比企型環		
3	土師器	環	(12.6)	5.1	—	78.6	40	茨西	雲	普通	橙	No5	74-5	
4	土師器	環	(16.2)	(4.1)	—	58.3	20	群東	雲、角	良好	にぶい・橙	貼床		
5	土師器	環	(13.5)	4.0	—	79.5	40	埼南	角、軽	普通	にぶい・橙			
6	土師器	環	10.6	3.4	—	62.9	60	埼北	角、軽	良好	橙			
7	土師器	鉢	(22.8)	(7.5)	—	198.8	20	佐野	角	普通	にぶい・橙	焼熟 貼床		
8	土師器	小型甗	(12.7)	15.0	—	430.5	50	群東	角	良好	にぶい・橙			
9	土師器	甗	19.4	15.5	6.2	1000.6	95	群東	角、軽	普通	にぶい・橙	No4		
10	土師器	甗	(27.8)	19.9	(8.2)	657.6	30	茨西	角、軽	普通	にぶい・橙			
11	土師器	甗	(15.6)	(8.3)	—	167.9	5	埼南	角	良好	橙	貼床		
12	土師器	甗	22.8	(14.0)	—	1367.0	30	茨西	角、軽	不良	にぶい・橙	No1		
13	土師器	甗	(20.4)	(13.5)	—	172.8	5	埼北	雲、角	良好	橙	カマド		
14	石製品	有溝砥石	長さ8.6幅4.9厚さ4.5重さ125.1		—		—					角閃石安山岩		
15	土製品	ミニチュア	—	(2.5)	3.2	15.9	30	角	雲	普通	にぶい・橙			
16	土製品	土玉	径2.3孔径0.6厚さ3.1重さ8.4		50		50	雲	普通	にぶい・橙				
17	土製品	土玉	径2.5孔径0.6厚さ3.2重さ10.0		50		50	角	良好	にぶい・橙		貼床		
18	土製品	土玉	径2.5孔径0.5厚さ2.6重さ8.1		30		30	雲、角	普通	にぶい・橙				
19	土製品	土玉	径2.8孔径0.5厚さ2.4重さ10.3		50		50	雲、角	普通	灰黄褐				

#### 第48号住居跡 (第130~132図)

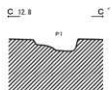
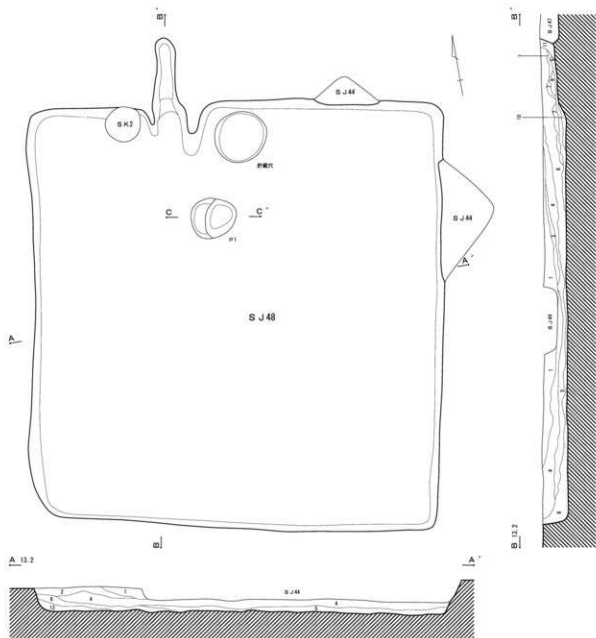
調査区中央、J・K-8・9グリッドに位置する。

第33・44・47・67号住居跡、第2号土坑と重複し、新旧関係は第44号住居跡、第2号土坑よりも古く、第33・47・67号住居跡よりも新しい。

平面形は方形で、規模は東西6.50m、南北6.80m、確認面からの深さ0.3mである。主軸方位はN-

8°-Eである。床面は壁際周辺を除くほぼ全面で貼り床が顕著に確認された。

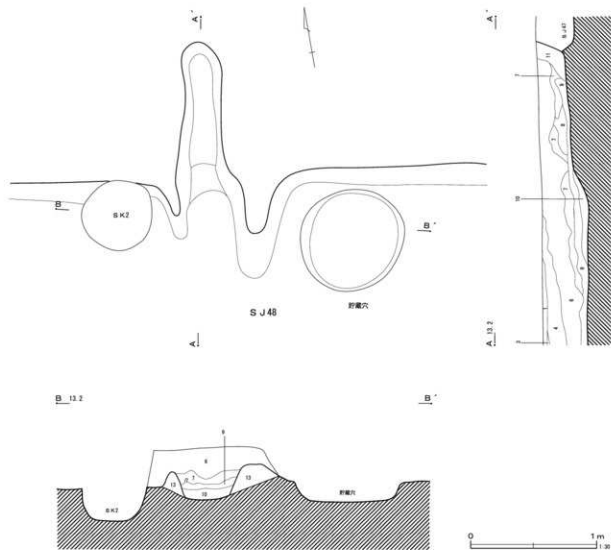
カマドは北壁の西寄りに設けられ、カマド方位はN-10°-Eである。袖部が両側で確認され、壁からの残存規模は左袖が45cm、右袖は83cmである。燃焼部はほぼ壁内に取まり、火床面は床面とほぼ同じかやや低い位置にあり、煙道部とは明瞭な段差をも



- |         |                         |
|---------|-------------------------|
| S J 48  |                         |
| 1 黒褐色土  | 炭化物集積層 粘性強 粒子粗い         |
| 2 褐色土   | 炭化物少量                   |
| 3 赤褐色土  | 砂層 粘土多量 炭化物少量           |
| 4 緑褐色土  | 炭化物多量 粘性強 粒子細か          |
| 5 黒色土   | 炭化物集積層 粘土ブロック多量         |
| 6 黄褐色土  | 炭化物微量                   |
| 7 赤褐色土  | 粘土ブロック集積層               |
| 8 黄褐色土  | 〔天井構造上〕 構造部<br>粘性強 粒子細か |
| 9 黒色土   | 炭化物集積層 粘性強              |
| 10 褐色土  | 粘土ブロック 炭化物少量<br>下に薄く灰堆積 |
| 11 灰褐色土 | 粘土ブロックやや多量<br>炭化物少量     |
| 12 暗褐色土 | 黄褐色土ブロック少量<br>炭化物微量     |
| 13 灰色土  | 粘質土ブロック層 カマド跡           |

0 2m

第130図 第48号住居跡



第131図 第48号住居跡カマド

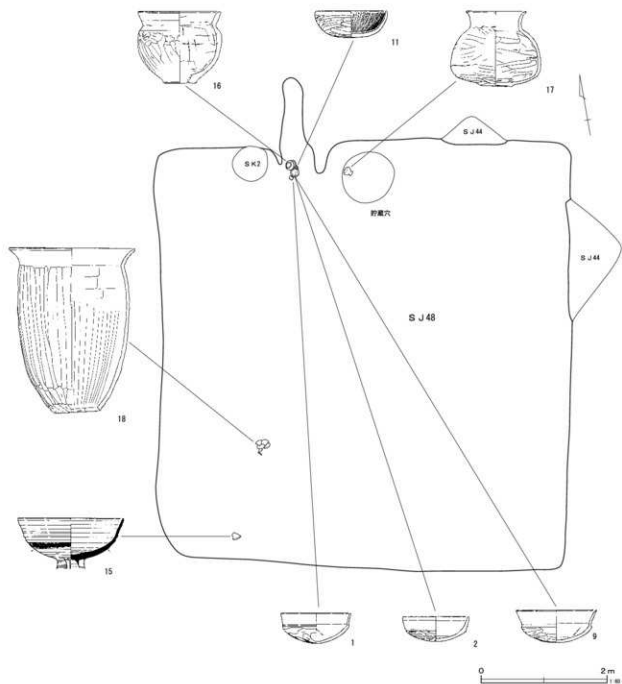
って接続する。煙道部は緩やかに傾斜しながら壁外へ95cm延びる。燃焼部、煙道部の壁は良く焼け、赤色に変化していた。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴とビット1基を確認した。貯蔵穴はカマドの右側に検出された。平面形は円形で、規模は径80cm、床面からの深さは16cmである。P1はカマド前面に位置し、平面形は楕円形で、規模は72×62cm、床面からの深さ28cmである。カマド燃焼部で土師器坏4点、小型甕1点が、

貯蔵穴内で壺1点が出土している。

遺物は土師器坏・壺・小型甕・甕、須恵器高坏等が認められ、混入と思われる土師器、須恵器も見られた。第133図11の土師器坏や17の壺は赤彩されていた。13の土師器坏の底部片には木炭痕が観察された。滑石製白玉1点、角閃石安山岩製と安山岩製の有溝砥石各1点が出土した。

時期は6世紀第1四半期である。

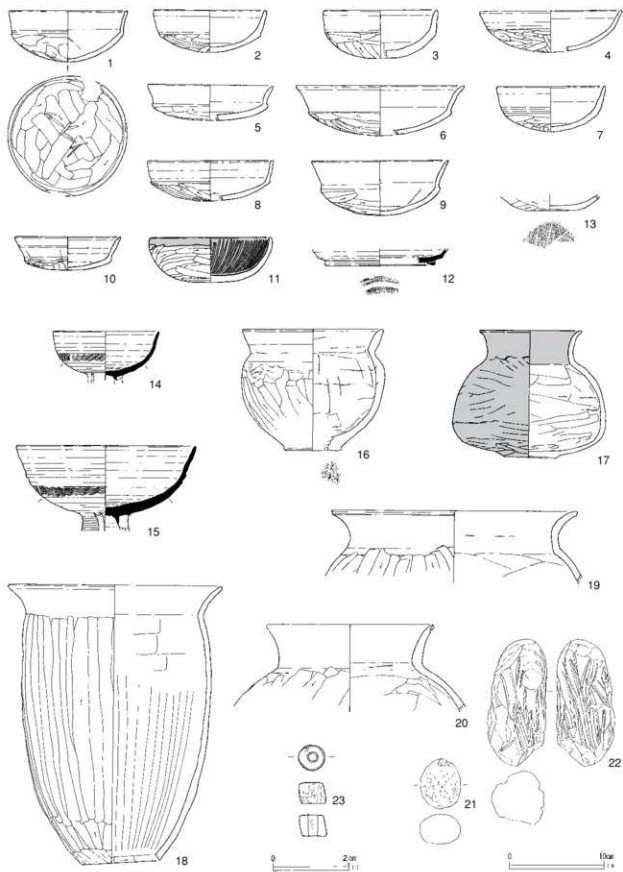


第132図 第48号住居跡遺物出土状況

第43表 第48号住居跡出土遺物観察表(1) (第133図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.4	5.4	—	97.1	95	群東	雲	良好	に深い橙	No.2	62-2
2	土師器	坏	(11.9)	4.4	—	88.0	50	埜北	雲	良好	橙	No.2	
3	土師器	坏	(11.9)	5.1	—	135.9	50	埜北	角	普通	橙	カマド、上層、粘土層下	
4	土師器	坏	(15.1)	(4.3)	—	37.5	20	埜北	雲、角	良好	橙	カマド、上層	
5	土師器	坏	13.2	(3.7)	—	62.2	30	埜北	雲	普通	橙	炭化層上	





第133图 第48号住居跡出土遺物

第44表 第48号住居跡出土遺物観察表(2) (第133図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
6	土師器	坏	(17.7)	5.2	—	113.0	40	埴北	角	普通	浅黄緑	炭化層上 小針系	62-3 74-6 75-1 85-4 95-15	
7	土師器	坏	(11.5)	4.7	—	80.2	50	佐野	角	普通	にぶい褐	指頭痕		
8	土師器	坏	(13.4)	4.2	—	44.1	25	佐野	雲、角	普通	橙	炭化層上		
9	土師器	坏	(14.5)	5.7	—	171.6	40	佐野	角	良好	にぶい褐	No.2		
10	土師器	坏	(11.2)	3.5	—	48.2	30	埴北	雲、角	良好	橙	No.3		
11	土師器	坏	(12.9)	4.8	—	70.9	25	粉南	角	良好	にぶい褐	No.3		
12	須恵器	高台付坏	—	(1.8)	(11.7)	12.4	5	太田	角	普通	灰白	木炭痕		
13	土師器	坏	—	(1.8)	(5.0)	28.0	10	粉南	角	普通	にぶい褐	木炭痕		
14	須恵器	高坏	(11.2)	(5.6)	—	109.2	25	管ノ沢	角	良好	灰	炭化層上 三方透		
15	須恵器	高坏	(19.0)	(9.0)	—	275.6	25	管ノ沢	角	良好	灰	No.5、炭化層上 三方透		
16	土師器	小型壺	14.8	12.9	(6.1)	612.3	75	茨西	角	普通	にぶい褐	No.1、カマド		74-6
17	土師器	壺	10.7	13.5	5.5	603.8	90	埴南	角、針	良好	にぶい褐	No.4		75-1
18	土師器	甗	22.2	29.5	8.1	1678.5	90	埴北	片、角	普通	にぶい褐	No.6、炭化層上		85-4
19	土師器	甗	(26.0)	(7.7)	—	169.5	5	茨西	角	普通	にぶい褐			
20	土師器	甗	(17.8)	(9.2)	—	637.4	20	粉南	角、小	普通	にぶい褐	焼土層下		
21	石製品	有溝砥石	長さ5.3幅4.2厚さ3.1重さ34.8				—					覆土 角閃石安山岩		
22	石製品	有溝砥石	長さ13.3幅6.2厚さ5.4重さ313.4				—					安山岩		
23	石製品	白玉	径0.69孔径0.25厚さ0.50重さ0.41				100					滑石		95-15

## 第49号住居跡 (第134図)

調査区中央部北西寄り、J-8グリッドに位置する。第45・47号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は、第45号住居跡、第1号溝跡よりも古く、第47号住居跡よりも新しい。

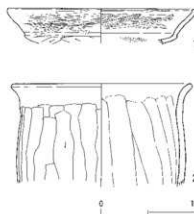
前述のように、第45号住居跡とはカマドを共有し、床面は第45号住居跡よりも15cmほど低い位置にある。第45号住居跡は本住居跡のカマドをそのままにし、床面を貼り直している。平面範囲は上層の第45号住居跡に比べて、住居跡東側がやや広くなり、結果としてカマドは北壁の中央寄りに設けられたことになる。第45号住居跡と同様、北西コーナーは第1号溝跡によって切られているが、本住居跡は南西コーナーが検出されている。

平面形は南北にやや長い長方形で、規模は南北4.45m、東西4.00m、確認面からの深さ0.3mである。主軸方位はN-16°-Wである。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-11°-Wである。燃焼部は床面より15cmほど低く掘り窪められる。

出土遺物は少量で、土師器環1点、甗1点が検出されたのみである。

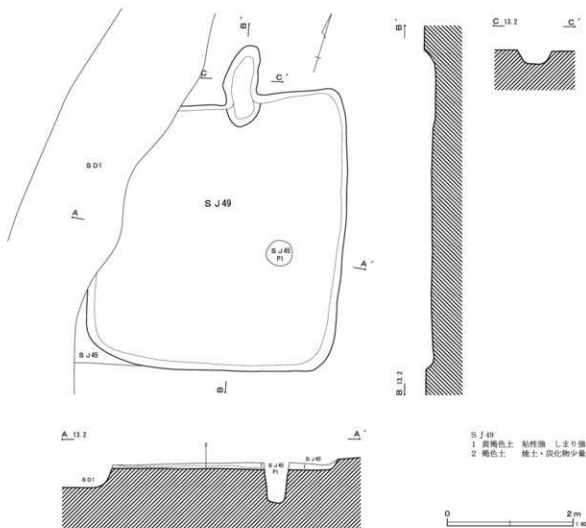
時期は6世紀第Ⅲ四半期である。



第134図 第49号住居跡出土遺物

第45表 第49号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(19.8)	(3.7)	—	31.6	10	粉南	角	良好	橙		
2	土師器	甗	(18.4)	(10.9)	—	181.3	5	粉南	角	普通	にぶい褐		



第135図 第49号住居跡

#### 第50号住居跡 (第136・137図)

調査区中央南東寄り、K・L-8・9グリッドに位置する。第38・56号住居跡と重複し、新旧関係は第56号住居跡よりも新しく、第38号住居跡よりも古い。第38号住居跡にはカマドを含む住居跡北東部の遺構上部を壊されている。

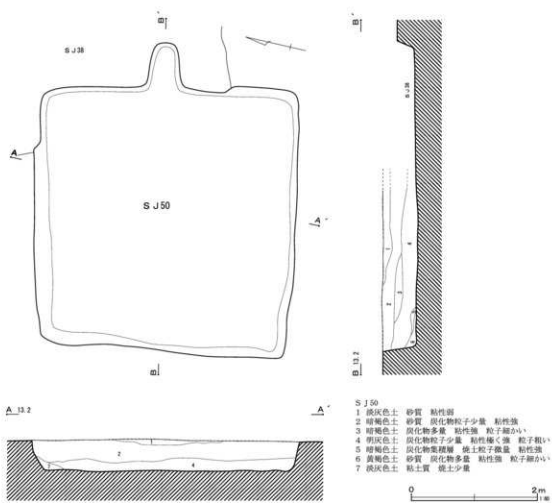
平面形は方形で、規模は東西、南北ともに4.19m、確認面からの深さは0.52mである。主軸方位はN-79°-Eである。

カマドは東壁中央に設けられており、カマド方位

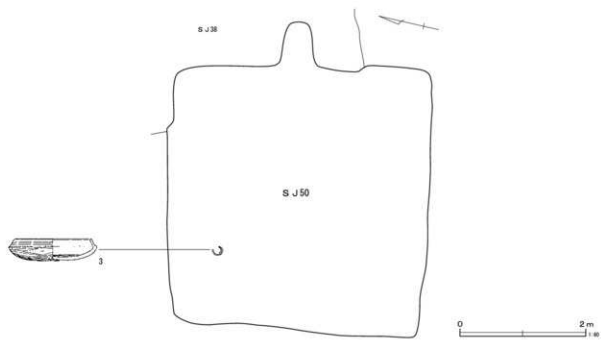
はN-81°-Eである。袖部は両側ともに確認されなかった。燃焼部の掘り込みは見られなかった。

遺物は土師器環・甕、須恵器埴瓶が認められた。第138図3は内外面に黒色処理され、底部外面に小さく木炭痕が見られる。第138図6は口縁端部が垂直に立ち上がる。外面はハケ目を施し、口縁はヨコナデしている。胴部はハケ目ナデしているもの明瞭に残る。外面には煤が付着している。角閃石安山岩製の有溝砥石が1点出土した。

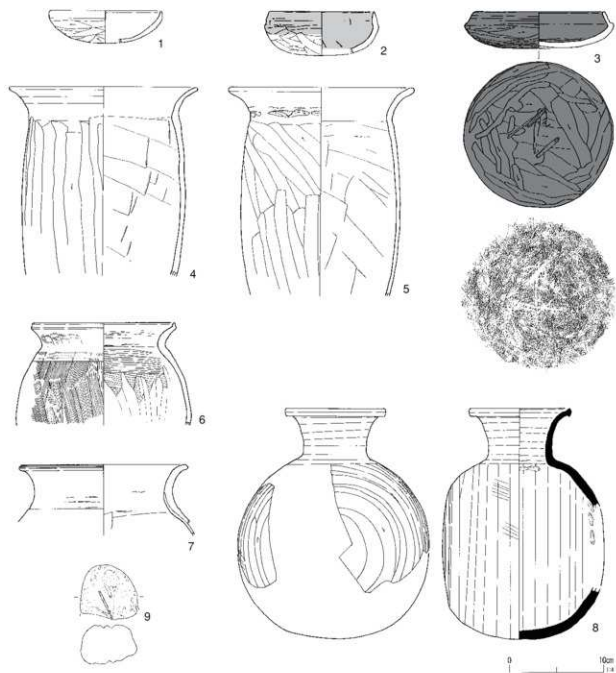
時期は7世紀第IV四半期である。



第136圖 第50号住居跡



第137圖 第50号住居跡遺物出土狀況



第138図 第50号住居跡出土遺物

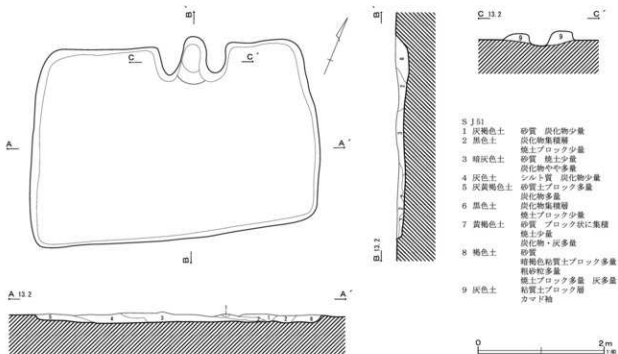
第46表 第50号住居跡出土遺物観察表 (第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(11.7)	(3.4)	—	34.8	30	佐野	雲、角	良好	橙	比企型環 No.1 木葉痕	62-4
2	土師器	環	(11.1)	(4.5)	—	47.4	25	埴南	軽	良好	橙		
3	土師器	環	13.6	3.9	—	285.2	80	佐野	角	良好	に濃い黄橙	No.1 木葉痕	86-3
4	土師器	甕	20.0	(20.1)	—	635.9	25	埴北	雲、角	良好	に濃い黄橙		
5	土師器	甕	19.3	22.1	—	633.1	40	佐野	角、軽	普通	に濃い赤褐		
6	土師器	甕	(15.0)	(10.9)	—	126.8	5	東北	雲	普通	淡黄	外面に厚付着	93-1
7	土師器	甕	(17.5)	(7.5)	—	132.7	5	新治	雲、軽	普通	褐灰	常陸斐	
8	須恵器	提瓶	10.5	(24.3)	—	857.8	50	金山		良好	灰	指原町	86-1-2
9	石製品	有溝砥石	長さ5.9幅5.7厚さ4.1重さ66.4			—	—				灰白	角四石安山岩	

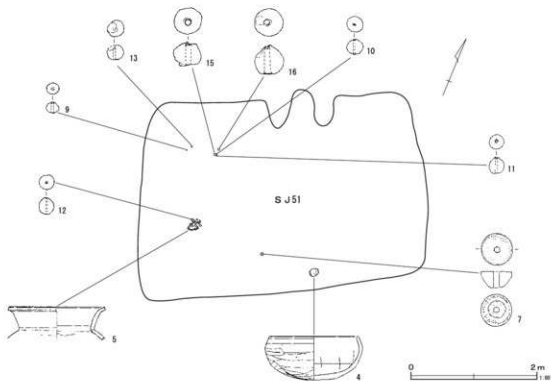
第51号住居跡 (第139・140図)

調査区西側、K-6グリッドに位置する。第52・

53・66・74・85号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも新しい。



第139図 第51号住居跡



第140図 第51号住居跡遺物出土状況

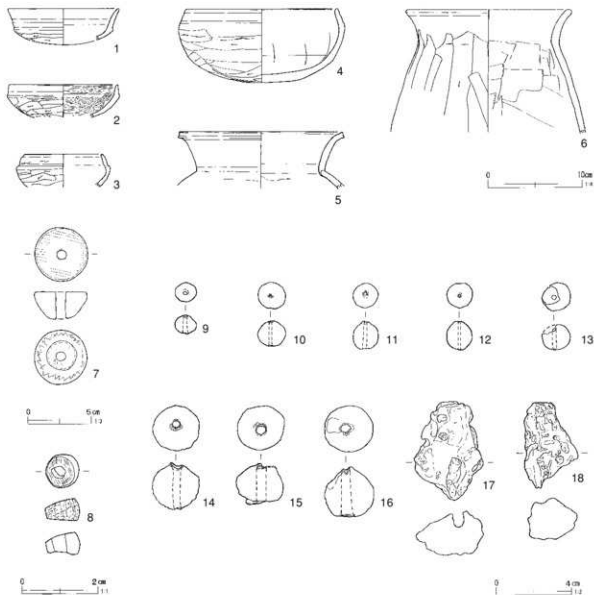
平面形は東西に長い長方形で、規模は東西4.58m、南北3.05m、確認面からの深さ0.13mである。主軸方位はN-25°-Wである。カマド前面に貼り床が認められ、固くしまっていた。床面西側で土玉が7点と紡錘車が出土した。

カマドは北壁のやや東寄りに造られ、カマド方位はN-20°-Wである。燃焼部は床面より5~10cm

程掘り窪められる。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖、右袖ともに60cmである。

遺物は、土師器環・鉢・甕が認められた。蛇紋岩製の石製紡錘車1点、滑石製白玉1点、土玉8点、貝殻穴痕泥岩2点が出土した。土玉は小さいものが5点、やや大き目が3点見られた。

時期は7世紀第IV四半期である。



第141図 第51号住居跡出土遺物

第47表 第51号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.7)	(3.3)	—	32.0	25	埼北	角、軽	良好	橙		
2	土師器	坏	(11.3)	(3.5)	—	60.1	40	茨西	角	良好	にぶい橙		
3	土師器	甕	(8.2)	(3.5)	—	16.4	20	栃南	雲、角	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	鉢	(15.9)	7.8	—	323.8	60	茨西	角	普通	褐灰	No.1	
5	土師器	甕	(17.2)	(6.0)	—	145.1	5	佐野	雲、角	普通	橙	No.3	
6	土師器	甕	(17.4)	(13.1)	—	196.2	5	茨西	雲	普通	にぶい黄橙		
7	石製品	紡錘車	径4.2孔径0.8厚さ2.2重さ56.8				100					No.2 蛇紋岩	95-22
8	石製品	白玉	径0.90孔径0.86厚さ0.55重さ0.64				100					滑石	95-14
9	土製品	土玉	径1.1孔径0.2厚さ1.0重さ1.0				100		角	普通	灰黄褐	No.6	95-22
10	土製品	土玉	径1.4孔径0.2厚さ0.8重さ2.7				100		雲	普通	灰黄褐	No.10	95-20
11	土製品	土玉	径1.3孔径0.2厚さ1.4重さ2.5				100		雲	良好	灰黄褐	No.11	95-19
12	土製品	土玉	径1.4孔径0.2厚さ1.5重さ2.7				100		雲、角	普通	にぶい褐	No.4	95-21
13	土製品	土玉	径1.5孔径0.3厚さ1.3重さ2.4				80		雲	普通	灰黄褐	No.5	95-18
14	土製品	土玉	径2.4孔径0.4厚さ2.4重さ11.8				100		雲、角	普通	灰黄褐	No.5	95-29
15	土製品	土玉	径2.4孔径0.5厚さ2.1重さ10.3				100		角	普通	にぶい黄橙	No.9	95-28
16	土製品	土玉	径2.6孔径0.5厚さ2.2重さ15.1				100		角	普通	にぶい黄橙	No.8	95-25
17		貝塚穴内泥層	長さ5.2幅3.6厚さ2.2重さ33.0				—						
18		貝塚穴内泥層	長さ4.5幅2.7厚さ2.2重さ20.2				—						

## 第52号住居跡 (第142～144図)

調査区西側、J・K-6・7グリッドに位置する。第53・51・54・66号住居跡と重複しており、新旧関係は、第51号住居跡よりも古く、第63・65・66号住居跡よりも新しい。

平面形状は方形で、規模は南北6.56m、東西6.37m、確認面からの深さ0.35mである。主軸方位はN-13°-1°Wである。床面は中央部に部分的に貼り床が認められている。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-25°-1°Wである。袖部は両側に確認され、壁からの残存規模は左袖85cm、右袖80cmである。右袖には、本住居跡より先行する第63号住居跡の煙道部が確認されていることから、袖の構築は他山削り出しであったと判断される。燃焼部は煙道部へ向かって

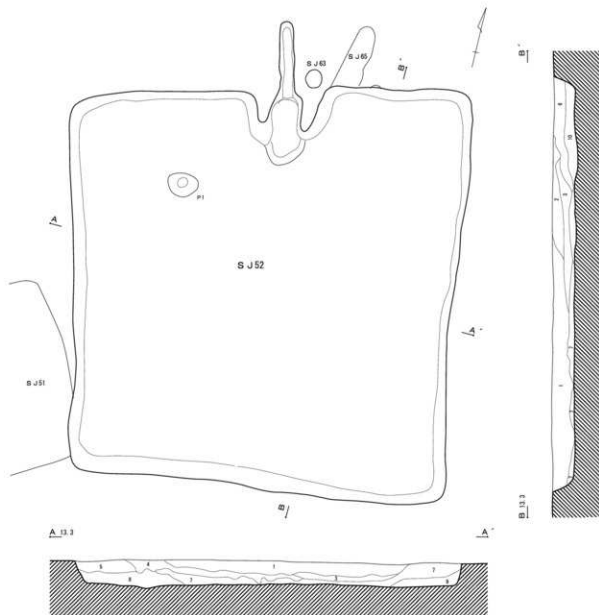
緩やかに傾斜をもった深い窪みをなし、煙道部とは段差をもって接続する。煙道部はほぼ水平に壁外へ110cm延びている。カマド袖内側および燃焼部の底面は被熱し赤変していた。燃焼部で土師器甕の上半部と下半部が別々に出土した。下半部は支脚として利用したと考えられる。

カマド以外の施設では、ピットが1基確認されている。P1は楕円形で、規模は47×37cm、床面からの深さ33cmである。住居跡前側で土師器環が2点出土している。

遺物は土師器環・鉢・甕、須恵器甕が認められた。土師器環には黒色処理されたものが多く見られた。角閃石安山岩製の有溝砥石1点、貝塚穴内泥岩2点が出土した。

時期は7世紀第Ⅲ四半期である。





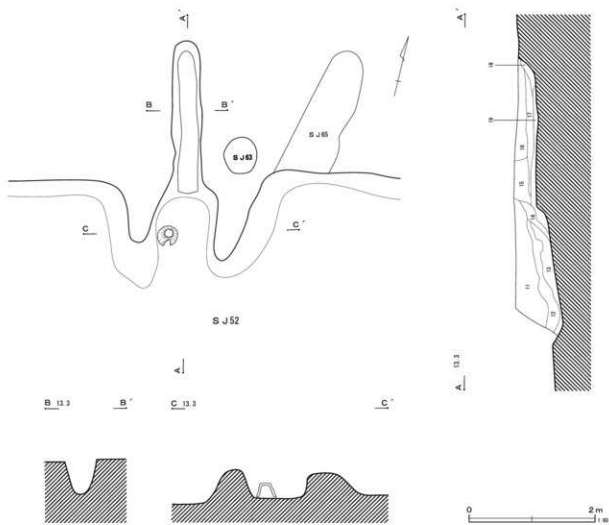
S J 52

- 1 灰色土 砂質 炭化物少量
- 2 黒褐色土 砂質 焼土ブロック少量 炭化物多量
- 3 黒色土 酸化物質多量
- 4 暗灰色土 砂質 炭化物・灰多量
- 5 灰褐色土 砂質 炭化物少量
- 6 灰色土 砂質 黄褐色シルト土ブロックやや多量 炭化物少量
- 7 灰褐色土 砂質
- 8 黄褐色土 砂質
- 9 灰色土 砂質 黄褐色砂質土ブロック多量 炭化物多量
- 10 暗灰色土 砂質 炭化物ブロック少量

- 11 暗褐色土 炭化物微量 粘性弱 粒子細かい
- 12 黒色土 炭化物集積層
- 13 赤褐色土 焼土ブロック集積層
- 14 黄褐色土 炭化物ブロック多く多量
- 15 赤褐色土 粘性強 粒子細かい
- 16 暗褐色土 炭化物粒子微量 粘性弱 粒子細かい
- 17 暗褐色土 焼土粒子微量 焼土・炭化物微量
- 18 灰赤色土 標道部敷設面
- 19 赤褐色土 焼土ブロック集積層

0 2m

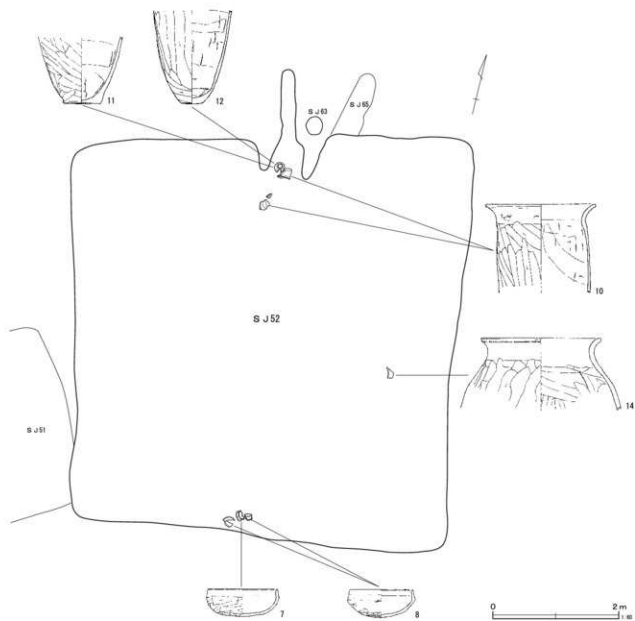
第142図 第52号住居跡



第143図 第52号住居跡カマド

第48表 第52号住居跡出土遺物観察表(1) (第145図)

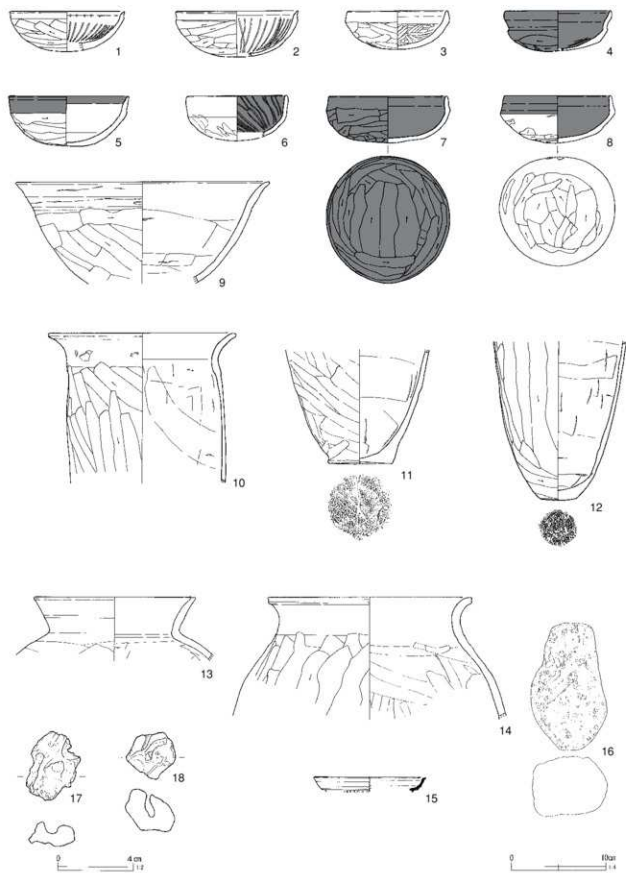
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.2	—	47.0	20	埴北角	土	良好	橙		
2	土師器	坏	(12.4)	4.8	—	39.6	25	埴北角	土	良好	橙	外面黒斑	
3	土師器	坏	(10.5)	4.1	—	81.3	40	佐野雲、角	土	良好	にぶい黄橙		
4	土師器	坏	11.2	4.3	—	84.1	70	佐野雲、角	土	良好	浅黄橙	焼成前の補修痕あり	62-5
5	土師器	坏	12.6	5.3	—	127.6	50	群東角	土	良好	にぶい橙		62-6
6	土師器	坏	(10.4)	(4.4)	—	23.4	20	茨西	土	良好	にぶい橙		
7	土師器	坏	12.4	4.9	—	219.9	100	茨西雲、角	土	普通	にぶい橙	No.5、No.6	62-7
8	土師器	坏	11.1	5.0	—	175.3	95	茨西角	土	普通	にぶい黄橙	No.4、No.6	62-8
9	土師器	鉢	(26.5)	(10.8)	—	145.5	5	埴北雲、角	土	良好	にぶい黄橙		
10	土師器	甕	19.8	(15.9)	—	588.4	40	埴北角	土	普通	橙	No.1、No.4、カマド	75-2
11	土師器	甕	—	(12.1)	6.8	396.1	10	新治雲、角	土	普通	にぶい橙	カマドNo.2支柱 本集痕	
12	土師器	甕	—	(16.8)	3.9	429.5	50	埴北雲、角	土	良好	灰黄褐	No.2カマド支柱	



第144図 第52号住居跡遺物出土状況

第49表 第52号住居跡出土遺物観察表 (2) (第145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
13	土師器	甕	(16.9)	(6.8)	—	138.7	5	群東	雲、角	良好	橙	No.8 カマド 自然軸 角閃石安山岩	
14	土師器	甕	(21.8)	(13.0)	—	331.2	5	茨西	角	普通	褐灰		
15	須恵器	甕	(12.0)	(1.6)	—	6.1	5	孫投		良好	灰		
16	石製品	有溝砥石	長さ13.5幅8.1厚さ6.4	重さ224.8	—	—	—	—	—	—	—		
17		貝塚穴頭型貯	長さ3.6幅2.5厚さ1.1	重さ6.1	—	—	—	—	—	—	—		
18		貝塚穴頭型貯	長さ2.4幅2.6厚さ2.1	重さ4.9	—	—	—	—	—	—	—		



第145图 第52号住居跡出土遺物

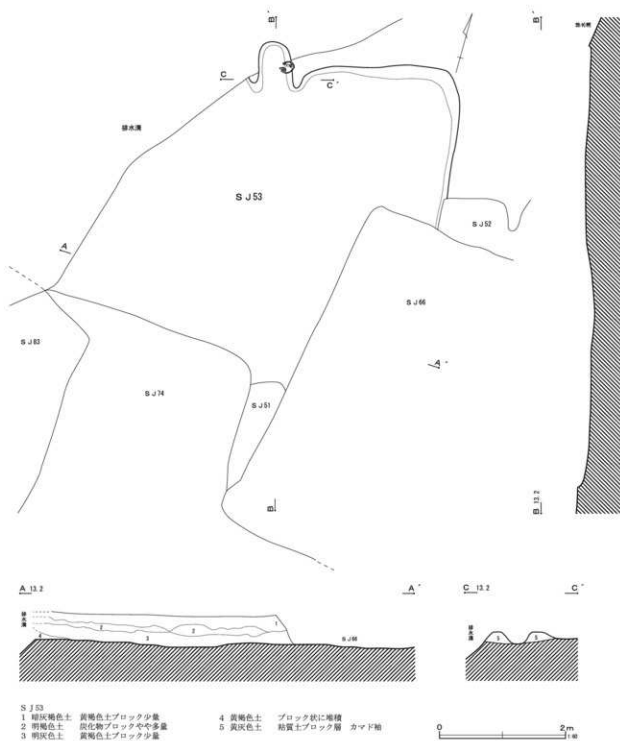
第53号住居跡 (第146・147図)

調査区西側、J・K-5・6グリッドに位置する。

第51・52・66・74・83号住居跡と重複し、新田関係は  
 何れの住居跡よりも古い。他の住居跡に東側及び

南側を、排水溝に西側を壊されているため平面形は  
 不明である。

検出された規模は、東西6.10m、南北5.05m、確  
 認面からの深さは0.45mである。主軸方位はN-



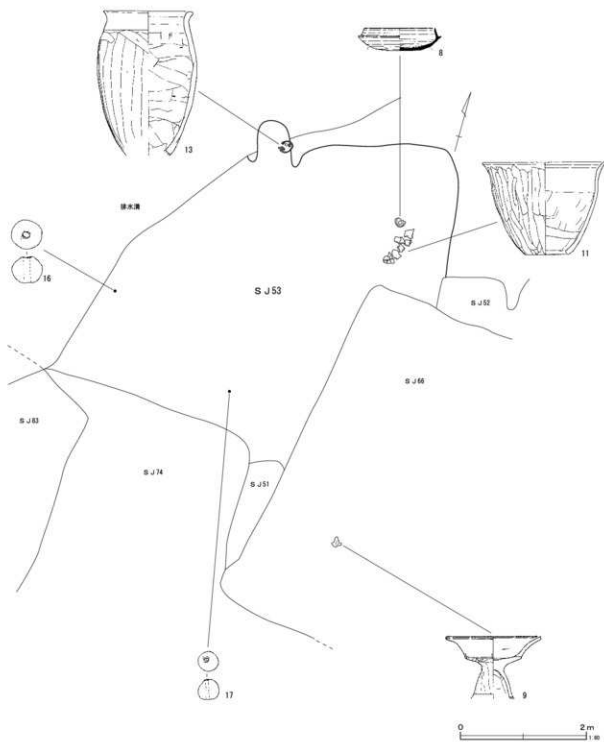
第146図 第53号住居跡

16° -Wである。

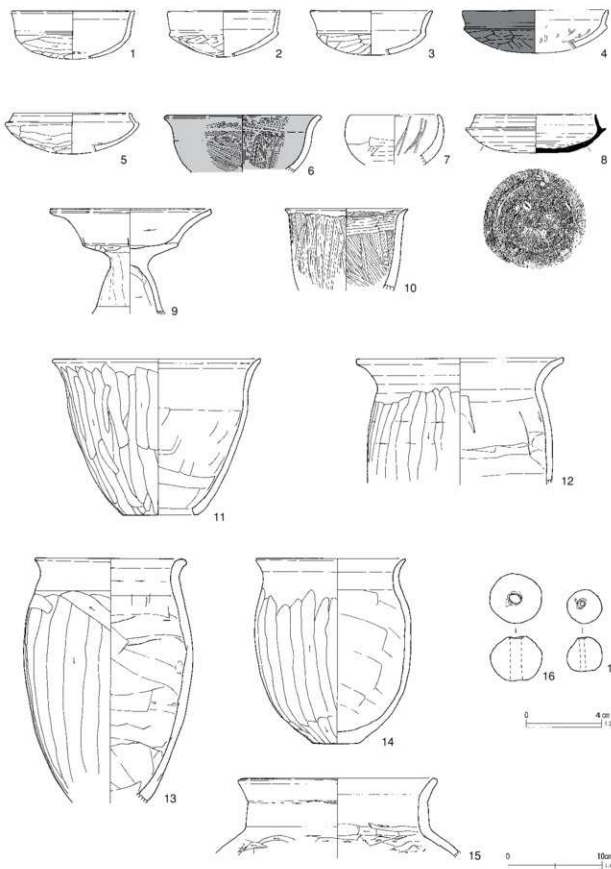
カマドは北壁に作られ、カマド方位はN-15° -Wである。袖部は両側が確認できたが、左袖は一部排水溝に壊される。右袖の残存規模は壁から40cmで

ある。燃焼部は床面とほぼ同じ高さである。煙道部右脇から底部を欠いた土師器甕が出土した。

遺物は土師器環・鉢・壺・高環・甕・小型甕・甕、須恵器環等が認められた。第148図4の土師器環は



第147図 第53号住居跡遺物出土状況



第148回 第53号住居跡出土遺物

外面に黒色処理が、6の鉢には内外面に赤彩がされていた。土玉が2点出土した。

時期は6世紀第I四半期である。

第50表 第53号住居跡出土遺物観察表 (第148図)

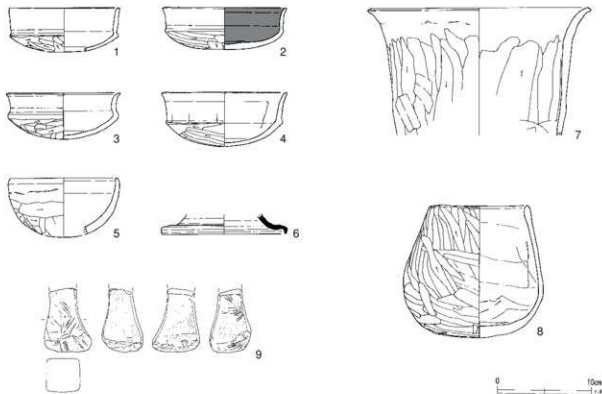
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	坏	(12.9)	(5.0)	—	39.5	40	群東	雲	良好	にぶい橙		
2	土師器	坏	(11.8)	(4.8)	—	44.1	25	埴北	雲	良好	橙		
3	土師器	坏	(13.0)	(4.6)	—	50.6	25	埴南	雲	良好	にぶい橙		
4	土師器	坏	(15.2)	(4.1)	—	46.8	20	群東	角、軽	普通	にぶい赤褐		
5	土師器	坏	(12.3)	(4.1)	—	51.0	25	埴北	角	良好	橙		
6	土師器	鉢	(16.1)	(6.1)	—	30.3	5	茨西	角、軽	良好	にぶい橙		
7	土師器	甕	(9.3)	(5.4)	—	29.3	10	茨西	雲、角	普通	にぶい橙		
8	須恵器	坏身	12.7	4.0	—	217.6	80	菅ノ沢		良好	灰	No.4	62-9
9	土師器	高坏	17.0	(11.2)	—	315.1	50	群東	角	普通	橙	No.8 内外面に煤付着	
10	土師器	鉢	(13.0)	(8.7)	—	100.7	20	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙		
11	土師器	甕	21.9	16.5	7.9	1020.7	90	埴北	雲、角	良好	灰黄	No.5	75-3
12	土師器	甕	(22.0)	(13.4)	—	186.8	5	埴南	雲、角	普通	にぶい黄橙	外面黒斑	
13	土師器	甕	15.9	(26.0)	—	1560.1	80	粉東	角、軽	普通	にぶい橙	No.1 被熱	86-4
14	土師器	甕	15.8	19.5	5.0	1183.9	90	埴北	角、軽	普通	にぶい黄橙		87-1
15	土師器	甕	(20.8)	(8.5)	—	182.5	5	粉南	角	良好	にぶい橙		
16	土製品	土玉	径2.7孔径0.7厚さ2.3重さ15.8				100		雲、角	普通	灰褐	No.6	90-2
17	土製品	土玉	径1.8孔径0.4厚さ1.8重さ6.1				100		雲	普通	にぶい橙	No.7	90-215

第54号住居跡 (第150図)

住居跡よりも古い。第55号住居跡には北東側の遺構上面を壊されている。

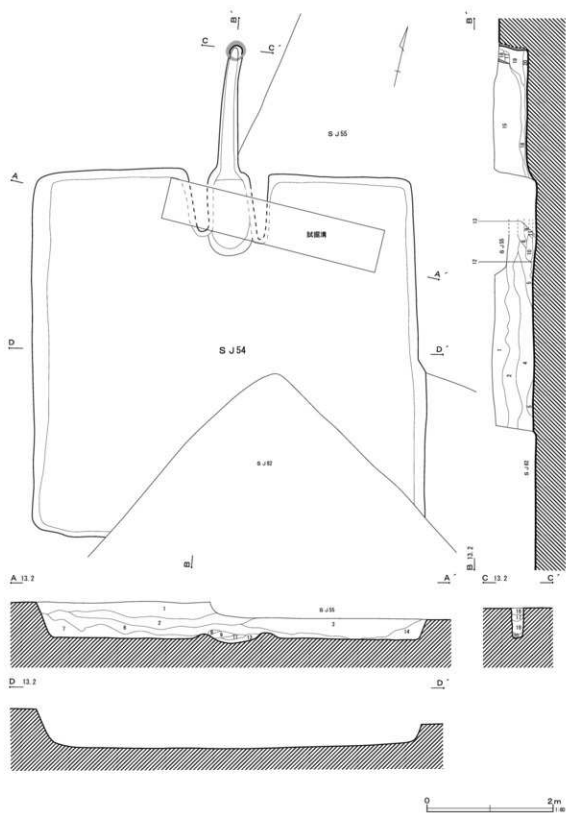
調査区西側、J・K-7グリッドに位置する。第55・58・82号住居跡と重複し、新住居跡は、何れの

平面形は方形で、規模は東西6.23m、南北6.00m、



第149図 第54号住居跡出土遺物





第150图 第54号住居跡

S 154

1 暗灰色土	砂質 炭化物ブロック少量	7 灰色土	砂質 炭化マンガン多量	17 黄褐色土	砂質
2 灰色土	炭化マンガン多量	8 赤色土	腐土集積層	18 赤色土	灰赤腐落土 煙道部
3 青灰色土	砂質 炭化物少量	9 灰色土	砂質 炭化物ブロック少量	19 暗褐色土	赤色土ブロックや中多量
4 灰褐色土	砂質 炭化物ブロック少量	10 赤色土	腐土集積層	20 黒色土	炭化物・炭集積層
5 黒色土	炭化物集積層	11 赤色土	腐土集積層		
6 暗灰色土	砂質 炭化物少量 炭化マンガン多量	12 黒色土	炭化物集積層		
		13 暗灰色土	炭集積層 炭化物多量		
		14 暗灰色土	砂質 炭化物ブロック少量		
		15 灰白色土	砂質 (岡山崩落土)		
		16 暗赤褐色土			

確認面からの深さは0.62mである。主軸方位はN-13°-Wである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-10°-Wである。袖部はトレンチによって大部分を壊されていたが、断面観察で先端を両側で確認できた。壁からの残存規模は左右共に袖が110cmである。残存高は両側ともに10cm程度で、地山が削り出されていた。燃焼部は床面より5cmほど掘り窪められる。煙道部は燃焼部とは10-15cmほどの明確な段差を持

ち、ほぼ水平に壁外へ205cm延びる。煙道部天井は崩落していたが、煙出し穴は残存状況が良く、確認面で直径30cmの円環状被熱部を捉えることができた。遺物は土師器環・壺・瓶・無頸壺、須恵器高環が認められた。第149図2の土師器環は内面に黒色処理がされ、4の環には煤が付着していた。上部が欠けているが、凝灰岩製の砥石が1点出土した。

時期は5世紀第Ⅳ四半期である。

第51表 第54号住居跡出土遺物観察表 (第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(11.6)	(4.6)	—	58.4	30	群東	雲	良好	にぶい黄緑		
2	土師器	環	(13.0)	4.4	—	69.4	30	埼玉	角	良好	橙		
3	土師器	環	(12.0)	5.4	—	71.8	30	埼玉	雲	普通	橙		
4	土師器	環	(13.0)	5.7	—	140.4	50	埼玉	雲	良好	橙	煤付着	
5	土師器	壺	(11.3)	(6.0)	—	51.4	20	埼玉	角	良好	褐灰		
6	須恵器	高環	—	(2.1)	(13.1)	16.5	5	三義	—	良好	灰白		
7	土師器	瓶	(22.1)	(13.5)	—	254.8	5	群東	角	普通	にぶい橙		
8	土師器	無頸壺	10.3	14.0	—	679.6	80	佐野	角	普通	にぶい橙		75-4
9	石製品	砥石	長さ6.8幅5.1厚さ3.6重さ169.0				50					凝灰岩	96-12

#### 第55号住居跡 (第151・152図)

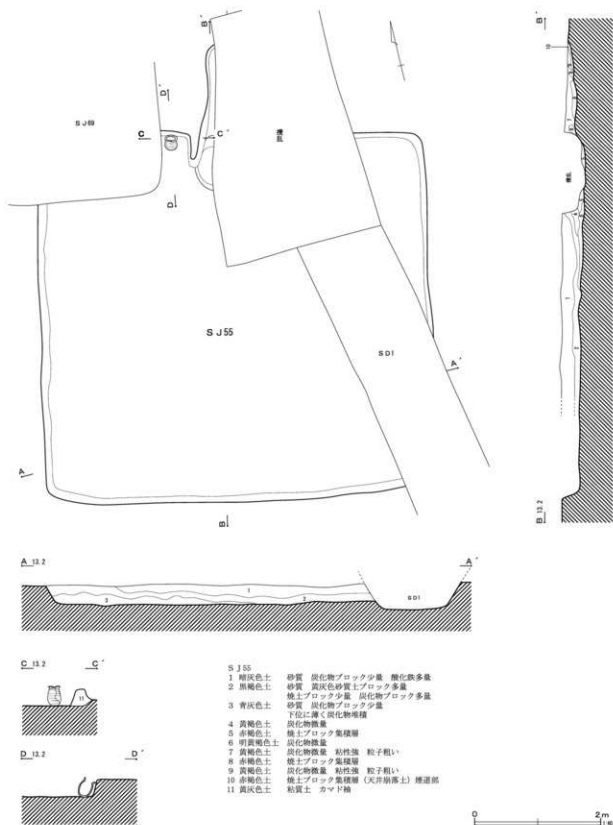
調査区西側、J・K-7・8グリッドに位置する。第54・69号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は第1号溝跡よりも古く、両住居跡よりも新しい。南北に走る第1号溝跡に住居跡東側を壊されるほか、カマド東側半分および北壁の一部が攪乱を受ける。平面形状は方形で、規模は東西6.21m、南北5.92m、確認面からの深さ0.3mである。主軸方位はN-13°-Eである。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-17°-Eである。袖部は左袖のみ確認され、壁

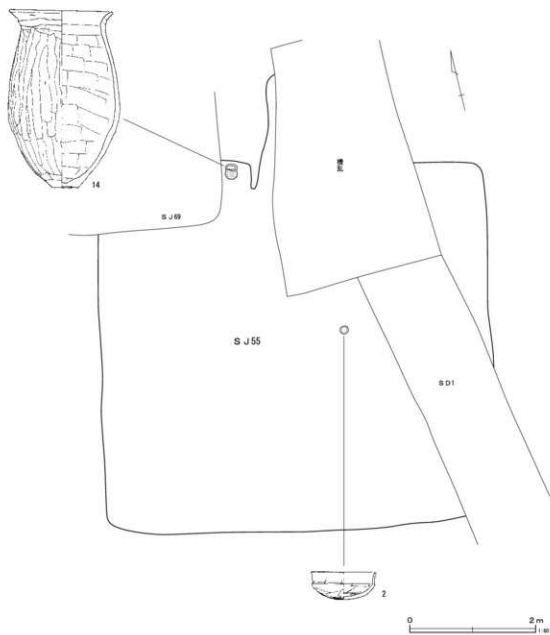
からの残存規模は53cmである。構築土には黄灰色粘質土が用いられ、内側は被熱し赤変していた。燃焼部は壁内に取まり、床面よりわずかに掘り窪められ、明確な段差をもって煙道部へ接続する。煙道部は凸をもち、外側へ傾斜しながら壁外へ145cm延びる。カマド左袖の脇で、土師器甕が北壁に据え置かれた状態で出土している。

遺物は土師器環・高環・甕、須恵器壺が認められた。第153図9の高環は内外面に赤彩されていた。土玉が1点、羽玉の基部の破片が1点出土した。

時期は5世紀第Ⅳ四半期である。



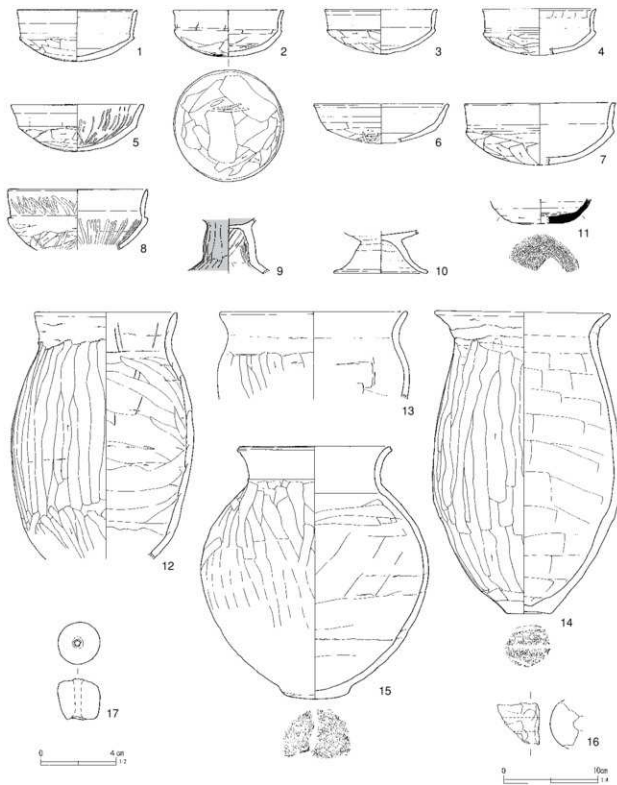
第151図 第55号住居跡



第152図 第55号住居跡遺物出土状況

第52表 第55号住居跡出土遺物観察表(1) (第153図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.5	5.4	—	163.1	75	群東	雲	普通	にぶい・橙	黒炭	62-10
2	土師器	坏	11.6	5.0	—	194.1	100	埴北	雲、角	良好	橙	N:2	63-1
3	土師器	坏	11.7	4.7	—	147.2	95	埴北	雲	良好	橙		63-2
4	土師器	坏	(11.9)	(4.8)	—	51.7	30	埴北	雲、角	良好	橙		
5	土師器	坏	(13.9)	5.0	—	59.4	20	群東	雲、角	普通	にぶい・橙		
6	土師器	坏	(14.2)	(4.0)	—	31.0	10	埴北	雲、角	良好	にぶい・橙		
7	土師器	坏	(15.8)	6.5	—	173.4	40	埴北	雲	普通	橙		
8	土師器	甗	(14.7)	(16.4)	—	67.1	20	佐野	角	普通	にぶい・橙	SJ54	
9	土師器	高坏	—	(5.9)	—	149.4	20	杉南	角	良好	にぶい・橙		



第153图 第55号住居跡出土遺物

第53表 第55号住居跡出土遺物観察表(2)(第153図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
10	土師器	高坏	—	(4.6)	(10.0)	80.5	25	群東	雲、角	普通	橙		
11	須恵器	小型壺	—	(2.6)	—	38.6	10	不明		良好	灰		
12	土師器	甕	15.0	(26.1)	—	1451.3	75	群東	雲、角	普通	にぶい黄緑	SJ30 外面黒斑	87-2
13	土師器	甕	(19.6)	(9.3)	—	187.4	10	埴北	角	良好	にぶい橙		
14	土師器	甕	18.3	32.1	4.6	2462.0	95	枋南	角	普通	にぶい黄緑	No.1 木葉痕	87-3
15	土師器	甕	16.0	26.7	7.0	1026.2	50	群東	角	普通	にぶい黄緑		87-4
16	土製品	羽口	長さ4.4幅4.2重さ39.7				5		雲、角	普通	にぶい橙		
17	土製品	土玉	径2.3孔径0.4厚さ2.1重さ12.3				100		角	普通	にぶい黄緑		86-10

## 第56号住居跡(第155・156図)

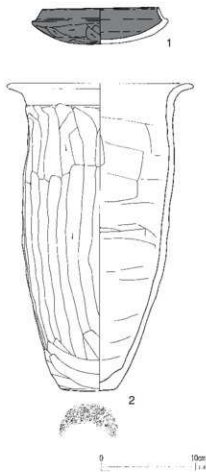
調査区中央南寄り、K・L-8・9グリッドに位置する。第38・50号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも古い。第38号住居跡に住居跡北東部上面の削平を受けるほか、第50号住居跡に中央部の床面を壊されている。

平面形状は方形で、規模は東西、南北ともに6.30m、確認面からの深さは0.31mである。主軸方位はN-6°-Wである。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-5°-Wである。袖部は両側が確認されたが、先端部が第50号住居跡に壊されている。両袖の壁からの残存規模は、左袖60cm、右袖56cmである。燃焼部は床面より10cmほど掘り窪められ、煙道部へは僅かな段差を持って接続する。煙道部は外側へ緩やかに傾斜しながら壁外へ144cm延びる。

出土遺物は少量で、土師器環1点・甕が1点図示できたのみである。環は内外面に黒色処理がされていた。

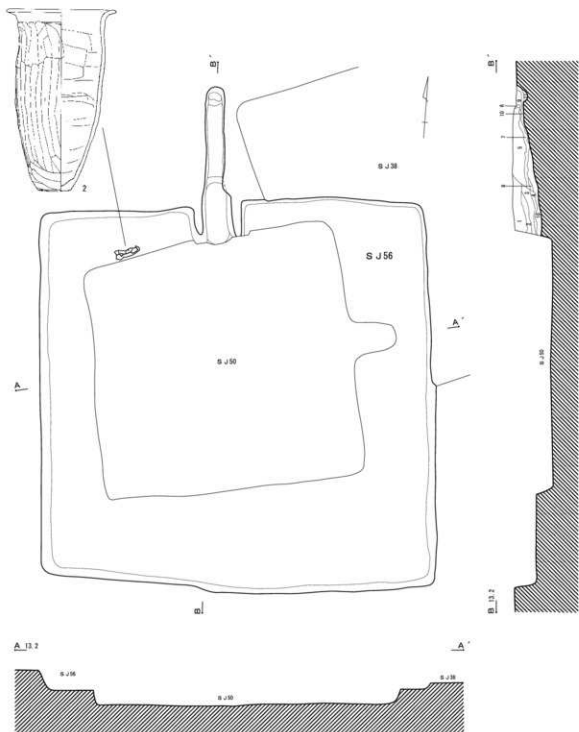
時期は7世紀第I四半期である。



第154図 第56号住居跡出土遺物

第54表 第56号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.2)	3.8	—	111.1	50	埴北	—	良好	褐灰		
2	土師器	甕	18.5	32.6	6.0	1452.2	70	枋南	角	良好	灰黄緑	No.1	88-1



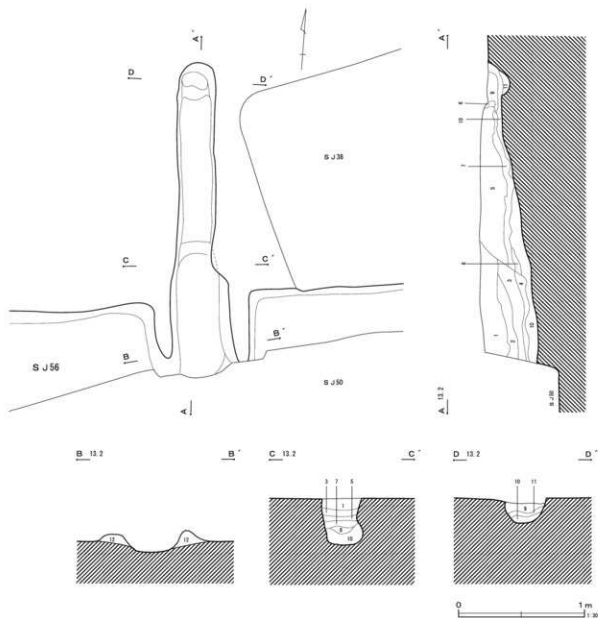
S J 56

- 1 明灰褐色土 炭化物粒子少量 粘性弱く強 粒子粗い  
 2 明灰褐色土 炭化物粒子少量 粘性強  
 3 灰褐色土 砂質  
 4 赤色土 焼土集積層 (天井崩落土) 埋込部  
 5 灰褐色土 シット質  
 6 赤色土 焼土集積層 (崩落土) 埋出し部  
 7 赤褐色土 焼土集積層 (天井崩落土) 埋込部

- 8 暗灰色土 焼土・灰多量  
 9 暗褐色土 焼土・炭化物ブロック多量  
 10 黒色土 炭化物・炭集積層 粘性強  
 11 赤褐色土 焼土集積層 灰多量  
 12 褐色土 砂質 黄褐色粘土ブロック多量

0 2m

第155図 第56号住居跡



第156図 第56号住居跡カマド

### 第57号住居跡 (第157図)

調査区中央やや南寄り、K・L-8グリッドに位置する。確認面から床面までの深さが非常に浅く、検出されたのは、やや深く掘り込まれていたカマドおよび住居跡北東コーナーのみである。第76・81号住居跡、第8号土坑、第1号溝跡と重複するが、新旧関係は、第1号溝跡よりも古く、第76・81号住居跡よりも新しい。第8号土坑との関係は不明である。

平面形は不明で、確認された規模は北東-南西4.25m、北西-南東3.70m、確認面からの深さは、最も深い場所で0.15mである。主軸方位はN-63°-Eである。

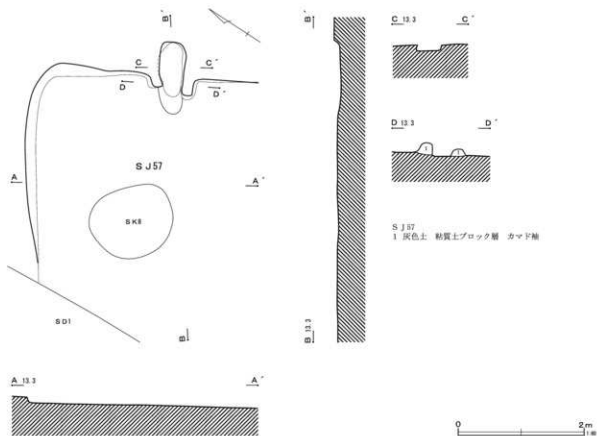
カマドは東壁に設けられ、カマド方位はN-60°-Eである。袖部は両側ともに僅かに確認され、壁からの残存規模は左袖22cm、右袖36cmである。燃焼部は床面より僅かに掘り窪められる。

出土遺物はごく僅かで、土師器壺の口縁部と滑石

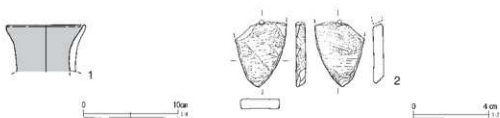


製の剣形石製模造品が図示できたのみである。しかしこれらは周囲の住居跡との重複の状況から、本住居跡には伴わないものと考えられる。

■封閉は遺物による決め手に欠けるが、他の住居跡との重複関係から、7世紀第IV後半期以降と考えられる。



第157図 第57号住居跡



第158図 第57号住居跡出土遺物

第55表 第57号住居跡出土遺物観察表 (第158図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	鉄在(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	壺	(8.2)	(4.9)	—	27.5	5	埴南	角	良好	橙			
2	石製物品	剣形品	長さ3.4幅2.6厚さ0.5重さ8.0					50					滑石	9423

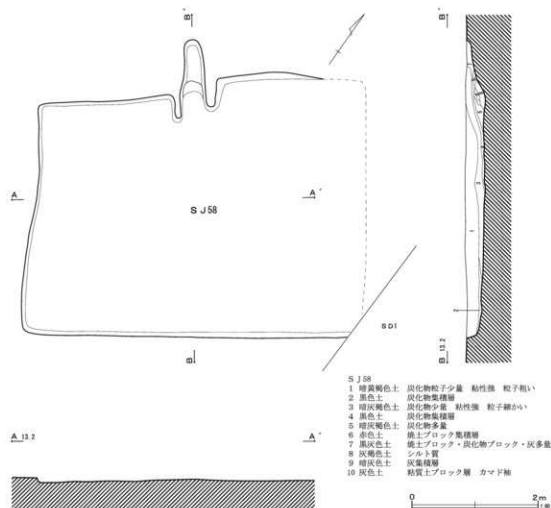
第58号住居跡 (第159・160図)

調査区西側、K-7・8、L-7グリッドに位置する。第54・64・82号住居跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係は第1号溝跡よりも古く、重複するほかの住居跡よりも新しい。第1号溝跡には南東コーナーを壊されている。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西5.45m、南北4.22m、確認面からの深さ0.3mである。主軸

方位はN-35°-Wである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-37°-Wである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖40cm、右袖48cmである。燃焼部は床面よりわずかに低いが、明確な掘り込みは見られない。煙道部へはスロープ状の傾斜をもって移行する。煙道部は外側へ向かって緩やかに傾斜し、壁外へ78cm延びる。



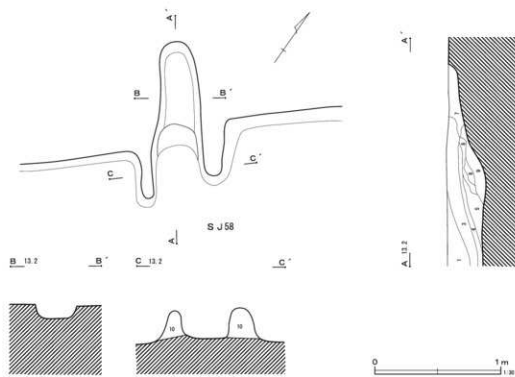
第159図 第58号住居跡

第56表 第58号住居跡出土遺物観察表 (第161図)

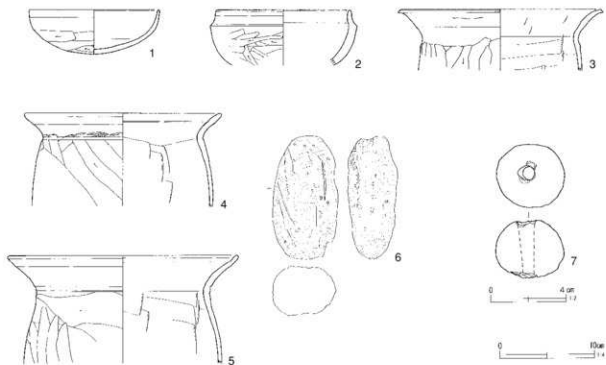
番号	種別	器種	口径	器高	口径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取	
1	土師器	坏	(13.5)	4.7	—	102.3	50	埴北	雲、角	普通	橙		63-3	
2	土師器	甗	(14.0)	(5.9)	—	47.7	10	群東	角	良好	灰褐			
3	土師器	甗	(21.3)	(6.5)	—	127.0	5	群東	雲	良好	にぶい橙			
4	土師器	甗	(20.8)	(9.9)	—	178.1	5	埴北	角	普通	にぶい橙			
5	土師器	甗	(24.2)	(11.5)	—	181.7	5	埴南	雲、片、角	普通	にぶい橙			
6	石製品	有溝磨石	長さ12.9幅6.9厚さ5.3重さ264.1					—					角閃石安山岩	
7	土製品	土玉	径3.6口径0.9厚さ3.0重さ34.6					100		角	良好	黒褐	掘り方	80-21

遺物は土師器杯・壺・甕が認められた。角閃石安  
山岩製の有溝砥石1点、土玉1点が出土した。

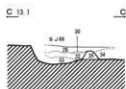
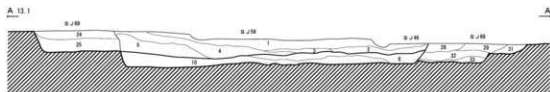
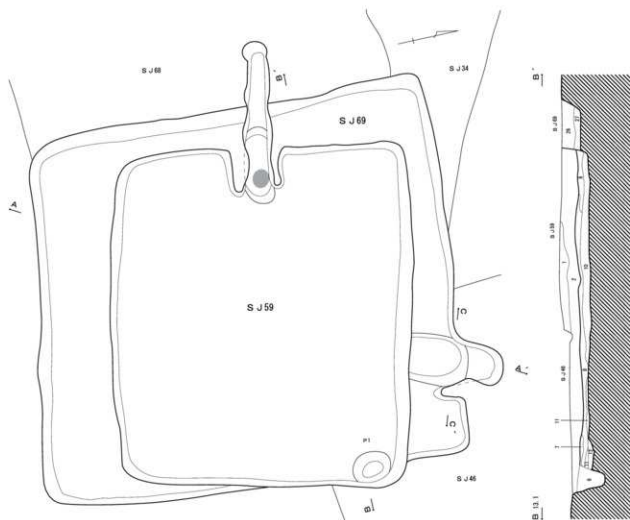
時期は8世紀前半である。



第160図 第58号住居跡カマド



第161図 第58号住居跡出土遺物



- S J 59
- 1 褐色土 砂質 黄褐色砂質土ブロック少量  
炭化物ブロック少量  
下位に薄く炭化物堆積
  - 2 褐色土 砂質 炭化物ブロック少量
  - 3 赤色土 炭化物堆積層 焼土ブロック少量
  - 4 暗褐色土 砂質 炭化物少量
  - 5 灰褐色土 砂質 炭化物少量
  - 6 灰褐色土 砂質 黄褐色砂質土ブロック多量  
炭化物ブロック少量
  - 7 褐色土 砂質 黄褐色砂質土ブロック多量
  - 8 褐色土 砂質 黄褐色砂質土ブロック多量
  - 9 赤色土 炭化物堆積層
  - 10 暗灰色土 砂質
  - 11 暗灰色土 砂質
  - 12 黄褐色土 砂質

- 13 暗灰色土 砂質 焼土少量
- 14 赤色土 焼土堆積層 (天井跡層土) 煙道部
- 15 赤色土 砂質 (天井跡層土)
- 16 赤色土 焼土堆積層 (天井跡層土) 煙道部
- 17 赤色土 焼土ブロック堆積層  
(天井跡層土) 煙道部
- 18 黒色土 炭化物堆積層
- 19 暗灰黄色土 砂質
- 20 灰黄色土 砂質 焼土ブロック少量
- 21 暗灰色土 砂質
- 22 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物・灰多量
- 23 黄褐色土 砂質 黄褐色粘質土ブロック多量  
方マド地

- S J 69
- 24 暗褐色土 砂質
  - 25 灰褐色土 砂質 炭化物少量
  - 26 褐色土 砂質 炭化物ブロック少量
  - 27 褐色土 砂質 下位に炭化物ブロック堆積
  - 28 褐色土 砂質 炭化物ブロック少量
  - 29 黄褐色土 砂質 ブロック状に集積
  - 30 赤褐色土 粘り強 (天井跡層土) 粘り強い
  - 31 緑灰色土 砂質 焼土ブロック多量
  - 32 黄褐色土 炭化物少量 粘り強い
  - 33 暗褐色土 焼土ブロック
  - 34 灰白色土 砂質 粘り強い
  - 35 灰白色土 粘質土ブロック層 カマド地

0 2 m

第162図 第59・69号住居跡

第59号住居跡 (第162～164図)

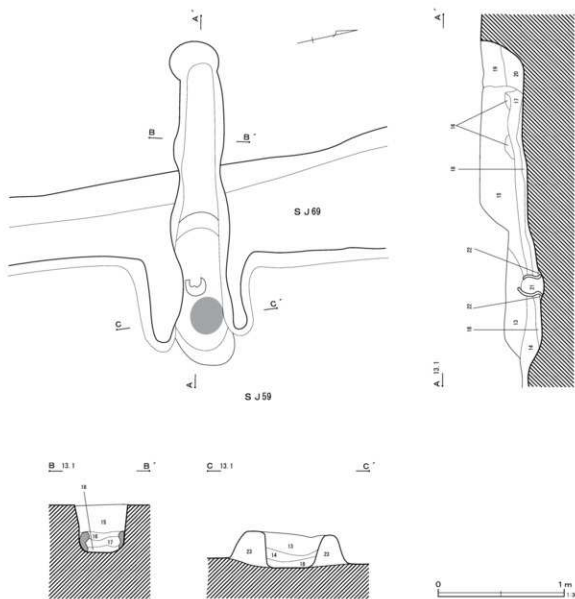
調査区西側、J-7グリッドに位置する。第46・69号住居跡と重複し、新旧関係は、第46号住居跡よりも古く、第69号住居跡よりも新しい。遺構上面は第46号住居跡の削平を受ける。

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西5.40m、南北4.80m、確認面からの深さ0.55mである。主軸方位はN-79°-Wである。床面はカマドのある西側半分で貼り床が認められた。

カマドは西壁中央に設けられ、カマド方位はN-

73°-Wである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖が75cm、右袖が65cmである。構築土には、黄褐色粘質土を多量に含んだ褐色砂質土が用いられ、内側は非常によく被熱し赤変していた。燃焼部はほぼ室内に収まり、床面より15cmほど掘り窪められ、明確な竈地状となる。燃焼部底面は煙道部へ向かって緩やかに傾斜し、僅かな段差を介して煙道部へ接続していた。燃焼部の規模は奥行き110cm、幅42cmである。

燃焼部中央には土師器小型甕が倒立した状態で出



第163図 第59号住居跡カマド

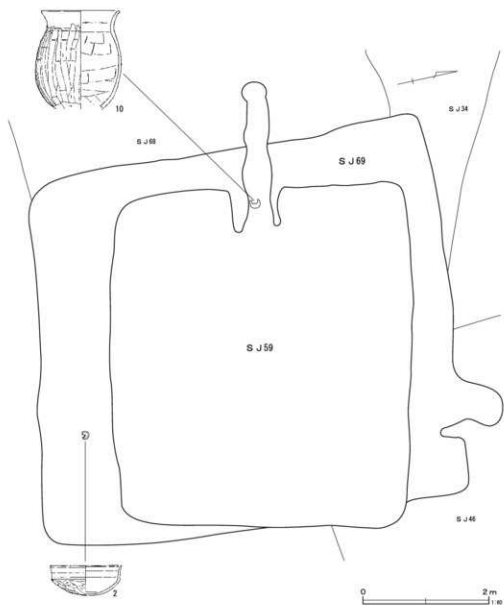
土した。小型甕は、火床面をさらに浅くピット状に掘り窪めたところへ設置し、焼土・炭化物・灰を多く含む黒褐色土で頸部までを埋めていた。出土状況から支脚に転用したものと判断される。支脚手前側の燃焼部底面は非常によく被熱し赤変していた。煙道部は外側へ向かって緩やかに傾斜している。煙道部の規模は130cmである。

カマド以外の施設では、北東コーナーにピットが1基確認されている。P1は、楕円形で43×31cm、

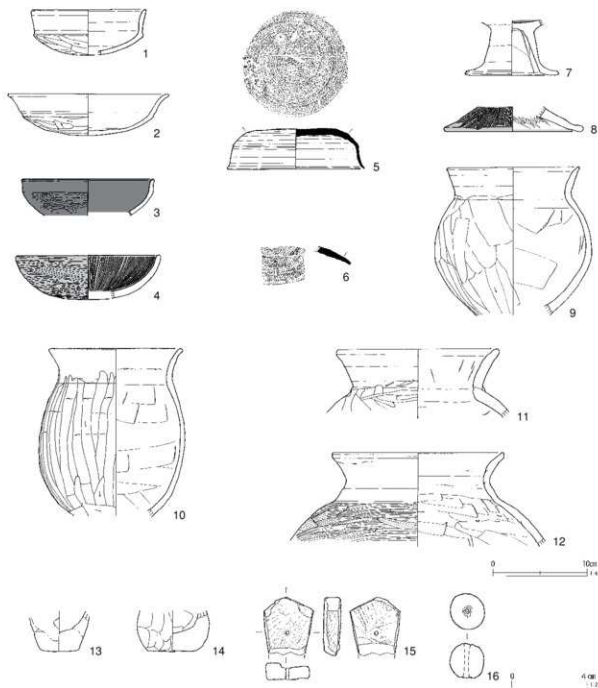
床面からの深さ30cmである。

遺物は土師器環・高環・小型甕・甕、須恵器蓋等が認められた。第165図3の土師器環は内面に黒色処理が、4の環や7・8の高環には赤彩が施されていた。5の須恵器蓋の上面には「一」の、6には「×」のヘラ記号が見られた。ミニチュア土器2点、粘板岩製の剣形石製模造品1点、土玉1点が出土した。

時期は6世紀第I四半期である。



第164図 第59・69号住居跡遺物出土状況



第165図 第59号住居跡出土遺物

第57表 第59号住居跡出土遺物観察表 (1) (第165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.2)	4.8	—	109.8	60	群東	雲、針	普通	橙		63-4
2	土師器	環	(16.6)	4.3	—	114.2	50	埼玉	角	普通	橙		
3	土師器	環	(13.8)	(3.9)	—	28.5	10	茨西	角、軽	良好	灰黄褐		
4	土師器	環	(15.0)	(4.6)	—	104.8	30	栃南	角	良好	浅黄橙		
5	須恵器	蓋	14.6	4.2	—	168.8	75	金山		良好	灰	ヘラ記号「-」 ヘラ記号「×」	63-5
6	須恵器	蓋	—	—	—	18.5	5	不明		良好	灰		
7	土師器	高環	—	(5.8)	9.9	170.4	40	群東	雲、角	普通	橙		
8	土師器	高環	—	(2.7)	14.3	145.3	20	栃南	雲、角	良好	浅黄橙		

第58表 第59号住居跡出土遺物観察表(2)(第165図)

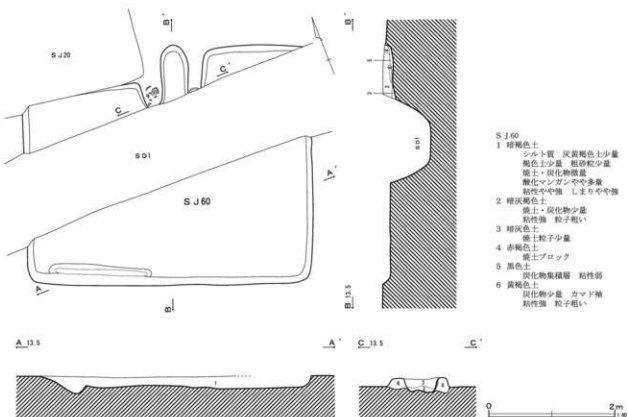
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
9	土師器	甕	13.8	(15.7)	—	610.4	75	埼玉北	角	普通	にぶい橙	カマドNo.1	88-2
10	土師器	甕	13.9	(17.8)	—	349.8	80	茨西	角	普通	にぶい橙		88-3
11	土師器	甕	(16.8)	(7.4)	—	201.1	5	茨西	角	良好	灰黄	常陸産	
12	土師器	甕	(17.8)	(10.0)	—	277.2	5	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙		
13	土製品	ミニチュア	—	(2.2)	(2.0)	5.4	10	栃南	角	普通	にぶい黄橙		
14	土製品	ミニチュア	—	(2.1)	2.6	27.1	50	栃南	角	普通	にぶい橙	粘板岩	94-2 95-16
15	石製品	銅形品	長さ3.1幅2.6厚さ0.9重さ10.0					50	雲、角	良好	にぶい黄橙		
16	土製品	土玉	径1.9孔径0.4厚さ1.8重さ5.8					100					

第60号住居跡(第166・167図)

調査区北側、I・J-9グリッドに位置する。第13・20・22・35・43号住居跡、第5号土坑、第1号溝跡と重複する。新旧関係は、第20号住居跡、第1号溝跡よりも古く、重複する他の住居跡、土坑よりも新しい。第1号溝跡に住居跡北側の床面を壊されている。

平面形は東西にやや長い長方形で、規模は東西4.53m、南北3.83m、確認面からの深さは0.17mである。主軸方位はN-23° Eである。

カマドは北壁ほぼ中央に位置し、カマド方位はN-20° Eである。煙道部は削平されており、検出は袖部と燃焼部のみにとどまった。袖部は両側が確認されたが、ともに第1号溝跡に先端部を壊されている。遺存状況が悪いながらも、両袖の先端部に倒立した土師器甕を確認した。袖の補強材としたものであろう。袖構築土は、粒子が粗く粘性の強い黄褐色土である。燃焼部は床面よりやや低い位置にあり、壁がわずかに焼けていた。カマド以外の施設としては、住居跡南壁の一部に壁溝が検出されている。



第166図 第60号住居跡

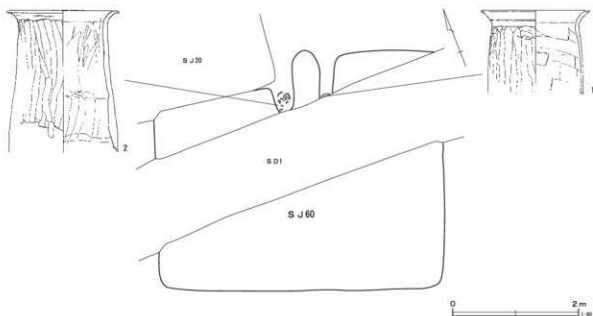


床面からの深さは13cmである。

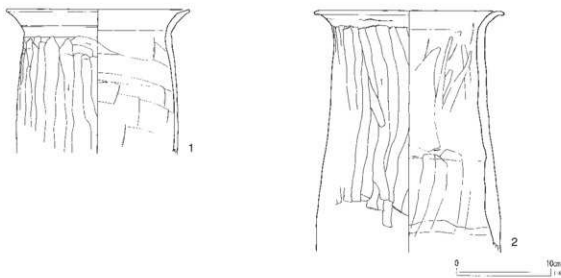
図示できるものはなかった。

遺物は少量で、カマド袖補強材の土師器甕以外に

時期は7世紀第Ⅱ四半期である。



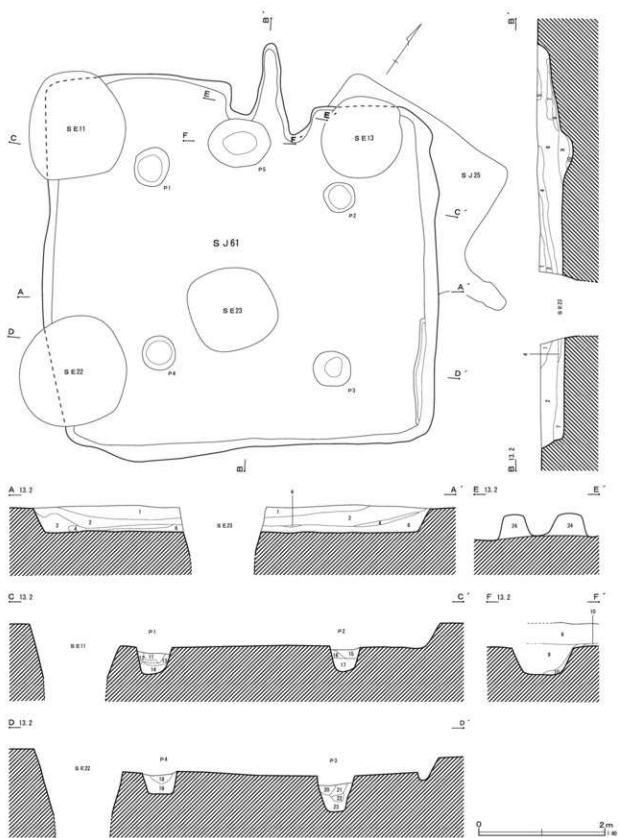
第167図 第60号住居跡遺物出土状況



第168図 第60号住居跡出土遺物

第59表 第60号住居跡出土遺物観察表 (第168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(19.4)	(15.3)	—	253.6	10	母土-母土	雲、角	良好	にぶい黄褐色	No.2	
2	土師器	甕	(20.1)	(25.7)	—	634.8	25	灰西	角	普通	にぶい黄褐色	No.1	



第169図 第61号住居跡

S J61:

- 1 暗褐色土 粘土・炭化物少量  
粘性強 砂子多い  
2 黄褐色土 粘性強 砂子少ない  
3 灰黄色土 砂質  
4 黄褐色土 粘性強 砂子少ない  
5 赤色土 天井崩落土 埴道跡  
6 灰色土 シルト質 粘土ブロック少量  
炭化物少量 粘性強 砂子多い  
7 暗灰色土 粘土質 粘土ブロック多量

- 8 赤色土 粘土ブロック集積層(天井崩落土)  
埴道跡  
9 暗灰色土 灰集積層 粘土・炭化物少量  
埴道跡  
10 黒色土 炭化物・灰集積層  
11 黒褐色土 粘土質 炭化物少量  
12 暗黄褐色土 粘土質 炭化物微量  
13 暗黄褐色土 粘土質 粘土粒子微量  
14 暗黄褐色土 粘土質 炭化物微量  
15 黒褐色土 粘土ブロック多量 炭化物多量

- 16 黒褐色土 粘土質ブロック少量  
粘土粒子少量 炭化物少量  
17 黄褐色土 粘土ブロック微量 炭化物少量  
18 灰褐色土 粘土粒子少量 炭化物多量  
19 黄褐色土 炭化物微量  
20 暗黄褐色土 粘土粒子微量 炭化物微量  
21 灰褐色土 粘土粒子微量 炭化物多量  
22 黄褐色土 炭化物少量  
23 黄褐色土 粘土粒子微量 炭化物微量  
24 灰色土 粘土質ブロック層 カマド跡

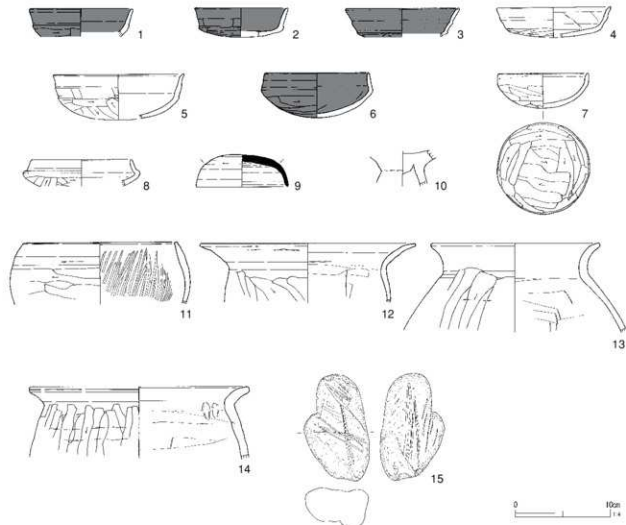
### 第61号住居跡 (第169図)

調査区南側、L・M-8グリッドに位置する。第25号住居跡、第11・13・22・23号井戸跡、第3号溝跡と重複し、新旧関係は何れの遺構よりも古い。

平面形は東西にやや長い長方形で、北壁のラインはややいびつである。規模は東西6.30m、南北6.18m、確認面からの深さは0.42mである。主軸方位は

N-35° -Wである。

カマドは北壁やや東寄りに設けられ、カマド方位はN-32° -Wである。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は左袖50cm、右袖62cmである。構築土に灰色粘質土を用いている。燃焼部は床面とほぼ同じ高さで、掘り込みを持たない。煙道部とも段差を持たないためはっきり区別できないが、燃焼部



第170図 第61号住居跡出土遺物

から外側に向かって緩く傾斜し、壁外へ85cm延びる。

カマド以外の施設としては、壁溝、ピットが確認されている。P1～4は柱穴である。平面形および規模は、P1は円形で64×58cm、床面からの深さ42cm、P2は円形で50×47cm、床面からの深さ40cm、P3は円形で59×56cm、床面からの深さ63cm、P4は円形で57×54cm、床面からの深さ45cmである。カマド左袖前面に検出されたP5は楕円形で、規模は

96×76cm、床面からの深さ45cmである。

また、壁溝が東壁南側で検出された。長さは170cmほどで、床面からの深さは7cmである。

遺物は土師器環・高坏・鉢・甕、須恵器蓋が認められた。第170図1・2・3・6の土師器環は内外面に黒色処理されていた。角閃石安山岩製の有溝砥石が1点出土した。

時期は7世紀第Ⅳ四半期である。

第60表 第61号住居跡出土遺物観察表（第170図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(10.8)	(3.0)	—	13.0	10	埴北	雲、角	普通	にぶい椀		
2	土師器	環	(9.9)	(3.1)	—	30.5	30	埴北	雲	良好	にぶい椀		
3	土師器	環	(12.0)	(3.0)	—	13.4	10	埴北	角	普通	にぶい椀		
4	土師器	環	(12.1)	(3.2)	—	47.5	40	埴北	角	良好	にぶい椀		
5	土師器	環	(13.8)	(4.8)	—	60.7	30	埴北	雲	良好	にぶい椀		
6	土師器	環	(11.0)	4.8	—	34.7	20	埴北	角、軽	普通	黄灰		
7	土師器	環	9.5	3.7	—	103.8	100	埴北	角、軽	良好	にぶい椀		63-6
8	土師器	環	(10.6)	(3.8)	—	21.4	10	埴北	角	良好	にぶい椀		
9	須恵器	環蓋	(9.6)	3.4	—	80.4	60	秋間	角、軽	良好	灰		63-7
10	土師器	高坏	—	(3.8)	—	93.9	5	茨西	角、軽	普通	椀		
11	土師器	鉢	(16.3)	(6.6)	—	56.7	5	佐野	雲、角	普通	にぶい椀		
12	土師器	甕	(22.6)	(6.3)	—	68.1	5	埴北	角	良好	にぶい椀	P2	
13	土師器	甕	(17.7)	(8.4)	—	91.1	5	埴北	角	良好	にぶい椀		
14	土師器	土釜	(23.1)	(7.7)	—	171.4	5	茨西	角	良好	にぶい椀		
15	石製品	有溝砥石	長さ11.4幅6.6厚さ3.9重さ153.5	—	—	—	—					角閃石安山岩	

#### 第62号住居跡（第172図）

調査区中央やや北寄り、J-8グリッドに位置する。第47号住居跡の下で確認された。

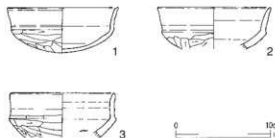
平面形はいびつな方形で、規模は東西4.40m、南北4.43m、確認面からの深さ0.24mである。主軸方位はS-65°-Eである。床面は、住居跡東側で貼り床が明確に確認される。

カマドは東壁南寄りに設けられる。主軸方向はS-65°-Eである。袖部は両側ともに確認できなかった。燃焼部は掘り込みがなく床面とはほぼ同じ高さで、わずかな焼土ブロックの分布が確認されるの

みである。

出土遺物は少量で、土師器環が3点図示できたのみである。

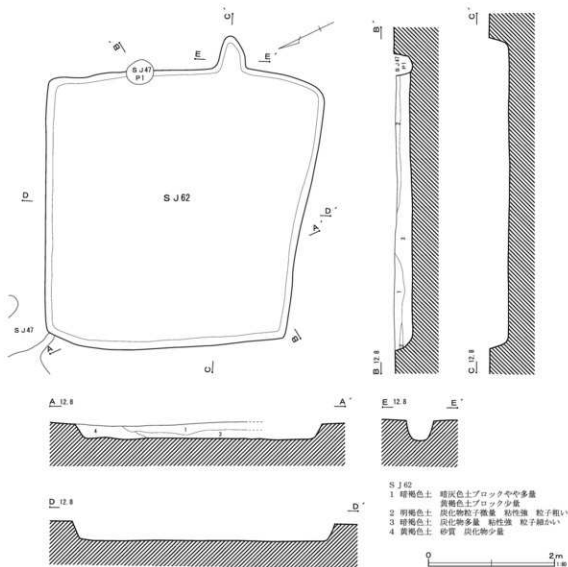
時期は6世紀第Ⅰ四半期である。



第171図 第62号住居跡出土遺物

第61表 第62号住居跡出土遺物観察表（第171図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(11.8)	4.8	—	54.5	30	群東	角	良好	にぶい椀		
2	土師器	環	(12.0)	(4.4)	—	44.8	20	埴北	雲	普通	椀		
3	土師器	環	(10.9)	(4.8)	—	40.3	10	埴北	雲	普通	にぶい椀		



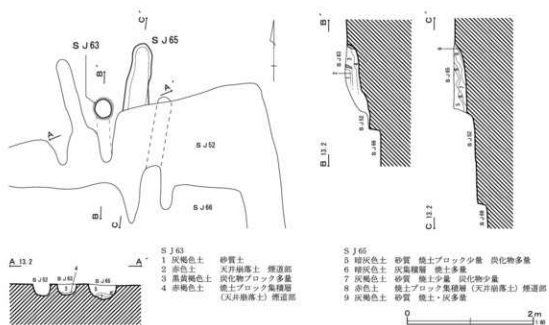
第172図 第62号住居跡

### 第63号住居跡 (第173図)

調査区西側、J-6グリッドに位置する。第52・66号住居跡と重複し、新旧関係は第52号住居跡よりも古く、第66号住居跡との関係は不明である。第52号住居跡に住居跡本体を壊されており、カマド煙道部のみ検出された。検出位置は第52号住居跡右袖部である。

煙道部は天井が崩落しているものの煙出し穴の遺存状況が良く、確認面では直径35cmの円環状被熱部が確認された。カマド方位はN-1°-Wである。遺物は出土しなかった。

時期は第52号住居跡との関係から、7世紀第Ⅲ四半期以前と考えられる。

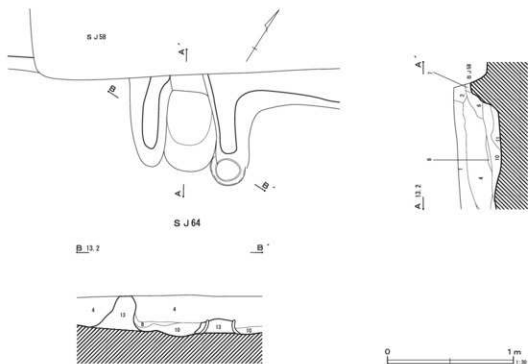


第173図 第63・65号住居跡

第64号住居跡 (第174～176頁)

調査区中央やや南西寄り、K・L-7・8グリッドに位置する。第58・72・91号住居跡、第11・14号土坑、第1号溝跡と重複し、新旧関係は、第58号住

居跡、第1号溝跡よりも古く、第72・91号住居跡、第11・14号土坑よりも新しい。第1号溝跡は、住居跡北東コーナーから南壁中央へ走り、遺構上面と床面の一部を削平している。

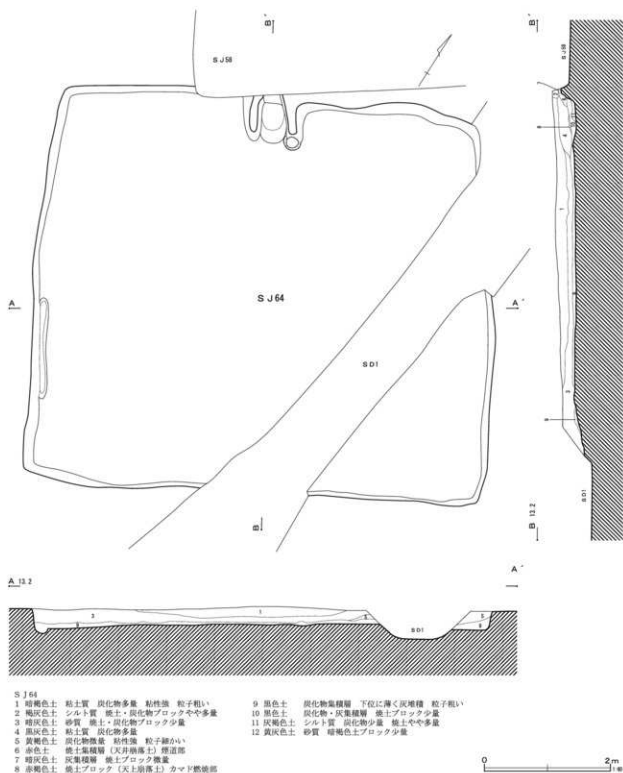


第174図 第64号住居跡カマド

平面形は東西に長い長方形で、規模は東西7.37m、南北6.41m、確認面からの深さ0.33mである。主軸方位はN-30°-Wである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-

32°-Wである。袖部は両側ともに遺存状況が良く、壁からの残存規模は左袖86cm、右袖90cmであり、構築土には黄灰色砂質土が用いられている。右袖先端部には土師器甕を倒立させ、補強材としている。



第175図 第64号住居跡

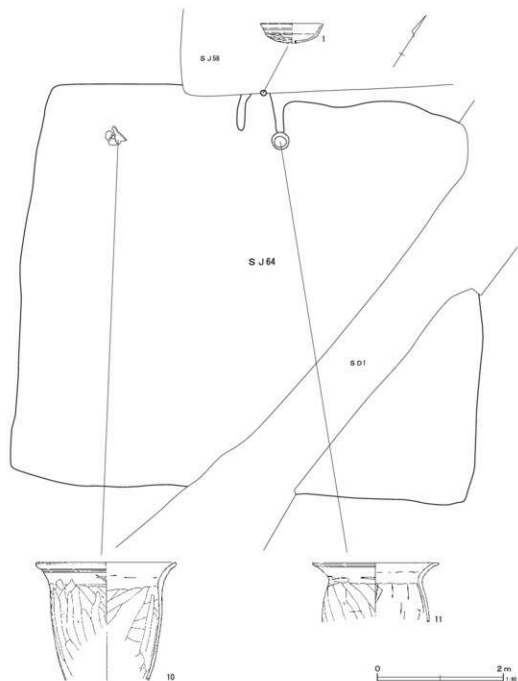
燃焼部は壁内に収まり、床面より10～15cm掘り窪められる。燃焼部の規模は、奥行き79cm、幅53cmである。また、燃焼部は20cm以上の明瞭な段差をもって煙道部と接続する。煙道部はほぼ水平に、壁外へ90cm延びる。

カマド以外の施設としては、壁溝が西壁の一部で

確認されている。床面からの深さは8cmである。

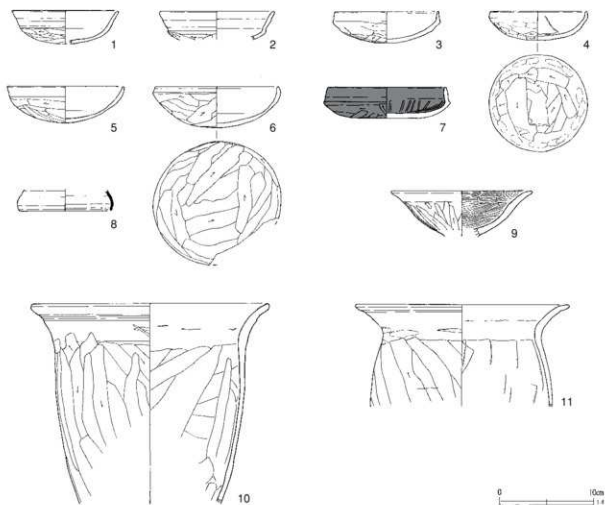
遺物は土師器環・高坏・甌・甕、須恵器蓋が認められた。第177図7の土師器環は内外面に黒色処理がされていた。

時期は7世紀第Ⅳ四半期である。



第176図 第64号住居跡遺物出土状況





第177図 第64号住居跡出土遺物

第62表 第64号住居跡出土遺物観察表 (第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.3	3.6	—	43.0	45	埼玉北	角、軽	良好	橙	No.3	63-8 63-9 63-10
2	土師器	坏	(12.1)	(3.0)	—	27.3	30	埼玉北	角	良好	にぶい黄橙	カマド	
3	土師器	坏	(10.8)	3.3	—	37.2	30	埼玉北	雲、角	良好	にぶい橙		
4	土師器	坏	10.1	3.1	—	82.5	100	埼玉北	雲、角	良好	橙	指頭痕	
5	土師器	坏	12.3	3.9	—	81.1	60	埼玉北	角、軽	普通	にぶい橙		
6	土師器	坏	13.0	4.3	—	119.1	80	埼玉北	角	良好	にぶい橙		
7	土師器	坏	12.3	3.3	—	69.4	50	佐野	角	良好	にぶい黄橙		
8	須恵器	坏蓋	(9.7)	2.3	—	49.0	5	湖西	雲	良好	灰		
9	土師器	高坏	(14.8)	(4.9)	—	80.7	10	茨西	雲	普通	にぶい橙		
10	土師器	甕	(24.8)	(21.3)	—	473.2	40	埼玉北	雲、角、軽	良好	にぶい橙	No.1	
11	土師器	甕	22.6	(10.8)	—	557.9	20	埼玉北	雲、角	普通	にぶい橙	No.4	

第65号住居跡 (第177図)

調査区西側、J-6グリッドに位置する。第52号住居跡と重複し、新旧関係は第52号住居跡よりも古い。同住居跡に住居跡本体は壊されており、カマド煙道部のみ検出された。第63・66号住居跡とも隣接

するが、これらの住居跡との新旧関係は不明である。カマド方位はN-8°-Eである。

遺物は出土しなかった。

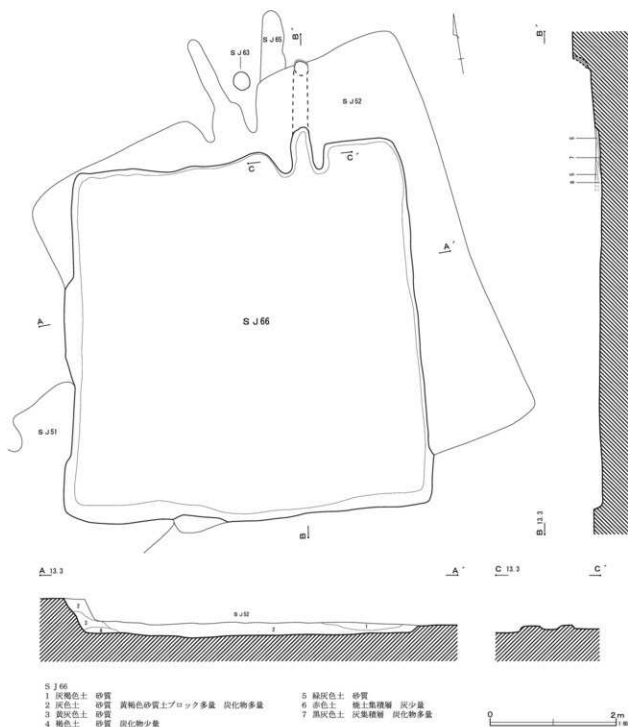
時期は第52号住居跡との関係から、7世紀第Ⅲ四半期以前と考えられる。

### 第66号住居跡 (第178図)

調査区西側、J・K-6・7グリッドに位置する。第51・52・63号住居跡と重複し、新旧関係は第51・52号住居跡よりも古く、第63号住居跡との関係は不明である。特に第52号住居跡とは大きく重なり、遺

構上面の削平を激しく受けている。

平面形は方形で、規模は東西、南北5.85mで、確認面からの深さは0.51mである。主軸方位はN-9°-Eである。床面は緩やかな凹凸があり、部分的に貼り床が見られる。貼り床は住居跡南西部で特



第178図 第66号住居跡

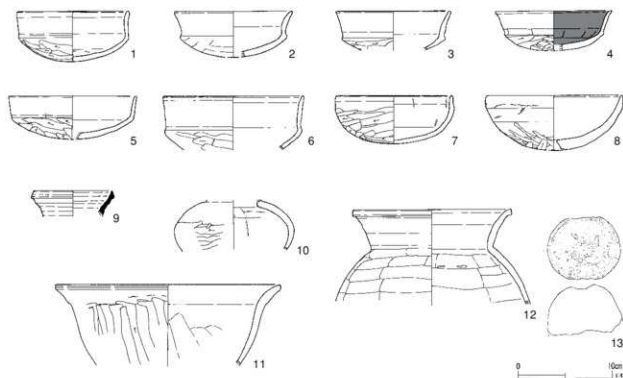
に顕著である。

カマドは北壁東寄りに造られ、カマド方位はN-10°-Eである。燃焼部には炭化物、灰、焼土ブロックが、周壁には炭化物が分布しており、その分布状況から袖を確認することができた。燃焼部は床面をやや掘り窪めており、袖基部は僅かな高まりがみられた。袖の基部は地山を削り出しており、燃焼部側は被熱し赤変している。壁からの残存規模は、左

袖44cm、右袖48cmである。煙道部は第52号住居跡に壊されており、煙出しの先端部がわずかに残存するのみである。煙出しは僅かに被熱し赤変していた。

遺物は土師器・環・壺・鉢・甕、須恵器長頸壺等が確認された。第179図4の土師器環は内面が黒色処理されていた。角閃石安山岩製の有溝砥石1点が出土した。

時期は6世紀第I四半期である。



第179図 第66号住居跡出土遺物

第63表 第66号住居跡出土遺物観察表 (第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	環	11.8	5.3	—	123.1	65	群東	軽	良好	橙	64-1		
2	土師器	環	(12.6)	4.8	—	67.3	30	群東	雲	普通	橙			
3	土師器	環	(12.2)	(4.2)	—	44.7	25	群東	角	普通	橙			
4	土師器	環	(12.2)	4.2	—	50.3	30	群東	雲	普通	にぶい・橙			
5	土師器	環	(13.6)	(4.5)	—	101.0	50	群東	角	普通	橙		SJS2	
6	土師器	環	(11.8)	(5.7)	—	31.2	20	埴南	雲	普通	にぶい・橙			
7	土師器	環	12.2	5.1	—	131.6	75	佐野	軽	良好	にぶい・橙			
8	土師器	壺	(14.4)	5.8	—	109.5	25	瀬田-三西	雲、角	良好	にぶい・橙		外面黒斑	
9	須恵器	長頸壺	(8.3)	(2.7)	—	8.6	5	湖西	雲	良好	灰白		自然釉	焼成後穿孔
10	土師器	壺	—	(5.3)	—	71.6	20	群東	角	良好	にぶい・橙		SJ66	
11	土師器	鉢	(23.8)	(8.7)	—	87.6	5	茨西	角	良好	にぶい・橙		64-2	
12	土師器	甕	16.8	(10.2)	—	130.1	5	群東	針	良好	にぶい・黄橙			SJS2
13	石製品	有溝砥石	長さ7.7幅6.5厚さ4.8重さ118.4				—	—	—	—	—	角閃石安山岩		

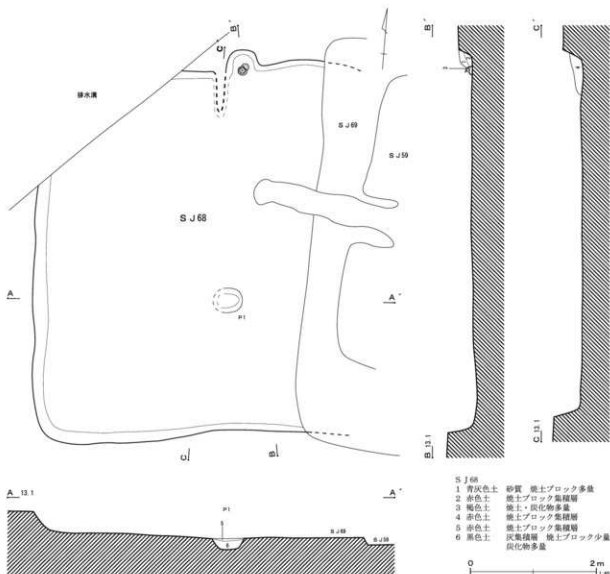
### 第67号住居跡 (第93・94図)

調査区中央東寄り、J・K-8・9グリッドに位置する。第36・37・44・48号住居跡と重複し、新旧関係は、第44・48号住居跡よりも古く、第36・37号住居跡よりも新しい。第48号住居跡に住居跡西側半分の遺構上面を大きく壊されているが、床面は全面が残っている。住居跡中央部分に貼り床が見られ、固くしまっていた。

平面形は方形で、規模は東西6.35m、南北6.43m、確認面からの深さ0.6mである。主軸方位はN-18°-Eである。

カマドは北壁やや西寄りに設けられ、カマド方位はN-15°-Eである。袖部は両側が確認されているが、左袖上部は第48号住居跡の削平を大きく受ける。壁からの残存規模は左袖75cm、右袖68cmで、構築土として褐色砂質土を用いていた。燃焼部は壁内に収まり、床面より5~10cm掘り留められている。燃焼部の規模は、長さ80cm、幅66cmである。煙道部は燃焼部と30cm以上の明瞭な段差を持ち、外側へ緩やかに傾斜しながら壁外へ188cm延びる。袖部、燃焼部、煙道部は非常に良く焼けていた。

遺物は土師器小片が少量出土したのみで、図示で



第180図 第68号住居跡

きるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、他の住居跡との重複関係から、6世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

#### 第68号住居跡 (第180・181図)

調査区西側、J-6・7グリッドに位置する。第59・69号住居跡と重複し、新旧関係は第59・69号住居跡よりも新しい。北西コーナーは調査区域外におよび、住居跡東側半分の床面は第69号住居跡に壊されている。

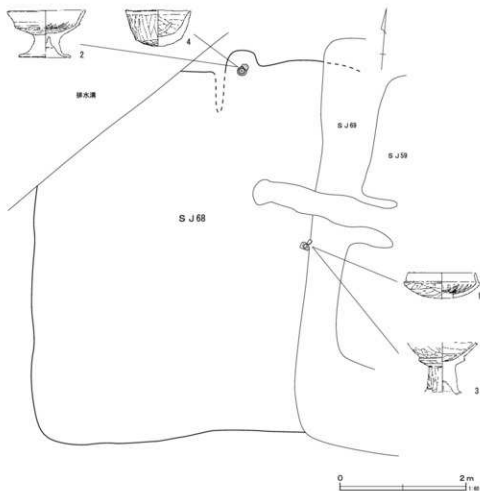
平面形は不明である。検出された規模は東西4.45m、南北5.75m、確認面からの深さ0.32mである。主軸方位はN-4°-Wである。床面は、住居跡西側半分で貼り床が確認された。

カマドは北壁に設けられ、カマド方位はN-4°-Wである。袖部は両側ともに平面的に確認できなかったが、左袖は土層断面で確認できたため推定復元した。右側も同様の袖があったものと考えられる。構築土は黄褐色砂質土である。燃焼部の掘り込みはほとんど確認できず、火床面は床面とほぼ同じ高さにある。燃焼部から土師器高坏と鉢が重なって出土した。

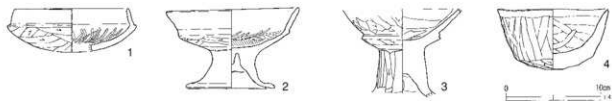
カマド以外の施設では、住居跡中央部でピットが1基確認されている。P1は、楕円形で45×38cm、床面からの深さ17cmを測る。

遺物は土師器環・高坏・鉢が認められた。

時期は6世紀第Ⅱ四半期である。



第181図 第68号住居跡遺物出土状況



第182図 第68号住居跡出土遺物

第64表 第68号住居跡出土遺物観察表 (第182図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	平	(12.0)	(4.6)	—	86.0	30	茨西	角、軽	良好	にふい・粗	No.2	75-5
2	土師器	高平	13.8	8.3	8.9	335.9	95	茨西	角	普通	粗	No.1	
3	土師器	高平	—	(9.1)	—	325.8	50	下総	雲	良好	にふい・粗	No.2	
4	土師器	鉢	(11.7)	6.4	—	197.9	50	茨西	角	良好	にふい・粗	No.1	75-6

### 第69号住居跡 (第162・164E)

調査区西側、I・J-7グリッドに位置する。第34・46・55・59・68号住居跡と重複し、新旧関係は、何れの住居跡よりも古い。遺構上面に第46号住居跡の削平を受けるほか、住居跡中央部を第59号住居跡に、また南東コーナーを第55号住居跡に壊されている。

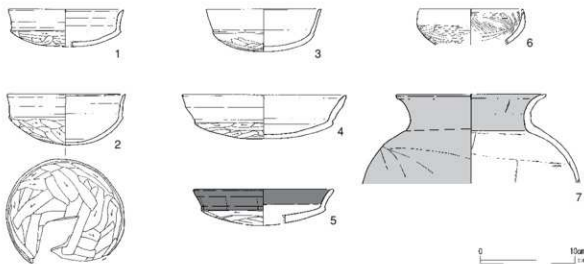
平面形状は方形で、規模は東西6.07m、南北6.70m、幅縁面からの深さは0.45mである。主軸方位はN-6°-Eである。

カマドは北壁の東寄りに造られており、カマド方位

はN-19°-Eである。袖部は右袖が確認され、壁からの残存規模は50cmである。構築土に灰色粘質土が用いられていた。燃焼部はほぼ壁内におさまり、土坑状に床面から20cmほど掘り窪められる。煙道部は燃焼部と明瞭な段差をもって接続し壁外へ57cm延びる。

遺物は土師器杯・甕が認められた。第183図5の土師器杯は口縁部内外面に黒色処理が、7の壺は外面と口縁部内面に赤彩されていた。

時期は6世紀第I四半期である。



第183図 第69号住居跡出土遺物

第65表 第69号住居跡出土物観察表 (第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.2)	3.4	—	56.7	25	群東	雲	普通	にぶい黄橙	No.1	64.3
2	土師器	坏	12.5	5.4	—	119.4	75	群東	雲、角	普通	橙		
3	土師器	坏	(12.1)	4.5	—	118.4	60	群東	雲、角	良好	にぶい黄橙		
4	土師器	坏	(17.4)	4.6	—	167.8	50	群東	雲	普通	橙		
5	土師器	坏	(14.8)	(3.8)	—	93.9	30	埴北	雲、角、軽	良好	にぶい黄橙		
6	土師器	坏	—	(3.7)	—	30.5	20	埴南	角、軽	良好	橙		
7	土師器	壺	15.9	(9.5)	—	506.5	20	埴南	普通	普通	にぶい黄橙		

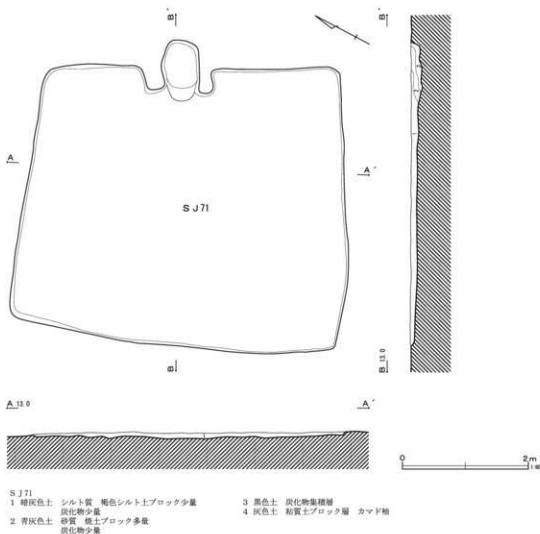
第70号住居跡 (第226図)

調査区西際、K-5グリッドに位置する。第83号住居跡の土層断面にのみ確認できた。第83号住居跡よりも新しく、第83号住居跡の床面とは40~50cmほどのレベル差がある。床面は黄灰色シルト土で床が

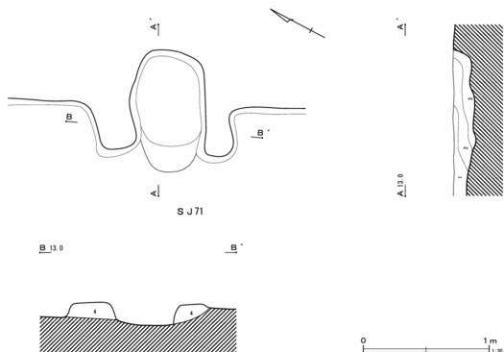
貼られており、貼り床下には炭化物の集積を伴う土坑状の落ち込みが確認される。

遺物は出土しなかった。

時期は第83号住居跡との関係から、6世紀第Ⅲ四半期以前と考えられる。



第184図 第71号住居跡



第185図 第71号住居跡カマド

#### 第71号住居跡 (第184・185図)

調査区西側、K・L-6・7グリッドに位置する。第54・79・82号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも新しい。

平面形は南北にやや長い長方形で、規模は東西4.50m、南北5.32m、確認面からの深さ0.09mとごく浅い。主軸方位はN-62°-Eである。

カマドは東壁ほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-67°-Eである。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は左右ともに42cmである。燃焼部は床面より10cmほど低く掘り窪められる。

出土遺物は土師器小片が極めて少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、周囲の住居跡との関係から、7世紀第IV四半期以降と考えられる。

#### 第72号住居跡 (第186図)

調査区西側、L-7グリッドに位置する。第26・

64・71・73・77・80・88号住居跡、第10・11・14・15号土坑、第1号溝跡と重複し、新旧関係は、第73号住居跡よりも新しく、他のすべての遺構よりも古い。住居跡各所を他遺構に壊されているが、平面形はやや東西に長い長方形と推測される。検出された規模は東西7.55m、南北6.95m、確認面からの深さは0.33mである。主軸方位はN-2°-Wである。

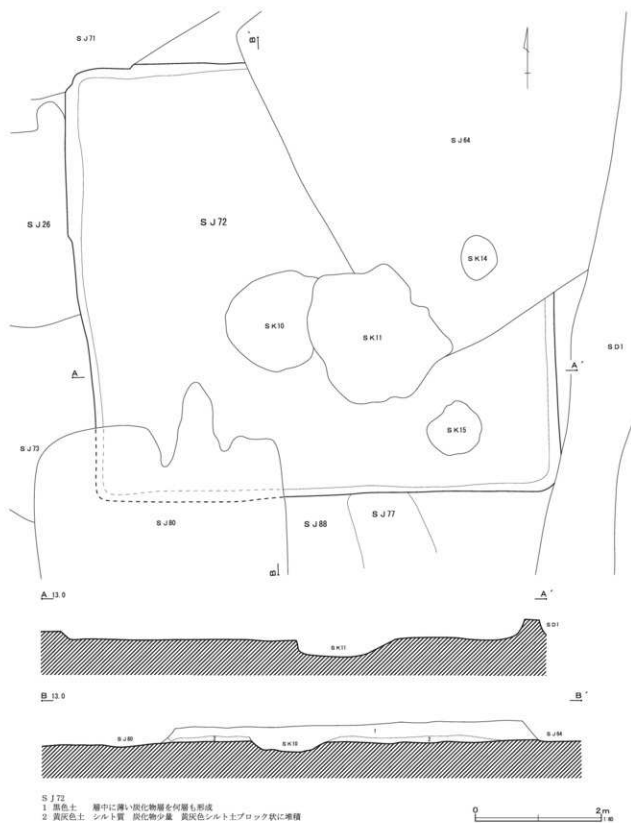
住居跡北東部は第64号住居跡に大きく壊されている。カマドは確認されなかったが、北壁中央付近で焼土ブロックの集積を確認したことから、この位置と推測される。

住居跡中央に位置する第10・11・15号土坑は、住居跡が完全に埋まりきる前に掘削され、床面を掘り抜いている。

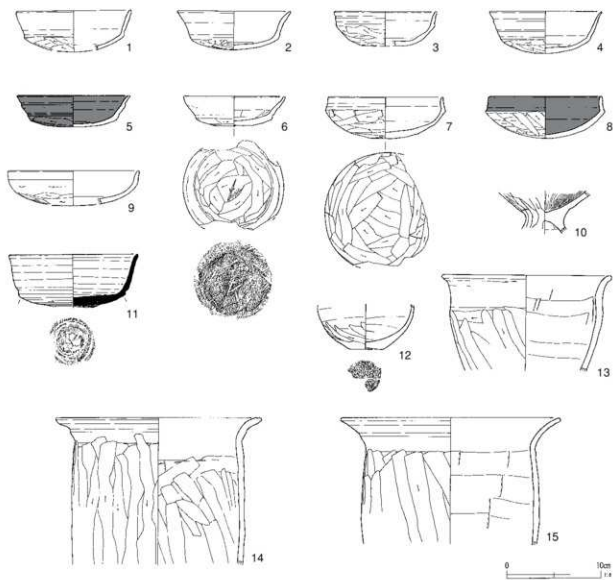
遺物は土師器環・高環・鉢・甕、須恵器高環が認められた。第187図5・8の土師器環は黒色処理されており、6の環底部には小さな木炭痕が見られた。角閃石安山岩製の有溝砥石が1点出土した。

時期は7世紀第III四半期である。





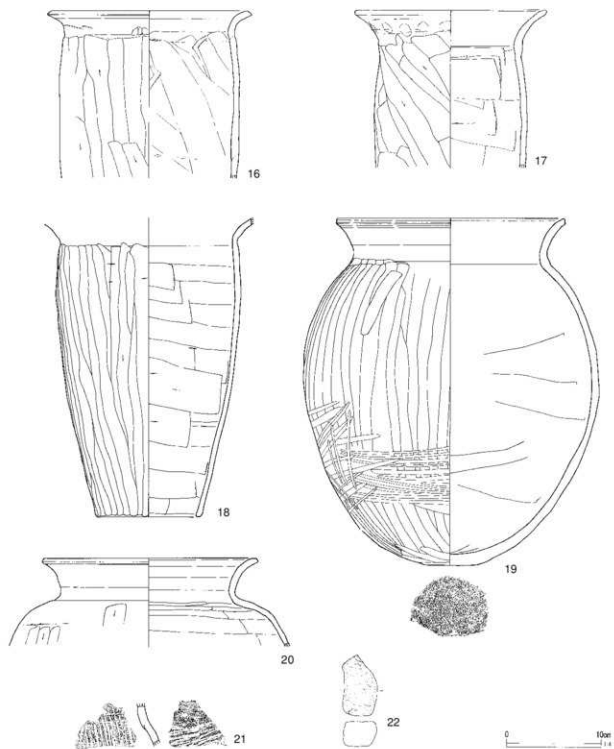
第186図 第72号住居跡



第187図 第72号住居跡出土遺物 (1)

第66表 第72号住居跡出土遺物観察表 (1) (第187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.2)	(4.2)	—	38.1	30	埴北	角、軽	良好	灰褐色		
2	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	73.8	50	埴北	角、軽	良好	にぶい黄褐色		
3	土師器	坏	(10.9)	3.6	—	41.6	30	群東	雲	普通	褐色		
4	土師器	坏	(11.9)	4.4	—	54.3	30	埴北	角、軽	良好	にぶい褐色		
5	土師器	坏	(11.9)	3.3	—	49.2	30	埴北	角	普通	褐色		
6	土師器	坏	10.6	3.2	—	99.6	80	佐野	雲、角	良好	褐色	木炭痕 指頭痕	
7	土師器	坏	(12.1)	4.4	—	126.5	75	佐野	雲、軽	良好	にぶい黄褐色		
8	土師器	坏	(11.9)	4.4	—	111.4	60	粉南	角	良好	灰白		
9	土師器	坏	(13.8)	(3.6)	—	48.5	25	埴北	雲、角、軽	良好	にぶい褐色		
10	土師器	高坏	—	(4.6)	—	96.6	10	茨西	雲	良好	灰褐色		
11	須恵器	高坏	13.6	(5.6)	—	259.8	50	菅ノ沢	雲	良好	灰		
12	土師器	鉢	—	(4.8)	3.4	79.7	60	茨西	雲	良好	褐色	SJ80	
13	土師器	鉢	(17.7)	(10.1)	—	137.3	10	佐野	角	良好	褐色	掘り方	64-4



第188図 第72号住居跡出土遺物 (2)

第67表 第72号住居跡出土遺物観察表 (2) (第187・188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
14	土師器	甕	(21.6)	(15.6)	—	256.6	10	埴北角	角	普通	にぶい橙		
15	土師器	甕	(23.2)	(13.4)	—	247.4	5	埴北角	角、軽	普通	にぶい黄橙	掘り方	
16	土師器	甕	(20.9)	(17.7)	—	335.3	5	埴南角	角	普通	にぶい黄橙	外面黒斑	
17	土師器	甕	(20.2)	(16.7)	—	420.8	10	埴南角	甕、角	普通	にぶい橙		

第68表 第72号住居跡出土遺物観察表(3)(第188図)

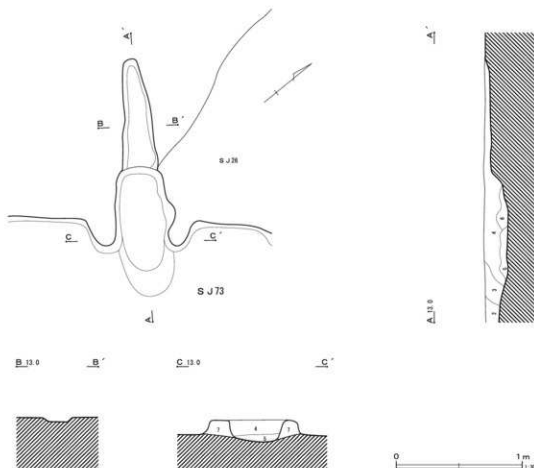
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
18	土師器	甕	—	(31.5)	(10.9)	776.3	40	佐野	軽	良好	にぶい黄褐色	SK11 トレンチ 角閃石安山岩	88-4	
19	土師器	甕	(24.0)	36.5	5.9	1814.3	60	群東	角	普通	灰黄褐色			
20	土師器	甕	(20.5)	(9.4)	—	578.1	10	駒南	角、軽	普通	灰黄			
21	土師器	甕	—	—	—	28.1	5	東北	雲、角	普通	にぶい橙			
22	石製品	有溝砥石	長さ6.4幅3.7厚さ2.6重さ22.0					—						

### 第73号住居跡(第189・190図)

調査区西側、L-6・7グリッドに位置する。第26・72・80・90号住居跡と重複し、新田関係は、何れの住居跡よりも古い。

住居跡東半部は第72・80号住居跡に壊されているため平面形状は不明である。検出された規模は北東—南西3.90m、南東—北西2.50m、確認面からの深さは0.15mである。主軸方位はN-50°-Wである。

カマドは西壁に設けられ、カマド方位はN-56°-Wである。袖部は両側で僅かに確認され、壁からの残存規模は、左袖28cm、右袖24cmで、構築土には灰色粘質土が用いられていた。燃焼部は壁を切り込み、底面は床面より5~10cm掘り窪められる。燃焼部の規模は長さ103cm、幅36cmである。煙道部へは明確な段差をもって接続する。煙道部は壁外へほぼ水平に87cm伸びる

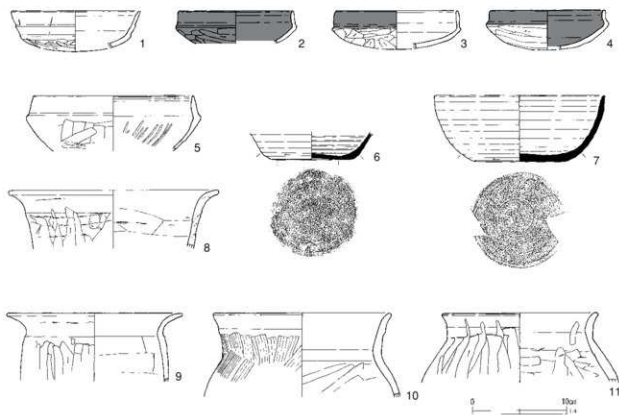
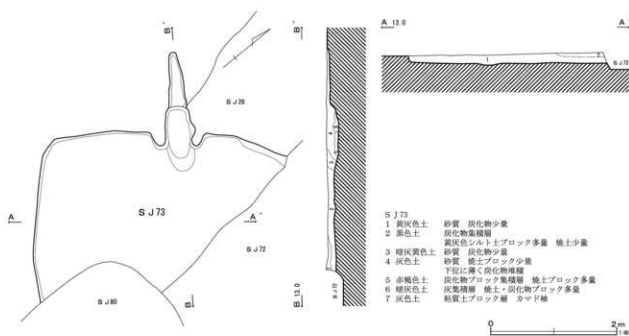


第189図 第73号住居跡カマド

遺物は土師器杯・壺・甗・須恵器杯・壺が認められた。第191図2・3・4の土師器杯は黒色処理されていた。

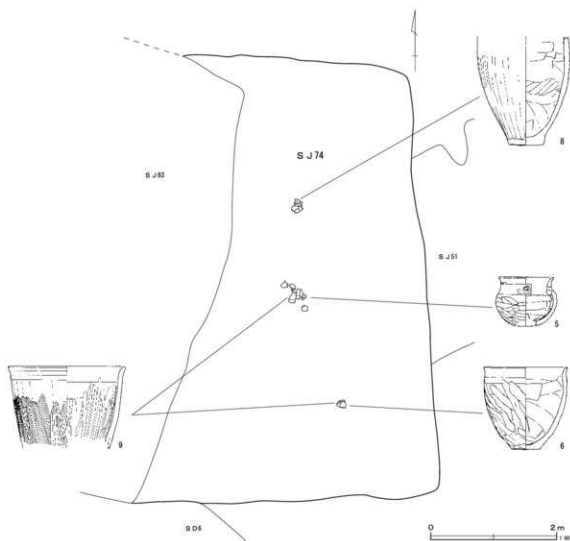
理されていた。

時期は7世紀第Ⅱ四半期である。



第69表 第73号住居跡出土遺物観察表 (第191図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.7)	(3.9)	—	34.7	20	埴北	角	良好	にぶい橙		
2	土師器	坏	(12.0)	(3.5)	—	26.3	20	埴北	角	普通	黒褐		
3	土師器	坏	(13.0)	(4.0)	—	82.7	40	茨西	雲、角	普通	灰黄褐	カマド	
4	土師器	坏	(12.0)	(4.1)	—	62.4	40	枳南	角	普通	灰黄褐		
5	土師器	甗	(16.8)	(5.9)	—	30.1	10	茨西	角	良好	にぶい黄橙		
6	須恵器	坏	—	(3.0)	9.0	132.3	50	不明	角	良好	灰		
7	須恵器	甗	(18.0)	7.0	10.3	307.1	40	南比企	針	良好	灰	SJ58南北トレンチ	自然輪 64-5
8	土師器	甗	(21.8)	(6.2)	—	103.3	5	茨西	角	普通	にぶい黄橙		
9	土師器	甗	(18.4)	(7.3)	—	69.6	5	埴東	雲、角	良好	にぶい黄橙		
10	土師器	甗	(18.6)	(9.0)	—	138.2	5	茨西	角	普通	橙	被熱	
11	土師器	甗	(16.4)	(7.4)	—	110.4	5	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙		



第192図 第74号住居跡遺物出土状況

第74号住居跡 (第192・193図)

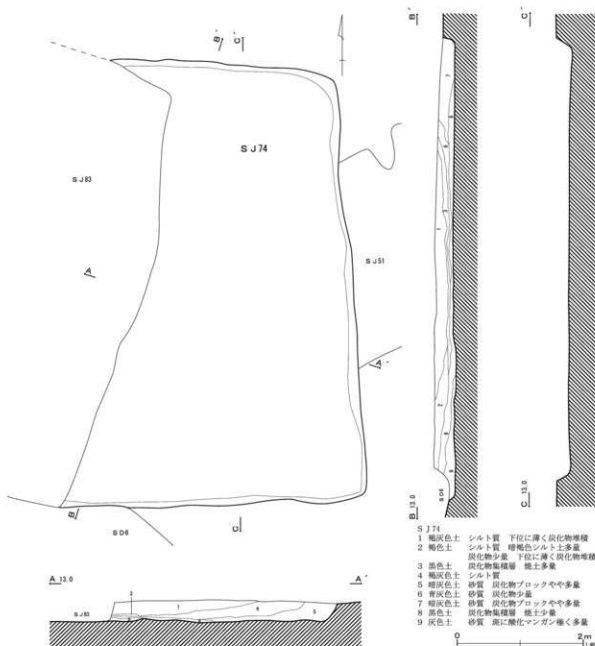
調査区西側、K-5・6グリッドに位置する。第51・83号住居跡、第6号溝跡と重複し、新旧関係は何れの遺構よりも古い。

西側半分は第83号住居跡に壊されているため平面形は不明である。検出された規模は南北7.10m、東

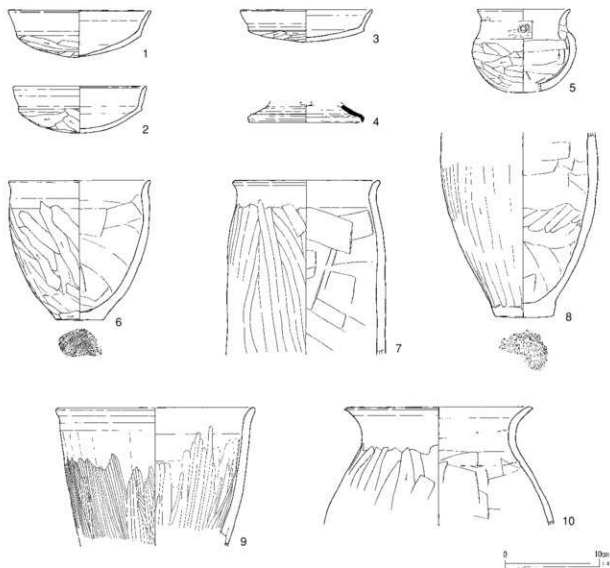
西4.70m、確認面からの深さは0.32mである。主軸方位はN-0°である。

遺物は土師器環・鉢・甕・須恵器高環の認められた。第194図5の土師器鉢は口縁下に穿孔が見られた。

時期は6世紀第Ⅱ四半期である。



第193図 第74号住居跡



第194図 第74号住居跡出土遺物

第70表 第74号住居跡出土遺物観察表 (第194図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(15.2)	5.0	—	151.7	70	群東	角	良好	にぶい橙		64-6
2	土師器	坏	13.9	5.0	—	143.7	70	埴北	角、軽	良好	橙		
3	土師器	坏	(13.8)	3.3	—	56.1	25	佐野	角、軽	普通	橙		
4	須恵器	高坏	—	(1.9)	(12.0)	5.6	5	金山		普通	黄灰		76-1
5	土師器	小甕壺	9.7	(8.7)	—	162.1	50	下総	雲、角	良好	にぶい橙	No.3、SJ70No.2 穿孔	
6	土師器	鉢	(15.0)	14.7	—	363.8	25	下総	雲、角	普通	にぶい橙	No.2 内面黒斑	76-2
7	土師器	甕	(15.0)	(18.4)	—	371.8	10	茨西	角	普通	褐灰	No.1	
8	土師器	甕	—	(19.6)	6.1	367.8	20	茨西	角、軽	普通	にぶい橙	No.4、SJ70 被熱	76-2
9	土師器	甕	20.7	(14.6)	—	1246.4	50	下総	雲、角	普通	にぶい黄橙	No.2・3、SJ70No.2	
10	土師器	甕	(19.4)	(12.6)	—	195.4	5	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙		



### 第75号住居跡 (第196図)

調査区南側、M-7・8グリッドに位置する。第87号住居跡、第22号井戸跡、第2・3号溝跡と重複し、新田関係は、第87号住居跡よりも新しく、他の遺構よりも古い。第22号井戸跡には住居跡北東コーナーを壊されている。

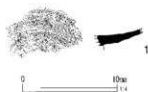
平面形はほぼ正方形で、規模は東西3.93m、南北3.77m、確認面からの深さは0.10mである。主軸方位はN-20°-Wである。床面はほぼ全面に貼り床が検出された。

カマドは北壁やや東寄りに造られ、カマド方位はN-7°-Wである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は、左袖65cm、右袖60cmで、構築土に黄灰色粘質土が用いられていた。燃焼部は壁内に

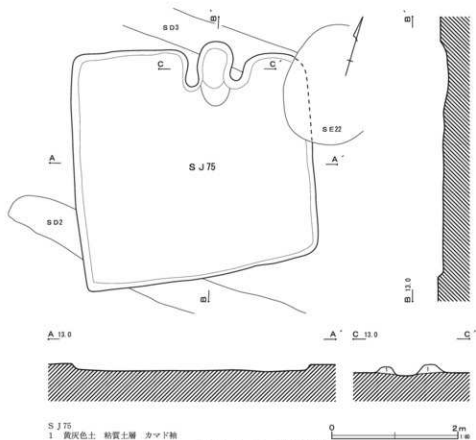
取り、床面よりも10cmほど掘り窪められる。燃焼部の規模は、長さ100cm、幅36cmである。煙道部は確認できなかった。

遺物は土師器・須恵器の小片が極少量出土した。図示した須恵器高環には「X」のヘラ記号が見られた。しかし重複する他の住居跡との関係から本住居跡に伴うものとは考え難い。

時期は第87号住居跡との重複関係から、7世紀第Ⅱ四半期以降と考えられる。



第195図 第75号住居跡出土遺物



S J 75  
1 黄灰色土 粘質土層 カマド軸

第196図 第75号住居跡

第71表 第75号住居跡出土遺物観察表 (第195図)

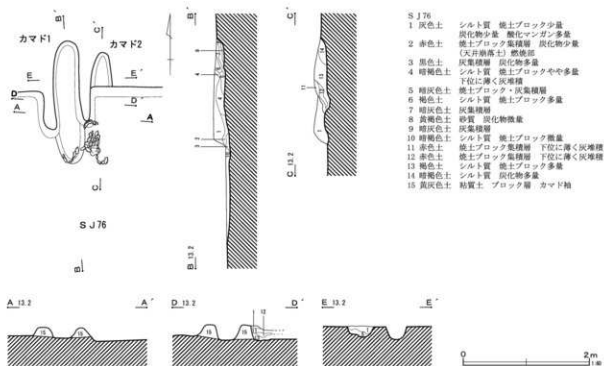
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	高環	—	—	—	50.6	5	不明		良好	灰	ヘラ記号「X」	

第76号住居跡 (第197・198図)

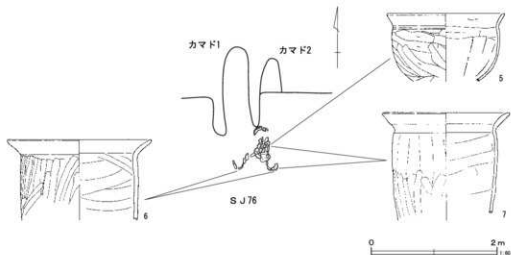
調査区中央やや南寄り、K-8グリッドに位置する。確認面からの深さが非常に浅く、検出されたのはやや深く掘り込まれたカマド周辺のみである。第57・81号住居跡と重複し、新旧関係は第57号住居跡より古く、第81号住居跡より新しい。主軸方位は

N-3° -Wである。

カマドは2基確認され、ともに北壁に造られている。土層断面や土器出土状況から、西側のカマド1が新しく、東側のカマド2が古い。カマド1はカマド方位がN-3° -Wである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖75cm、右袖60cmであ



第197図 第76号住居跡



第198図 第76号住居跡遺物出土状況

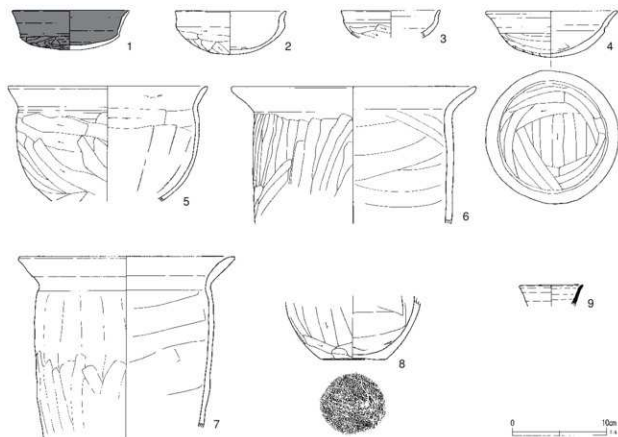
る。右袖部先端には土師器甕を倒立させて補強材としていた。燃焼部は床面より低く掘り窪められ、煙道部へは明瞭な段差をもたず緩やかに移行する。煙道部はわずかな凹凸をもちながら壁外に72cm延びる。

カマド2は、煙道部先端のみ確認された。カマド

方位はN-2°-Eである。検出された規模は105cmである。カマド前面に土器がまともって出土した。

遺物は、土師器環・鉢・甕、須恵器壺が認められた。第199図1の土師器環は黒色処理されており、9の須恵器壺には自然釉が見られた。

時期は7世紀第IV四半期である。



第199図 第76号住居跡出土遺物

第72表 第76号住居跡出土遺物観察表 (第199図)

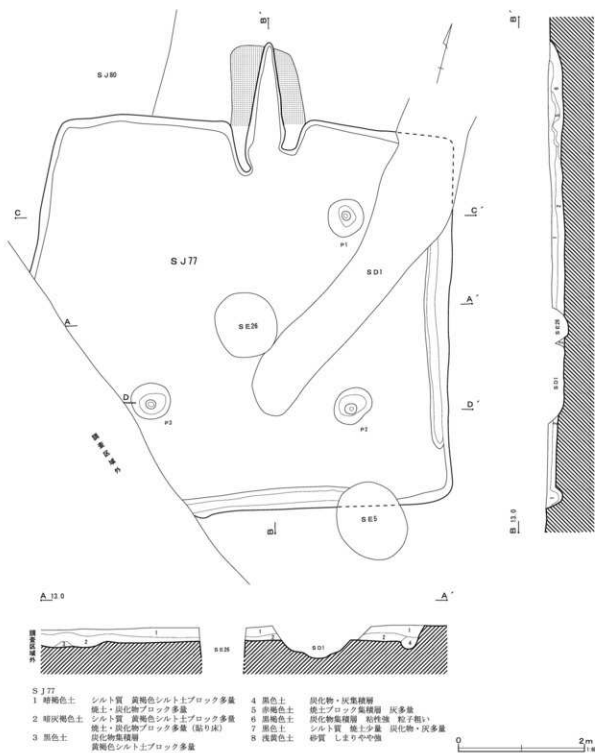
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	12.3	4.2	—	91.4	75	佐野	角	普通	にぶい・橙	掘り方、カマド	64-7
2	土師器	環	11.7	4.6	—	83.8	60	群東	角	良好	にぶい・橙		64-8
3	土師器	環	(10.5)	(2.9)	—	22.2	25	茨西	雲、角	普通	橙	カマド	
4	土師器	環	13.9	4.9	—	222.0	100	下南	雲、角	良好	橙		64-9
5	土師器	鉢	(21.0)	(12.2)	—	314.4	25	埼玉	雲、角	良好	にぶい・黄緑	N2	
6	土師器	甕	(25.8)	(14.6)	—	1780.7	30	新治	雲、片	不良	灰褐	掘り方、カマド、N1-3、SJ50	76-3
7	土師器	甕	22.7	(19.4)	—	1614.7	40	新治	雲、角	不良	灰赤	N2-3、カマド、掘り方	76-4
8	土師器	小型甕	—	(6.8)	6.9	195.6	10	駒南	角	普通	灰白	東西トレンチ、SJ50	
9	須恵器	壺	(6.7)	(2.3)	—	6.5	5	東海		良好	灰白	掘り方 自然釉	

第77号住居跡 (第200～203頁)

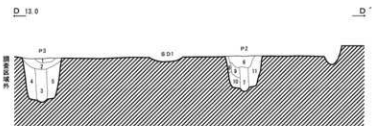
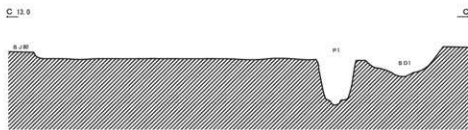
調査区南側、L-7、M-7・8グリッドに位置する。第80・87・92号住居跡、第5・26号井戸跡、第1号溝跡と重複し、新田関係は、井戸跡、溝跡お

よび第80号住居跡よりも古く、第87・92号住居跡よりも新しい。南西コーナーは調査区域外に及んでい

るほか、北東コーナーは第1号溝跡に壊される。平面形は東西にやや長い長方形で、規模は東西



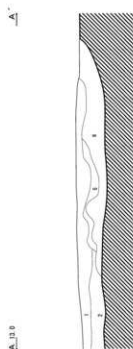
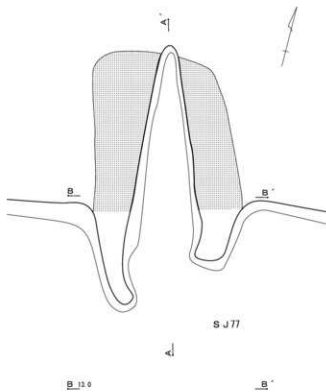
第200図 第77号住居跡 (1)



- S.177 P11
- 1 暗灰色土 砂質 下に深く炭化物堆積
  - 2 灰色土 砂質 黄褐色シルト土ブロック多量  
下部に炭化物・灰堆積
  - 3 黒灰色土 シルト質 黄褐色シルト土ブロック少量  
炭化物堆積
  - 4 暗灰色土 砂質 炭化物少量
  - 5 黒灰色土 シルト質 黄褐色シルト土ブロック多量
  - 6 暗灰色土 砂質 炭化物粒子少量
  - 7 黒灰色土 シルト質
  - 8 黄褐色土 シルト質 ブロック状に堆積  
暗灰色砂質土ブロック少量
  - 9 暗灰色土 砂質 黄褐色シルト土ブロック多量
  - 10 暗灰色土 砂質 炭化物ブロック少量
  - 11 黒灰色土 シルト質 黄褐色シルト土ブロック多量

0 2m  
1:10

第201図 第77号住居跡 (2)



0 1m  
1:10

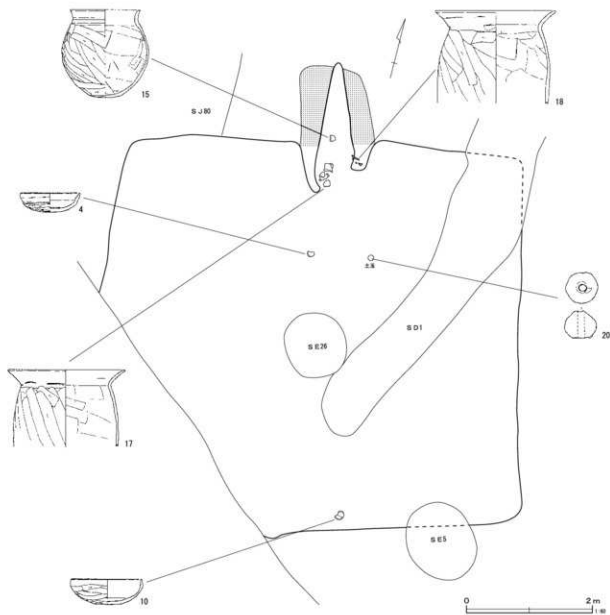
第202図 第77号住居跡カマド

6.70m、南北6.32m、確認面からの深さは0.22mである。主軸方位はN-10° -Wである。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられ、カマド方位はN-15° -Wである。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は、左袖84cm、右袖56cmで、構築土にしまりの強い浅黄色砂質土を用いている。燃焼部は床面より僅かに低い明確な掘り込みがなく、煙道部へは段差をもたずになだらかに移行する。煙道は先細りする平面形で、壁面は非常に良く焼けてい

た。燃焼部から土師器片、甕が出土した。

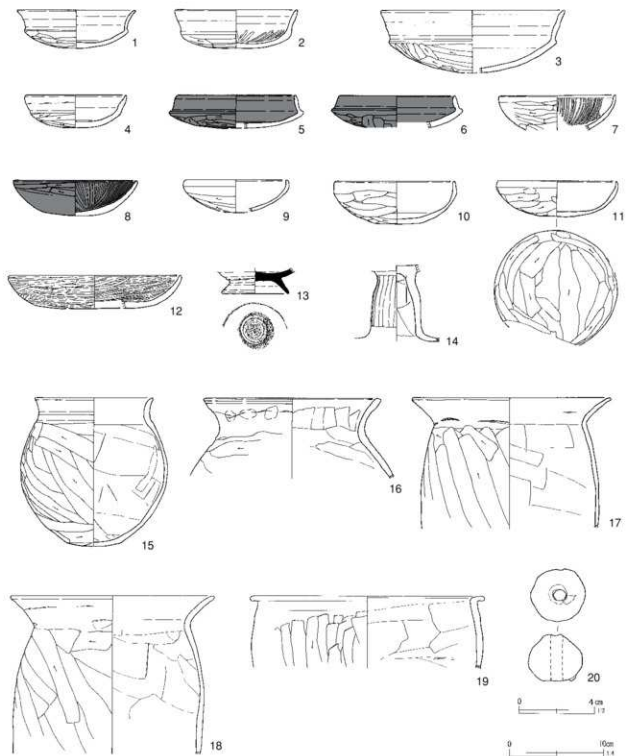
本住居跡ではカマドの掘り方を検出した。第2次調査区では唯一である。調査時は土坑と考えていたが、第3次調査区で同様の事例が見られたことから認識を改めた。カマド掘り方は、東西113cm、南北120cm、深さ約10cm程度の方形土坑で、埋土にはカマド袖部と同じ、しまりの強い浅黄色砂質土が用いられていた。掘り方底面は煙道部底面より高く、煙道部は掘り方底面を10cmほど掘り込んでいた。



第203図 第77号住居跡遺物出土状況

カマド以外の施設としては、柱穴、壁溝が検出された。柱穴は北東部、南東部、南西部で確認されたが、北西部では精査を試みたが検出には至らなかった。P 2・P 3は断面で柱痕が確認された。P 1は

断面による柱痕の確認はできなかったが、柱の当たりが確認された。柱穴の規模は、P 1は円形で60×54cm、床面からの深さ70cm、P 2は楕円形で62×50cm、床面からの深さ56cm、P 3は円形で62×60cm、



第204図 第77号住居跡出土遺物

床面からの深さ70cmを測る。壁溝は東壁、南壁で検出された。床面からの深さは10cmである。

遺物は土師器環・高環・甕が認められ、混入と思われる土師器・須恵器も見られた。第204図5・

6・7の土師器環は内外面に黒色処理されていた。土玉が1点出土した。

時期は7世紀第Ⅲ四半期である。

第73表 第77号住居跡出土遺物観察表（第204図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.5)	4.0	—	50.8	40	群東	雲	良好	橙	掘り方	
2	土師器	環	(12.9)	4.0	—	77.7	30	群東	雲	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	環	(19.5)	(6.6)	—	175.7	40	埼北	雲、角、軽	普通	にぶい橙	SJ87	
4	土師器	環	(10.7)	3.4	—	78.9	50	佐野	雲、角	良好	にぶい橙	No.6	64-10
5	土師器	環	(12.4)	3.5	—	84.2	50	佐野	角	良好	にぶい橙	掘り方	
6	土師器	環	(12.2)	(3.4)	—	39.4	20	佐野	角	普通	褐灰	掘り方	
7	土師器	環	(12.2)	(3.7)	—	17.6	20	茨西	角	普通	にぶい橙		
8	土師器	環	(13.0)	3.7	—	118.8	60	佐野	角	良好	にぶい橙		65-1
9	土師器	環	(10.7)	(3.3)	—	20.3	20	埼北	角	普通	にぶい橙		
10	土師器	甕	12.6	4.5	—	177.1	90	埼北	雲、角、軽	良好	にぶい橙	No.8	65-2
11	土師器	環	12.5	3.8	—	111.0	80	埼北	雲	良好	橙		65-3
12	土師器	甕	(18.0)	3.5	—	72.9	20	佐野	雲	良好	明赤褐		
13	須恵器	高台付甕	—	(2.7)	7.0	60.6	20	三和	角	良好	褐灰		
14	土師器	高環	—	(8.1)	—	112.6	20	茨西	雲、角	普通	橙	掘り方	
15	土師器	小型甕	(12.5)	15.7	—	264.1	40	埼北	雲、角、軽	普通	にぶい橙	No.2	89-1
16	土師器	甕	(18.2)	(8.4)	—	116.8	5	茨西	角	普通	にぶい黄橙	指頭痕	
17	土師器	甕	(20.9)	(13.9)	—	270.7	20	群東	雲、角	普通	にぶい橙	No.4、カマド	
18	土師器	甕	21.5	(16.7)	—	662.9	40	埼北	雲	普通	にぶい橙	No.3	76-5
19	土師器	土釜	(24.6)	(7.7)	—	131.1	5	新治	雲	良好	褐灰		
20	土製品	土玉	径2.9孔径0.7厚さ2.5重さ18.3				100	新治	角	普通	灰黄褐	No.7	92-7

#### 第78号住居跡（第205～207図）

調査区西側、K・L-6グリッドに位置する。第85号住居跡、第6・7号溝跡、第12号土坑と重複し、新旧関係は何れの遺構よりも古い。

平面形は方形に近く、規模は東西4.20m、南北3.90m、確認面からの深さは0.3mである。主軸方位はN-10° -Wである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-7° -Wである。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖58cm、右袖54cmである。構築土には黄白色粘質土が用いられていた。燃焼部の掘り込

みはほとんど見られず、火床面は床面とほぼ同じ高さである。煙道部とも段差をもち、同じ高さのまま移行する。

燃焼部では支脚に転用した土師器高環が、火床面から5cmほど浮いて、炭化物集積層上で伏せた状態で出土した。

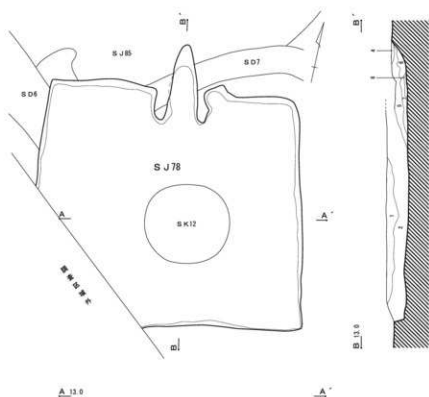
遺物は土師器環・高環、須恵器甕が認められた。第208図5・6は製塩器と思われる。歪みがあり、作りが雑で、他の土器とは理窟に区別できる。角刈石安山岩製の有溝砥石が1点出土した。

時期は5世紀第Ⅳ四半期である。

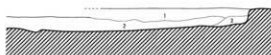
第74表 第78号住居跡出土遺物観察表（1）（第208図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(13.0)	(5.4)	—	61.5	30	群東	雲、角	普通	橙		
2	土師器	高環	16.3	9.8	10.5	503.5	95	駒南	雲、角	良好	にぶい黄橙	No.4	76-6
3	土師器	高環	15.7	10.8	10.7	471.0	90	茨西	雲、角	普通	橙	No.3	77-1
4	土師器	高環	15.8	(9.6)	—	476.9	90	茨西	雲、角	良好	橙	No.1	77-2



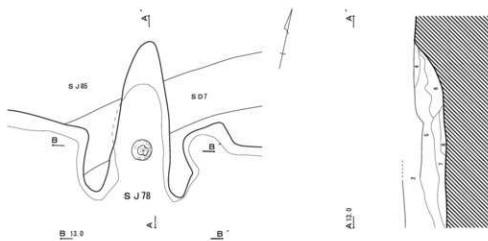


- S J 78
- 1 暗褐色土 シルト質 炭化物多量
  - 2 黄褐色土 シルト質 炭化物多量
  - 3 褐色土 シルト質 暗褐色シルト土多量 炭化物微量
  - 4 赤色土 粘土ブロック集積層 (天井崩落土) 障子部
  - 5 褐色土 シルト質
  - 6 明赤褐色土 シルト質 粘土ブロック多量 (天井崩落土) 障子部
  - 7 暗褐色土 砂質 炭化物・灰多量
  - 8 黒色土 炭化物集積層
  - 9 黄白色土 粘質土ブロック層 カマド跡



第205図 第78号住居跡

0 5m



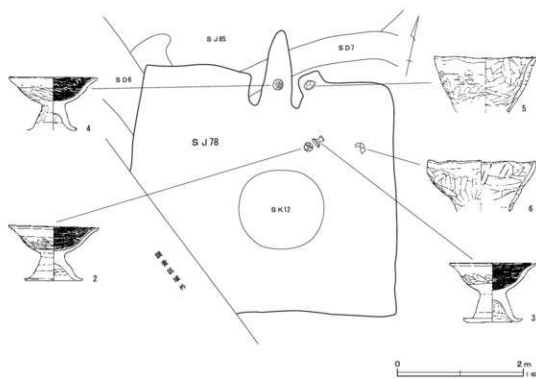
B 12.0

A 12.0

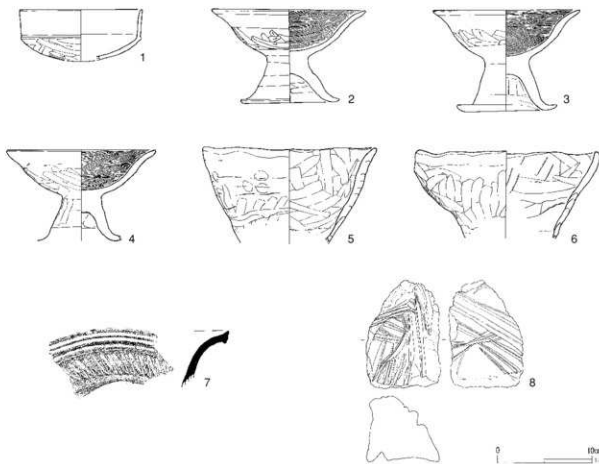


第206図 第78号住居跡カマド

0 1m



第207图 第78号住居跡遺物出土状況



第208图 第78号住居跡出土遺物

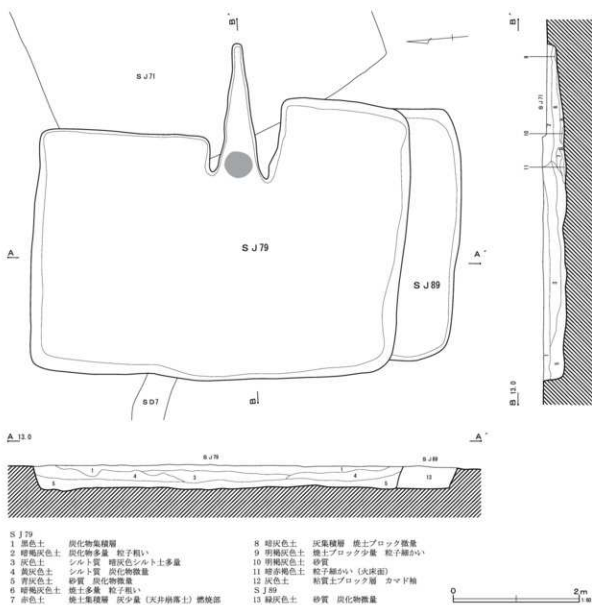
第75表 第78号住居跡出土遺物観察表 (2) (第208図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
5	土師器	製塩土器	18.3	(10.2)	—	528.8	50	下総	雲、角	不良	橙	N.2 内外面黒斑	77.3
6	土師器	製塩土器	18.9	(9.3)	—	559.3	80	下総	角	普通	にぶい橙	N.5、SJ79	77.4
7	須恵器	甕	—	—	—	87.8	5	新治	雲	普通	灰		
8	石製品	有溝砥石	長さ11.4幅7.7厚さ8.9	重さ238.4	—	—	—					角閃石安山岩	96.22

第79号住居跡 (第209～211図)

調査区西側、K・L-6・7グリッドに位置する。第71・89号住居跡、第7号溝跡と重複し、新旧関係は、第71号住居跡、第7号溝跡よりも古く、第89号住居跡よりも新しい。

平面形は南北に長い長方形で、カマドの設けられた東壁は、カマドを中心とした北側と南側で張り出し方が異なる。規模は南北5.93m、東西はカマド北側で3.8m、南側で4.35mである。確認面からの深さは0.36mである。主軸方位はS-84°-Eである。



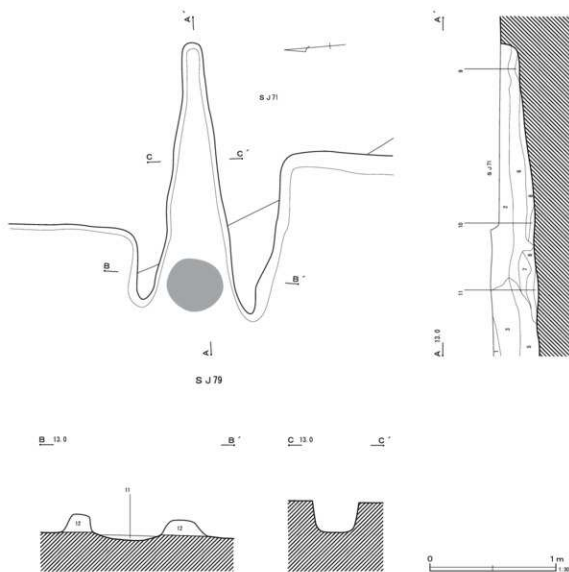
第209図 第79・89号住居跡

カマドは東壁中央に設けられ、カマド方位はS-85°-Eである。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は左袖60cm、右袖は66cmである。燃烧部は掘り込みがなく床面とほぼ同じ高さで、被烧遗迹が明瞭に残っていた。煙道部は燃烧部との段差を持たず、明瞭な区別のないまま外側へ向かって緩やかに傾斜し、壁外へ106cm延びる。

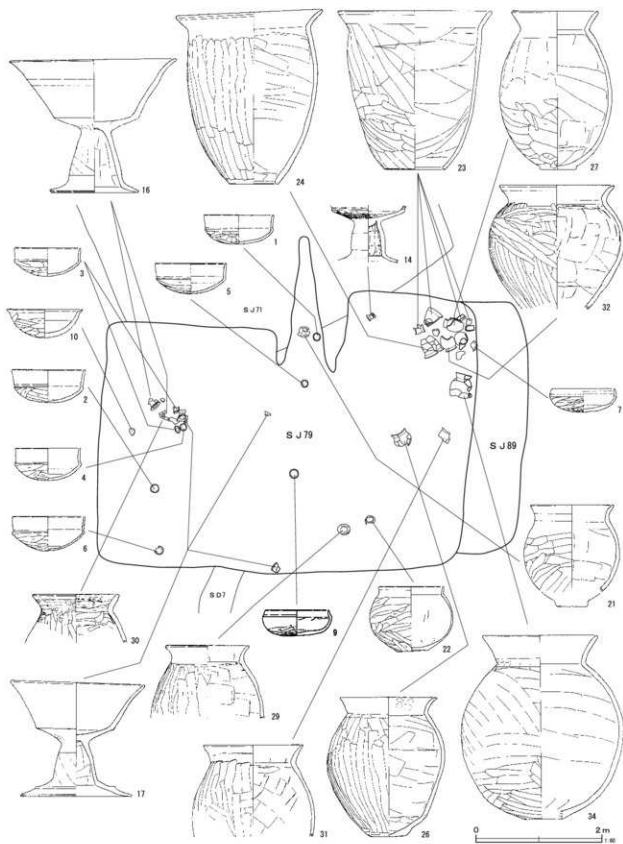
遺物は極めて多量に出土した。土師器环・高环・鉢・甗・小型壺・小型甗・甗等が出土した。第212

図7・9の土師器环は赤彩されていた。16・17は土師器の大型の高环である。角閃石安山岩製の有溝砥石1点、砂岩の編織物石1点が出土した。出土状況は、南東コーナーや北半部中央付近でややまとまって出土した。南東コーナーでは土師器甗・甗が、北半部中央付近では环・高环が多く出土した。住居跡全体においても北半では环・高环が、南半では甗・甗が多く出土する傾向が見られる。

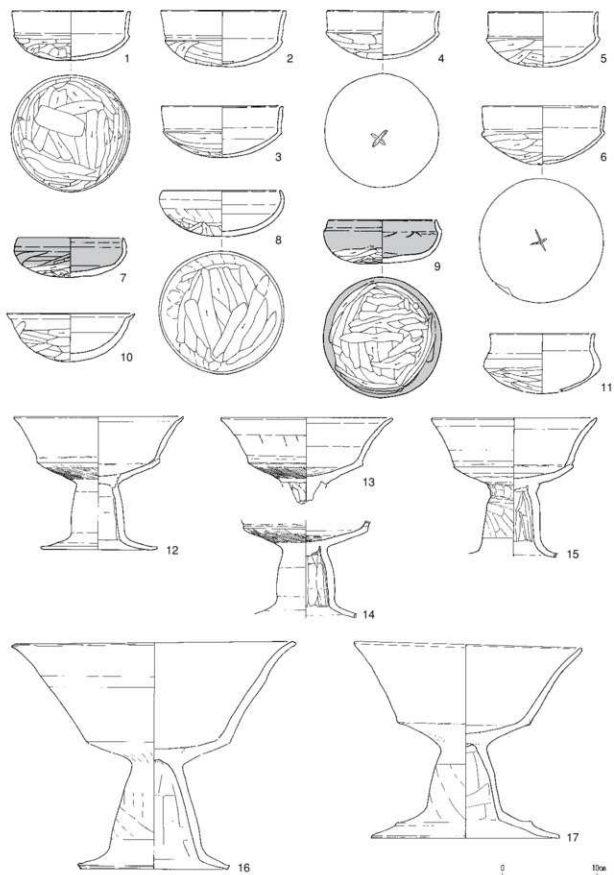
時期は6世紀第I四半期である。



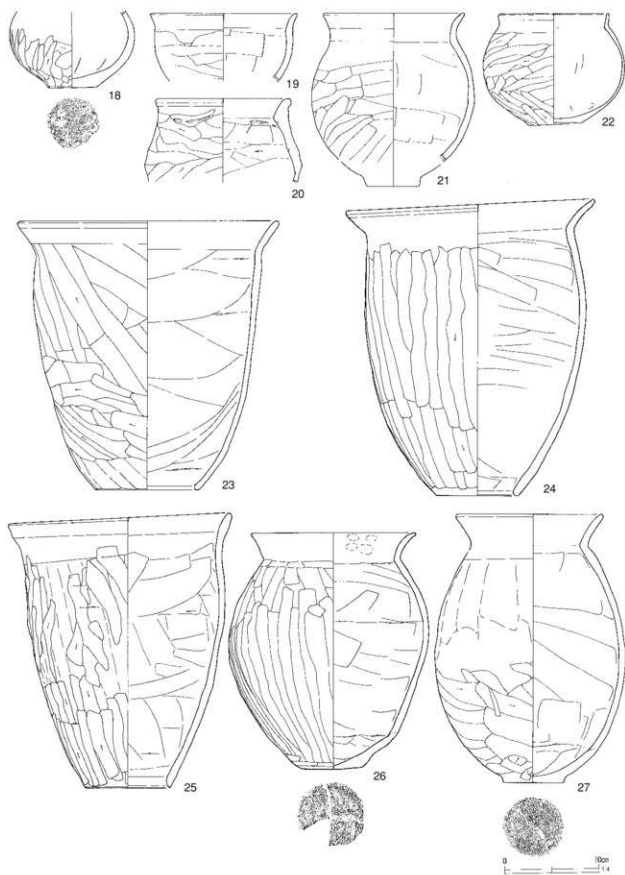
第210図 第79号住居跡カマド



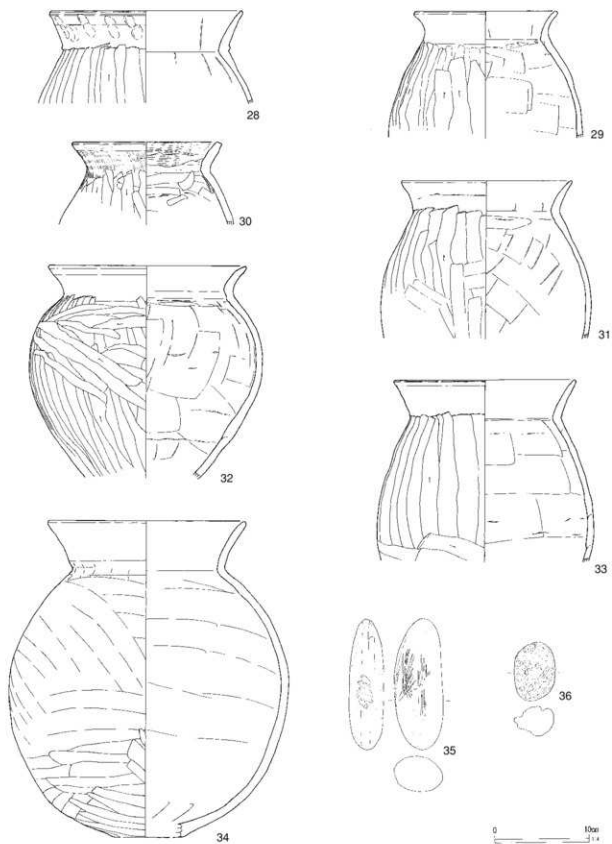
第211图 第79号住居跡遺物出土状況



第212図 第79号住居跡出土遺物 (1)



第213図 第79号住居跡出土遺物(2)



第214图 第79号住居跡出土遺物(3)



第76表 第79号住居跡出土遺物観察表 (第212・213・214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.4	5.3	—	167.0	100	群東	角	良好	にぶい	No.36	65-4
2	土師器	坏	13.2	5.9	—	202.3	95	群東	角	普通	橙	No.3	65-5
3	土師器	坏	12.7	5.5	—	165.2	80	群東	雲、角	良好	にぶい	No.9・12	65-6
4	土師器	坏	11.8	5.2	—	147.5	95	群東	角、軽	良好	橙	No.10 ヘラ記号「×」	65-7
5	土師器	坏	11.6	5.8	—	182.8	95	群東	雲、角	良好	にぶい	No.7	65-8
6	土師器	坏	12.8	6.2	—	147.0	90	埴北	角	普通	橙	No.1 ヘラ記号「×」	65-9
7	土師器	坏	11.0	4.2	—	143.7	70	埴南	角	良好	橙赤彩赤	No.23 比企型坏	65-10
8	土師器	坏	12.4	4.9	—	222.8	100	茨西	角	良好	橙	外面黒斑	66-1
9	土師器	坏	11.3	4.1	—	206.7	100	埴南	角	良好	にぶい	No.5 外面黒斑	66-2
10	土師器	坏	(13.5)	5.0	—	143.0	50	群東	角、軽	普通	橙	No.8	
11	土師器	甕	(11.1)	(6.2)	—	53.0	25	群東	雲	良好	橙		
12	土師器	高坏	(18.0)	14.0	12.4	353.8	60	群東	角	普通	橙		
13	土師器	高坏	18.1	(8.9)	—	347.4	50	群東	角	良好	にぶい		
14	土師器	高坏	—	(10.4)	—	297.50	50	群東	雲	普通	橙	No.19	
15	土師器	高坏	(17.6)	(14.6)	—	440.1	50	群東	雲、角	普通	にぶい	指頭痕	77-5
16	土師器	大型高坏	29.2	23.9	15.6	1692.5	70	群東	角	良好	明赤褐	No.13・14	77-6
17	土師器	大型高坏	24.1	20.9	19.9	924.1	80	埴北	角	普通	橙	No.4・6・11、SJ82	78-1
18	土師器	小型壺	—	(8.0)	5.3	405.8	50	栃南	角	普通	にぶい	煤付着	
19	土師器	鉢	(15.3)	(7.2)	—	52.9	10	栃南	雲	良好	にぶい	外面黒斑	
20	土師器	小型甕	(14.2)	(8.9)	—	177.2	10	茨西	雲、角	普通	灰褐		
21	土師器	小型甕	14.8	(15.8)	—	855.9	50	群東	角、軽	普通	にぶい	No.37	78-2
22	土師器	小型壺	11.4	11.7	5.5	379.7	95	佐野	雲、角	良好	にぶい	No.33	78-3
23	土師器	甕	27.5	28.3	(10.9)	1128.0	50	茨西	軽	普通	にぶい	No.17・18・21	82-2
24	土師器	甕	26.2	31.5	8.7	2889.1	95	群東	角、軽	良好	にぶい	No.15	83-3
25	土師器	甕	23.2	29.2	8.8	2192.9	95	栃南	角、軽	普通	にぶい	No.28	83-4
26	土師器	甕	17.3	25.1	7.1	1776.6	90	群東	角、軽	普通	褐灰	No.32	90-1
27	土師器	甕	15.2	28.4	6.3	914.9	80	栃南	雲、角	普通	にぶい	No.26	90-2
28	土師器	甕	(20.1)	(9.7)	—	276.1	10	群東	片	良好	にぶい	指頭痕	
29	土師器	甕	15.0	(13.5)	—	657.4	30	埴南	雲、角	普通	にぶい	No.34	78-4
30	土師器	甕	15.4	(8.8)	—	379.3	20	茨西	雲	普通	にぶい	No.14	78-5
31	土師器	甕	(17.8)	(16.8)	—	384.5	20	群東	角	普通	にぶい	No.30	
32	土師器	甕	20.8	(22.6)	—	1991.3	70	茨西	角、軽	普通	にぶい	No.20、SJ81カマドNo.1	90-3
33	土師器	甕	18.9	(19.3)	—	552.7	20	栃南	雲、角、軽	普通	にぶい		
34	土師器	甕	20.6	33.3	(7.6)	3473.8	80	群東	雲、角	普通	にぶい	No.22	90-4
35		編物石	長さ13.8幅5.1厚さ3.7重さ320.0				100						
36	石製品	有溝砥石	長さ6.1幅4.3厚さ3.1重さ30.1				—					角閃石安山岩 砂岩	

## 第80号住居跡 (第215～217図)

調査区南西、L・M-7グリッドに位置する。第72・73・77・87・92号住居跡、第13号土坑と重複し、新旧関係は、何れの遺構よりも新しい。

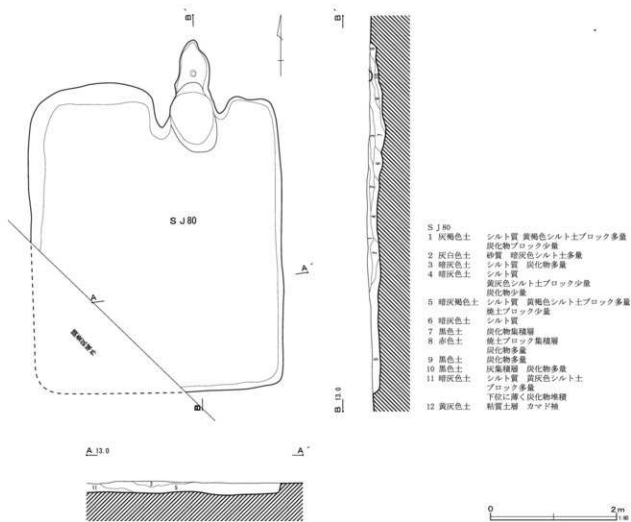
住居跡南西部は調査区域外に及ぶが、平面形は南北に長い長方形と推定される。規模は南北4.65m、東西3.95m、確認面からの深さは0.18mである。主軸方位はN-1°-Wである。

カマドは北壁のやや東寄りに設けられ、カマド方位はN-0°である。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は左袖72cm、右袖60cmで、黄灰色砂質土が用いられている。燃焼部は壁内に取まり、床

面より10～15cm掘り窪められる。煙道部とは僅かな段差をもち、外側へ向かって凹凸を繰り返しながら壁外へ87cm延びる。煙道部から正位の須恵器片が壁面から5cmほど浮いた状態で出土した。

遺物は土師器坏・甕、須恵器片が確認られ、混入と思われるものも見られた。第218図4の土師器坏は内外面に黒色処理されていた。鉄線片が2点出土し、同一個体の可能性もあるが接点はない。角閃石安山岩製の有溝砥石1点、大型の貝塚穴部凝岩1点が出土した。

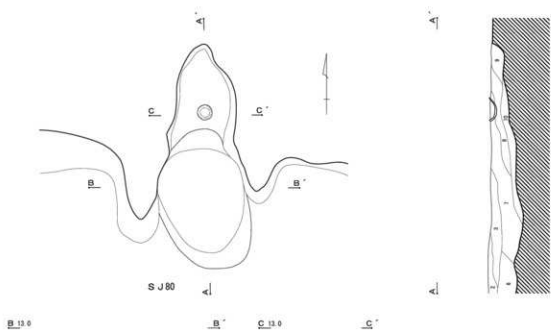
時期は8世紀第1四半期である。



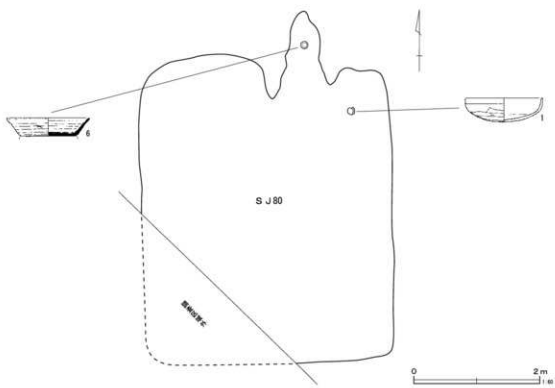
第215図 第80号住居跡

第77表 第80号住居跡出土遺物観察表 (第218図)

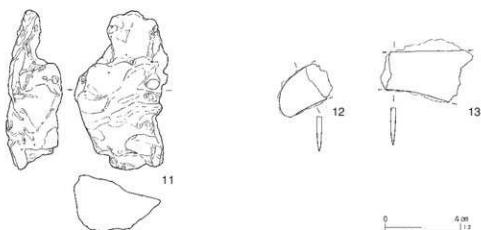
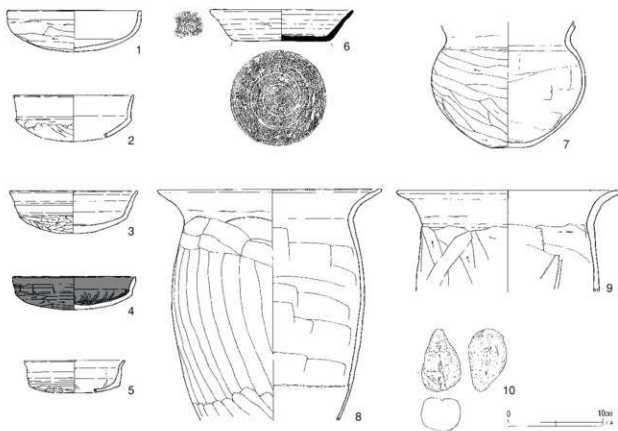
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	4.4	—	137.1	70	埴北	雲、角、軽	普通	にぶい橙	No.1	
2	土師器	坏	(12.7)	(4.5)	—	26.0	20	埴北	角	普通	橙		
3	土師器	坏	(13.5)	4.5	—	111.0	50	埴北	雲、角、軽	普通	橙		
4	土師器	坏	(12.9)	3.5	—	105.6	60	粉南	角	普通	にぶい橙		
5	土師器	坏	(10.7)	3.4	—	40.2	40	埴北	角	良好	明赤褐	トレンチ、SJ72	
6	須恵器	坏	(15.2)	3.3	10.3	182.1	80	南比企	針	良好	灰	No.2 ヘラ記号「X」	66-3
7	土師器	小型甕	—	(13.4)	(3.8)	177.4	25	埴北	角	良好	橙		
8	土師器	甕	23.5	(24.6)	—	1035.9	60	埴北	角、軽	普通	にぶい橙		91-1
9	土師器	甕	(23.2)	(10.8)	—	191.6	10	埴北	雲、角	普通	にぶい橙		
10	石製品	有溝砥石	長さ6.6幅4.1厚さ3.6	重さ35.5			—					角閃石安山岩	
11		貝殻六面泥田	長さ8.4幅4.7厚さ2.8	重さ30.5			—						
12	鉄製品	鎌	長さ(3.0)	刃幅2.0背幅0.3		20						13と同一個体か	98-28
13	鉄製品	鎌	長さ(4.9)	刃幅2.0～2.7背幅0.2		30						12と同一個体か	98-29



第216図 第80号住居跡カマド



第217図 第80号住居跡遺物出土状況



第218図 第80号住居跡出土遺物

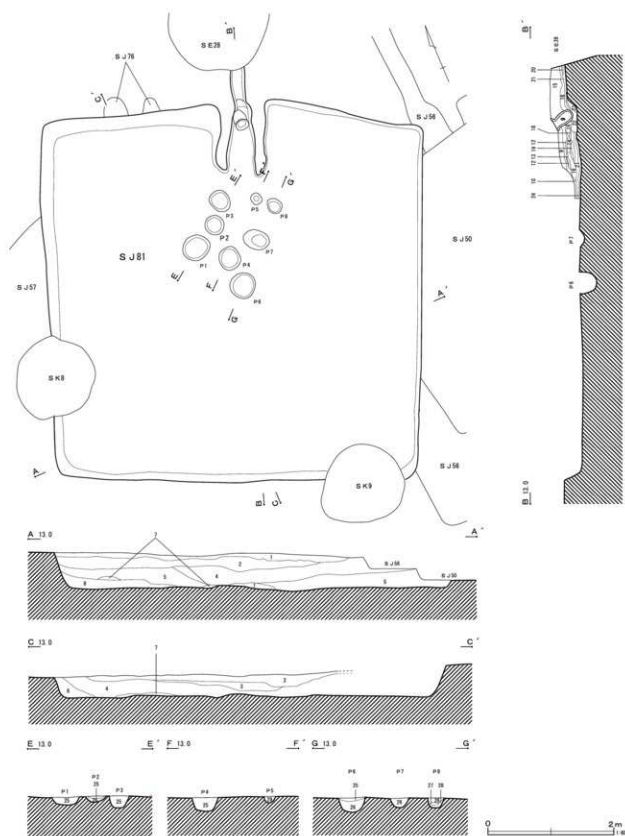
#### 第81号住居跡 (第219-221区)

調査区中央やや南寄り、K・L-8グリッドに位置する。第50・56・57・76号住居跡、第8・9号土坑、第28号井戸跡と重複しており、新旧関係はすべての遺構より古い。第50号住居跡に住居跡東側を、第9号土坑に南東コーナーを壊され、第28号井戸跡

にカマド煙道部先端を壊されている。

平面形は方形で、規模は東西6.07m、南北6.05m、確認面からの深さは0.5mである。主軸方位はN-24°-Eである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-20°-Eである。袖部は両側で確認され、壁からの



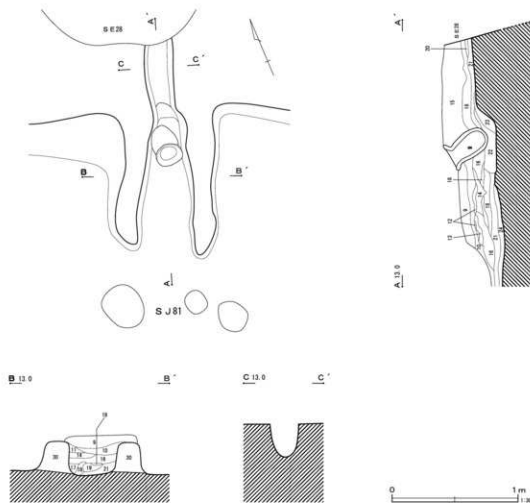
第219图 第81号住居跡

残存規模は左袖110cm、右袖120cmである。構築土には黄褐色粘土を多く含む灰色土が用いられ、内側は非常によく被熱し赤変していた。燃焼部は壁内に収まり、床面より僅かに低くなっているが、明瞭な掘り込みは見られない。煙道部は、燃焼部と15cmほどの明瞭な段差をもって接続する。煙道部は外側へ

向かって緩やかな傾斜をもち壁外に50cm延び、第28号井戸跡に壊されている。

燃焼部から土師器碗、甌が出土している。甌は左袖に接する位置で、火床面から10cmほど浮いて逆位で出土した。甌は左袖筋で斜位の状態で出土した。

カマド以外の施設は、カマド前面から住居跡中央



第220図 第81号住居跡カマド

S J 81

- 1 淡灰色土 砂質 粘性弱
- 2 褐色土 シルト質 灰白色シルト土少量
- 3 褐色土 粘土・炭化物粒子少量 炭化物集積層 焼土少量
- 4 黄灰色土 粘土質 焼土少量 炭化物多量
- 5 黄褐色土 7位に炭化物を絡層 砂質 粘性に強 粒子粗い
- 6 暗褐色土 シルト質 炭化物少量
- 7 暗褐色土 炭化物集積層
- 8 黄褐色土 砂質 炭化物少量 粘性強 粒子粗い

- 9 暗灰色土 砂質 炭化物少量
- 10 暗灰色土 砂質 焼土ブロック少量 炭化物少量
- 11 褐色土 砂質 焼土ブロック少量
- 12 黒色土 炭化物集積層 焼土ブロック少量
- 13 黄褐色土 シルト質
- 14 暗灰色土 砂質 焼土ブロック少量
- 15 褐色土 砂質
- 16 赤色土 焼土ブロック集積層
- 17 黄褐色土 シルト質 焼土ブロック・灰多量
- 18 暗灰色土 灰集積層

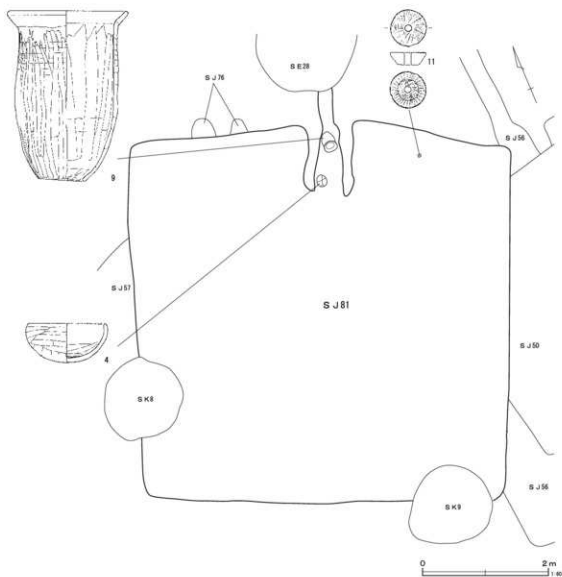
- 19 赤色土 焼土ブロック集積層
- 20 褐色土 砂質
- 21 暗灰色土 灰集積層
- 22 赤色土 焼土ブロック集積層
- 23 暗灰色土 灰集積層
- 24 黒色土 炭化物集積層
- 25 暗灰色土 灰集積層
- 26 赤褐色土 下位に焼土ブロック多量 焼土集積層 灰多量
- 27 黄褐色土 シルト質 焼土少量
- 28 暗灰色土 灰集積層 焼土多量
- 29 褐色土 炭化物集積層
- 30 灰色土 焼土ブロック少量 粘質土ブロック層 カマド跡

部にかけてピットが8基確認されている。覆土は何れも類似しており、炭化物、灰、焼土ブロックを多く含んでいる。平面形と規模は、P 1は円形で46×40cm、床面からの深さ12cm、P 2は円形で32×31cm、床面からの深さ8cm、P 3は円形で34cm、床面からの深さ20cm、P 4は円形で36×32cm、床面からの深さ22cm、P 5は円形で18cm、床面からの深さは10cm、P 6は円形で42×38cm、床面からの深さ22cm、P 7

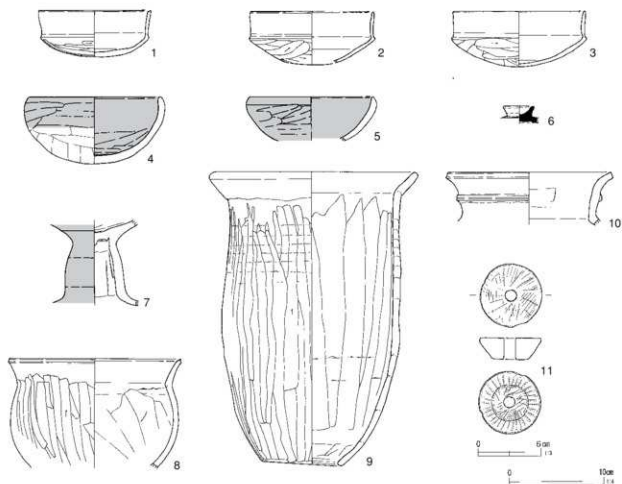
は楕円形で42×30cm、床面からの深さ16cm、P 8は楕円形で30×24cm、床面からの深さ18cmである。

遺物は土師器環・高環・鉢・甕・須恵器蓋が認められた。第222図4・5の土師器環、7の高環は赤彩されていた。蛇紋岩製の石製紡錘車が1点出土した。

時期は6世紀第1四半期である。



第221図 第81号住居跡遺物出土状況



第222図 第81号住居跡出土遺物

第78表 第81号住居跡出土遺物観察表 (第222図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(11.7)	4.9	—	114.8	70	埴北	角	普通	橙		66-4
2	土師器	環	(13.0)	(5.4)	—	40.4	20	埴北	角、軽	普通	橙		
3	土師器	環	(13.8)	5.8	—	65.4	25	埴北	角	普通	橙		
4	土師器	甕	14.0	7.1	—	376.3	100	茨西	雲、角	良好	にぶい橙	No.2	66-5
5	土師器	環	(13.0)	(4.7)	—	48.0	20	茨西	雲、角	普通	にぶい橙		
6	須恵器	蓋	3.1	(1.8)	—	19.2	5	畿内		良好	灰		
7	土師器	高環	—	(9.1)	—	226.7	20	群東	雲、角	普通	橙		
8	土師器	鉢	(18.2)	(11.6)	—	136.1	10	茨西	角	普通	にぶい橙		
9	土師器	甕	21.2	31.1	8.4	1935.0	70	茨西	雲、角、軽	普通	にぶい橙	カマFNo.1	91-2
10	土師器	甕	(17.3)	(5.5)	—	244.4	5	佐野	雲、角	普通	橙		
11	石製品	紡錘車	径4.9口径2.9厚さ1.7重さ57.2				100					カマFNo.3 蛇紋岩	95-24

第82号住居跡 (第223・224図)

調査区中央西寄り、K-7・8、L-7グリッドに位置する。住居跡北東の一部を攪乱によって壊されているほか、第54・58・64・71号住居跡、第1号溝跡と重複する。新旧関係は、第54・71号住居跡よ

りも新しく、重複する他の遺構よりも古い。

平面形は方形で、規模は東西6.55m、南北6.80m、確認面からの深さは0.35mである。主軸方位はN-26°-Eである。

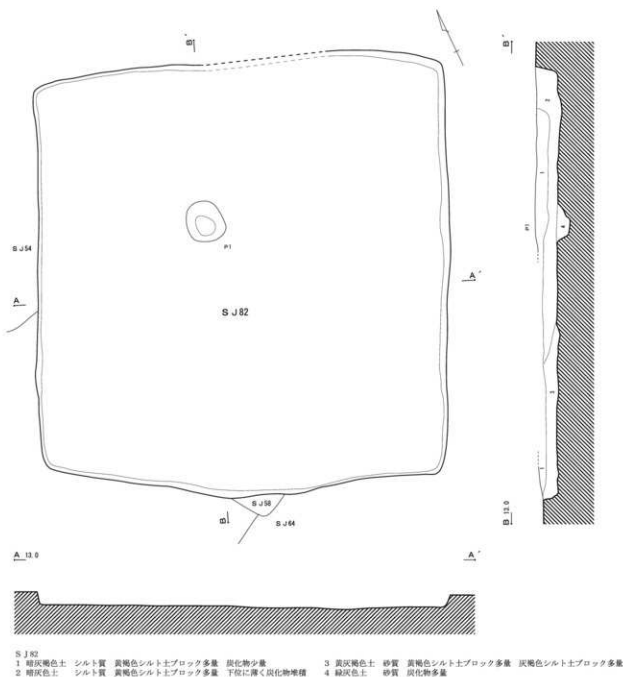
カマドは検出されなかった。



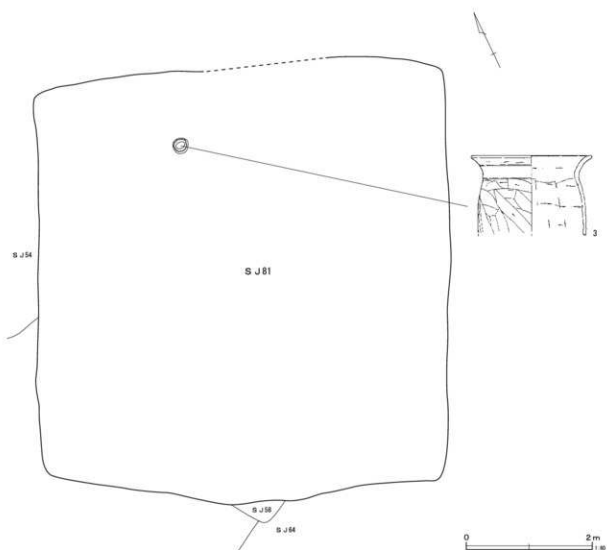
カマド以外の施設としては、壁溝とピット1基が確認されている。壁溝は住居跡北壁の東側で検出された。床面からの深さは4cmである。P1の平面形は方形で、規模は64×56cm、床面からの深さは20cmである。

遺物は土師器環・甕が認められた。第225図5の土師器甕は内面に、7は胴部外面に煤が付着している。欠けているが土製紡錘車が1点出土した。

時期は7世紀第四半期である。



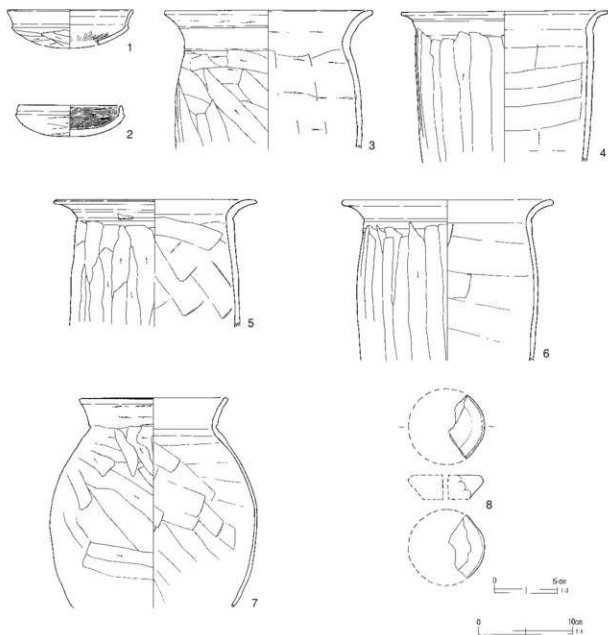
第223図 第82号住居跡



第224図 第82号住居跡遺物出土状況

第79表 第82号住居跡出土遺物観察表 (第225図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.3)	(3.7)	—	31.6	20	群東	角、軽	良好	にぶい黄緑		
2	土師器	坏	(10.8)	3.3	—	53.5	25	茨西	角	普通	褐灰		
3	土師器	甕	22.0	(14.7)	—	788.1	30	埴北	角、軽	普通	にぶい黄緑	No1	78-6
4	土師器	甕	(21.6)	(16.0)	—	275.7	10	埴南	雲	普通	にぶい黄緑		
5	土師器	甕	(21.6)	(13.5)	—	193.8	5	佐野	雲	普通	にぶい黄緑	内面に煤付着	
6	土師器	甕	(22.2)	(17.0)	—	218.2	5	佐野	雲、角	普通	にぶい黄緑		
7	土師器	甕	(15.3)	(22.2)	—	241.3	5	粉南	雲	普通	灰黄褐	胴部外面に煤付着	
8	土製品	紡錘車	径 (5.9)	厚さ (1.9)	重さ 19.5		25		角	普通	灰褐		95-25



第225図 第82号住居跡出土遺物

### 第83号住居跡 (第226図)

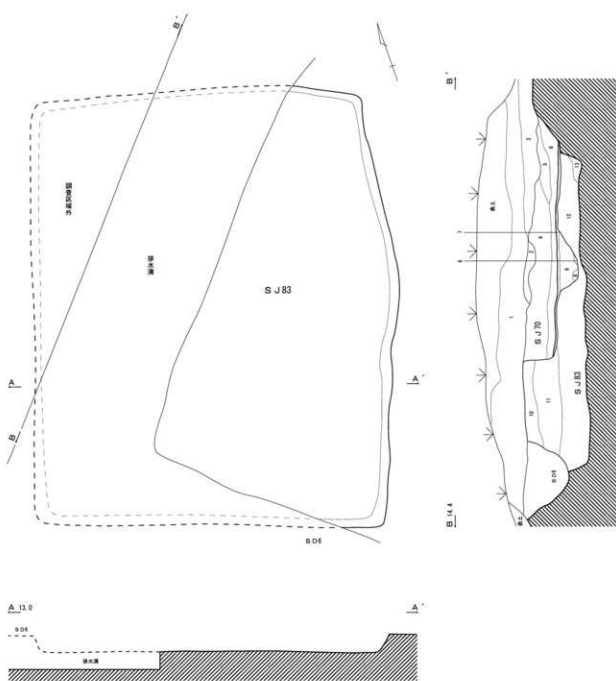
調査区西際、K-5・6グリッドに位置する。住居跡の西半部は調査区域外に及んでいる。また調査時の排水溝敷設により、平面的に確認できたのは住居跡東側半分である。第70・74号住居跡、第6号溝跡と重複し、新旧関係は第70号住居跡、第6号溝跡よりも古く、第74号住居跡よりも新しい。

推定される平面形は、南北にやや長い長方形で、

調査区壁の断面観察を元に推定した。検出された規模は南北6.80m、東西3.73m、確認面からの深さは0.32mである。主軸方位はN-19° - Eである。

遺物は覆土下層より出土し、土師器・高環・須恵器高環が認められた。第225図2・3の土師器環と5の高環には黒色処理されていた。

時期は6世紀第Ⅲ四半期である。



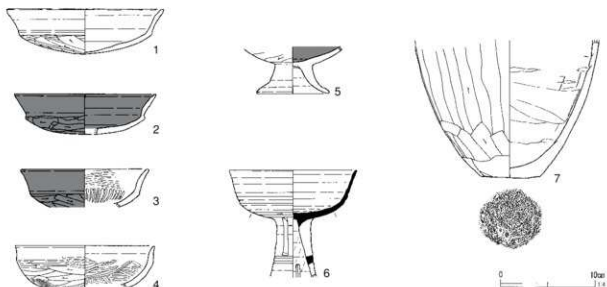
S J 70

- 1 灰色土 粘土質 炭化物多量
- 2 灰褐色土 砂質 粗砂多量
- 3 褐色土 シルト質 黄灰色砂質土多量
- 4 灰褐色土 シルト質 黄褐色シルト土ブロック少量
- 5 褐色土 炭化物少量 土層片少量
- 6 黄褐色土 シルト質 土層片少量
- 7 黄灰色土 シルト質 (粘り味)

8 暗褐色土

- 9 黒色土 炭化物塊層
- 10 褐色土 シルト質 炭化物少量
- 11 褐色土 シルト質 暗褐色粘質土少量
- 12 黄灰色土 黄灰色砂質土多量 炭化物少量
- 13 青灰色土 砂質 褐色シルト土ブロック不平等多量

第226図 第83号住居跡



第227図 第83号住居跡出土遺物

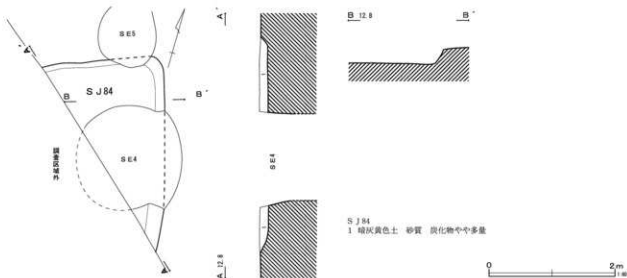
第80表 第83号住居跡出土遺物観察表 (第227図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(17.1)	4.8	—	121.8	40	群東	雲、角、軽	良好	橙		
2	土師器	坏	(15.0)	4.3	—	45.1	20	群東	雲	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	(13.5)	(4.0)	—	23.5	10	茨西	雲、角、軽	普通	褐灰		
4	土師器	坏	(14.8)	(4.6)	—	43.5	20	佐野	角	良好	にぶい黄橙		
5	土師器	高坏	—	(5.0)	7.7	112.1	50	埜北	角、軽	良好	橙		
6	須恵器	高坏	(13.5)	(11.4)	—	155.9	25	金山		普通	灰	SJ74 長脚二段三方通	79-1
7	土師器	甕	—	(14.6)	6.4	832.2	20	下総	雲、角	普通	にぶい橙		

第84号住居跡 (第228図)

調査区南側、M-7・8グリッドに位置する。住居跡の大半が調査区外に及んでおり、検出された

のは住居跡北東コーナーのみである。第4・5号井戸跡と重複し、住居跡東壁および床面を壊されている。新旧関係は、何れの井戸跡よりも古い。



第228図 第84号住居跡

平面形は不明である。検出された規模は東西1.93m、南北3.10m、確認面からの深さは0.13mである。東壁の方位はN-17°-Wである。

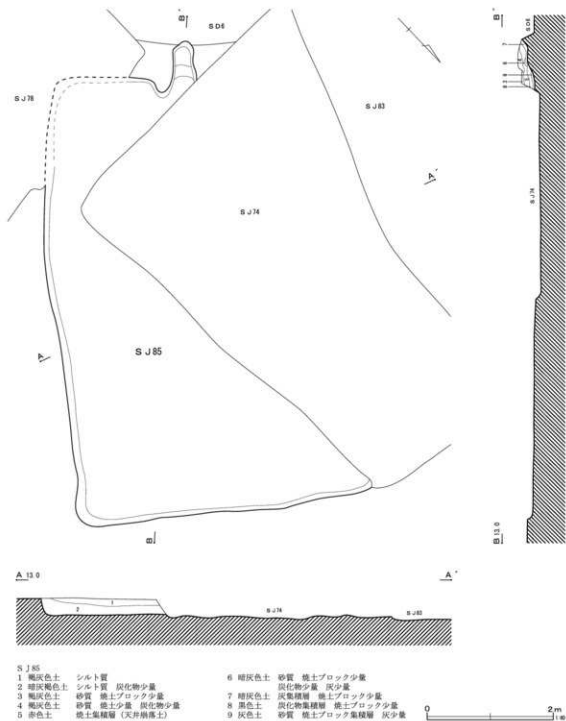
遺物は土師器の小片が極少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠け、重複する井戸跡

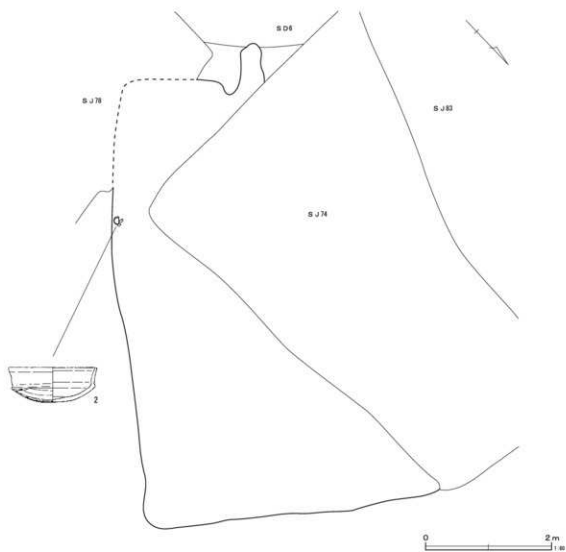
との関係からは中世以前とするしかない。

#### 第85号住居跡 (第229・230図)

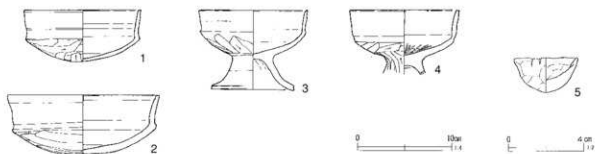
調査区西側、K-6グリッドに位置する。第74・78・83号住居跡、第6号溝跡と重複し、新田関係はいずれの遺構よりも古い。第74号住居跡に住居跡西



第229図 第85号住居跡



第230図 第85号住居跡遺物出土状況



第231図 第85号住居跡出土遺物

第81表 第85号住居跡出土遺物観察表 (第231図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.2	5.5	—	120.3	60	群東雲	雲	良好	橙		66-6
2	土師器	坏	(15.8)	(6.3)	—	280.8	70	群東雲	雲	普通	にぶい橙	No.1 外面底部に埋付着	66-7
3	土師器	高坏	11.4	8.4	(8.8)	225.3	80	群東雲・角	雲・角	普通	にぶい橙	カマド	79-2
4	土師器	高坏	(11.8)	(6.8)	—	123.5	25	新治雲	雲	良好	にぶい橙	カマド	
5	土製品	ミニチュア	(3.4)	(1.8)	—	4.5	50	角	角	普通	にぶい橙	カマド	

側の大半を壊されているほか、第78号住居跡に南東コーナーを壊されている。

平面形は南北に長い長方形と考えられる。検出された規模は、東西4.70m、南北7.00m、確認面からの深さは0.28mである。主軸方位はS-39°-Wである。

カマドは住居跡南壁に設けられ、カマド方位はS-45°-Wである。煙道部先端を第6号溝跡に、また右袖を第74号住居跡に壊されている。袖部は左側のみ確認され、壁からの残存規模は28cmである。燃焼部はほぼ壁内に収まり、15~20cmの明瞭な段差をもって煙道部へと接続する。煙道部は先端を他遺構に切られているが、立ち上がりから推測する限りこれより大きく外側へは延びない。

遺物は土師器環・高環が認められた。第231図2の土師器環の外周底部には煤が付着していた。ミニチュア土器が1点出土した。

時期は6世紀第I四半期である。

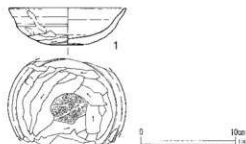
#### 第86号住居跡 (第232図)

調査区南西側、L-6グリッドに位置する。第90号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

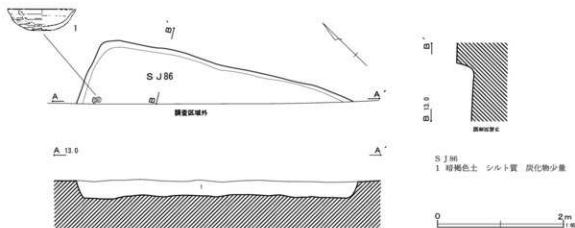
住居跡の大半は調査区域外に及ぶため、平面形は不明である。検出された規模は、東西1.05m、南北4.10m、確認面からの深さは0.30mである。東壁を基準とした方位はN-31°-Wである。床面は検出されたほぼ全面に貼り床が貼られていた。調査区際で土師器環が出土した。

出土遺物は少量で、図示できたのは土師器環1点のみである。外周底部に木炭痕が観察された。

時期は7世紀第IV四半期である。



第232図 第86号住居跡出土遺物



第233図 第86号住居跡

第82表 第86号住居跡出土遺物観察表 (第232図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	12.3	3.9	3.8	134.2	80	佐野角		普通	にぶい黄緑	No.1 木炭痕	



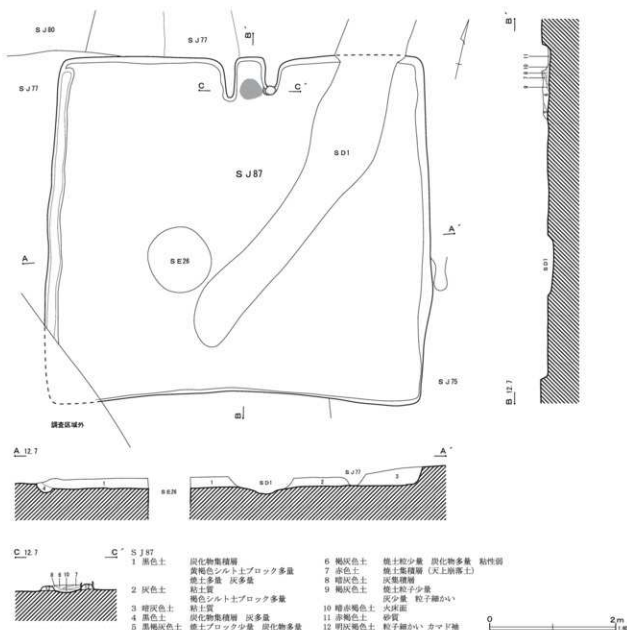
第87号住居跡 (第234・235図)

調査区南側、L・M-7・8グリッドに位置する。第75・77・80号住居跡、第26号井戸跡、第1号溝跡と重複し、新旧関係はすべての遺構よりも古い。住居跡南西コーナーは調査区域外に及んでいる。

平面形状は東西に長い長方形で、規模は東西6.15m、南北5.55m、確認面からの深さは0.25mである。主軸方位はN-13°-Wである。

カマドは北壁中央に設けられ、カマド方位はN-

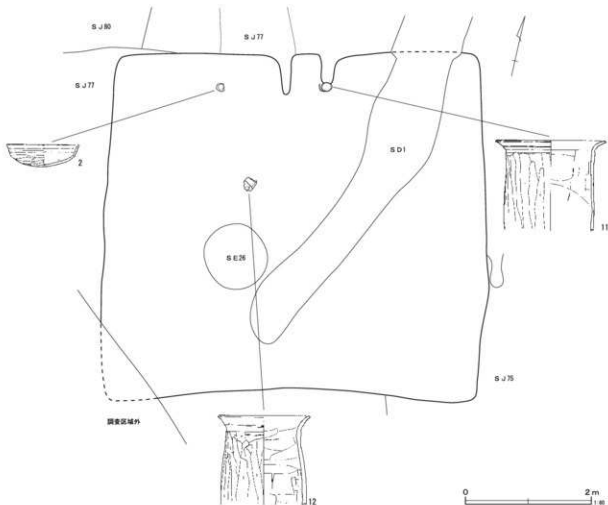
11°-Wである。煙道部は上層遺構によって壊されており、燃焼部と袖部の検出にとどまった。袖部は両側で確認され、壁からの残存規模は、左袖66cm、右袖60cmで、構架土には明灰褐色土を用いている。右袖先端部には土銅器臺を倒立させて補強材としていた。燃焼部は壁内に取まり、床面より僅かに低い位置にあるが、明瞭な掘り込みは見られない。燃焼部では被熱箇所を確認している。燃焼部の規模は、奥行き70cm、幅58cmである。



第234図 第87号住居跡

遺物は土師器環・小型甕・甕、須恵器環が認められた。第236図1・3・4・5の土師器環は黒色処理され、7は赤彩されていた。先端を欠損した刀子

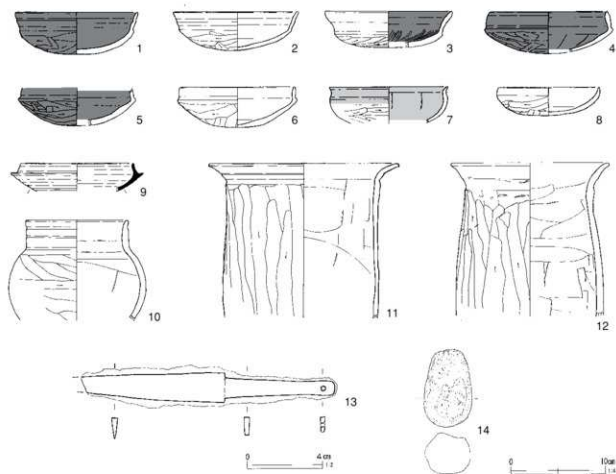
1点、角閃石安山岩製の有溝砥石1点が出土した。時期は7世紀第Ⅱ四半期である。



第235図 第87号住居跡遺物出土状況

第83表 第87号住居跡出土遺物観察表 (第236図)

番号	種別	器種	I径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.8)	4.5	—	77.7	40	群東	角	普通	浅黄橙		
2	土師器	環	13.1	4.1	—	121.9	80	埜北	角	良好	にぶい黄橙	No.3	66-8
3	土師器	環	(13.4)	(3.8)	—	43.7	20	芸西	角	良好	にぶい黄橙		
4	土師器	環	(12.3)	(4.3)	—	93.1	40	埜北	雲	普通	にぶい橙		
5	土師器	環	—	(4.0)	—	38.6	25	埜北	角	普通	にぶい橙		
6	土師器	環	(12.0)	4.3	—	76.1	40	楊南	角	普通	にぶい橙		
7	土師器	環	(12.5)	(3.9)	—	19.7	10	埜北	角	良好	橙		
8	土師器	環	10.6	3.0	—	77.2	80	埜北	雲、角	普通	にぶい橙		66-9
9	須恵器	坏身	(11.9)	(3.0)	—	22.2	10	湖西	角	良好	灰白		
10	土師器	小型壺	10.8	(10.6)	—	269.3	30	埜北	角	普通	普通	SJ77掘り方	79-3
11	土師器	甕	20.2	(16.4)	—	540.8	40	埜北	雲、角	普通	にぶい黄橙	No.2	
12	土師器	甕	(16.6)	(16.3)	—	500.9	20	佐野	角	普通	橙	No.1	
13	鉄製品	刀子	長1 (11.0) 短1 (7.0) 基部径3.0(輪径1.5)幅0.3				95						
14	石製品	有溝砥石	長さ8.3幅5.0厚さ4.5重さ84.2				—					角閃石安山岩	98-23



第236図 第87号住居跡出土遺物

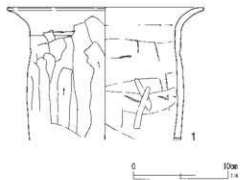
第88号住居跡 (第237図)

調査区南側、L-7グリッドに位置する。第72・77・80・87号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも古い。

周りを他の住居跡に壊され、床面の一部を検出したのみで平面形状は不明である。検出された規模は東西3.50m、南北1.40m、確認面からの深さ0.15mである。

出土遺物は極めて少量で、土師器甕が1点図示できたのみである。しかし、この土器は重複する他の住居跡との関係から本住居跡に伴うとは考え難い。

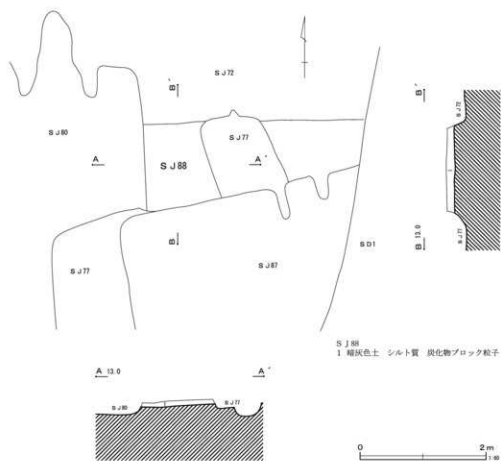
時期は、重複する第87号住居跡から7世紀Ⅱ四半期以前と考えられる。



第237図 第88号住居跡出土遺物

第84表 第88号住居跡出土遺物観察表 (第237図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(21.0)	(14.1)	—	154.7	5	佐野	角	良好	にぶい黄緑		



第238図 第88号住居跡

第89号住居跡 (第209図)

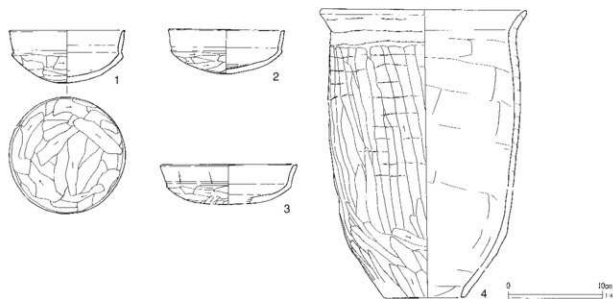
調査区西側、L-6グリッドに位置する。第26・79号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも古い。第79号住居跡よりも床面が僅かに浅く、住居跡南側の一部しか残っていないため、平面形は不明である。

検出された規模は東西4.00m、南北0.90m、確認面からの深さは0.27mである。主軸方位はS-84°-Eである。

出土遺物は多くなく、土師器環・甕が認められた。時期は5世紀第IV四半期である。

第85表 第89号住居跡出土遺物観察表 (第239図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	12.3	5.6	—	231.7	100	群東	雲、角	普通	橙		66-10
2	土師器	環	12.1	4.6	—	131.2	70	埴北	軽	普通	橙		67-1
3	土師器	環	(14.2)	4.2	—	50.4	25	群東	雲	良好	橙		
4	土師器	甕	21.5	30.6	8.5	1775.0	80	埴輪	雲、角、軽	普通	にぶい橙	SJ79	91-3

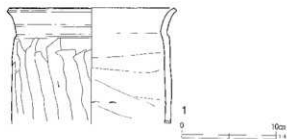


第239図 第89号住居跡出土遺物

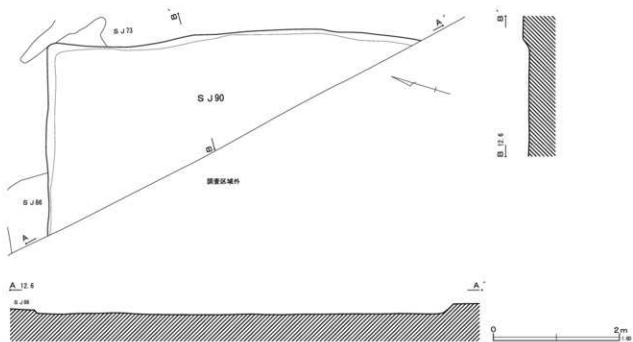
第90号住居跡 (第241図)

調査区南側、L-6・7、M-7グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区域外に及ぶ。第73・86号住居跡と重複し、その何れよりも古い。

平面形は不明である。検出された規模は、東西3.05m、南北5.95m、確認面から床までの深さは、



第240図 第90号住居跡出土遺物



第241図 第90号住居跡

もっとも深い地点で0.20mである。東壁を基準とした方位はN-17° -Wである。

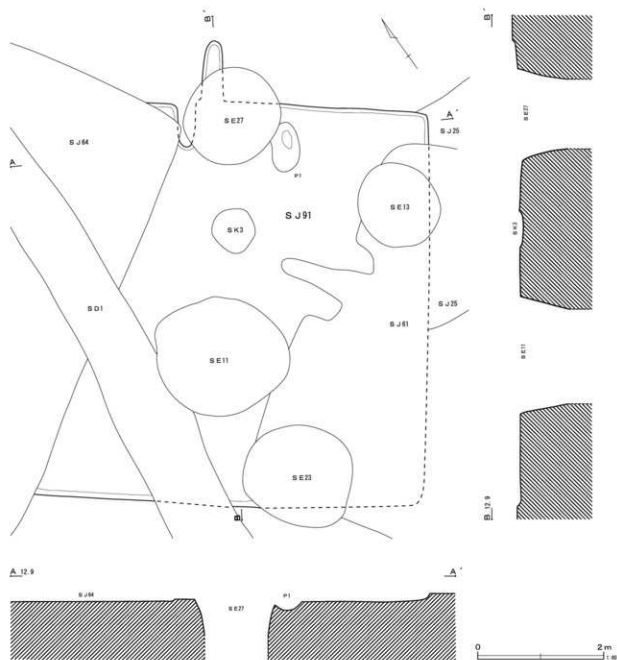
カマドおよびその他の施設は確認されなかった。出土遺物は極めて少量で、土師器甕が1点図示で

きたのみである。しかし、この土器は重複する他の住居跡との関係から本住居跡に伴うとは考え難い。

時期は、重複する第86号住居跡から7世紀第四半期以前と考えられる。

第86表 第90号住居跡出土遺物観察表 (第240図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	17.5	(12.4)	—	524.5	20	佐野	雲	普通	にぶい黄緑		79-4



第242図 第91号住居跡

### 第91号住居跡 (第242図)

調査区南側、L-7・8グリッドに位置する。第25・61・64号住居跡、第3号土坑、第11・13・23・27号井戸跡、第1号溝跡と重複しており、新旧関係は何れの遺構よりも古い。

各所を他遺構に壊されているため平面形は判然としな。検出された規模は東西4.45m、南北6.23m、確認面からの深さは0.09mである。主軸方位はN-38°-Eである。

カマドは北壁に設けられ、第64号住居跡と第27号井戸跡に壊されており、左袖の一部と煙道部先端が残存するに過ぎない。カマド方位はN-38°-Eである。左袖の残存規模は80cmである。煙道部は52cm残存しており、外側へ向かって緩やかに傾斜している。

カマド以外の施設としては、カマド左側でピット

を1基確認した。平面形は楕円形で、80×45cm、床面からの深さは13cmである。

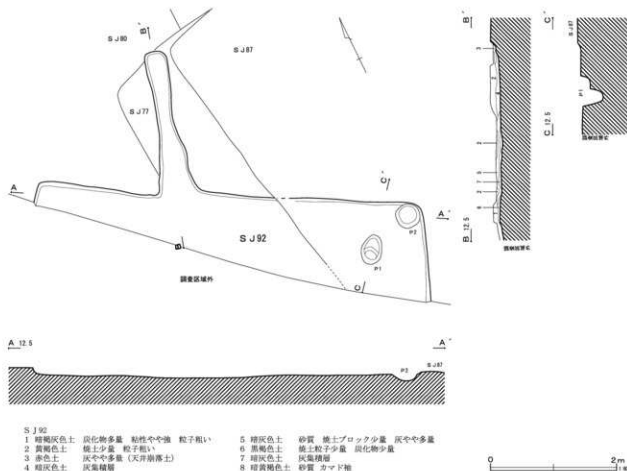
遺物は土師器小片が極めて少量で、図示できるものはない。

時期は遺物による決め手に欠けるが、周囲の住居跡との重複関係から7世紀第IV四半期以前と考えられる。

### 第92号住居跡 (第243図)

調査区南側、M-7グリッドに位置する。住居跡の大半は調査区域外に及び、カマドおよび住居跡北側を検出したのみである。第77・80・87号住居跡と重複し、新旧関係は何れの住居跡よりも古く、住居跡北壁の一部は第87号住居跡の壁溝に壊される。

平面形は不詳で、検出された規模は、東西6.18m、南北1.50m、確認面からの深さは0.12mである。主



第243図 第92号住居跡

軸方位はN-28°-Eである。

カマドは北壁西寄りに造られ、カマド方位はN-15°-Eである。袖部は両側ともに残存していない。燃焼部は掘り込みが見られず、床面と同じ高さである。煙道部へも段差を持たずに移行する。煙道部は外側へ向かって僅かに傾斜し、壁外へ230cm延びる。

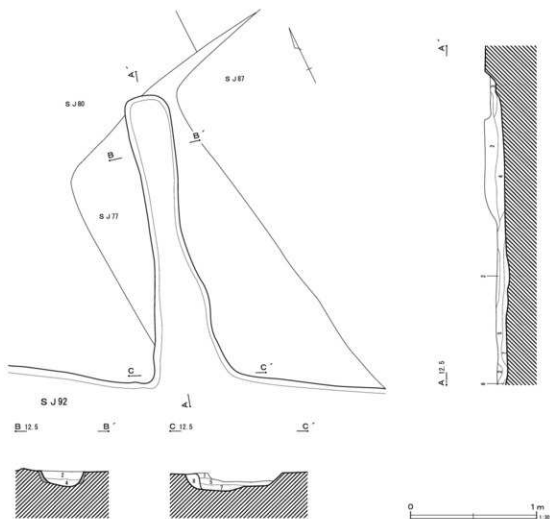
カマド以外の施設としては、北東コーナー付近でピットが2基確認されている。平面形と規模は、P1は楕円形で46×34cm、床面からの深さ35cm、P2は円形で径38cm、床面からの深さ11cmである。

出土遺物は少量で、土師器坏が2点図示できたのみである。第244図2は黒色処理がされていた。

時期は7世紀第Ⅱ四半期である。



第244図 第92号住居跡出土遺物



第245図 第92号住居跡カマド

第87表 第92号住居跡出土遺物観察表 (第244図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.9)	4.4	—	37.7	20	埴北	角、軽	良好	にぶい橙		
2	土師器	坏	(11.8)	(3.5)	—	27.0	20	埴北	角、軽	良好	灰褐色		



## 2. 土坑



第246図 土坑全体図

## 2. 土坑

### 第1号土坑 (第247区)

調査区の南端、M-7・8グリッドに位置する。第4号井戸跡と重複し、同井戸跡北側を切られている。

平面形は長円形で、規模は長径1.4m、短径1.25mで、深さは0.7mである。長軸方位はN-83°-Wである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第2号土坑 (第247区)

調査区の中央部、J-8グリッドに位置する。第48号住居跡の覆土中に掘り込まれ、床面も掘り抜いている。

平面形は円形で、規模は直径0.68m、深さは0.9mである。断面形状は円筒状である。

遺物は出土していないが、覆土の観察から第1号溝跡や井戸跡と同時期と考えられる。

### 第3号土坑 (第247区)

調査区の中央やや南寄り、L-8グリッドに位置する。第91号住居跡と重複し、本土坑が新しい。

平面形はほぼ円形で、規模は直径0.9m、深さは0.4mである。断面形状は浅い円筒状である。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第5号土坑 (第247区)

調査区の中央やや北寄り、I・J-9グリッドに位置する。第35・60号住居跡と重複し、新旧関係は第60号住居跡より古く、第35号住居跡より新しい。

平面形は円形で、規模は直径1.6m、深さは0.58mである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第6号土坑 (第247区)

調査区の中央やや北寄り、I・J-9グリッドに位置する。第23・33・35号住居跡と重複し、いずれ

の住居跡にも切られている。

平面形は円形で、規模は直径0.95m、深さは0.35mである。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

### 第7号土坑 (第247区)

調査区の中央西寄り、J-7グリッドに位置する。

平面形はほぼ円形で、規模は長径0.97m、短径0.84mで、深さは0.3mである。

遺物は覆土下層の底面付近より土師器高環が出土している。

時期は5世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

### 第8号土坑 (第247区)

調査区の中央、K・L-8グリッドに位置する。第81号住居跡と重複し、同住居跡より新しい。

平面形は円形に近く、規模は長径1.35m、短径1.12mで、深さは0.22mである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第9号土坑 (第247区)

調査区の中央やや南寄り、L-8グリッドに位置する。第81号住居跡と重複し、本土坑が新しい。

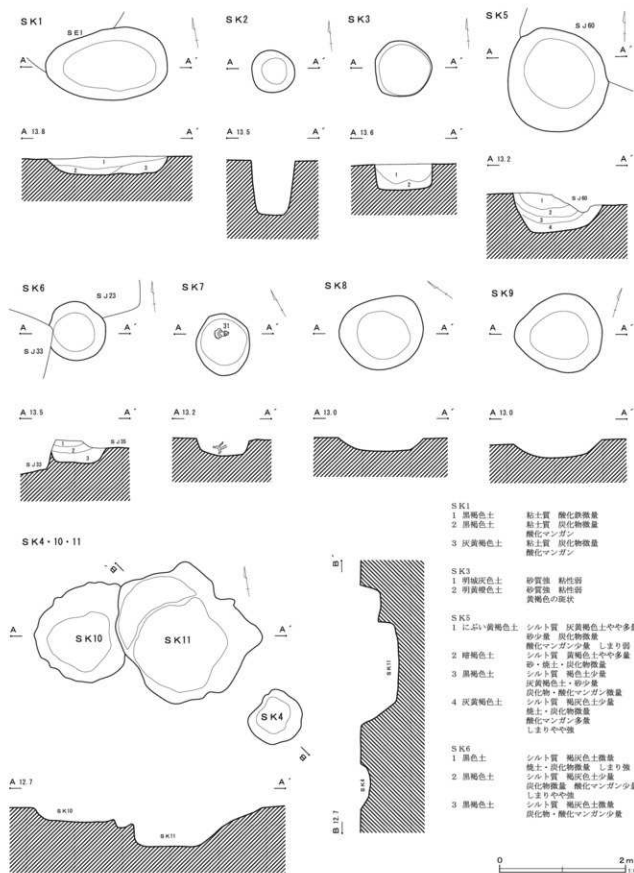
平面形は不整形で、規模は長径1.4m、短径1.2mで、深さは0.24mである。断面形状は浅い鉢状である。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第10号土坑 (第247区)

調査区の南西側、L-7グリッドに位置する。第72号住居跡と重複するほか、第11号土坑と接し、第15号土坑とも近接する。第11号土坑とは切り合っているが、調査時の覆土の観察から、同じ時期のもの判断される。本土坑は第72号住居跡の覆土中より掘り込まれている。

平面形は不整形で、規模は長径1.65m、短径



第247図 土坑 (1)

1.5mで、深さは0.15mである。土坑底面、壁面ともに平坦な面を確認しづらく、ところどころあばた状に窪んでいる。覆土には炭化物が比較的多く見られた。

時期の明確な遺物は確認されていないが、検出状況から第72号住居跡の覆土が埋まりきる、古墳時代後期のものと考えられる。

#### 第11号土坑 (第247図)

調査区の南西側、L-7グリッドに位置する。第72号住居跡と重複するほか、第10号土坑と接し、第15号土坑とも近接する。第10号土坑とは切り合いを見せるが、同時期のものと判断した。

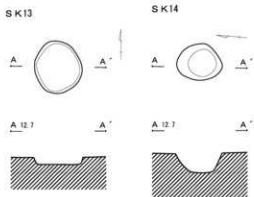
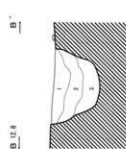
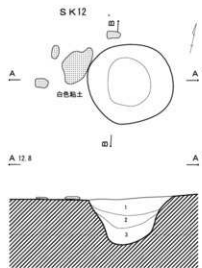
平面形は不整形円形で、テラス状の面をもつ。規模は長径2.32m、短径1.91m、深さは0.62mである。長軸方位はN-36°-Wである。第10号土坑同様、ところどころあばた状に窪んでいる。覆土には炭化物が比較的多く見られたほか、馬歯が確認された。

遺物は多量に出土し、土師器杯・甕、須恵器蓋・壺が認められた。

時期は7世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

#### 第12号土坑 (第248図)

調査区の西側、L-6グリッドに位置する。第78



SK12  
1 暗灰色土 シルト質 炭化物少量  
2 灰色土 粘土質 粘土少量 炭化物多量 下段に炭化物堆積  
3 灰色土 粘土質 炭化物少量

第248図 土坑 (2)

号住居跡調査中に確認され、覆土下層から床面を掘り抜いていた。

平面形はほぼ円形で、規模は直径1.35m、床面からの深さ0.72mである。土坑の周囲に白色粘土が散乱した状態で検出された。

出土遺物は少量で、土師器高杯・甕が認められた。

時期は6世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

#### 第13号土坑 (第248図)

調査区の南西側、L-7グリッドに位置する。第80号住居跡と重複し、同住居跡より新しい。

平面形はほぼ円形、規模は長径0.82m、短径0.75mで、深さは0.11mである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### 第14号土坑 (第248図)

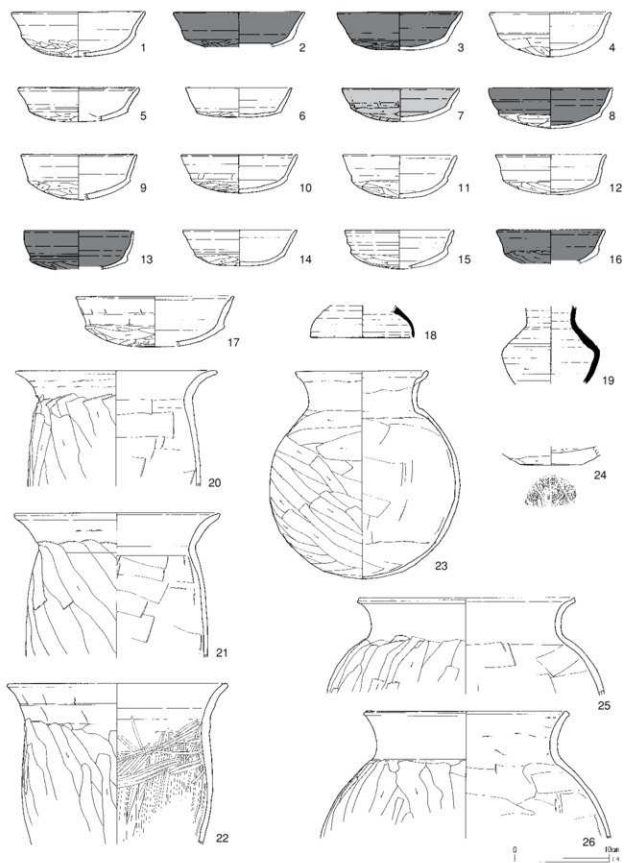
調査区の南西側、L-7グリッドに位置する。第64号住居跡と重複し、同住居跡より古い。

平面形は不整形円形で、規模は長径0.72m、短径0.58mで、深さは0.3mである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### 第15号土坑 (第247図)

調査区の南西側、L-7グリッドに位置する。第

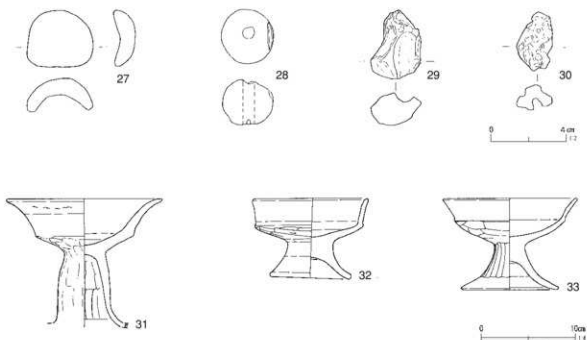


第249图 土坑出土遗物 (1)

72号住居跡と重複するほか、第10・11号土坑と近接する。

平面形は不整形円形、規模は長径0.85m、短径0.7mで、深さは0.15mである。

第10・11号土坑とは規模こそ違うものの、検出地点や平面形、底面や壁面の様子から、同じ古墳時代後期の所産と考えられる。



第250図 土坑出土遺物(2)

第88表 土坑出土遺物観察表(1)(第249図)

番号	副号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	11	土師器	坏	(14.2)	(4.7)	—	49.9	25	英西	雲、角	良好	にぶい橙		
2	11	土師器	坏	13.9	(3.8)	—	81.0	40	埴北	角	良好	灰褐		
3	11	土師器	坏	(13.2)	4.0	—	63.5	30	埴北	角	良好	にぶい黄橙		
4	11	土師器	坏	(12.8)	4.7	—	83.3	40	埴北	角	良好	にぶい黄橙		
5	11	土師器	坏	(12.8)	(3.6)	—	44.8	30	埴北	角	良好	にぶい橙		
6	11	土師器	坏	(11.3)	3.1	—	42.8	30	埴北	角	良好	にぶい赤褐		
7	11	土師器	坏	(12.4)	3.5	—	74.3	50	埴北	角	良好	灰黄褐		
8	11	土師器	坏	(13.0)	4.3	—	78.3	40	埴北	角	良好	にぶい黄橙		
9	11	土師器	坏	(12.2)	(4.8)	—	51.4	30	埴北	角	良好	にぶい橙		
10	11	土師器	坏	(12.4)	4.0	—	63.4	40	埴北	雲、角	良好	にぶい橙		
11	11	土師器	坏	(12.0)	4.6	—	60.3	50	埴北	角	良好	にぶい褐	指頭痕	
12	11	土師器	坏	(11.6)	4.2	—	60.4	50	埴北	角	良好	灰黄褐		
13	11	土師器	坏	(11.6)	(4.1)	—	37.4	30	埴北	角	良好	橙		
14	11	土師器	坏	(12.0)	3.8	—	64.5	50	埴北	角	普通	にぶい褐		
15	11	土師器	坏	(11.5)	4.1	—	56.8	40	埴北	角	良好	にぶい黄橙		
16	11	土師器	坏	11.4	(3.6)	—	42.8	40	埴南	角	良好	にぶい黄橙		
17	11	土師器	坏	(16.6)	(5.3)	—	104.3	30	埴北	角	普通	灰黄褐		
18	11	須恵器	坏蓋	(10.9)	(3.4)	—	25.8	20	不明		良好	灰		
19	11	須恵器	壺	—	(8.3)	—	75.0	20	不明	雲	普通	灰白		
20	11	土師器	甕	21.2	(12.3)	—	429.5	20	埴北	角	普通	灰黄褐		
21	11	土師器	甕	(21.6)	(15.4)	—	377.7	20	埴北	角	良好	にぶい橙		
22	11	土師器	甕	(23.2)	(17.0)	—	518.1	20	英西	角、軽	普通	にぶい黄橙		79-5

第89表 土坑出土遺物観察表 (2) (第249・250図)

番号(図)	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
23	11	土師器	甕	13.8	22.0	—	941.1	80	埼玉	角	普通	にぶい黄緑	外面黒灰	91-4
24	11	土師器	甕	—	(2.0)	(6.6)	55.7	5	茨西	角	普通	にぶい黄緑	木炭痕	
25	11	土師器	甕	(23.0)	(10.4)	—	314.4	10	群馬	雲、角	良好	にぶい黄緑	煤付着	
26	11	土師器	甕	21.4	(13.5)	—	601.7	20	群馬	雲	良好	にぶい黄緑		79-6
27	11	土製品	不明品	長さ3.0幅3.5厚さ0.8重さ11.8				100		角	普通	焼灰		
28	11	土製品	土玉	径2.9孔径0.6厚さ2.4重さ15.4				95		雲、角、軽	普通	暗赤褐		93-23
29	11			長さ3.6幅2.7厚さ1.7重さ10.1				—				灰赤		
30	11			長さ3.0幅1.9厚さ1.3重さ3.3				—				灰褐		
31	7	土師器	高坏	(16.2)	13.6	—	468.4	70	群馬	角	普通	橙	No1	80-1
32	12	土師器	高坏	(12.6)	8.6	8.3	262.4	60	佐野	角、軽	良好	明赤褐		80-2
33	12	土師器	高坏	(14.1)	9.6	10.0	203.4	50	茨西	雲、角	良好	橙		80-3

### 3. 井戸跡

第2次調査区で検出された井戸跡は23基である。平面形はいずれも円形で、素掘りのものである。形状は円筒状、漏斗状、有段のものがある。何れの井戸跡も掘り下げ途中で湧水が激しくなり、底面の検出はできなかった。

遺物を出土した井戸跡は少ないが、第2号井戸跡のほか数基の井戸跡でかわらけ、陶磁器類が確認されており、主に15～16世紀の所産と考えられる。井戸跡の大半がⅢ区曲溝(第1号溝跡)の内側に所在するという分布から、井戸跡と溝跡の関係が推察される。

#### 第1号井戸跡 (第252図)

調査区の南際、N-8グリッドに位置する。第28号住居跡と重複し、同住居跡よりも新しい。

平面形は円形で、規模は長径1.17m、短径1.02mである。やや下方へいくにつれややすぼまるが、ほぼ円筒状である。確認面からの深さ0.95mまで検出した。

遺物は磁器の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第2号井戸跡 (第253図)

調査区の南東際、M・N-9グリッドに位置する。平面形は直径1.12mの円形で、ややすぼまりを見

せるがおおむね円筒状に掘られている。確認面からの深さ0.75mまでを検出した。

遺物は、覆土上層からかわらけ11枚がまとまって出土した。出土レベルは北側が高く、南側が低く、北側から流れ込んできた状態を示している。

#### 第3号井戸跡 (第254図)

調査区の南際、M・N-8グリッドに位置する。第28号住居跡と重複し、住居跡より新しい。

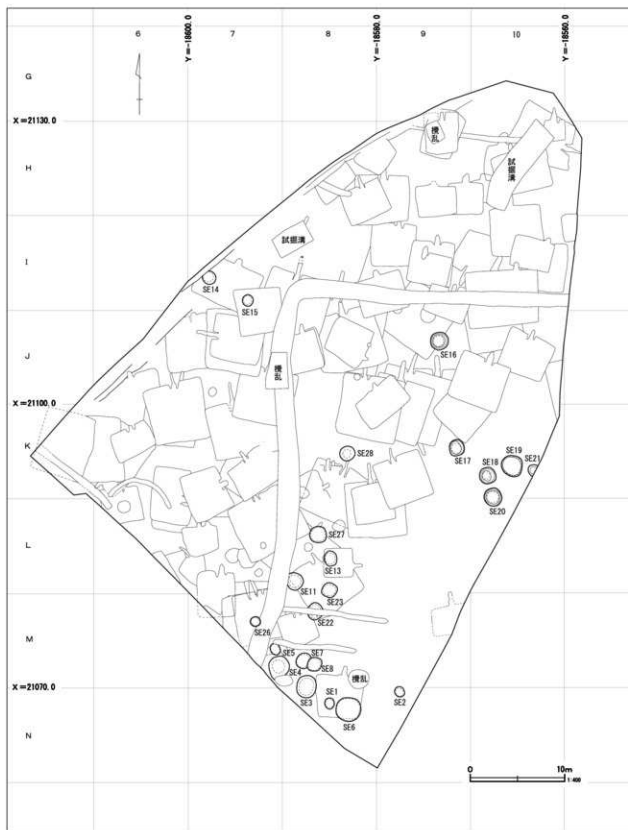
平面形は南北にやや長い長円形である。確認面より0.8mまでは漏斗状に掘り込まれ、これ以下は円筒状になるようである。規模は長径2.4m、短径2.1mである。確認面からの深さ1.15mまでを検出した。

遺物は香炉、すり鉢、徳利、片口鉢が認められた。

#### 第4号井戸跡 (第255図)

調査区の南際、M-7・8グリッドの第3号井戸跡西隣に位置する。第1号土坑と重複し、土坑より新しい。

平面形は円形で、確認面から0.4mの深さで段を持つように掘り込まれている。段上部は直径1.7mの円筒状でやや開き気味に立ち上がり、確認面での直径は2.57m、下部は直径1.05mの円筒状でほぼ垂直に落ち込む。確認面からの深さ1.0mまでを検出した。



第251図 井戸跡全体図



遺物は厩刃から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

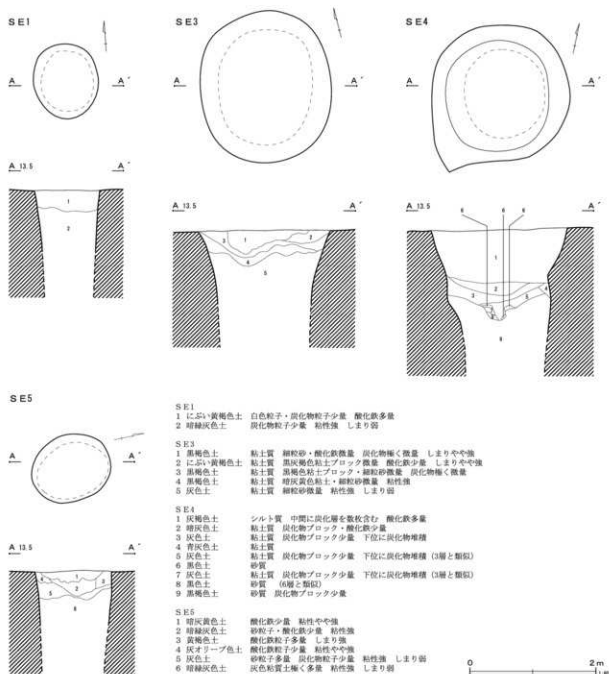
#### 第5号井戸跡 (第252㌻)

調査区の南際、M-7グリッドの第4号井戸跡北側に位置する。第2号溝跡と重複し、同溝跡より新

しい。

平面形状は長円形で南北方向にやや長い。規模は長径1.27m、短径1.05mで、円筒状に掘り込まれる。確認面からの深さ0.90mまでを検出した。

遺物は厩刃の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。



第252㌻ 井戸跡 (1)

### 第6号井戸跡 (第254区)

調査区の南際、N-8グリッドの第1号井戸跡東側に位置する。第28号住居跡と重複し、同住居跡よりも新しい。

平面形は直径2.66mの円形で、円筒状に掘り込まれている。確認面からの深さ1.05mまでを検出した。

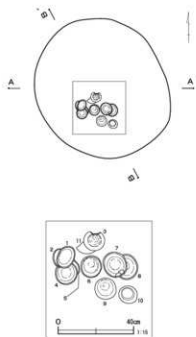
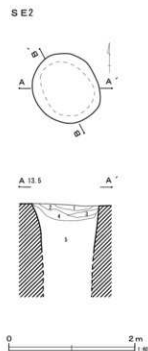
遺物は周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

### 第7号井戸跡 (第254区)

調査区の南際、M-8グリッドの第3号井戸跡北側に位置する。第8号井戸跡と重複し、本井戸跡が古い。

平面形は円形と思われ、規模は残存している南北方向で径1.7mである。漏斗状に掘り込まれるものと考えられる。確認面からの深さ1.05mまでを検出した。

遺物は出土していない。



### 第8号井戸跡 (第254区)

調査区の南際、M-8グリッドに位置する。第7号井戸跡と重複し、同井戸跡より新しい。

平面形は楕円形で、規模は長径1.68m、短径1.47mである。円筒状に掘り込まれている。確認面からの深さ1.05mまでを検出した。

遺物は、かわらけや周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

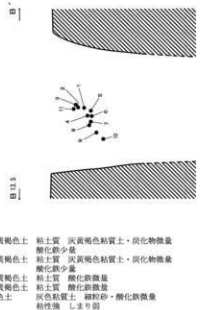
### 第9号井戸跡 欠番

### 第10号井戸跡 欠番

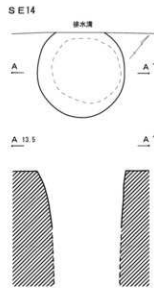
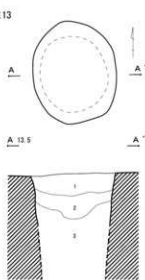
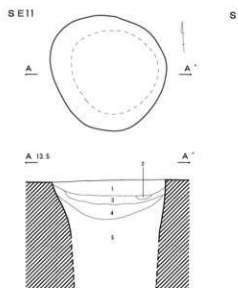
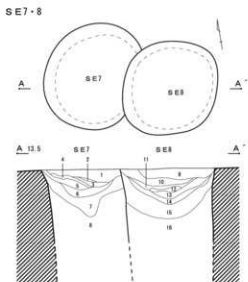
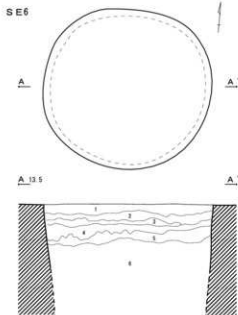
### 第11号井戸跡 (第254区)

調査区の南寄り、L-8グリッドに位置する。第61号住居跡と重複し、同住居跡より新しい。

平面形はやや歪んだ円形で、規模は長径1.89m、短径1.77mである。西側半分はやや傾斜を持った漏斗状に掘り込まれるが、東側半分は垂直に近く掘り



- S E 2
- |    |       |                   |
|----|-------|-------------------|
| 1  | 灰黄褐色土 | 粘土質 灰黄褐色粘質土・炭化物微量 |
| 2  | 灰黄褐色土 | 炭化物少量             |
| 3  | 灰黄褐色土 | 粘土質 灰黄褐色粘質土・炭化物微量 |
| 4  | 灰黄褐色土 | 炭化物少量             |
| 5  | 灰黄褐色土 | 粘土質 炭化物微量         |
| 6  | 灰黄褐色土 | 粘土質 炭化物微量         |
| 7  | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 8  | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 9  | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 10 | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 11 | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 12 | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 13 | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 14 | 灰色土   | 炭化物少量             |
| 15 | 灰色土   | 炭化物少量             |



SE6

- 1 灰オリーブ色土 白色粒子・酸化鉄少量 粘性やや強 しまり強
- 2 灰オリーブ色土 酸化鉄多量 粘性やや強 しまり強
- 3 灰オリーブ色土 酸化鉄少量 粘性やや強 しまり強
- 4 灰オリーブ色土 砂粒子多量 酸化鉄粒子少量 しまりやや強
- 5 暗緑灰色土 粘土質 炭化物粒子微量 粘性強 しまり弱
- 6 暗オリーブ灰色土 灰色粘質土層く多量 粘性強 しまり弱

SE7-8

- 1 に近い黄褐色土 シルト質 黒褐色粘質土・に近い黄褐色粗砂・酸化鉄微量 炭化物極く微量
- 2 黒褐色土 シルト質 酸化鉄微量
- 3 黄灰色土 シルト質 黒褐色シルト土 (12層)・酸化鉄微量 粘性やや強 しまり強
- 4 黒褐色土 シルト質 黄灰色シルト土ブロック・酸化鉄微量 褐灰色シルト粗砂・酸化鉄微量 炭化物極く微量
- 5 灰黄褐色土 粘土質 炭化物・酸化鉄微量 粘性強
- 7 灰黄褐色土 粘土質 炭化物・酸化鉄微量
- 8 黒褐色土 粘土質 黄灰色シルト粘土・炭化物・酸化鉄微量 粘性強 しまり弱
- 9 に近い黄褐色土 粘土質 炭化物極く微量 酸化鉄少量 粘性やや強 しまり強
- 10 灰黄褐色土 粘土質 炭化物極く微量 酸化鉄少量 しまり強
- 11 灰黄褐色土 シルト質 褐灰色シルト土・赤色粒子少量 炭化物微量 しまり強

SE12

黒色土 シルト質 炭化物極く微量 酸化鉄微量

SE13

粘土質 褐灰色シルト土微量 炭化物極く微量

SE14

粘土質 炭化物極く微量 粘性強 しまり弱

SE15

粘土質 炭化物極く微量 粘性強 しまり弱

SE16

粘土質 炭化物極く微量 粘性強 しまり弱

SE17

砂質 粘性弱 粒子細かい

SE18

砂質 ロック

SE19

炭化物少量 粘性弱 粒子細かい

SE20

粘性強 粒子細かい

SE21

砂質 炭化物少量

SE22

砂質 粘性強

SE23

褐灰色土 炭化物少量 粘性強 粒子細かい



第254図 井戸跡 (3)

込まれる。確認面からの深さ1.00mまでを検出した。

遺物はかわらけ、すり鉢のほか、周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第12号井戸跡 欠番

#### 第13号井戸跡 (第254図)

L-8グリッドの第11号井戸跡北西に位置する。第25・61号住居跡と重複し、両住居跡より新しい。

平面形は長円形で南北にやや長い。円筒状に掘り込まれ、下方へ行くにつれてややすまる形状である。規模は長さ1.6m、短径1.3mである。確認面からの深さ0.85mまでを検出した。

遺物は周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第14号井戸跡 (第254図)

調査区の西側、I-7グリッドに位置する。北東側は調査区域外におよび未検出である。

平面形は1.42mの円形で、南側は緩やかな傾斜をもって掘られており、北側は比較的に急な立ち上がりを見せる。確認面からの深さ0.90mまでを検出した。

遺物は周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第15号井戸跡 (第255図)

調査区の西側、I-7グリッドの第14号井戸跡の南東に位置する。第46号住居跡と重複し、住居跡より新しい。

平面形は1.20mの円形で、南西側は漏斗状に掘られ、北東側は垂直に近く掘り込まれる。確認面からの深さ1.10mまでを検出した。

遺物は周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第16号井戸跡 (第255図)

調査区の中央やや北東寄り、J-9グリッドに位置する。第35号住居跡と重複し、同住居跡よりも新しい。

平面形は円形で、漏斗状に掘り込まれるが、確認面から0.3mの深さで緩い段を持っている。段上部は漏斗状でやや開き気味に立ち上がり、確認面での直径は1.9mである。下部は直径1.05mの円筒状でほぼ垂直に落ち込む。

確認面からの深さ1.0mまでを検出した。

遺物は周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第17号井戸跡 (第255図)

調査区の東側、K-9グリッドに位置する。

平面形は円形で、確認面から0.30mの深さで段を持っている。段上部は直径1.45mの円筒状でやや開き気味に立ち上がり、確認面での直径は1.75mである。下部は直径1.05mの円筒状でほぼ垂直に落ち込む。

確認面からの深さ1.0mまでを検出した。

遺物は周辺の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

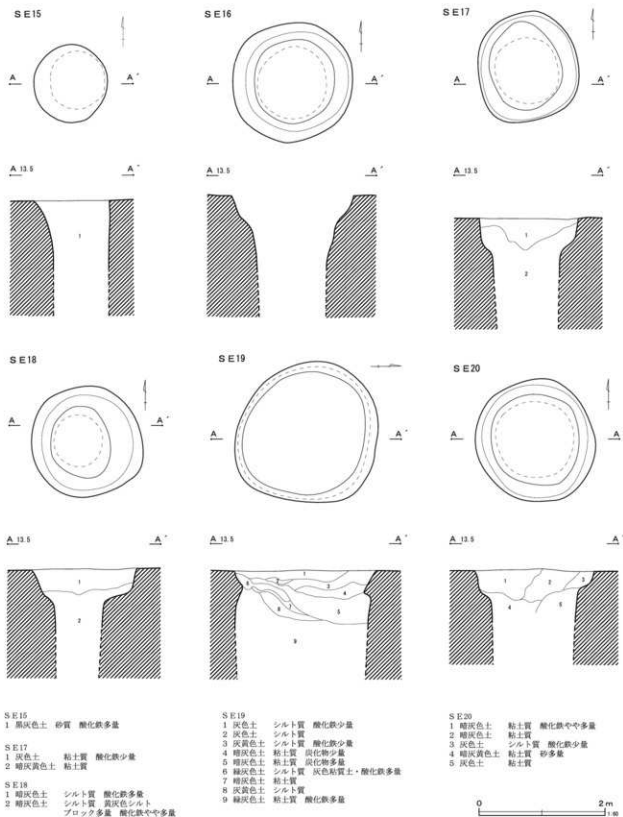
#### 第18号井戸跡 (第255図)

調査区の東側、K-10グリッドで第17号井戸跡の南東側に位置する。

平面形は円形で、確認面から0.5mの深さで段を持っている。段の上部は開き気味に立ち上がり、確認面での直径は1.82mである。下部は直径0.75mの円筒状となる。

確認面からの深さ1.0mまでを検出した。

遺物は周辺から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。



第255図 井戸跡 (4)

#### 第19号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の東側、K-10グリッド、第18号井戸跡の東側に位置する。

平面形は楕円形で、確認面から0.35mの深さで段を持っている。段の上部は開き気味に立ち上がり、確認面での直径は2.23mである。段部での直径は1.90mで、段の直下でオーバーハングし、直径2.12mの円筒状となる。

確認面からの深さ1.0mまでを検出した。

遺物は周縁から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第20号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の東側、K・L-10グリッドで、第18号井戸跡の南側に位置する。

平面形は円形で、確認面から0.45mの深さで段を持っている。段の上部はやや開き気味に立ち上がり、確認面での直径は1.9m、段部で直径1.35mである。段の下部は直径1.30mの円筒状となり、ややすばまりながら落ち込む。

確認面からの深さ1.0mまでを検出した。

遺物は周縁から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第21号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の東側、K-10グリッドの第19号井戸跡東側に位置する。東半分は調査区域外に及んでおり未検出であるが、平面形は円形と思われる。規模は残存する南北方向で1.23mである。確認面より0.90mの深さまで漏斗状に掘り込まれ、以下は円筒状となる。確認面からの深さ0.95mまでを検出した。

遺物は出土していない。

#### 第22号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の南寄り、M-8グリッドに位置する。第61号住居跡、第3号溝跡と重複し、いずれの遺構よ

りも新しい。

平面形は楕円形で、規模は長径1.82m、短径1.67mである。確認面からの深さ0.90mまでを検出した。検出最低面まで漏斗状に掘り込まれている。

遺物は周縁の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第23号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の南寄り、L・M-8グリッドで第22号井戸跡の北東側に位置する。第61号住居跡と重複し、同住居跡より新しい。

平面形は楕円形で、規模は長径1.74m、短径1.55mである。確認面からの深さ1.10mまでを検出した。

遺物は周縁の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第24号井戸跡 欠番

#### 第25号井戸跡 欠番

#### 第26号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の南際、M-7グリッドに位置する。第87号住居跡と重複し、同住居跡より新しい。

平面形は円形で、規模は径1.10mである。確認面から1.15mの深さまでは漏斗状に掘り込まれ、以下は円筒状となる。確認面からの深さ1.30mまでを検出した。

遺物は、かわらけや周縁の住居跡から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。

#### 第27号井戸跡 (第25㉔区)

調査区の中央やや南寄り、L-8グリッドの第13号井戸跡北側に位置する。第91号住居跡と重複し、同住居跡より新しい。

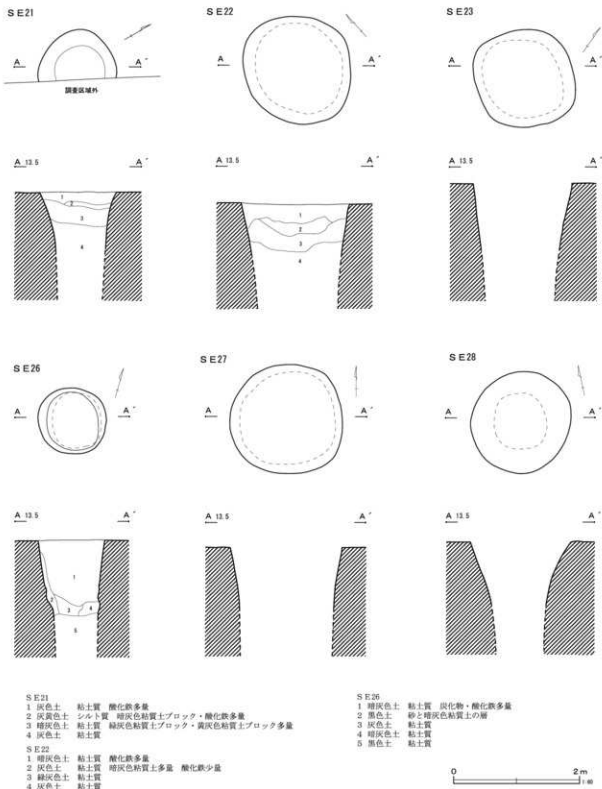
平面形は直径1.75mの円形で、確認面から0.80mの深さまでは漏斗状に掘り込まれ、それ以下は円筒

状となる。

確認面からの深さ1.50mまでを検出した。  
遺物は扉辺の住居跡から混入したと思われる土師  
器片が出土した。

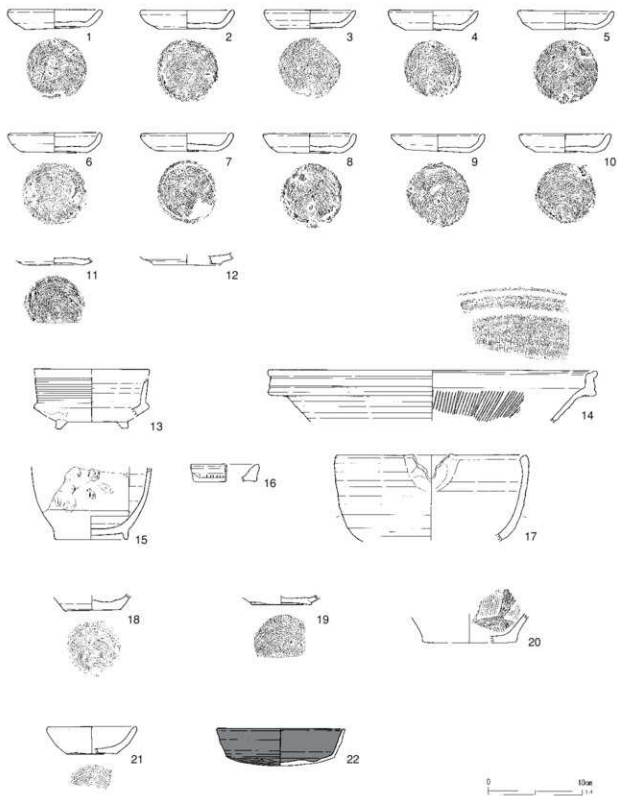
### 第28号井戸跡 (第256図)

調査区中央、K-8グリッドに位置する。第81号  
住居跡と重複し、同住跡のカマド煙道部を壊して  
いる。



第256図 井戸跡 (5)

確認面では直径1.60mの円形で、漏斗状に掘り込まれ、検出した最低面では直径0.75mの円形となる。遺物は周辺から混入したと思われる土師器小片が少量出土した。  
 確認面からの深さ1.05mまでを検出した。



第257図 井戸跡出土遺物



第90表 井戸跡出土遺物観察表 (第257図)

番号(群)	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	2	かわらけ	皿	9.7	2.1	6.6	74.4	100	角、軽	良好	にぶい	No1	16C後半	67-2
2	2	かわらけ	皿	9.7	2.0	6.3	85.5	100	角	良好	にぶい	No2		67-3
3	2	かわらけ	皿	9.4	2.0	6.6	65.1	90	角	良好	にぶい	No3		67-4
4	2	かわらけ	皿	9.3	2.1	6.0	75.5	100	角、軽	良好	にぶい	No4		67-5
5	2	かわらけ	皿	9.9	2.0	6.7	94.0	100	角、軽	良好	にぶい	No5		67-6
6	2	かわらけ	皿	9.5	2.0	6.8	87.3	100	角、軽	良好	にぶい	No6		67-7
7	2	かわらけ	皿	9.5	1.9	6.3	83.3	95	角、軽	良好	にぶい	No8		67-8
8	2	かわらけ	皿	9.4	2.1	6.6	88.0	95	角、軽	普通	にぶい	No9		67-9
9	2	かわらけ	皿	9.5	2.0	6.7	68.4	100	角、軽	普通	灰黄褐	No10		67-10
10	2	かわらけ	皿	9.4	2.0	6.3	83.8	100	角、軽	良好	にぶい	No11		68-1
11	2	かわらけ	皿	—	(0.8)	5.9	35.8	50	角、軽	良好	にぶい	No7		
12	2	志野	皿	—	(1.6)	—	15.3	5		普通	灰白			
13	3	瀬戸・美濃	香炉	—	(4.2)	—	21.2	5		良好	灰白	鉄輪	16C	
14	3	陶器	すり鉢	(34.7)	(5.5)	—	208.3	10		良好	暗赤褐			
15	3	磁器	徳利	—	(6.6)	7.3	279.8	30		良好	灰白			
16	3	陶器	すり鉢	—	—	—	14.9	5		良好	にぶい		17C前半	
17	3	瀬戸・美濃	片口鉢	(20.0)	(8.1)	—	107.8	10		良好	灰白		近世	
18	8	かわらけ	皿	—	(1.6)	6.0	62.0	10	角	良好	灰黄褐			
19	11	かわらけ	皿	—	(1.0)	6.3	23.7	10	角、軽	普通	にぶい			
20	11	瓦質土器	すり鉢	—	(3.1)	(10.0)	27.5	5		良好	オリーブ黒			
21	26	かわらけ	皿	(9.1)	2.9	(5.4)	32.7	30	角、軽	普通	橙			
22	27	土師器	坏	(13.6)	3.9	—	76.0	50	埴北	角	良好	橙		

#### 4. 溝跡

飯積遺跡第2次調査区で確認された溝跡は7条である。溝跡は、掘り込みが深く調査区内で直角に曲がる区画溝(第1号溝跡)と、東西方向に走る掘り込みの浅い溝跡(第2・3・4・5号溝跡)が見られる。また、浅い溝跡もその方向によって2種類程度に分かれそうである。時期は、第1号溝跡からは時期の判断できそうな遺物が出土しているが、他の溝跡からは時期の特定できる遺物は極めて少ない。

##### 第1号溝跡(第259-261図)

I-8・9・10・11、J-7・8、K-8、L-7・8、M-7・8グリッドに位置する。数多くの住居跡と重複し、その何れよりも新しい。J-7・8グリッドでは西側を掘りに壊されていた。M-7グリッドの調査区南西側から緩やかに航行しながら北進し、I-8グリッド内で直角に曲がり、ほぼ直線的に東走する。東側は調査区域外へ続く。

規模は、全長70.60m、幅1.24-2.35mである。

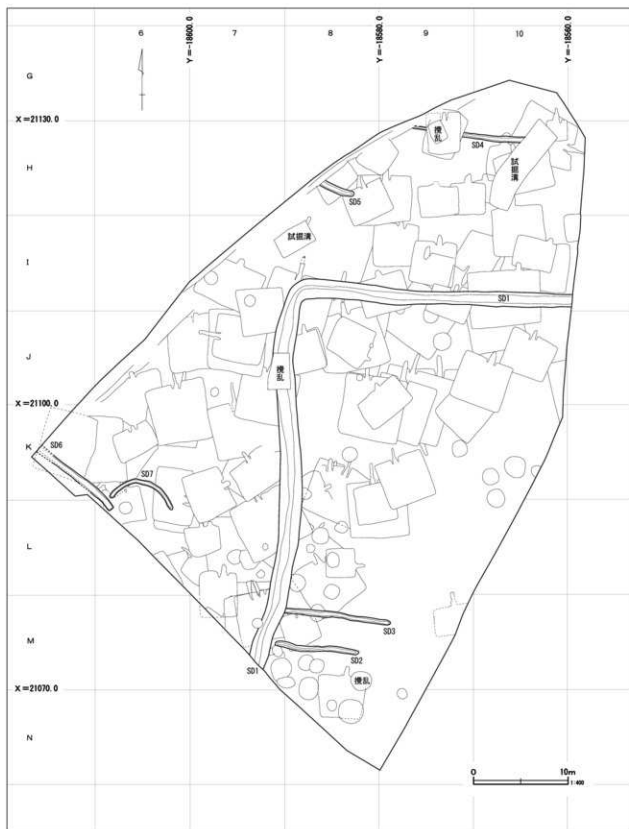
遺構確認面からの深さは0.65-1.15mで、底面の標高は南端12.10m、曲がり角付近12.50m、東端12.30mである。断面形状は逆台形で、底面は平坦な部分が多く見られた。

遺物は、青磁、常滑、瀬戸・美濃、かわらけ、焙烙、内耳鍋等が出土した。特に、L-8グリッド内では比較的まとまって出土した(第263-266図)。また、周辺の住居跡から混入したと考えられる土師器、須恵器、石製品等も多く出土している。

##### 第2号溝跡(第259・266図)

調査区南側、M-8グリッドに位置する。第75号住居跡、第5号井戸跡と重複する。新旧関係は住居跡より新しく、井戸跡より古い。溝跡の西端は第5号井戸跡に切られ、途切れている。方向的には第1号溝跡の西辺と直交するが、僅かに間が見られ、第3号溝跡とは約3m離れて平走する。

検出された規模は、長さ8.85m、幅0.50-0.60m



第258河 溝跡全体図



である。遺構確認面からの深さは0.15～0.33mで、底面の標高は西端12.95m、東端13.05mである。

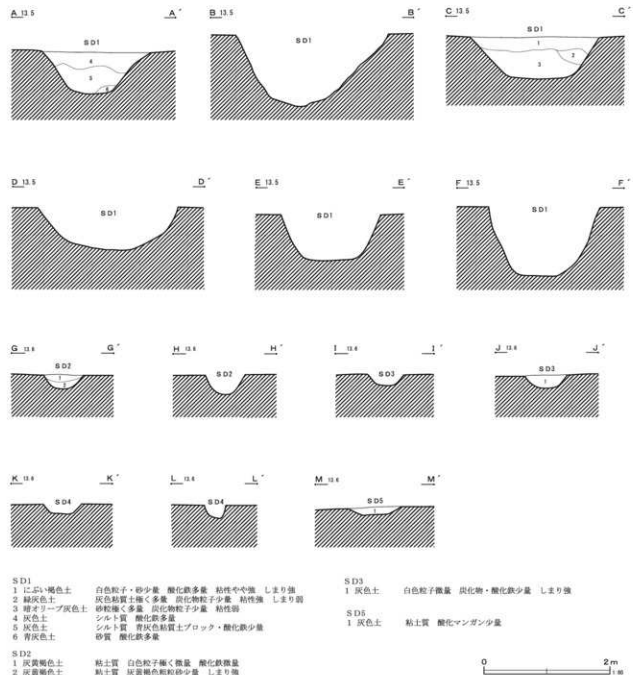
遺物は周囲からの混入と思われる土師器片が僅かに出土した。

### 第3号溝跡 (第259・260図)

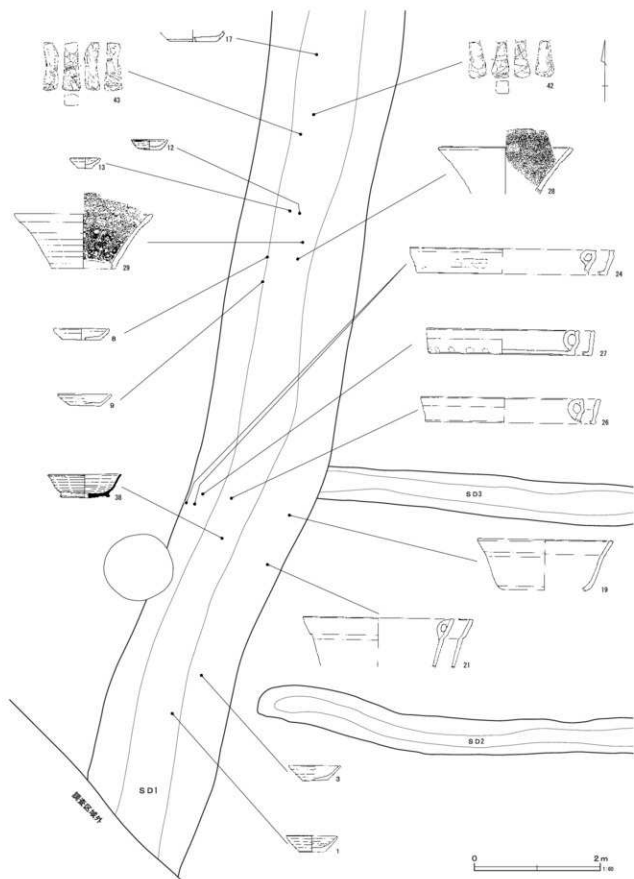
調査区南側、M-8・9グリッドに位置する。第

61・75・87号住居跡、第2号井戸跡と重複する。新旧関係は住居跡より新しく、井戸跡より古い。溝跡の西端は第1号溝跡西辺と直行する形で接し、第2号溝跡とは並行する。

検出された規模は、長さ11.2m、幅0.50～0.65mである。遺構確認面からの深さはほぼ0.20mで、底面の標高は西端13.00m、東端13.10mである。



第260図 溝跡土層断面図



第261图 第1号沟遗迹物出土状况

遺物は周用からの混入と思われる土師器片が少量出土した。

#### 第4号溝跡 (第259・260図)

調査区北側、H-9・10グリッドに位置する。第2・4・8・15号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも新しい。東西方向に走り、西側は調査区域外へと続き、東は試掘溝で壊されていた。試掘溝より東側では検出されなかった。

検出された規模は長さ12.0m、幅は0.3~0.6mである。遺構確認面からの深さは0.15~0.2mで、底面の標高は西端13.05m、東端13.1mである。

遺物は周用からの混入と思われる土師器片がごく僅かに出土した。

#### 第5号溝跡 (第259・260図)

調査区北側、H-8グリッドに位置する。第10・18号住居跡と重複し、これより新しい。西側は調査区域外へと続き、東端はやや南に振れる。

検出された規模は長さ3.73m、幅0.6~0.7mである。遺構確認面からの深さは0.1~0.15mで、底面の標高は13.1m前後である。

遺物は周用からの混入と思われる土師器片がごく

僅かに出土した。

#### 第6号溝跡 (第262図)

調査区西際、K・L-6、L-7グリッドに位置する。第74・78・83号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも新しい。調査区の縁に沿うように、北西から南東方向に延びる。約10m離れた第3・4次調査区においても、第6号溝跡の続きと考える同一方向の溝跡が確認されている。

検出された規模は長さ10.2m、幅0.5~0.9mである。深さは西端の調査区壁で0.65m確認できる。底面の標高は12.6m前後である。

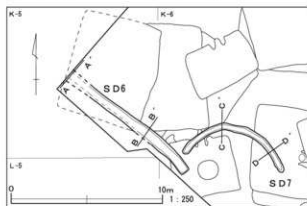
遺物は出土しなかった。

#### 第7号溝跡 (第262図)

調査区西側、K-6グリッドに位置する。第78・79・85号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも新しい。

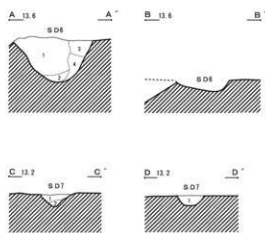
平面形は半径約3.2mの円形溝跡の1/3強が検出された。検出された長さは8.3m、幅は0.55mである。遺構確認面からの深さは0.2m前後で、底面の標高は12.75m前後である。

遺物は出土しなかった。

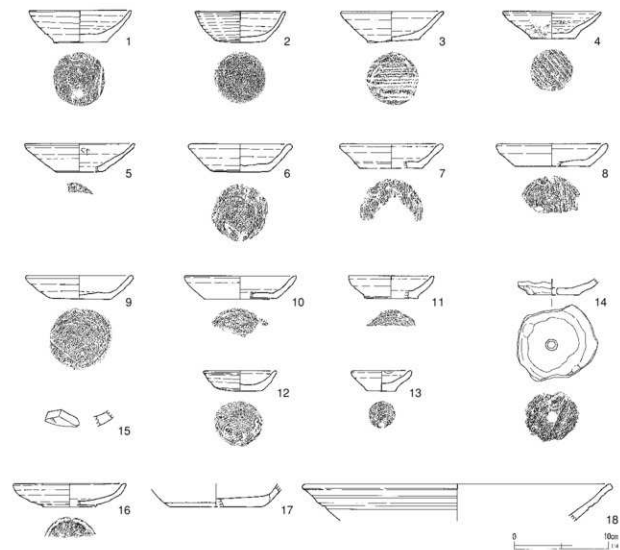


- SD6  
 1 暗褐色土 シルト質 暗灰色粘質土ブロック多量 炭化物・土器片少量  
 2 暗褐色土 シルト質 炭化物多量  
 3 黄褐色土 シルト質  
 4 黄褐色土 シルト質 黄褐色シルト土ブロック少量

- SD7  
 1 黄褐色土 シルト質 黄褐色粘質土・炭化物ブロック少量  
 2 灰褐色土 シルト質 黄褐色シルト土多量 炭化物ブロック少量



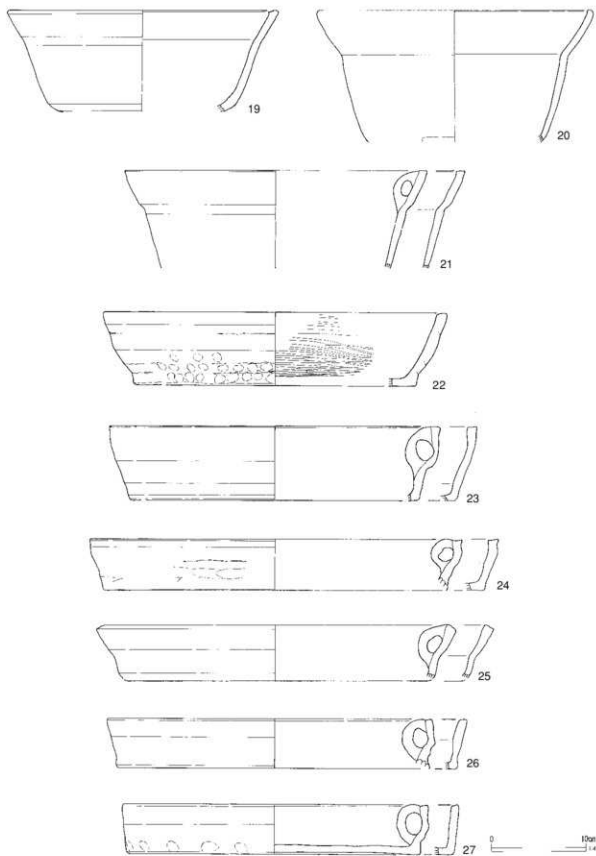
第262図 溝跡 (2)



第263図 溝跡出土遺物 (1)

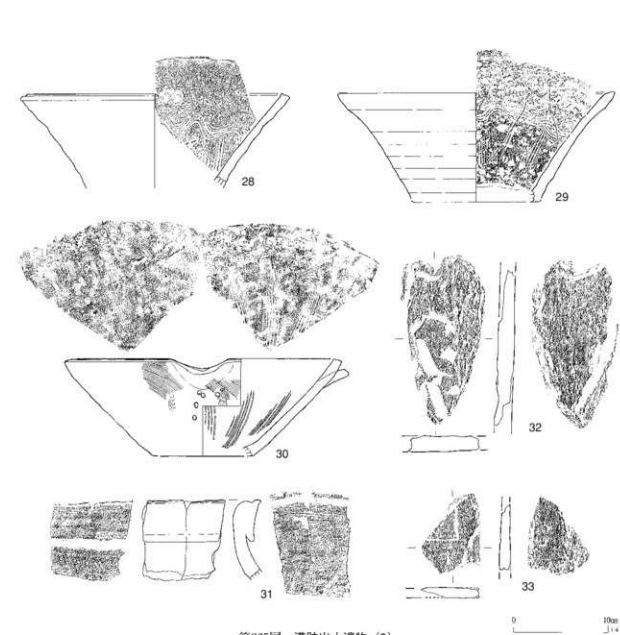
第91表 溝跡出土遺物観察表 (1) (第263図)

番号	部材	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存 (%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	1	かわらけ	皿	10.7	3.4	5.6	125.5	95		雲、角	普通	灰白	No.43	68-2
2	1	かわらけ	皿	9.5	3.3	5.5	60.0	70			良好	にぶい・粗	I-9g	68-3
3	1	かわらけ	皿	10.7	3.4	5.6	92.8	80		角	良好	にぶい・粗	No.44 棒状圧痕	68-4
4	1	かわらけ	皿	(10.4)	2.9	4.8	59.7	70		片	普通	灰白	底面棒状圧痕	
5	1	かわらけ	皿	(11.7)	3.0	(5.5)	27.8	25		角	普通	灰黄	L-8g	内面に油煙付着
6	1	かわらけ	皿	10.4	3.0	6.2	83.6	60		角、軽	普通	にぶい・粗	L-7g	68-5
7	1	かわらけ	皿	10.4	2.6	6.6	70.1	50		角、軽	普通	にぶい・粗	L-7g	16C後半
8	1	かわらけ	皿	(11.2)	2.5	(7.8)	50.4	30		角、軽	良好	粗	No.20 編物状の圧痕?	68-6
9	1	かわらけ	皿	11.1	2.5	6.4	94.2	95		角、軽	普通	にぶい・粗	No.21	68-7
10	1	かわらけ	皿	(11.8)	2.4	(7.7)	28.4	20		雲、角	普通	粗	L-7g	
11	1	かわらけ	皿	(9.0)	2.4	(5.8)	30.1	30		雲、角	普通	浅黄粗	M-7g	
12	1	かわらけ	皿	7.4	2.1	4.7	42.9	70		雲、片、角	普通	褐灰	No.6	68-8
13	1	かわらけ	皿	6.0	2.2	3.0	33.0	95		雲、片	良好	灰黄粗	No.7 油煙	68-9
14	1	かわらけ	皿	-	(1.7)	5.3	58.2	30		角、英	良好	にぶい・粗	底部中央に穿孔	
15	1	青磁	碗	-	-	-	8.0	5			良好	灰白	I-8g	蓮弁
16	1	瀬戸・尾瀬	小皿	(11.8)	2.5	(5.5)	48.6	30			良好	灰白	L-7g	内面にトチン痕



第264図 満跡出土遺物(2)

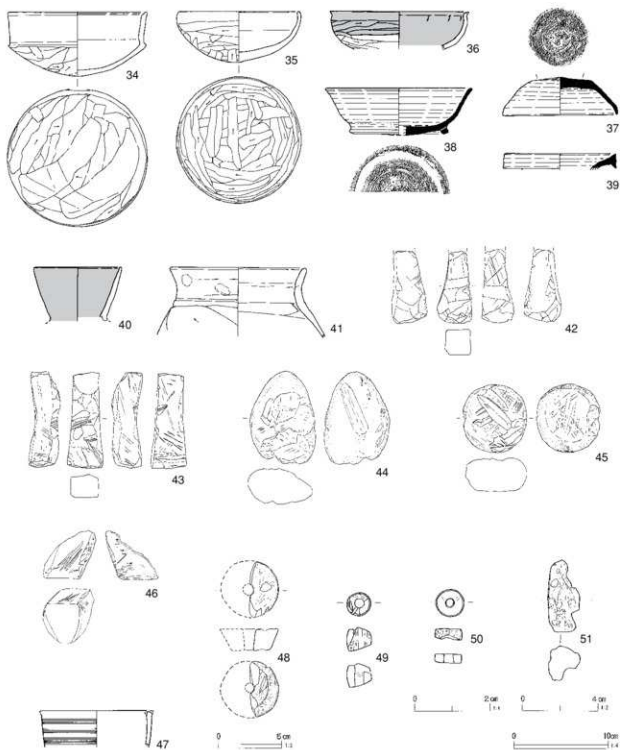




第265図 溝跡出土遺物 (3)

第92表 溝跡出土遺物観察表 (2) (第263・264・265図)

番号(図)	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
17	1	古瀬戸	盤	—	2.5 (9.8)	93.3	30			良好	にぶい、褐	No.3 たわた里 古瀬戸後期	
18	1	古瀬戸	直縁太皿	(32.2)	(3.9)	—	37.7	5		良好	灰白	J-7g-8 後期IV	
19	1	瓦質土器	鍋	(28.0)	(10.7)	—	207.9	10		普通	暗灰	No.42	
20	1	瓦質土器	鍋	(28.2)	(13.9)	—	330.4	20		良好	暗灰		
21	1	瓦質土器	内耳鍋	(31.8)	(10.3)	—	216.3	10	角	良好	灰	No.41	
22	1	瓦質土器	大鉢小	(36.2)	7.7 (29.6)	171.6	5	角、軽	良好	暗灰			
23	1	瓦質土器	焙烙	(34.8)	7.8 (30.0)	165.6	5	雲、角	普通	にぶい、褐	L-7g 外面煤付着		
24	1	瓦質土器	焙烙	(39.0)	5.4 (36.0)	191.2	10	角	普通	黄灰	M-7g, No.34・35 外面煤付着		
25	1	瓦質土器	焙烙	(36.0)	(5.6)	—	194.1	5		良好	灰	L-7g	
26	1	瓦質土器	焙烙	(35.0)	5.2 (32.8)	136.4	5	角、軽	良好	灰	No.33 外面煤付着		
27	1	瓦質土器	焙烙	(31.8)	5.2 (30.5)	638.5	40	角、軽	普通	黄灰	No.32 外面煤付着		
28	1	瓦質土器	すり鉢	(26.8)	(10.0)	—	325.1	30	角、軽	普通	黄灰	No.11	
29	1	瓦質土器	すり鉢	(29.0)	11.6 (13.6)	913.8	40	角、軽	不良	黄灰	No.8 15C後半-16C		
30	1	瓦質土器	片口鉢	(27.8)	10.3 (10.8)	346.0	20	軽	普通	灰	J-7・8g		



第266図 溝跡出土遺物 (4)

第93表 溝跡出土遺物観察表 (3) (第265図)

番号	副号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
31	1	常滑	大甕	—	(8.5)	—	619.1	5			良好	にひい赤褐色	L-7g 15C後手	
32	1		板碑	長さ18.0	幅8.5	厚さ1.7	重さ385.5	5					緑泥片岩	97-1-1
33	1		板碑	長さ8.6	幅6.3	厚さ1.1	重さ81.5	5					L-7g 緑泥片岩	97-1-2

第94表 溝跡出土遺物観察表 (4) (第266図)

番号	種類	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
34	1	土師器	坏	14.6	6.8	—	337.6	100	群東	雲	良好	橙	K-8g	68-10
35	1	土師器	坏	12.6	5.4	—	243.9	100	群東	角	良好	橙	I-8g 指頭痕	69-1
36	1	土師器	坏	(14.7)	(4.0)	—	44.7	20	埴南		良好	橙	I-8g 比企型坏	
37	1	須恵器	蓋	(11.0)	4.0	—	109.8	40	湖西小		良好	灰白	M-9g-II-1 自然輪	69-2
38	1	須恵器	高台付坏	(15.6)	5.0	(10.5)	89.8	30	湖西小		良好	灰	No.38	
39	1	須恵器	長頸壺	(11.6)	(1.8)	—	26.8	5	東海		良好	灰白	M-7g	
40	1	土師器	壺	9.1	(5.7)	—	95.3	10	埴南	雲、角	良好	にぶい・橙	I-8g	
41	1	土師器	壺	14.3	(7.4)	—	334.0	20	埴北	雲、角	普通	にぶい・橙	I-9g	
42	1	石製品	砥石	長さ7.5幅3.7厚さ2.7重さ116.0				80					No.4 凝灰岩	96-16
43	1	石製品	砥石	長さ10.1幅3.7厚さ2.3重さ152.9				90					No.5 凝灰岩	96-15
44	1	石製品	有溝砥石	長さ9.8幅6.8厚さ3.8重さ200.3				—					安山岩	
45	1	石製品	有溝砥石	長さ7.2幅6.6厚さ3.3重さ88.5				—					角閃石安山岩	
46	1	石製品	砥石	長さ(5.1)幅(4.4)厚さ4.3重さ102.3				10					L-7g 凝灰岩	96-17
47	4	彫・透	香炉	—	(3.8)	—	11.8	5			良好	灰白		
48	5	石製品	紡錘車	径4.4幅2.3厚さ1.7重さ23.0				50					滑石	95-26
49	5	石製品	白玉	径0.59孔径0.22厚さ0.50重さ0.23				100					滑石	95-18
50	5	石製品	白玉	径0.73孔径0.20厚さ0.23重さ0.18				100					滑石	95-17
51	5		貝類	長さ3.8幅1.7厚さ1.3重さ5.5				—				淡黄		

## 5. グリッド出土遺物

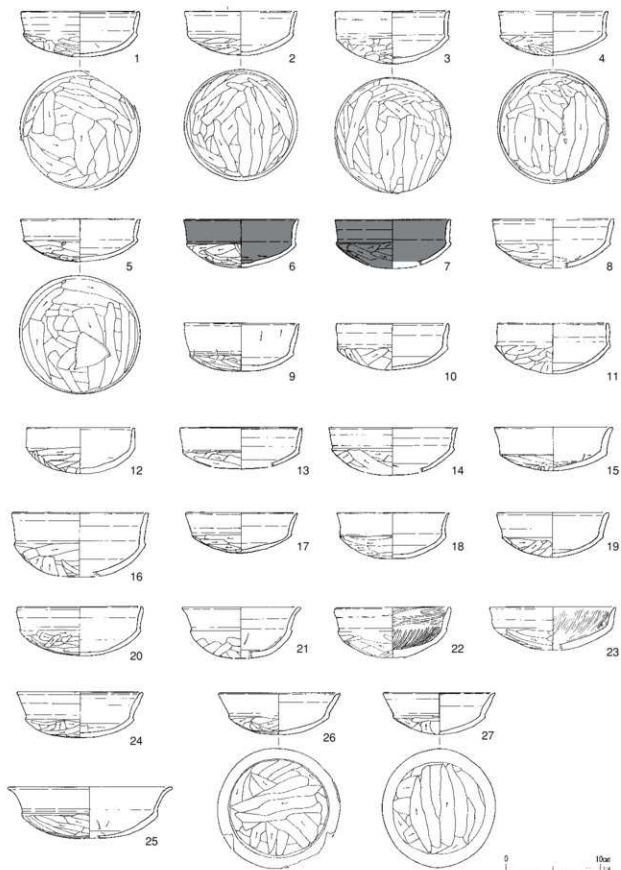
飯杣遺跡第2次調査区では、調査開始当初遺構確認作業を行った際に、多量の遺物が出土した。しかし、各遺構の平面プランを明確に捉えることができず、遺物が帰属する遺構を特定できなかった。そこで、調査を進めるにあたり、グリッド単位で遺物を取り上げた。

各遺構の精査後、遺物を取り上げたグリッド内の遺構に遺物を帰属させようと試みたが、遺構の重複が激しく、帰属する遺構を確定できなかった。

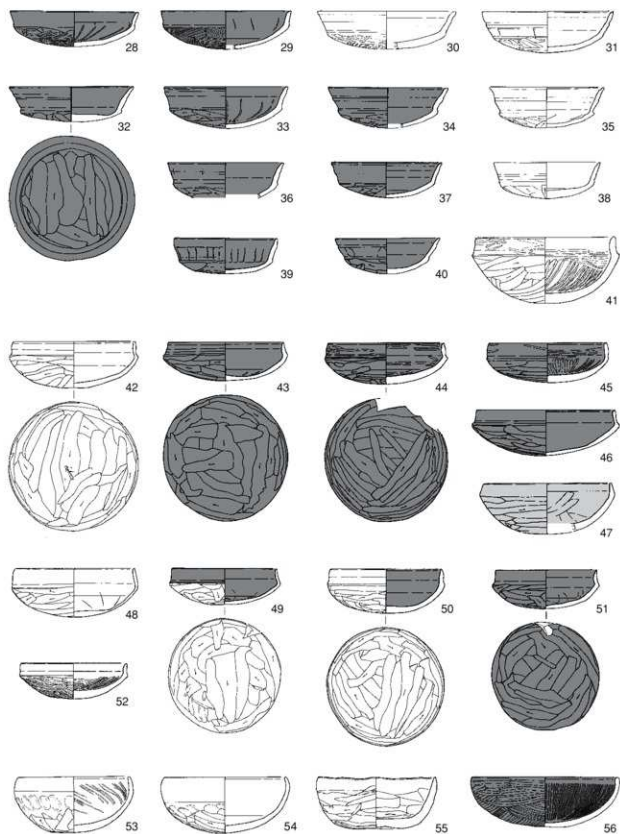
そこで、これらの遺物をグリッド出土遺物として掲載する。

第95表 グリッド出土遺物観察表 (1) (第267図)

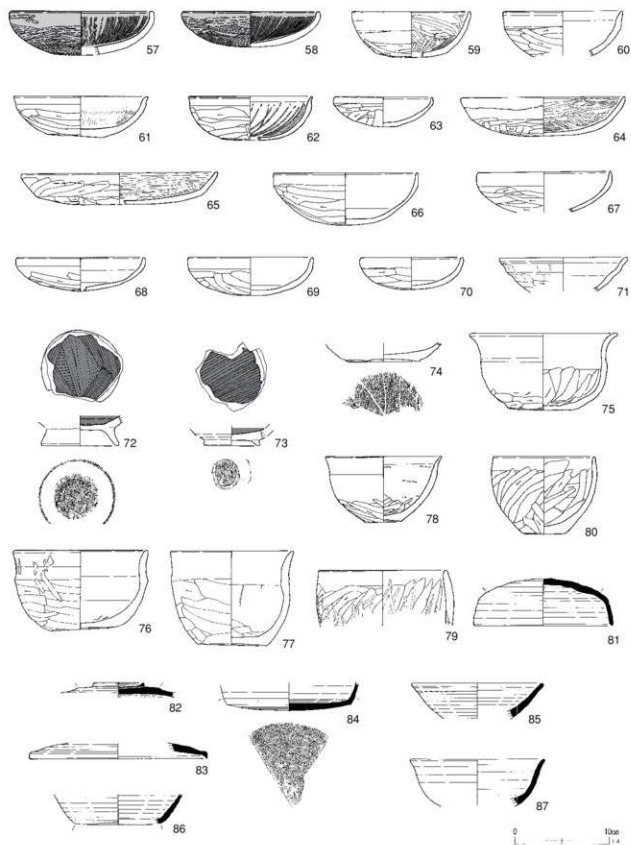
番号	遺構番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	99	土師器	坏	12.6	4.8	—	142.8	80	群東	雲	良好	橙	No.6	69-3	
2	99	土師器	坏	11.8	4.7	—	163.5	100	群東	雲、角、軽	良好	橙	No.3	69-4	
3	99	土師器	坏	12.0	5.6	—	185.8	95	埴北	雲、角	普通	橙	No.34	69-5	
4	99	土師器	坏	11.5	4.7	—	120.3	100	群東	雲、角	良好	橙	No.2	69-6	
5	99	土師器	坏	12.8	4.5	—	148.9	95	群東	雲、角	普通	橙	2	69-7	
6	99	土師器	坏	12.2	5.0	—	100.1	60	群東	雲	良好	橙	5		
7	99	土師器	坏	12.3	(4.9)	—	141.9	60	埴北	角	良好	にぶい・橙	I-1、No.6	69-8	
8	99	土師器	坏	(12.9)	(5.1)	—	64.4	30	群東	雲、角	普通	にぶい・橙	IV-9 外面黒痕		
9	99	土師器	坏	12.1	5.0	—	135.8	70	埴南	角	普通	橙	No.1	69-9	
10	99	K9	土師器	(11.9)	4.9	—	169.3	95	埴北	雲	良好	明赤褐	No.7	69-10	
11	99	I10	土師器	坏	11.8	5.3	—	176.3	100	粉西	雲、角	良好	にぶい・橙	No.2・6	70-1
12	99	J9	土師器	坏	11.4	4.9	—	177.8	75	埴南	角	普通	にぶい・橙	I-1、No.1 外面黒痕	70-2
13	99	J10	土師器	坏	(12.4)	(4.1)	—	41.8	25	埴北	雲	普通	にぶい・橙	I-4	
14	99	K9	土師器	坏	(13.6)	(4.7)	—	52.8	25	埴北	雲	普通	橙	I-7	
15	99	I9	土師器	坏	12.6	4.6	—	250.1	100	埴南	雲、角	良好	にぶい・橙	No.14 比企型坏	70-3
16	99	I7	土師器	坏	(14.4)	(6.7)	—	145.5	40	群東	雲、針	普通	にぶい・橙		
17	99	H11	土師器	坏	(11.9)	4.2	—	55.5	50	群東	雲	普通	橙	1	
18	99	I7	土師器	坏	(11.9)	4.8	—	43.1	30	群東	雲	普通	橙		
19	99	I11	土師器	坏	(11.8)	4.7	—	78.7	50	埴北	角	普通	橙	No.2	



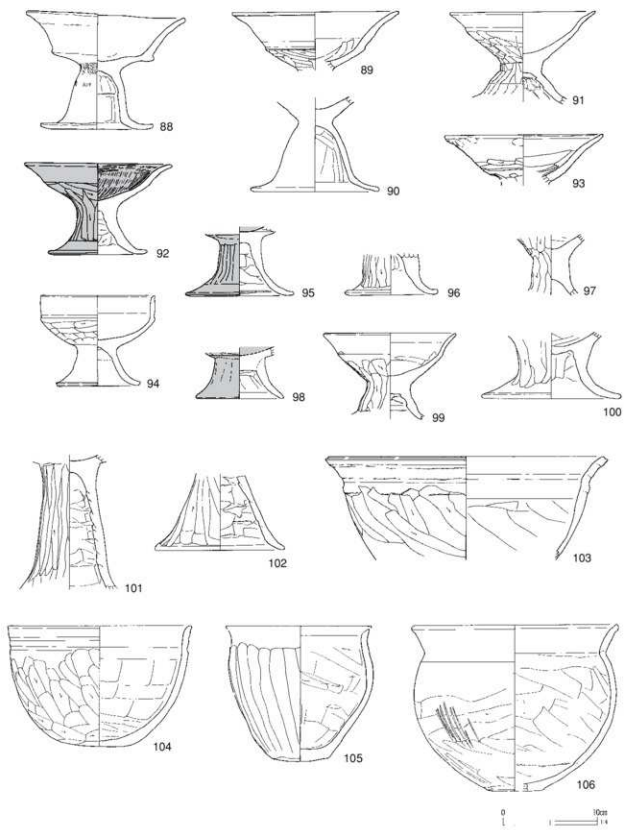
第267図 グリッド出土遺物 (1)



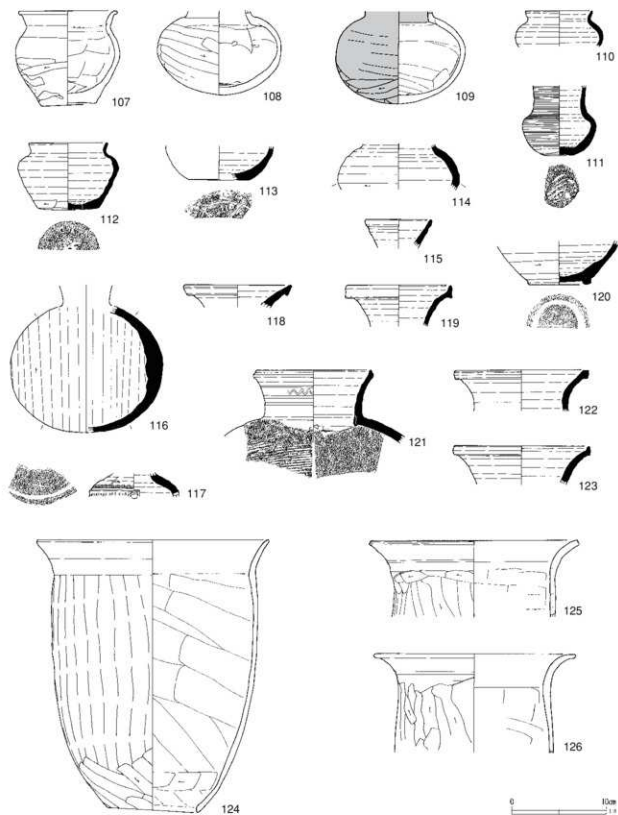
第268図 グリッド出土遺物(2)



第269図 グリッド出土遺物 (3)

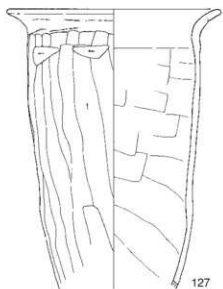


第270図 グリッド出土遺物(4)

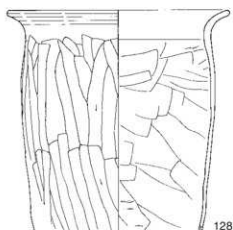


第271図 グリッド出土遺物 (5)





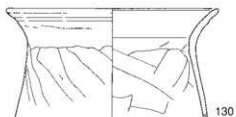
127



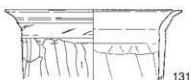
128



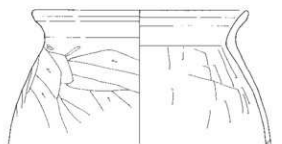
129



130



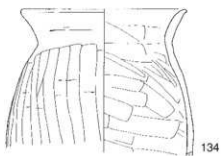
131



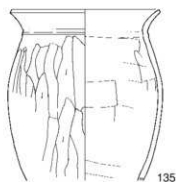
133



132



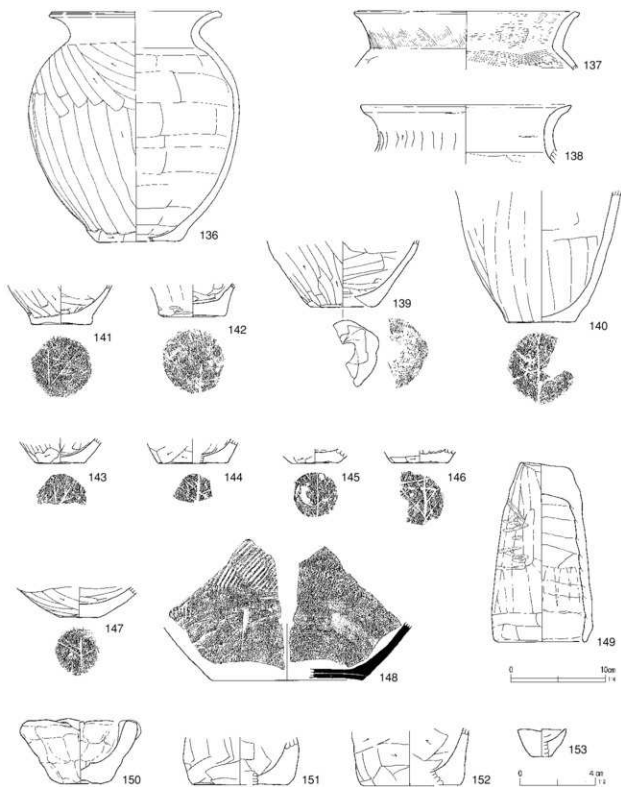
134



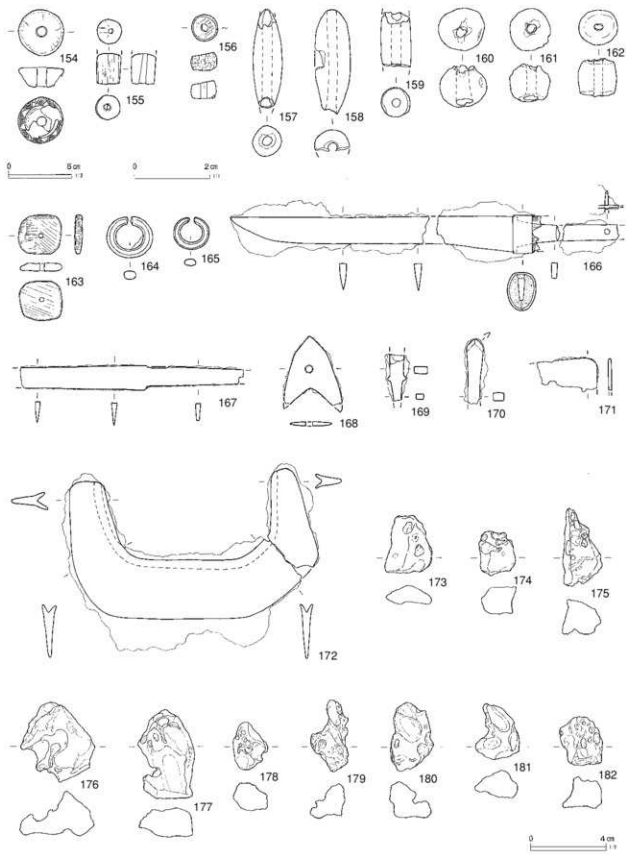
135



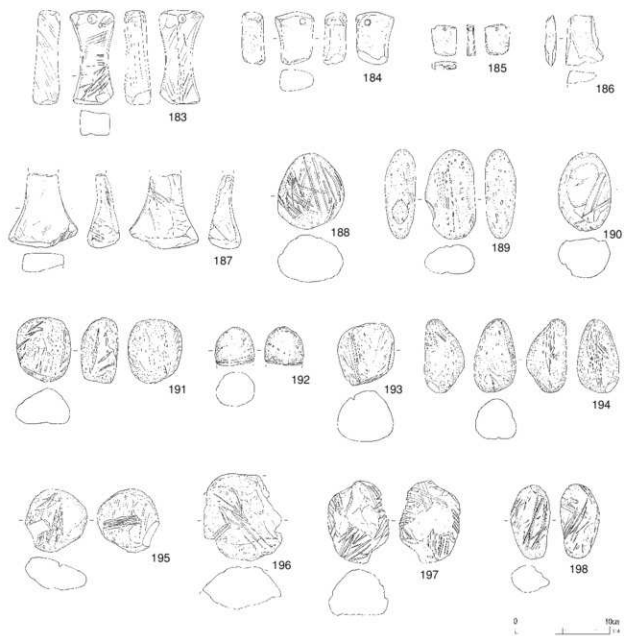
第272図 グリッド出土遺物 (6)



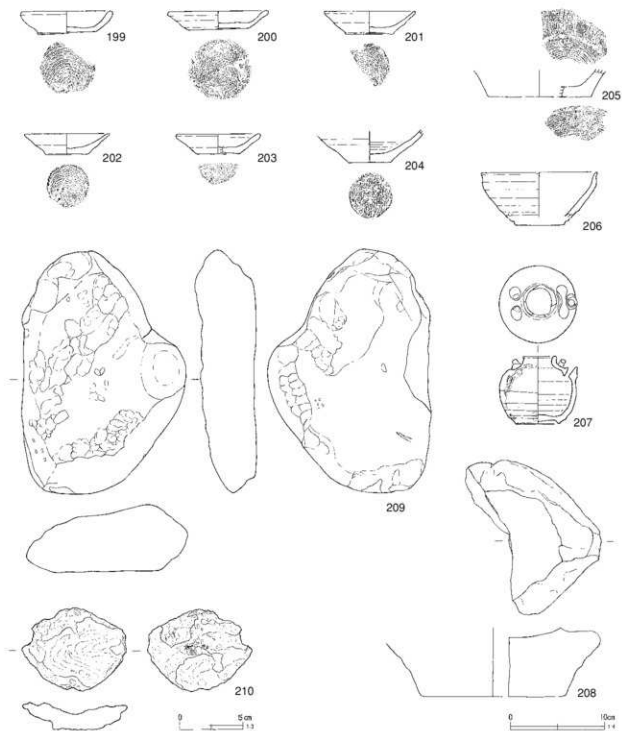
第273図 グリッド出土遺物 (7)



第274図 グリッド出土遺物(8)



第275図 グリッド出土遺物 (9)



第276図 グリッド出土遺物 (10)

第96表 グリッド出土遺物観察表(2) (第267・268・269区)

番号	遺物番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
20	付9	J9	土師器	坏	(13.0)	5.2	—	62.7	40	埴北	角	良好	にぶい橙	外面黒炭	
21	付9	K9	土師器	器	(12.5)	5.4	—	104.2	50	群東	雲	普通	にぶい橙	Ⅱ-1, Ⅰ-7	外面黒炭
22	付9	J10	土師器	坏	12.1	5.3	—	188.4	80	安西	角	良好	にぶい橙	No.8	704
23	付9	K10	土師器	坏	(13.2)	4.5	—	103.4	50	佐野	角	普通	にぶい橙	Ⅱ-9	
24	付9	B9	土師器	坏	13.4	4.8	—	151.3	70	群東	雲	良好	にぶい橙	No.5	705
25	付9	J9	土師器	坏	(17.3)	5.4	—	82.4	25	埴北	角	良好	にぶい橙	Ⅱ-9	小針系
26	付9	M9	土師器	坏	12.9	4.4	—	150.2	95	埴北	雲、角	普通	橙	Ⅱ-1	706
27	付9	M9	土師器	坏	11.9	4.4	—	127.1	100	埴北	角	良好	橙	I	707
28	付9	I10	土師器	坏	(13.6)	3.7	—	98.0	50	佐野	角	普通	にぶい赤褐	Ⅱ、Ⅲ	
29	SJ	I4-Ⅱ	土師器	坏	(13.6)	(4.1)	—	56.8	30	佐野	角	良好	橙		
30	付9	I7	土師器	坏	(14.5)	4.0	—	65.4	20	群東	雲、角	普通	橙	Ⅱ-9	
31	付9	J6	土師器	坏	(13.9)	4.4	—	60.4	25	埴北	角	良好	橙		
32	付9	L9	土師器	坏	13.2	3.7	—	153.4	100	埴北	雲、角	良好	灰白	Ⅱ-1	
33	付9	J9	土師器	坏	13.0	4.4	—	173.1	75	橋南	角、軽	良好	黒褐	Ⅱ-7	708
34	付9	L7	土師器	坏	(12.7)	(4.3)	—	50.7	30	埴北	角	良好	浅黄橙		
35	付9	M9	土師器	坏	12.0	4.4	—	111.2	80	埴北	角	良好	淡黄	I	709
36	付9	K6	土師器	坏	(12.2)	(3.8)	—	44.2	30	埴北	角	良好	にぶい黄橙		
37	付9	B9	土師器	坏	11.7	3.8	—	114.5	90	埴北	角	普通	灰黄	No.12	710
38	付9	I7	土師器	坏	11.3	3.8	—	74.2	50	埴北	角	普通	にぶい黄橙	Ⅱ-1	内面に窪付者
39	付9	J7	土師器	坏	(11.0)	3.8	—	76.9	60	埴北	角	普通	にぶい橙	I	
40	付9	J8	土師器	坏	11.1	3.8	—	90.8	80	埴北	角	良好	にぶい黄橙		
41	付9	I10	土師器	坏	14.7	7.0	—	321.8	75	橋南	雲、角	良好	にぶい橙	No.38	711
42	付9	L9	土師器	坏	12.9	4.9	—	218.9	95	安西	角	良好	にぶい黄橙	No.7	木葉痕
43	付9	L9	土師器	坏	12.2	4.1	—	161.6	100	群東	角	良好	にぶい黄橙	No.4	714
44	付9	J9	土師器	坏	12.3	4.4	—	200.7	75	安西	角、軽	普通	にぶい褐	Ⅲ-9	715
45	付9	K9	土師器	坏	(12.4)	3.7	—	147.7	60	安西	角	普通	にぶい橙	Ⅱ-1	716
46	付9	H9	土師器	坏	14.6	4.8	—	167.6	60	群東	軽	良好	橙	No.18	717
47	付9	J9	土師器	坏	(13.3)	(5.1)	—	54.3	20	安西	雲、角	良好	にぶい橙	Ⅱ-9	
48	付9	K9	土師器	坏	12.5	5.2	—	155.0	95	群東	角、軽	良好	橙	Ⅲ-9	718
49	付9	M9	土師器	坏	11.0	3.8	—	127.1	95	埴北	角	良好	にぶい黄橙	I	719
50	付9	B9	土師器	坏	(11.7)	4.7	—	175.7	100	佐野	角	良好	淡黄	No.3	71-10
51	付9	L9	土師器	坏	10.7	4.1	—	120.8	95	群東	角	普通	灰黄褐	No.3	72-1
52	付9	L9	土師器	坏	(11.1)	3.8	—	65.9	30	安西	角	良好	にぶい褐	Ⅱ-1	
53	付9	I7	土師器	坏	11.8	5.9	—	250.3	100	群東	雲、角	良好	にぶい橙	No.1	指頭痕
54	付9	J9	土師器	坏	(12.8)	5.9	—	124.2	40	橋南	角	良好	にぶい橙	Ⅰ-7・Ⅰ	指頭痕
55	付9	J10	土師器	坏	(12.4)	5.4	—	165.9	40	安西	雲、角	普通	にぶい黄橙	Ⅱ-1	
56	付9	I10	土師器	坏	(15.1)	5.2	—	193.4	50	安西	雲、角	普通	にぶい橙	No.24	723
57	付9	J9	土師器	坏	(15.1)	(4.1)	—	184.0	50	安西	雲	良好	にぶい橙	Ⅰ-7	724
58	付9	B9	土師器	坏	(14.4)	3.8	—	139.9	50	安西	角	普通	にぶい橙	No.5	外面黒炭
59	付9	I7	土師器	坏	(12.5)	4.8	—	53.5	20	佐野	角	普通	明赤褐	Ⅲ-9	外面黒炭
60	付9	I-Ⅱ	土師器	坏	(12.6)	(4.7)	—	60.8	30	安西	角	普通	にぶい橙		
61	付9	M9	土師器	坏	14.1	4.3	5.7	202.5	80	埴北	角、軽	普通	橙	Ⅲ	725
62	付9	K6	土師器	坏	(13.1)	4.6	—	66.8	40	佐野	角	良好	橙	外面黒炭	
63	付9	L9	土師器	坏	(10.2)	3.2	—	56.0	50	埴北	雲、角	良好	橙	No.8	
64	付9	J10	土師器	坏	17.2	4.1	—	147.0	75	橋南	雲、角	良好	にぶい橙	I	726
65	付9	B8	土師器	盤	(20.6)	3.3	—	106.6	20	橋南	角	普通	橙	Ⅲ	
66	付9	M9	土師器	坏	(15.1)	5.5	—	163.2	60	埴北	角	良好	橙	Ⅱ-1	727
67	付9	M9	土師器	坏	(14.0)	(4.3)	—	40.2	20	群東	角	普通	にぶい橙	Ⅱ-1	
68	付9	J9	土師器	坏	(13.5)	3.6	—	66.2	50	埴北	角	普通	にぶい橙	Ⅲ-9	指頭痕
69	付9	J9	土師器	坏	(13.1)	4.0	—	74.9	50	群東	角	普通	にぶい橙	Ⅲ	
70	付9	L9	土師器	坏	(10.7)	3.5	—	79.0	60	橋南	角	良好	橙	Ⅲ-9	
71	付9	H9	土師器	坏	(13.4)	(3.6)	—	20.9	30	下総	角	良好	浅黄橙	Ⅱ	指頭痕
72	付9	K6	内裏土器	高台付罐	—	(3.2)	7.8	97.4	20	安西	雲、角	良好	にぶい橙		

第97表 グリッド出土遺物観察表 (3) (第269・270・271図)

番号	遺物番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
73	丙1	K5	四土器	高台付	—	(2.3)	(5.6)	50.4	10	東西	角	普通	にぶい黄緑	Ⅲ 被熱	
74	丙1	J11	土師器	環	—	(2.1)	(7.0)	74.6	20	東西	角、軽	普通	にぶい黄	Ⅲ→ウ 木炭痕	
75	丙1	I7	土師器	鉢	(15.6)	8.2	7.6	344.6	70	東西	雲	普通	黄	I→イ 外面黒斑	80-4
76	丙1	I9	土師器	鉢	14.1	8.5	6.7	517.1	95	群東	雲	良好	にぶい黄	№9	80-5
77	丙1	I9	土師器	鉢	12.8	10.0	7.3	576.4	80	東西	雲、角	良好	にぶい黄	№5	80-6
78	丙1	L10	土師器	鉢	(12.3)	7.0	3.8	182.1	70	東西	雲、角	良好	にぶい黄	I 内面黒斑	81-1
79	丙1	K9	土師器	鉢	13.4	(6.0)	—	160.2	20	東西	角	良好	にぶい黄	I、Ⅱ、Ⅲ	
80	丙1	B9	土師器	鉢	(10.7)	8.2	(4.5)	88.7	25	東西	角	良好	にぶい黄	№5	
81	丙1	G10	須恵器	環蓋	(14.8)	5.0	—	141.2	50	陶色		良好	灰	Ⅰ	72-8
82	丙1	K6	須恵器	蓋	つまみ付	(5.7)	高さ(1.5)	50.5	10	南北比企		良好	灰	Ⅱ	
83	丙1	K7	須恵器	蓋	(18.8)	(1.7)	—	28.6	5	南北比企	雲、角	良好	灰白	Ⅳ	
84	丙1	J10	須恵器	環	—	(3.0)	(13.0)	57.8	10	南北比企		良好	灰白	Ⅳ	
85	丙1	K6	須恵器	環	(13.4)	(3.8)	—	25.4	5	下西	雲、角	普通	灰白		
86	丙1	K6	須恵器	環	—	(3.1)	—	13.1	5	新治	雲	良好	灰白	Ⅲ	
87	丙1	K6	須恵器	環	(14.2)	(5.0)	—	49.6	20	下西	角	普通	浅黄緑		
88	丙1	J9	土師器	高坏	16.8	12.5	11.9	567.9	90	群東	雲、軽	普通	黄	№7	81-2
89	丙1	J10	土師器	高坏	(17.3)	(6.3)	—	166.7	20	群東	雲	普通	黄	I、I→7→イ 外面黒斑	
90	丙1	J8	土師器	高坏	—	(10.0)	13.6	303.4	50	群東	雲、角、軽	良好	黄		
91	丙1	J9	土師器	高坏	15.1	(9.8)	—	356.7	60	東西	雲、角	普通	にぶい黄	I→7 指頭痕	
92	丙1	H10	土師器	高坏	(15.3)	9.8	10.4	349.4	75	粉南	角、軽	普通	にぶい黄	№1・3	81-4
93	丙1	J10	土師器	高坏	16.6	(5.3)	—	300.0	50	東西	雲、角	普通	黄	№1	
94	調査区	須恵器	土師器	高坏	12.0	9.6	8.5	291.8	90	群東	角	普通	にぶい赤濁		81-5
95	丙1	I9	土師器	高坏	—	(7.3)	11.4	223.7	40	粉南	雲	良好	黄	I→イ	
96	丙1	K7	土師器	高坏	—	(4.3)	9.5	166.2	20	東西	片、角	良好	にぶい黄		
97	丙1	I7	土師器	高坏	—	(6.6)	—	144.2	20	東西	角	普通	灰黄濁	Ⅲ→ウ 支脚転用か?	
98	丙1	K6	土師器	高坏	—	(5.4)	8.9	179.8	40	東西	角	良好	にぶい黄		
99	丙1	J8	土師器	高坏	14.0	(9.1)	—	290.8	60	東西	雲、角	良好	にぶい黄	外面黒斑	81-6
100	丙1	J6	土師器	台付甕	—	(7.0)	(14.4)	325.4	20	東西	片、角	普通	にぶい黄		
101	丙1	J6	土師器	高坏	—	(14.1)	—	487.5	40	東西	角	良好	黄	粘土組痕	
102	丙1	I9	土師器	高坏	—	(8.1)	13.5	288.5	40	東西	雲、角	良好	にぶい黄濁	I→1 粘土粒巻き上げ痕	
103	丙1	H9	土師器	鉢	(29.1)	(6.0)	—	309.1	20	埼玉	角	良好	にぶい黄	Ⅲ	
104	丙1	H10	土師器	鉢	19.3	12.8	8.2	1001.3	100	埼玉	角	普通	にぶい黄	№27	82-1
105	丙1	J9	土師器	鉢	—	13.8	5.9	642.5	60	下西	角、軽	普通	にぶい黄	№2	82-2
106	丙1	J10	土師器	鉢	(21.2)	17.5	(6.0)	607.0	40	群東	角、軽	普通	明赤濁	№3、Ⅲ→7 刃痕?	
107	丙1	I7	土師器	小型壺	10.1	10.0	5.8	353.9	95	佐野	角、軽	普通	にぶい黄	4	92-1
108	丙1	K9	土師器	小型壺	—	(9.0)	—	267.8	50	粉南	角	普通	にぶい黄	№5	
109	丙1	I9	土師器	小型壺	—	(9.9)	—	432.7	80	埼玉	角、軽	普通	にぶい黄	№1	
110	丙1	J6	須恵器	短頸壺	(7.1)	(3.8)	—	15.0	10	湘西		良好	灰	Ⅲ	
111	丙1	B9	須恵器	小型壺	—	(7.4)	3.2	116.5	60	陶色		良好	灰	I 自然釉	82-3
112	丙1	J9	須恵器	短頸壺	(8.2)	7.0	(6.5)	82.3	40	粉南		良好	灰	Ⅳ→ウ 自然釉	82-4
113	丙1	K7	須恵器	壺	—	(3.7)	(6.4)	48.6	10	湘西		良好	灰	一括	
114	丙1	I9	須恵器	短頸壺	—	(4.8)	—	54.0	10	南北比企		良好	灰	Ⅳ→ウ	
115	表	須恵器	壺	(6.8)	(3.1)	—	14.6	5	太田山		普通	灰	自然釉		
116	丙1	I9	須恵器	長頸壺	—	(13.3)	—	364.6	30	東海		良好	灰	№6 自然釉 フラスコ形	
117	丙1	I9	須恵器	壺	—	(2.5)	—	27.6	5	南北比企		良好	灰	Ⅲ ヘウ記号「X」	
118	表	須恵器	長頸壺	(11.3)	(2.4)	—	35.5	5	不明		良好	灰白	自然釉		
119	2次	須恵器	長頸壺	(11.0)	(4.4)	—	25.7	5	湘西		良好	灰白	自然釉		
120	丙1	I9	須恵器	長頸壺	—	(4.6)	6.7	115.4	5	湘西		良好	黄灰	Ⅲ→ウ 自然釉	
121	丙1	L7	須恵器	横貫	(12.0)	(7.8)	—	139.6	5	東海		良好	灰	Ⅱ 自然釉	
122	丙1	H10	須恵器	長頸壺	(14.0)	(4.4)	—	25.7	5	在地		良好	灰	Ⅲ 自然釉	
123	丙1	J8	須恵器	長頸壺	(14.2)	(4.1)	—	23.2	5	在地		良好	灰		
124	丙1	H11	土師器	甕	24.3	28.7	9.6	1785.3	80	埼玉	雲、角、軽	普通	にぶい黄	№1	92-2
125	丙1	J10	土師器	甕	21.8	(8.2)	—	492.8	20	埼玉	角、軽	良好	にぶい黄	Ⅲ→7、№2	

第98表 グリッド出土遺物観察表(4) (第271・272・273・274区)

番号	遺物番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
126	付1	L10	土師器	甕	(21.0)	(10.5)	—	234.2	10	埴北	雲、角	良好	灰黄	Ⅱ-7	
127	付1	K9	土師器	甕	21.9	(29.5)	—	1414.1	70	埴北	角	不良	にぶい橙	No.2	
128	付1	B9	土師器	甕	23.1	(23.3)	—	747.0	40	埴北	角、軽	普通	にぶい黄橙	No.10	
129	付1	I7	土師器	甕	(20.8)	(8.8)	—	182.4	20	埴北	雲、角	良好	にぶい黄橙	Ⅲ-9	
130	付1	K-13	土師器	甕	22.3	(11.5)	—	243.7	20	埴北	雲、角	普通	にぶい橙		
131	付1	K-13	土師器	甕	(18.6)	(7.5)	—	354.1	20	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙	外面被熱	
132	付1	K9	土師器	小型壺	(12.6)	(5.3)	—	125.2	10	群東	角	良好	橙	Ⅱ-1	
133	付1	B9	土師器	甕	22.5	(14.4)	—	852.2	20	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙	No.4	
134	付1	I10	土師器	甕	17.4	(15.7)	—	937.4	40	群東	角	良好	にぶい黄橙	31	
135	付1	K-13	土師器	甕	(15.6)	(18.1)	—	249.9	30	群東	角	良好	にぶい黄橙		
136	付1	L9	土師器	甕	17.6	24.2	(8.4)	1668.7	80	茨西	角、軽	普通	灰黄	No.1, Ⅱ-7	92-3
137	付1	I7	土師器	甕	(23.0)	(6.2)	—	153.9	5	橋南	角	良好	明赤褐	ウ	
138	付1	I7	土師器	甕	(22.2)	(6.3)	—	346.3	10	茨西	雲、角	良好	にぶい橙	Ⅱ-9 常総産	
139	付1	I7	土師器	甕	—	(7.0)	(7.0)	129.3	10	茨西	角	普通	褐灰	Ⅱ-9 底部打ち欠き	
140	付1	K9	土師器	甕	—	(14.0)	7.3	1315.7	20	茨西	雲、片、角	不良	灰褐	No.2-3, No.7-8 木炭痕	
141	付1	K10	土師器	甕	—	(4.1)	6.4	162.7	5	橋南	片	普通	にぶい橙	Ⅰ-4 木炭痕	
142	付1	H10	土師器	甕	—	(3.5)	7.0	147.1	5	橋南	雲、角	良好	にぶい黄橙	No.4 木炭痕	
143	付1	J7	土師器	甕	—	(2.7)	(5.3)	55.4	5	茨西	角	普通	にぶい黄橙	Ⅰ 木炭痕	
144	付1	J9	土師器	甕	—	(2.6)	(8.6)	38.7	5	茨西	角	普通	にぶい橙	Ⅱ-9 木炭痕	
145	付1	J7	土師器	甕	—	(1.5)	5.0	48.1	5	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙	Ⅲ 木炭痕	
146	付1	J7	土師器	甕	—	(1.4)	(6.0)	39.1	5	茨西	角、軽	普通	にぶい黄橙	Ⅰ 木炭痕	
147	付1	L9	土師器	甕	—	(3.3)	4.0	217.5	5	茨西	角	良好	黒褐	Ⅰ-7 木炭痕	
148	付1	I10	須恵器	甕	—	(6.1)	(16.0)	200.2	5	不明		良好	灰	No.16	
149	付1	B9	土製品	支脚	9.2	19.0	9.2	940.7	100	橋南	角、英	良好	にぶい黄橙	No.2	92-4
150	付1	K9	土製品	ミニチュア	(5.4)	3.4	2.0	46.4	70	片、角	普通	浅黄橙	Ⅲ 指痕		
151	表	表	土製品	ミニチュア	—	(2.5)	(5.0)	23.5	20	片	普通	浅黄橙			
152	付1	L9	土製品	ミニチュア	—	(2.9)	(5.3)	15.9	15	雲、角	普通	にぶい黄橙	Ⅱ-7		
153	付1	J9	土製品	ミニチュア	(2.6)	1.3	(1.0)	2.9	50	雲、角	普通	にぶい黄橙	Ⅰ-9		
154	付1	I10	石製品	紡錘車	径3.6孔径0.8厚さ1.6重さ28.1			90					No.19 滑石	95-7	
155	付1	J10	石製品	管玉	径1.23孔径0.37長さ1.57重さ3.06			50					Ⅱ-7 緑色凝灰岩	94-24	
156	付1	J-37	石製品	白玉	径0.69孔径0.22厚さ0.42重さ0.32			100					トナリ 滑石	95-19	
157	付1	J7	土製品	土錘	孔径0.5長さ2.5幅1.5厚さ1.6重さ10.7			95		軽	普通	にぶい黄橙	Ⅲ	94-11	
158	付1	J10	土製品	土錘	孔径0.5長さ5.5厚さ1.9重さ9.7			50		普通	にぶい橙	Ⅱ-7	94-13		
159	付1	M7	土製品	土錘	孔径0.5長さ2.9幅1.5厚さ1.5重さ8.1			50		雲、軽	普通	にぶい橙	Ⅲ	94-12	
160	付1	J10	土製品	土玉	径2.4孔径0.6厚さ2.2重さ10.4			100		雲、角	普通	にぶい橙	Ⅳ	95-21	
161	付1	J10	土製品	土玉	径2.2孔径0.5厚さ2.0重さ8.4			100		雲	普通	にぶい黄橙	No.5	95-23	
162	付1	J8	土製品	土玉	径2.0孔径0.5厚さ2.0重さ7.9			100		雲、角	普通	にぶい橙	Ⅰ	95-17	
163	付1	I7	石製品	有孔円板	長さ2.1幅2.2厚さ0.4重さ3.3			100					Ⅲ 滑石	94-26	
164	付1	表	銅製品	耳環	径2.2×2.4厚さ0.4×0.6			100					トレンチ 銅地銀貼り	97-22	
165	表	表	銅製品	耳環	径1.7×1.8厚さ0.35×0.55			100					No.1 銅地銀貼り	97-21	
166	付1	H9	鉄製品	刀子	長さ(20.5)刃長(15.2)刃幅2.5柄幅0.4			90					Ⅱ 柄木残る 2枚合せ?	98-21	
167	付1	M9	鉄製品	刀子	長さ(11.8)刃長(6.6)刃幅1.1-1.3柄幅0.5			80					Ⅳ	98-24	
168	付1	B9	鉄製品	鉄錘	長さ3.0幅3.0厚さ0.2			95					Ⅰ 無蓋錘	98-15	
169	付1	K9	鉄製品	鉄錘	長さ(3.2)幅0.7厚さ0.3			20					Ⅰ 韓泥鍔	98-13	
170	付1	L9	鉄製品	鉄錘	長さ(3.4)幅0.9厚さ0.4			20					Ⅱ-4 鑿筒式?	98-12	
171	付1	K9	鉄製品	不明品	長さ(3.2)幅(1.6)厚さ(0.1)			—					No.8	98-14	
172	付1	B8	鉄製品	鏃(鋼)先	長さ7.9幅13.0刀幅3.1			100					Ⅲ	98-27	
173	SJ	I-16		貝製/須恵器	長さ3.0幅2.4厚さ0.8重さ4.2			—							
174	付1	I10		貝製/須恵器	長さ2.4幅1.8厚さ1.4重さ4.7			—					Ⅱ		
175	付1	I10		貝製/須恵器	長さ4.1幅0.2厚さ1.8重さ8.6			—					Ⅰ		
176	付1	I10		貝製/須恵器	長さ4.0幅3.9厚さ2.0重さ14.7			—					Ⅲ		
177	付1	I10		貝製/須恵器	長さ4.7幅2.9厚さ1.5重さ12.4			—					Ⅳ		
178	付1	I10		貝製/須恵器	長さ2.5幅1.8厚さ1.4重さ3.0			—					Ⅲ		



第99表 グリッド出土遺物観察表 (5) (第274・275・276図)

番号	遺物番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
179	片1	J9	厚板状磁器	長さ3.8幅1.9厚さ1.6重さ4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
180	片1	J9	厚板状磁器	長さ3.5幅2.2厚さ1.9重さ7.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
181	片1	J9	厚板状磁器	長さ2.9幅2.3厚さ1.4重さ4.5	—	—	—	—	—	—	—	—	IV-9	—
182	片1	J10	厚板状磁器	長さ2.6幅2.2厚さ1.6重さ5.1	—	—	—	—	—	—	—	—	III	—
183	表	採	石製品	砥石	長さ9.9幅4.7厚さ2.6重さ154.4	—	95	—	—	—	—	—	凝灰岩	96-14
184	片1	J11	石製品	砥石	長さ5.6幅4.1厚さ2.3重さ73.0	—	100	—	—	—	—	—	III-1 凝灰岩	96-18
185	片1	J7	石製品	砥石	長さ3.2幅2.6厚さ0.7重さ11.5	—	95	—	—	—	—	—	III-7 凝灰岩	96-11
186	片1	J6	石製品	砥石	長さ5.4幅3.2厚さ1.3重さ25.7	—	50	—	—	—	—	—	安山岩	96-10
187	片1	J10	石製品	砥石	長さ7.8幅7.2厚さ2.0重さ142.0	—	50	—	—	—	—	—	III-7 凝灰岩	96-11
188	片1	J7	石製品	有溝砥石	長さ8.0幅6.9厚さ4.9重さ145.0	—	—	—	—	—	—	—	IV 角閃石安山岩	—
189	片1	J10	石製品	有溝砥石	長さ9.4幅5.2厚さ3.1重さ58.6	—	—	—	—	—	—	—	I-1 角閃石安山岩	—
190	片1	J10	石製品	有溝砥石	長さ8.3幅5.5厚さ4.2重さ67.1	—	—	—	—	—	—	—	I, No1 角閃石安山岩	—
191	片1	J10	石製品	有溝砥石	長さ4.0幅5.1厚さ3.6重さ27.9	—	—	—	—	—	—	—	I 角閃石安山岩	—
192	片1	K7	石製品	有溝砥石	長さ4.0幅4.1厚さ3.6重さ27.9	—	—	—	—	—	—	—	I 角閃石安山岩	—
193	片1	K-18	石製品	有溝砥石	長さ6.7幅6.0厚さ5.4重さ103.0	—	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩	—
194	片1	L9	石製品	有溝砥石	長さ7.8幅4.4厚さ4.2重さ64.6	—	—	—	—	—	—	—	IV-7 角閃石安山岩	—
195	片1	L9	石製品	有溝砥石	長さ6.7幅6.4厚さ2.9重さ50.8	—	—	—	—	—	—	—	IV-7 角閃石安山岩	—
196	片1	M8	石製品	有溝砥石	長さ9.1幅8.1厚さ4.6重さ145.1	—	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩	—
197	片1	M9	石製品	有溝砥石	長さ8.7幅6.3厚さ4.9重さ116.1	—	—	—	—	—	—	—	I-7 角閃石安山岩	—
198	表	採	石製品	有溝砥石	長さ7.8幅4.1厚さ2.9重さ72.1	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	—
199	片1	M8	かわらけ	皿	9.5 2.4 6.3 46.3	—	60	—	角	良好	浅黄橙	—	—	72-9
200	片1	I8	かわらけ	皿	10.4 2.0 6.4 84.4	—	95	—	角	普通	橙	I	—	72-10
201	表	採	かわらけ	皿	9.6 2.4 4.9 35.2	—	40	—	角	良好	にぶい橙	—	—	—
202	片1	L9	かわらけ	皿	(8.8) 2.2 4.6 55.0	—	60	—	角	良好	にぶい黄橙	II-7	—	—
203	片1	L9	かわらけ	皿	(8.5) 2.1 (4.5) 32.1	—	40	—	角	良好	にぶい橙	IV-1	—	—
204	片1	J9	かわらけ	皿	— (3.5) 4.6 67.0	—	30	—	角	良好	にぶい黄橙	II-1	—	—
205	片1	M8	脚・懸	すり鉢	— (2.9) (11.0) 83.3	—	5	—	角	良好	褐	IV 大塚1~II (I5C和)	—	—
206	片1	M8	脚・懸	天目茶碗	(12.2) (4.8) — 22.8	—	10	—	角	良好	赤褐, 黒紫黒	III 大塚2	—	—
207	片1	M9	美酒	酒甕(戻瓶)	3.1 7.1 4.5 185.0	—	90	—	—	—	—	IV-7 灯明の油入れか?	85-6	
208	片1	M8	五輪塔	風輪	— (7.3) (15.4) 1461.1	—	30	—	—	—	—	IV 安山岩	96-22	
209	片1	I10	石器	台石	長さ25.6幅17.0厚さ7.0重さ4614.9	—	100	—	—	—	—	No28 蛇紋岩	96-21	
210	片1	K7	鉄滓	椀形鉄滓	長さ8.2幅6.4厚さ2.1重さ94.1	—	100	—	—	—	—	II 木炭灰あり	—	

第100表 住居跡新旧対照表

新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号
第1号住居跡	第1号住居跡	第36号住居跡	第36号住居跡	第70号住居跡	第70号住居跡
第2号住居跡	第2号住居跡	第37号住居跡	第37号住居跡	第71号住居跡	第71号住居跡
第3号住居跡	第3号住居跡	第38号住居跡	第38号住居跡	第72号住居跡	第72号住居跡
第4号住居跡	第4号住居跡	第39号住居跡	第39号住居跡	第73号住居跡	第73号住居跡
第5号住居跡	第5号住居跡	第40号住居跡	第40号住居跡	第74号住居跡	第74号住居跡
第6号住居跡	第10b号住居跡	第41号住居跡	第41号住居跡	第75号住居跡	第75号住居跡
第7号住居跡	第7号住居跡	第42号住居跡	第42号住居跡	第76号住居跡	第76号住居跡
第8号住居跡	第8号住居跡	第43号住居跡	第43号住居跡	第77号住居跡	第77号住居跡
第9号住居跡	第9号住居跡	第44号住居跡	第44号住居跡	第78号住居跡	第78号住居跡
第10号住居跡	第10a号住居跡	第45号住居跡	第45号住居跡	第79号住居跡	第79号住居跡
第11号住居跡	第11号住居跡	第46号住居跡	第46号住居跡	第80号住居跡	第80号住居跡
第12号住居跡	第17b号住居跡	第47号住居跡	第47号住居跡	第81号住居跡	第81号住居跡
第13号住居跡	第13号住居跡	第48号住居跡	第48号住居跡	第82号住居跡	第82号住居跡
第14号住居跡	第19b号住居跡	第49号住居跡	第49号住居跡	第82号住居跡	第83号住居跡
第15号住居跡	第15号住居跡	第50号住居跡	第50号住居跡	第83号住居跡	第70号住居跡
第16号住居跡	第16号住居跡	第51号住居跡	第51号住居跡	第84号住居跡	第84号住居跡
第17号住居跡	第17a号住居跡	第52号住居跡	第52号住居跡	第85号住居跡	第85号住居跡
第18号住居跡	第18号住居跡	第53号住居跡	第53号住居跡	第86号住居跡	第86号住居跡
第19号住居跡	第19a号住居跡	第54号住居跡	第54号住居跡	第87号住居跡	第87号住居跡
第20号住居跡	第20号住居跡	第55号住居跡	第55号住居跡	第88号住居跡	第88号住居跡
第21号住居跡	第21号住居跡	第56号住居跡	第56号住居跡	第89号住居跡	第89号住居跡
第22号住居跡	第22号住居跡	第57号住居跡	第57号住居跡	第90号住居跡	第90号住居跡
第23号住居跡	第23号住居跡	第58号住居跡	第58号住居跡	第91号住居跡	第91号住居跡
第24号住居跡	第24号住居跡	第59号住居跡	第59号住居跡	第92号住居跡	第92号住居跡
第25号住居跡	第25号住居跡	第60号住居跡	カマド14		
第26号住居跡	第26号住居跡	第61号住居跡	第61号住居跡		
第27号住居跡	第27号住居跡	第62号住居跡	第62号住居跡		
第28号住居跡	第28号住居跡	第63号住居跡	カマド15		
第29号住居跡	第29号住居跡	第64号住居跡	第64号住居跡		
第30号住居跡	第30号住居跡	第65号住居跡	カマド16		
第31号住居跡	カマド5	第66号住居跡	第66号住居跡		
第32号住居跡	カマド13	第67号住居跡	番号なし		
第33号住居跡	第33号住居跡	第68号住居跡	第68号住居跡		
第34号住居跡	第34号住居跡		第67号住居跡		
第35号住居跡	第35号住居跡	第69号住居跡	第69号住居跡		

第101表 土坑・井戸跡・溝跡新旧対照表

土坑		井戸跡		溝跡	
新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号
第1号土坑	第1号土坑	第1号井戸跡	第1号井戸跡	第1号溝跡	第1号溝跡
第2号土坑	第2号土坑	第2号井戸跡	第2号井戸跡	第2号溝跡	第2号溝跡
第3号土坑	第3号土坑	第3号井戸跡	第3号井戸跡	第3号溝跡	第3号溝跡
第5号土坑	番号なし	第4号井戸跡	第4号井戸跡	第4号溝跡	第4号溝跡
第6号土坑	番号なし	第5号井戸跡	第5号井戸跡	第5号溝跡	第5号溝跡
第7号土坑	第7号土坑	第6号井戸跡	第6号井戸跡	第6号溝跡	第6号溝跡
第8号土坑	第8号土坑	第7号井戸跡	第7号井戸跡	第7号溝跡	第7号溝跡
第9号土坑	第9号土坑	第8号井戸跡	第8号井戸跡		
第10号土坑	第10号土坑	欠番	第9号井戸跡		
第11号土坑	第11号土坑	欠番	第10号井戸跡		
第12号土坑	第12号土坑	第11号井戸跡	第11号井戸跡		
第13号土坑	第13号土坑	欠番	第12号井戸跡		
第14号土坑	第14号土坑	第13号井戸跡	第13号井戸跡		
第15号土坑	第15号土坑	第14号井戸跡	第14号井戸跡		
欠番	第5号土坑	第15号井戸跡	第15号井戸跡		
欠番	第6号土坑	第16号井戸跡	第16号井戸跡		
		第17号井戸跡	第17号井戸跡		
		第18号井戸跡	第18号井戸跡		
		第19号井戸跡	第19号井戸跡		
		第20号井戸跡	第20号井戸跡		
		第21号井戸跡	第21号井戸跡		
		第22号井戸跡	第22号井戸跡		
		第23号井戸跡	第23号井戸跡		
			第4号土坑		
		欠番	第24号井戸跡		
		欠番	第25号井戸跡		
		第26号井戸跡	第26号井戸跡		
		第27号井戸跡	第27号井戸跡		
		第28号井戸跡	第28号井戸跡		

## V 調査のまとめ

### 1. 住居跡の動向

飯積遺跡第2次調査では、92軒の住居跡が検出された。これらの住居跡は5世紀から10世紀までの間の約450年余りにわたって、消長を繰り返しながら見られる。

この項では、第2次調査で検出された住居跡92軒のうち、時期の明確となった73軒を変遷の対象として時期毎に記した。したがって、調査された飯積遺跡全体の変遷ではなく、あくまでも第2次調査区内のみであり、集落の変遷をまとめる途中経過と捉えていただきたい。第2次調査区と第3・4次調査区を合わせた飯積遺跡の集落の変遷については、事業団報告書第334集「飯積遺跡Ⅱ」を参照していただきたい。なお、住居跡の#朝期は同書V章「飯積遺跡出土土器と周明の地域」に準拠している。

#### 5世紀代(第277区)

5世紀第Ⅳ四半期から第2次調査区内で住居跡が認められる。この時期の住居跡は5軒検出された。調査区(第2次調査区・以下同じ)の中央に一辺約8mの大型の住居跡が見られ、それより南西側に2軒が重複して、更に南西側の調査区端に小さめの2軒が検出されている。

#### 6世紀代(第278区)

住居跡の数が大きく増減する時代である。

第Ⅰ四半期は、住居跡が急激に増大する時期で、22軒の住居跡が認められる。最も多数の住居跡が検出された時期である。これらの住居跡は調査区の中央付近を東西の帯状に分布している。特に中央付近では同期の住居跡が数軒とまって重複する箇所が見られた。調査区北端にも2軒認められるが、南側には住居跡は見られない。

第Ⅱ四半期は住居跡数が4軒で、前期に比べ激減する。調査区中央やや北に重複し合いながら2軒が、西端に2軒が見られる。

第Ⅲ四半期には3軒認められる。調査区中央と北

端近く、西端に各1軒とそれぞれ距離を置いて分布している。

第Ⅳ四半期は前期同様3軒の住居跡が認められる。調査区中央を東西に間隔をあけて分布している。

#### 7世紀代(第279区)

6世紀ほどの大きな変化は見られないが、第Ⅳ四半期に住居跡が増加する。

第Ⅰ四半期は1軒のみである。調査区中央の南寄り、集落の端に検出された。

第Ⅱ四半期は5軒とやや増加する。調査区南西端に3軒がまとまって検出され、残り2軒は北半部に見られた。

第Ⅲ四半期は4軒である。3軒が調査区南半に、他の1軒は北端近くで検出された。

第Ⅳ四半期は9軒と、6世紀第Ⅰ四半期ほどの大きな増加ではないが第2のピークを迎える。調査区の南半にその大半が検出され、北端部に1軒が見られた。

#### 7世紀末から8世紀代(第280区)

前期までとは#時期区分がやや異なるが、7世紀末から8世紀第Ⅰ四半期に#時期を設けた。この#時期は4軒と僅かな間に住居跡数は半減してしまう。位置的には、前期には住居跡が見られなかった場所に検出されている。

第Ⅰ四半期に限定できるのは1軒のみである。前期と異なり、前々期の7世紀第Ⅳ四半期に近い調査区南西端で検出された。

8世紀前半は8軒と住居跡数は増加する。第3のピークとも考えられるが、やや長く時間幅を見たためとも考えられる。住居跡は集落の東辺近くに分布する傾向が見られる。

第Ⅲ四半期は1軒と集落は急激に衰退する。調査区北東端に検出された。

第Ⅳ四半期は、住居跡は検出されない空白期で、

これ以降、空白期が見られるようになる。

#### 9世紀代（第28Ⅱ㊦）

第Ⅰ四半期は前期同様、空白期である。

第Ⅱ四半期は調査区北端に1軒の住居跡が検出された。

第Ⅲ四半期も前期同様、調査区北端に1軒の住居跡が検出された。

第Ⅳ四半期、再び住居跡が検出されない空白期となる。

#### 10世紀代（第28Ⅲ㊦）

集落の終結期で、前半代の住居跡が調査区南半の集落東端に1軒検出されたのみである。

これ以降、調査区内に住居跡は見られなくなる。

第102表 住居跡時期別表

時期	住居番号	軒数
5世紀 4/4	33, 54, 55, 78, 89	5
6世紀 1/4	4, 15, 17, 24, 29, 30, 35, 36, 37, 41, 43, 47, 48, 53, 59, 62, 66, 67, 69, 79, 81, 85	22
6世紀 1/4以前	12, 32, 34	(3)
6世紀 2/4	21, 22, 68, 74	4
6世紀 2/4～3/4	6	(1)
6世紀 3/4	10, 49, 83	3
6世紀 3/4以前	70	(1)
6世紀 4/4	23, 39, 46	3
6世紀 4/4以前	42	(1)
7世紀 1/4	56	1
7世紀 2/4	8, 60, 73, 87, 92	5
7世紀 2/4以前	88	(1)
7世紀 2/4以降	75	(1)
7世紀 3/4	7, 52, 72, 77	4
7世紀 3/4以前	63, 65	(2)
7世紀 3/4以降	26	(1)
7世紀 4/4	18, 44, 50, 51, 61, 64, 76, 82, 86	9
7世紀 4/4以前	90, 91	(2)
7世紀 4/4以降	38, 57, 71	(3)
7世紀 末以前	14	(1)
7世紀 末～8世紀1/4	3, 5, 19, 45	4
8世紀 1/4	80	1
8世紀 前半	11, 13, 16, 20, 27, 28, 40, 58	8
8世紀 3/4	9	1
9世紀 2/4	1	1
9世紀 3/4	2	1
10世紀 前半	25	1
中世 以前	84	(1)
不明	31	(1)



第277図 5世紀代の住居跡



第278図 6世紀代の住居跡



第279図 7世紀代の住居跡





第280図 7世紀末から8世紀代の住居跡



第281図 9・10世紀代の住居跡

## 2. 溝跡について

飯積遺跡第2次調査区では7条の溝跡が検出された。これらの溝跡の多くは調査区域外に伸びており、明らかに第3・4次調査区の溝跡と関連するものもみられる。そこで第2次調査区と第3・4次調査区を含めた15条の溝跡について、若干のまとめを行ってみたい。第1号溝跡から第7号溝跡は第2次調査区、第8号溝跡以降は第3・4次調査区である。

第1号溝跡は、調査区の中央付近でほぼ直角に曲がり、東側と南側は調査区域外に伸びている。検出された長さは約70m、幅1.2~2.3m、深さ0.6~1.2mで、断面は逆台形である。青磁、常滑、瀬戸・美濃、かわらけ、埴谷、内耳鍋等多量の遺物が出土している。

第2号溝跡と第3号溝跡は同規模の並行する細い溝跡で、第1号溝跡の区画内にあり、同溝跡と直行する。全長は第2号溝跡8.85m、第3号溝跡が11.2m、幅は共に0.5~0.65m、深さは0.15~0.33mと0.2mである。

第4号溝跡は、調査区の北端にあり、第1号溝跡の北端と同一方向に走っている。

第5号溝跡は、調査区北西端にあり、検出された長さは4mに満たない。西端は調査区域外に伸びる。幅は0.6~0.7m、深さは0.15m以下である。

第6号溝跡は、調査区西端にあり、調査区の南西際と並行する。第3・4次調査区の第14号溝跡と繋がると考えられる。全長10.2m、幅0.5~0.9m、深さは0.65mである。

第7号溝跡は、調査区西端近くにあり、半径約3.2mの弧を描いている。全長8.3m、幅0.55m、深さ0.2mである。

第8号溝跡は、調査区の北半にあり、北側は調査区域外に伸びている。検出された長さは28m、幅0.4~0.8mで直線的に走る。南端の延長線には後述する第9号溝跡の西端にあたる。

第9号溝跡はa・b・cの3条に分けられている。第9号溝跡は調査区の中央にあり、全長15m、幅

1.8~2.2mで、深さは0.95mと深い。西端は第8号溝跡の延長線上で途切れている。

第9号溝跡は調査区中央より東側にあり、全長13.5m、幅0.9~1.3mの直線状である。9号溝跡から2mほどの距離を置いて、9号溝跡の延長線より僅かに外れる位置にある。覆土上層からかわらけが出土している。

第9号溝跡は、第9号溝跡の南側にほぼ並行し、西端は第9号溝跡と接している。第9号溝跡の延長線にあたり、全長12.5m、幅0.5~1.0m、深さは0.1~0.25mである。

第10号溝跡は第9号溝跡南側にあり、全長3.3m、幅0.6mである。

第11号溝跡は調査区南東端にあり、南端は調査区域外に伸びる。全長3.5m、幅0.3~0.45m、深さ0.2mである。

第12号溝跡は第11号溝跡の北側に位置し、北端は第9号溝跡に接している。全長11m、幅0.3~0.8mで、北端では第9号溝跡より0.3m以上深くなっていた。

第13号溝跡は調査区北西端にあり、河川跡の堆積土を掘り込んでいる。河川跡と同一方向に走り、西端は調査区域外に伸びる。全長11.2m、幅0.9~2.1m、深さ0.45mである。

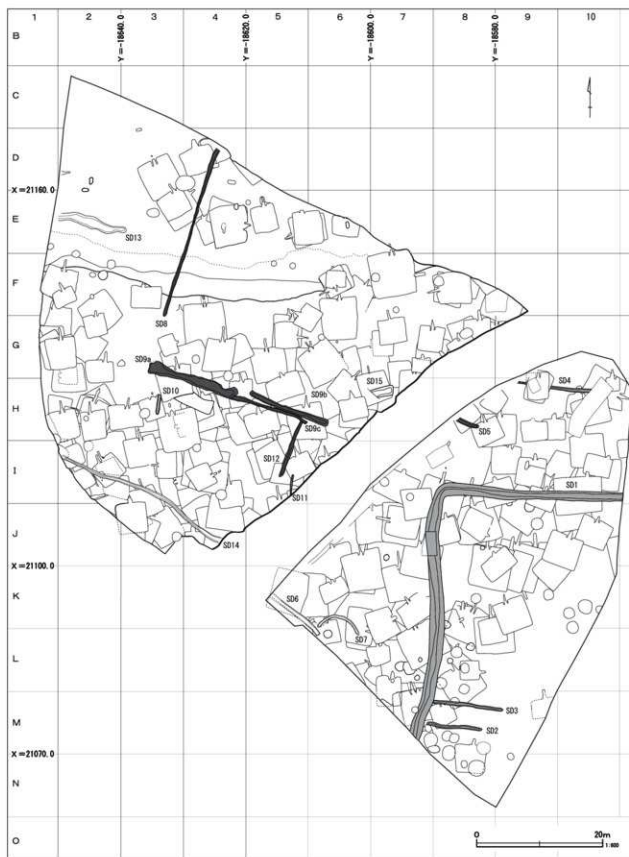
第14号溝跡は調査区南端にあり、第2次調査区の第6号溝跡と繋がると考えられる。全長30m、幅0.5~1.0mである。

第15号溝跡は調査区東端にあり、西端は途切れている。全長3.4m、幅1.4m、深さ0.4mである。

以上が各溝跡の概略であるが、これら溝跡は走行方向で3グループに分けられる。第一は第1号溝跡を中心とするグループ、第二は第8・9号溝跡を中心とするグループ、第三はその他のグループである。

第一のグループは、第1・2・3・4・10・11号溝跡である。

第1号溝跡は、時期の判断できる遺物が多く出土



第282図 飯積遺跡跡跡全体図

している。古瀬戸直緑大皿・盤は古瀬戸後期に、常滑大甕は15世紀後半になると考えられ、これらをはじめ陶器類は15世紀代のものが多く出土している。かわらけは16世紀代のものが多く、鍋・焙烙・すり鉢等は15世紀後半から16世紀のものである。出土遺物全体では15世紀から16世紀のものが主体だが、一部には16世紀末から17世紀前半と考えられる瀬戸・美濃小皿も出土している。第1号溝跡は、調査時には直角に曲がる形態や、その内部に井戸跡が集中することから館跡の一部かと思われた。しかし、溝跡内側に土器破片が検出されず、出土遺物が生活用品を主体としていること、地元へ館に関する伝承等がないことなどから館跡ではないと判断した。

第2・3号溝跡は第1号溝跡の区画内で並行し、第1号溝跡西辺に直交する溝跡である。第4号溝跡は第1号溝跡の北側約16mで北辺と並行している。第11号溝跡は第1号溝跡の西側2.4mで西辺と並行し、さらに西側2.5mに第10号溝跡が並行している。第1号溝跡北辺は東西方位に対して東行するに随って2度南に傾斜する。同様に第2・3号溝跡は7度、第4号溝跡は6度傾いている。第1号溝跡西辺は南北方位に対して北行するに随って7度東に傾斜し、第10号溝跡が8度、第11号溝跡は6度である。これら溝跡は、方位に対する角度が2～8度の範囲で傾き、並行あるいは直行していると考えられる。このことから溝跡は第1号溝跡を中心とした何らかを区画するためのものではないだろうか。そしてその時期は、第1号溝跡と同時期であろう。

第二のグループは、第5・8・9(a～c)・12号溝跡である。

第8号溝跡と第9号溝跡は事業報告書第334集

#### 引用・参考文献

- 飯村均 2001「東国の集落」『陶器の生産』『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会  
岩瀬謙 1995「前・居立」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第151集  
太田博之 2002「東五十子・川原町」東五十子遺跡調査会  
金子直行 2001「川越城／小在家Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第273集  
木戸春夫 2004「戸宮前／在家／宮廻」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第297集

『飯積遺跡Ⅱ』で詳細な報告が行われている。この中で溝跡は、発掘調査前に当地に鎮座していた鷺神社に関連する区画溝、あるいはそれに先行する溝跡としている。また、第12号溝跡は第9号溝跡に直交し、第5号溝跡は第9号溝跡と並行する。これらの溝跡は東西または南北の方位に対する角度が18～22度の範囲で同一方向に傾いており、それぞれが密接に関連すると考えられる。第5号溝跡は神社本体からはやや離れたが、深谷市前遺跡で検出された江戸時代の神社参道の側溝跡と同様の溝跡とも考えられる。鷺神社は万治二(1659)年の勧請とされ、第9号溝跡からは16世紀末のかわらけが1点出土している。しかし、神社と溝跡は方向が同一であるが、勧請と溝の掘削が同時期とは限らない。また、かわらけは1点のみの出土である。これらのことから溝の機能した時期を判断することに躊躇する。

第1グループの溝跡は第1号溝跡の時期と考えられるが、第2グループは決め手がない。このため新旧関係は不明とせざるを得ない。しかし、走行方向の異なる溝が近接しているため、同時期に存在したと考えるには無理があるだろう。

その他のグループの溝跡は、それぞれが個別に、時期や性格も別々であったと考えられる。

第6・14号溝跡は、第2次調査区と第3・4次調査区に跨って調査区の南西辺に並行して走っている。この方向は現在の利根川の堤防と同じ方向である。これは溝跡が、江戸時代の利根川の付け替え以降に当地の田圃の用水あるいは排水として機能していた可能性も考えられる。他の溝跡は検証の手だてがなく、時期・性格共に不明である。